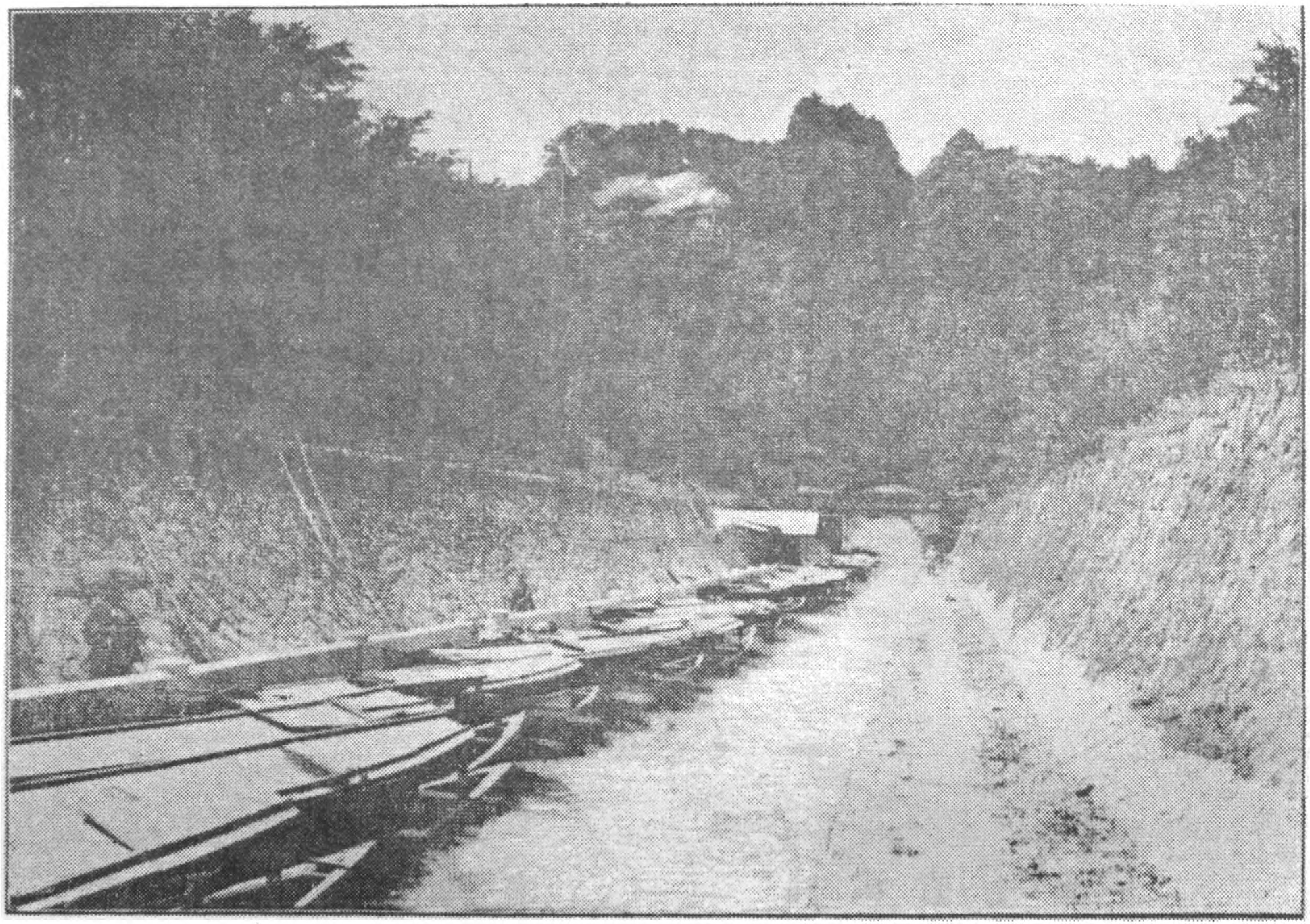

女鑑
第拾五年
第拾號

女鑑 第十五年 第十號 目次

口絵

琵琶湖疏水運河第一隧道



海軍大將有栖川宮威仁親王殿下

同妃慰子殿下



松平直亮伯の家庭



英國皇太子ウエールス親王殿下同妃殿下



波斯國王ムザフエール、エドヂヌ陛下

伊太利皇太后マルゲリッタ陛下

(雜錄欄參照)

日本赤十字社篤志看護婦人會京都支部總會



（中央なるは總裁閑院宮殿下にして御凱旋の際台臨あらせらる）

歐米各種化粧品直輸入商

全國到ル處ニ在リ

特約販賣店

東京 大阪

平尾贊平

本店 支店

最新煉香油

(紳士用)(貴婦人用)



東京濱町一町目

平尾六店

電浪 一一〇

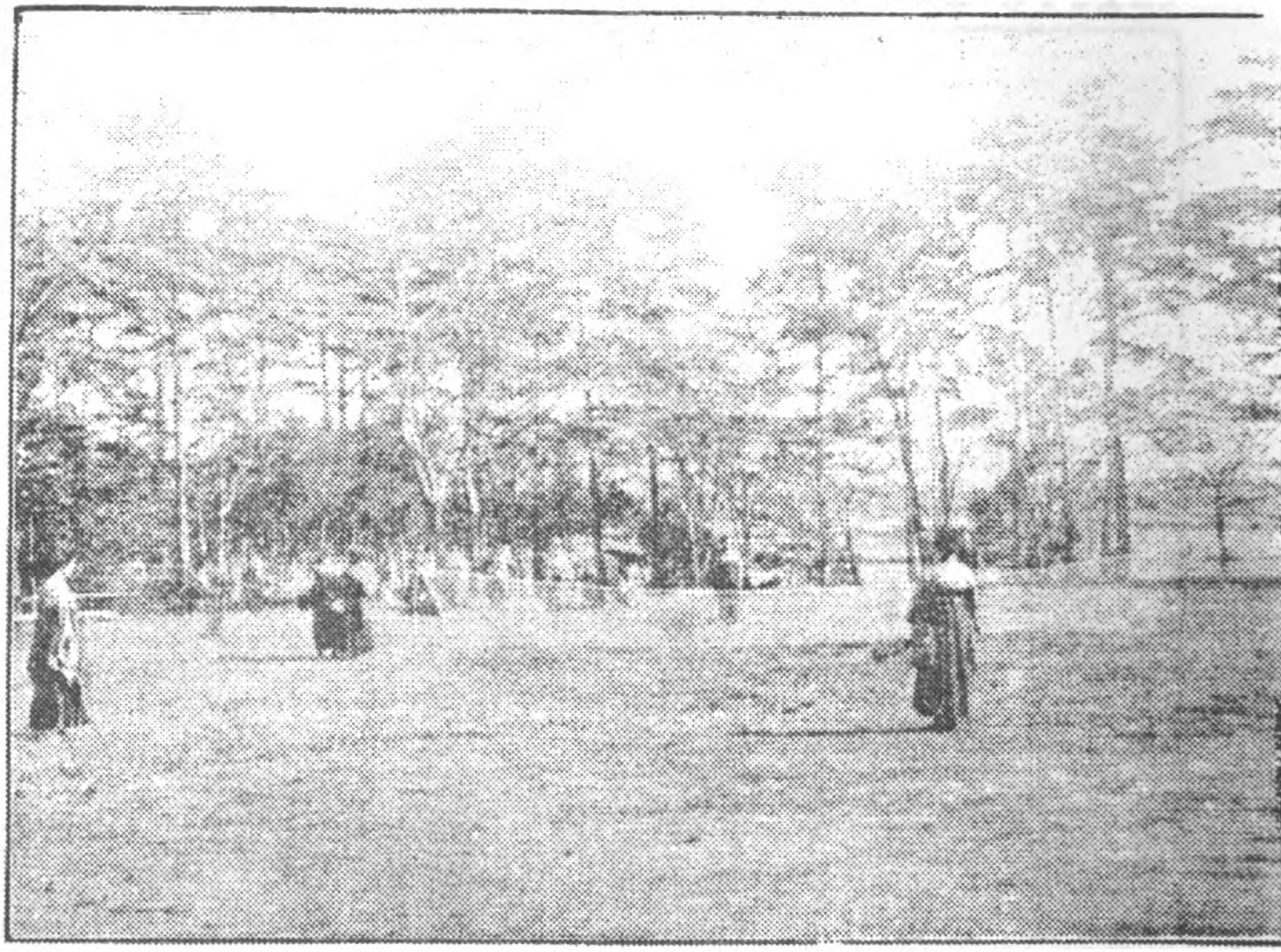
香油(ゴールド、オイル)發賣元



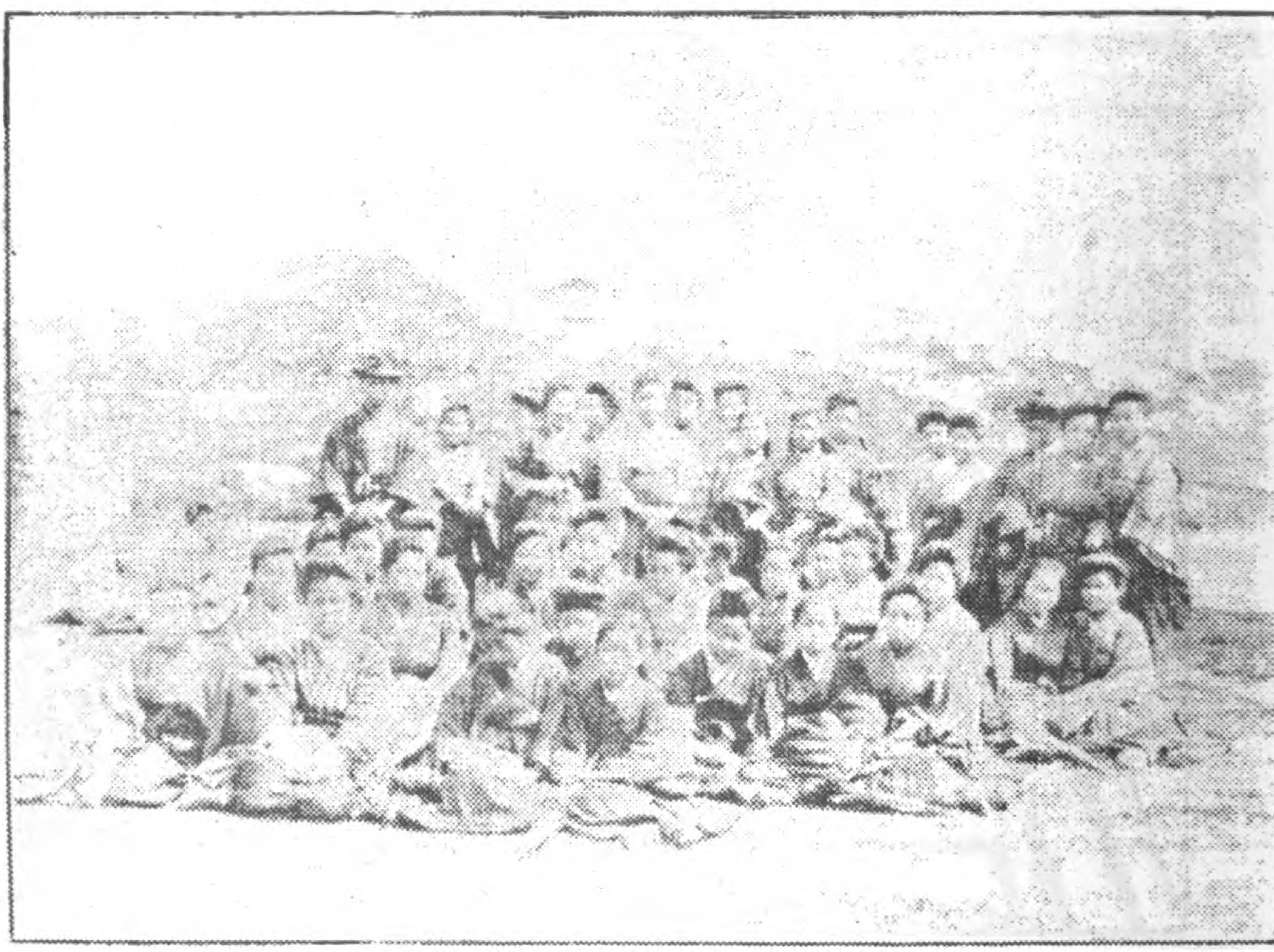


定價•金五十錢•金廿五錢•金十五錢•金二十錢

大宮公園に於ける運動會



日比谷公園に於ける運動會



これは東京府第一高等女學校生徒が大宮公園及び日比谷公園に於て催せる運動會の一部なり

水戸高等女學校卒業生並職員



（前列の中央は同校長本田嘉種氏左側は池田教頭背後は豐田教諭なり訪問欄參照）

東京女醫學校職員並生徒



群馬縣篤志看護婦人會



女學及家庭書類

島田佳矣 野口駿尾 共著 ◎女子技藝 編物模様圖案 全五冊 定價｛松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢｝ 郵稅各二錢

棚橋絢子著 ◎女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ◎女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ◎女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

磯部武者五郎著 ◎家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢

藤野天城著 ◎女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ◎女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

松川霓州著 ◎結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ◎家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢

女鑑編輯局編 ◎[illegible]編 ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

著者	書名	冊數	定價	郵稅
梅澤清一著	◎清少納言と紫式部	全	金卅五錢	金六錢
澁谷愛著	◎萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀內新泉著	◎少女讀本	全三冊	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	◎常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林雨搭著	◎勾當の內侍	全	金十三錢	金二錢
濱田廣著	◎袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	◎靜御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	◎顏世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	◎家庭訓話 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀨眞卿著	◎學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	◎女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

塚原澁柿著 ◎小牧合戰 全 定價金五十五錢 郵税金十錢

工藤武重謹著 ◎孝明天皇御遺德 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

山崎忠和著 ◎文久物語（一名寺田屋騷動） 全 定價金二十八錢 郵税金六錢

少年傳記類

文學士大町桂月著 ◎少年武士道史第一編 藤田東湖 定價金十九錢 郵税金四錢

法學士工藤景文著 ◎少年武士道史第二編 山中鹿之助 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士三好物外著 ◎少年武士道史第三編 上杉謙信 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士笹川臨風著 ◎少年武士道史第四編 本多平八 定價金十九錢 郵税金四錢

田岡嶺雲著 ◎少年武士道史第五編 小早川隆景 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士白河鯉洋著 ◎少年武士道史第六編 立花宗茂 定價金十九錢 郵税金四錢

法學士太田芥溟著 ◎少年武士道史第七編 木村重成 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士中内蝶二著 ◎少年武士道史第八編 大石良雄 定價金十九錢 郵税金四錢

內國通運株式會社編纂 ◎新式 大日本里程地圖 洋裝、帙入（定價各參圓五拾錢）同送料荷造費廿五錢 卅五錢 懸詩帙五十錢 洋四十錢

農商務省御編纂 ◎清國輸出織物刺繡に關する 意匠圖按 大和綴 正價金五圓 送料及荷造費 廿五錢 臺灣 四十五錢



第十五年第十號

平和克復後の日本女子

戰雲の一たび滿韓の野を包みしより、我が日本女子は滿腔の精神を獻げて、能く君國の爲に盡すところありき。我が軍隊が血と骨とを以て、敵國に應酬し、海に克ち陸に克ちて、堅塞を陷ゐれ上將を擒にし、連りに奇勝を奏して、日本軍人の特性を發揮しつつある間には、我が日本女子は其小さき胸に萬斛の思を疊み、纖細き手に一片の情を寄せて、或は繃帶を卷き、或は恤兵袋を製りて、有らん限りの力を盡し、眞心籠めて、後援の實を擧げつゝありしなり。されば日本軍人の赫奕たる功名が、歐米各國の嘆賞を博せしと共に、日本女子の現はしたる報國的精神もまた歐米各

國の讃美するところたりしは宜なりといふべし。

然るに米國大統領が、平和と人道との爲に、相敵對國の間に立ちて斡旋したる結果は、ポートマウスに於ける彼我兩全權大使の會合となり、會合はやがて双方提議の讓歩となり妥協となりて、玆に平和條約の締結を見るに至らんとす。平和條約の表面に現るべき我が戰勝の效果如何は、未だ發表せられざるを以て、予輩未だ公然之を知ることを得ず。縱し之を知るも、慢りに容喙すべき限りにあらずと雖も、兎も角世界人道の爲めに平和の克復されて、殘忍冷酷なる各種の殺傷が其跡を絕つと同時に戰捷自然の趨勢として、東洋の一島帝國たる我國が、世界列强と伍を爲して、一等國の列に入りたるを祝賀せずんは非ざるなり。

さて既に世界の列强と伍をなして、謂ゆる一等國の仲間入りを爲す以上は、之に相當すべき實を擧げ之に相應すべき體面を維持せざるべからざるは勿論なり。兵力を以て購ひたる此の名譽は、兵力以外の實力を以て之を保持せざるべからず。戰爭を以て博したる此の功績は、戰爭以外の平和なる事業を以て之を永續せしめざるべからざるなり。若し兵力の名譽をして唯に兵力に止まらしめ、戰爭の功績をして單に戰爭に終らしめば、兵力と戰爭との休みたる時には、其の名譽も功績も亦消えて、跡を留むるを得ざるべし。是を以て我が帝國が今回の戰捷に依りて博し得たる大名譽と大功績とは、我が一般國民が、意を致し、力を盡して、之を後代にまで傳うるの覺悟を要すべきにあらずや。

敎育の普及進捗、商工實業の發達盛昌、海陸軍事の施設擴張等は、固より戰後に於ける重要なる經

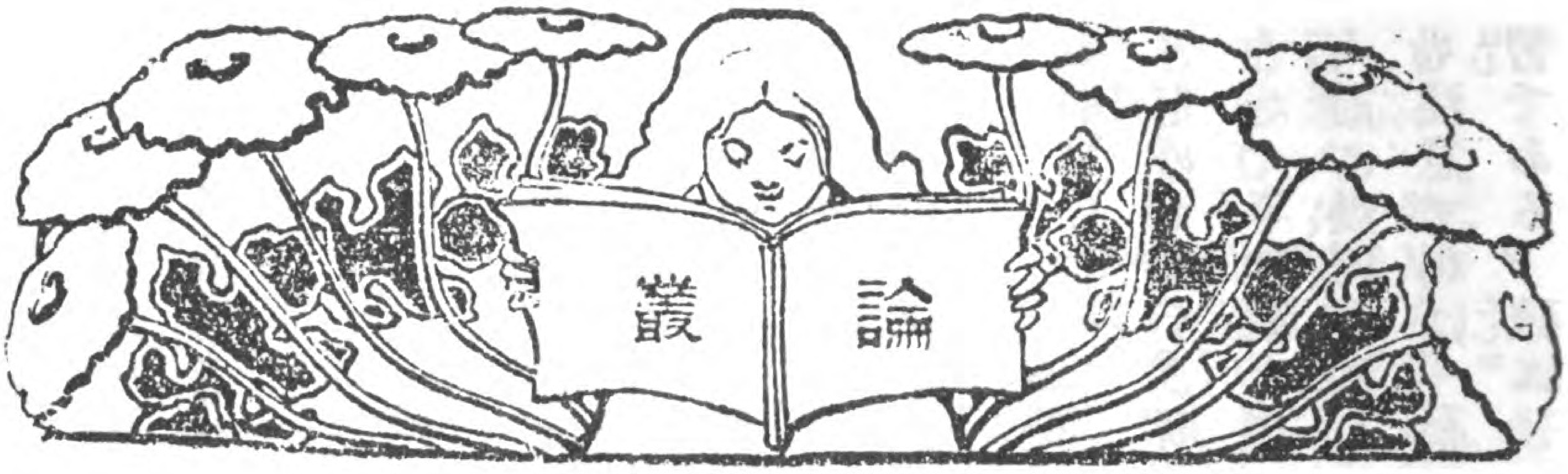
營たるは、予輩の今茲に事新らしく陳述するの必要なかるべし。予輩は一般日本婦人が、猶ほ戰爭の時に於て盡したるが如き國家的精神を戰爭後の平和時代に發揮せんことを望むを以て、予輩の責務上特に最も大切なるを感せざるを得ざるなり。

後方勤務の兵士が、戰線に立ちて奮闘せる兵士の勳功に對し、與つて大に力あるが如く、又た一般の國民が、出征軍人の功勞に關して、多大の力を添たるが如く、我が日本女子は、日本軍人の現はしたる功業に就きて、少なからざる貢獻を爲したるは、何人も善く認知するところなり。さればこそ日本女子なる特稱は、日本軍人の名擧と共に、世界の讃辭を博して其の光榮を頒つ所以なれ。若し擧國一致の實を擧げたる今回の軍事的行動より、女子の盡力を引去りたらんには、軍隊の奏したる勳功は、或は今日の如くしかく大ならざりしやも亦知るべからざるなり。それ一滴の血を見てすら尙ほ其心に感傷する女子が、一念發起するときは、その性情と相容れざる骨山血河の大戰爭に對しても、多大の功勳を致すこと斯の如くなるを見ば、その天質の身心と相一致する平和の事業に對して、より以上の功績を現はし得べきは、殆んど疑ひなかるべし。

然らば則ち如何にせば、戰爭時代に於けるが如く、猶平和時代に盡すことを得べきや。曰く斷々焉他の奇なし。唯だ婦人としての本分を盡すにあるのみ。妻として良妻たらば、妻たるに於て、何の餘す處かあるや。母として賢母たらば、母たるに於て、何の遺す處かあらんや。妻として母として一點の非難を加ふべきものなくば、女子として何等の遺憾があるべきや、女子として遺憾なきは、女子の本

分を全うせるなり。女子の本分已に全きに於ては、國家の一員たる本分も亦完全に盡したるものにあらずや。其夫をして文明國の紳士として毫も辱づるなからしむるは、妻なるものゝ力なり。其兒をして第二の國民として健全なる發達を遂げしむるは、母たるものゝ力なり。この二つの者已に戰捷の名譽を維持して以て、世界强國の列に伍せる我國の位置を鞏固ならしむるに足る。况んや妻として母としての餘力ならば、進んで直接に國家社會の爲に盡すところあるも亦甚だ可ならずや。

愛國婦人會に加盟して、奔走盡力するにあらずんば、戰後の婦人たる道にあらずと思ふ人もあらん。義勇艦隊製造資金の募集に應じて、資を投ずるにあらざれば、新興國女子としての恥辱なりと思ふ方もあらん。又た貴婦人と相伍して交際社會に翺翔するにあらざれば、文明國婦人の面目を保つ所以にあらずと考ふる人もあらん。是等の事固より必ずしも惡しきにはあらざれば、若し餘力あらば應分の力を盡すべきは言ふまでもなけれど、本末を忘れて、專ら意を此に注ぎ、之に依るにあらざれば、戰捷後の功果を收むる能はざるが如くに思惟せば、恐らく思はざるの過誤を生じて、後日必ず悔悟するの時あるべし。妻たるは易し、されど良妻たるは易からず。母たるは難からず、されど賢母たるは甚だ難し。易からざるを能く完うし、難きを能く盡すは、寔とに戰捷後に於ける日本女子の勤めなり又日本女子の名譽と位地とを保持する所以なり。日本國の赫々たる光榮を後代に傳ふる所以なり。若し夫れ戰捷後の日本女子が、勤勉節約を守るべきは、尤も重要の事ならざるを得ず、戰爭に克ちて經濟に破れたる普佛戰爭後の獨逸國は、日本女子のよく鑑むべきところにあらずや。



女子と規律

東京高等女學校長　棚橋絢子

考へて見まするに、現今の人よりは古人の方が、餘程規則立つて事をしたやうに思ひます。當今の女子達は先づ學校だけでは、稍規則立つて事をしますが、さて其他の事となると、それは〱驚くべきです。

例へば宴會などにしてもいつも定めた時刻よりは遲い。少しでも規則立つてすればするだけ、利があるのに一向不規則。時には規則〱と騒ぐ人もありますが、たゞ表面のみで、内心にはさまで規則に重きを置かない。眞に今規則立つて、一家揃つて朝起きをしますと、どのやうに心地快いものでせう、それに引きかへて朝寢坊の不快はどうでせう。

▲私の稚い時代

には嬰兒の外は、一家うち揃つて毎朝五時には起きる定めで、十歳の時には、拭き掃除やら、御膳のこしらへやら、兄弟が多かつたものですから、隨分勞働しました。今では學校があるからと云つて、そのやうな事はさせないが、それでも宅の娘、最も上の十一歳になりますのには、朝々床の間を拭はせます。學校と違つて、毎朝爲よ爲よと催促して、漸く此頃床の間だけは拭ふやうになりました。

▲一體日本の習慣では萬事が不檢束で困る。人を訪問するにも、先方の翌日の規律にまで影響を及ぼすことの無いやう、夜更けては訪はないやうに、また訪うて居つても午後の九時迄、くとも九時半には歸るやうに、心せいではなりませむ。また

▲下女を使ふにも然うで、その使ひ方に少しも定りがありませぬ。私は毎朝私の部屋で、手水をつかひますが、入用品一切、歯磨とか、手拭とか、櫛とか、整然と備へて置きますから、たゞ水を藥鑵に一杯、運ばすればそれで足ります。而して下女が、部屋を掃除して居る間を、庭の草取に費やして、その後お膳に向ひます、これが私の規則になつて居ます故、人を多く使はずに出來る。檢束なくすると、やれ水をやれ元結をやれ剃刀をと大騒ぎになる。規則立つて爲ると萬事が簡易に出來る。その

▲藥罐に入れる水の量も柄杓で幾杯と定めて置く。斯ういふ風に萬事をすると、自分が出來ない時、人に命じても不都合が無い、私は目分量とか、手加減とかいふ事にするのが善くないと思ふ。同じく御飯を焚くにしても、何時頃から着手し、一人前に幾何の米を使用するとか、定めて置けば、随て人の多少に因り、増減せられます。たゞこの一事でも注意すれば、私の一家のみならず、社會の利益であります。それを好い加減にせよといふのが一般の風習である。確に

▲好い加減にといふ事が害を

する。物事を好い加減にと云つて大樣にすると、兎角過不足を來し、前後混同を來す、されば無用の時間を費やす事が夥しい。これに反して規律を保てば經濟である。固より經濟とは金錢上のみと心得てはなりませむ。時間の費が金錢に大關係を持つて居ます。人々が時間を經濟的に使用せぬ故、種々の仕事が出來ず、それ故自宅で出來る位の易い事でも外で爲させるやうになります。それですから先づ一番に、小兒に規律だつて事をなさせるやうに敎へるが宜ひです、殊に女の子をば徐々と使つて、餘り

▲厭がらぬ程に仕事を課し

てゆくと、否がらぬのみか、却つて喜ぶやうになる、然うなつてゆくと、本人は少しも苦勞しないで仕事をする、それを抛擲して、十四五にもなつて、俄に此れもせよ、彼れもせよといふことになると、本人も苦しみ親も苦しむ、小い時より敎へ込む方が幾許好結果であるかは、爭ふの要はありませむ。此頃新しう一人の下婢を雇ひましたが、朝から晩まで不調法ばかり仕て居る、これは稚い時から敎へなかつたものですから、こんなので、小い時から

▲このやうなものはこのやうに取扱ふ

といふ習慣を附けて置けば宜いので、蓋の有るものは必ずその蓋を開けて、水の有無を確めるとか、臺に乘るべきものならば、乘つて居るか如何かを確めて、而る後心して扱へば、油を零すとか、硯の水を滴らすとかの失體はない。稚い時より不檢束不規則に生育つた者には、兎角不調法が多い。

一家の妻君たる地位に在る人は、殊に女子養育の上にこの點を注意して貰ひたい。呶いやうですが娘が相應な年齢になつてから騒ぐのは宜ろしくありませむ、何事をするも、一に

▲年齢に因るとて

年齢を加ふれば自然と、知るに至るとして放任すれば、始終物が遲れる、年齢取つて、年齢の長じたる爲めに知るやうでは、役をなすことが少い、徒らに年齢の寄るのを待つて知るならば、教育は用つたものではありますまい。子を教育するには、

▲方針を示して、經驗せしめ

なくてはなりませむ。不調法を小兒の時より矯正してゆけば、教ふる年月が長い。何事も規則立つてすれば、仕懸つたものでも、中途で手が空くと、直に他のものに從事せられる、このやうにすれば、倍といひたいが實に三倍も時間が助かる。私は年寄ですが、一日何かと用事をしますがその用事は、決して若い一廉の婦人に劣りませぬ、それならば若い人程勞働するかといふに、然うで無い、ただ全く順序立てゝするといふに出るのであります。今朝書物箱を査べて居ましたら不圖、西洋女大學が出て來た、これにも今私が申しましたやうなことが載つて居ます。

▲一家の主婦となつては

西洋では交際を、喧ましくいひ、小兒時代から交際を教へ交際の際に内を治めるといふ風ですが、日本で

は一家の内を治め、それから交際をといふ風です、そは如何にせよ日本のは偏る、不規律である、交際するとて何も朝から晩まで、交際するにも及ばず、土曜日曜をこれに當てゝも宜い、而して此兩日をこれに當てるやう平生勞働けば宜い、今の人には一廉の妻君といはるゝ人にして、交際々々と始終出て居て、何時訪ねても不在な方がある、爾うかと思へばその反對に、始終家にばかり居て、良人に向つて外へ連れて往つて下さるならば出るが、獨りでは出難いなどゝ云ふ人もある、此種の人達は、年中下婢や小兒とのみ交際して居るものだから、人の氣を汲むことを知らず、偶々人と逢へば、頻にお辭儀のみをなし、語が交されない、これも殘念である。

西洋の方では偏しないで、夫が立派に出世すれば、夫の品位を落さないやうにし、夫が亡くなつても、品格を墮し家政を紊し、家を失はないやうにし、別して子があれば、親の跡を續がせるやうにする。これは身分の高貴な人に於ては、比較的容易でありますが、相應の不動産や貯蓄の無い人では、急に零落し易いが、それを然うしないやうに力むるのが女の義務であります。

學校の敎育時間は僅ですから、専ら學校委任では宜くありません、それでは實際の間に合ひません、わたくしは學校で往々、生徒に

▲**記憶力が乏しい**

のを感じます、これは慣習が惡い所以かと思ひます。私は記憶力の善い方ではないが、一家を整理してゆく上に於ては、よく記憶して居ます、これは全く何物をでも種類分けにし、整理し易いやうにするを以てゞす、今迄在るものを二重に買ひ求めたことがありませむ。記憶力が惡るくば惡るいやうに區劃を附けて

すれば宜い、物品に區分がなくては、見えなくなるものがある、見えないから同じものを、幾個も購ふ、經濟上損である、中には餘り久しく使用しなかつた爲め金屬製の物などは、錆が附き使用に堪へなくなる記憶力の惡るい人でも心得一つで、規則正しくすることに慣れてくると、存外覺へらるゝものです。この記憶力を養ふため、小兒に相當な事業を授けるが宜くあります、然しそれも人々の天稟に因るから一樣に授けては不可ません、善きものには多くを、惡しきものには少しを授けてゆくがよろしうあります、これは學校へ進る上にも注意して、愚鈍の方をばやさしいもので固めて、無理に敎へるときは、何も出來なくなると恐れねばなりません、勿論才發な方をば一層發達するやう多くを敎へてよろしい。また一軒の内にでは、種々の用事はあるが、その中、眼目になるものがある。それは

▲賢愚を問はず一家の經濟に

力むべきで、夫も注意してこれを勸め、自分も成らぬまでも留意しないではなりませむ。然るに當時の人には、夫に家事一切を委せ、金錢は夫の儲けて來るものと思ひ、費用は入るだけは入るものとして、一向意を致さぬのが多い。一家の經濟に心を入れ尚小兒に惡しき慣習をつけぬやうにとは、縱令至らんにせよ自分の力の在らん限り、進んでしなくてはなりませむ、其他女の義務は幾許もありますが、自分より力めんではなりませぬ。その

▲小兒を養育するにも

一寸僅の間、泣かせないならばよいとして、嘘を云つたりなどして、惡しき習慣をつけるなど最も不可で

す。よきものを與へるといつて與へなかつたり、或は怪物が出るといつていつはつたりするなどは元より惡いです、現在見せられるものをいつて、見せなければなりませぬ、現時の風習では小兒に嘘を敎へて居る、私の内の下から二番目の子を、久しく下女に委して居たが、何か惡い事をすると、乾度姉さんがしたとか、太郎さんがしたとか詐る、決して叱らないから眞實をいへといつても嘘をいふ、この嘘を敎へること嘘をいふことが、不規則な慣習をつくる原因になる。

子供を養育するに、一時樂に樂にと力むるのは感心されませぬ。元來親となつたらば、子を育つるに十分骨を折らないではならぬ理です。同じ骨を折るにも衣服などに苦心して、よき習慣をつくるなどには夢々思ひ及ばない、殊に財產家にては、内々では金錢に不自由は無し、たゞ他家へ緣付ければよい、娘は賣物のやうに考へて居る。外國と競爭する第二の國民を造るべき時に當つて、このやうでは實に困りますこのやうな放任主義で、育てあげられた人々は、あはれなものと思ひます。私は子供を敎育するに意を用ゐまして、規則正しくすることゝ、記憶力を助長せしむることゝには特に多く注意しました。一つの箱に物を入れるのにも、その入れやうを工夫せしめ、揷頭とか人形とか種々の玩弄物でも、部分をさせて損じないやうに敎へました。後には三人の子が二人になり又その一人も二十歲で死にましたが、殘る一人は今でも、敎へた通り整然と行つて居ます。誰でも敎へたならば、あのやうにならうと思ひます。然し私は大勢子を持たぬから、斷言は致しません。悴は男だから、吝々しては見つとも無いといふこともありますが依然緻密の所は私に似て居ます。私しは

▲半紙の反古であつたならば

決して手拭きにはしない、新聞の帶封は拂塵になり紙の切屑は紙捻になる、糸屑も利用すれば立派に用を達す、平生仕事を了つた後などで、一寸糸を繼ぐとか紙を捻るとかして置けば、他日貴重な時間を助ける拂塵は買へば、一錢足らずの物でせうけれど、その一錢も集つて千圓となるので、千圓がもし一錢足らずともそれは千圓で無いのである、誰れも〳〵千圓には眼が附いても一錢には眼が附かない。私が毎朝下女が掃除して居る間の半時間を庭に費やすのは、無益のやうで然うでない。その草取と同じやうに毎日毎日規則だつて事をすれば、非常に利益であると確信して疑ひませむ。現時の日本で先づ規則だつて行はるゝものはたゞ食事のみでもありませうか。一日も早う一般が規則だつて事業をするやふに致さなくてはなりますまい。

女子教育は如何せば可なるか

廣島縣立廣島高等女學校長　齋藤鹿三郎

廣島は日露戰爭以來樞要の土地となり、諸般の點に於て比較的活氣を呈し居ると同時に、教育家の參考に資すべきもの亦鮮しとせざるなり、殊に女子教育の發展は、米國篤志看護婦マーキー女史の一行並に英國同看護婦リ夫人等の頻繁往來すると共に、多少の感化を受けたるものありと思はる、此際女子教育の當事者たる齋藤校長の意見を聞くも亦無益の業にあらずと考へ、一夕同校長を訪ひ之が談話を試みたれば、其要領を記して貴社に寄する事とはなしぬ（藤田霽濱識）

△女子教育の理想

如何なる女子を作らねばならぬかと云ふ事は、女子教育上必らず豫め確定して置かねばならぬことである即ち女子教育者は先づ理想の婦人と云ふものを頭に造り置き、生徒を導きて日一日其方向に進ましめなければならぬのである、そこで高等女學校にては、高等女學校令第一條に基き、女子に須要なる高等普通教育を施すと云ふことが目的としてあるが故に實地の教育者は此高等普通教育と云ふことを正しく解釋して置かねばならぬ、元來教育と云ふことを汎く言へば、男子も女子も同一で共に身體の發達強健を得せしめ且精神の確立を得せしむると云ふことが必要である、然れども男子と女子とは其天職が異なるものであるから、女子には主として其身は内向に適する樣に仕込み、其精神の活動も内向きに役立つ樣に仕込まなければならぬ、抑も女子の天職と云ふ事は、家政の整理、兒女の教養と云ふ二大任務に外ならぬのである、換言せば能く人の妻として、又人の母としての任務を盡すと云ふことである。

△善良なる妻とは如何

そこで教育者は善良なる妻とは如何なるものであるかと云ふ講究が必要である、簡單に此事を申せば人の妻たるものは、先づ有形上にては、衣食住及び其種類、品質、價格、其他衞生上、道德上、經濟上に關し秩序ある整理を爲すの能力がなければならぬ、故に學校にては大いに衣食住に關する家政學を實地に授け同時に秩序的行動と云ふ事に重きを置くのであります、又無形上にては、家族の心の整理、即ち平和なる家庭を作ると云ふことが一の大なる任務である、而して平和と云ふことは『事なし』と云ふことではない、『無事の進行』と云ふことである、されば家族の皆々の心が和合して居つて、而も家が益々繁盛し、益々豊かに成り行き、誰も彼も心地よき發達を遂げて居ると云ふとである、事なくして進歩のなき家は、平和な

る家と云ふことは出來ぬ、故に其家の發達進歩を計る所の能力もあり、且つ絶えず之を計りつゝある者でなければ、良妻と云ふことは出來ぬのである、然るに絶えず己れの考へを立てゝ仕事をすると、動もすれば玆に新舊衝突と云ふことが起るのである、之が世の所謂姑と嫁との衝突である、之は學問をした嫁さんにも此事が起ることがある、併し之は其學問をした女子が、己れの學んだ智識及び强き意思を剛情に行はんとするより來たる弊である。

△女子の感情の整理

そこで將來の女學校教育は、女子の感情の整理、即ち情を剛にせずに柔かに用ゐしむる、所謂柔能く剛を制すと云ふことを原則とし、舅姑に對しては柔順を旨として其感情を害せざる樣にせねばならぬ、而して徐ろに自分の信ずる仕事を進め、老人をして己れの爲る事に贊成するに至らしむる力量を有する樣に仕込む事が大切である、之は皆感情教育から來るのである、故に當校にては感情教育と云ふことは大いに注意して居ります、而して其基は愛敬と云ふことである、愛敬と云ふことは女子の有すべき二大德操である愛と云ふのは他の爲を計ることを目的として、己れの心持や行ひを他に働きかくる事を云ふのである、火におあたりなさいと云ふも其人が寒いだらうと云ふことを思ひやりて云ふので、御世辭に云ふのではないのである、敬とは己れ若くは他のものゝ爲を計り、又は己れの爲に計りたるものに對して、愛を働きかかくることを云ふのである、即ち對手の爲を計る行爲は之を愛敬と云ふのである、品性高き女子と云ふのは、必らず此二つの德操を有して居るのである、此二つさへあれば家内の平和が保たぬことはない、姑と爭ひを爲す恐れはないのである。

△賢明なる母とは如何

女子教育者は賢明なる母とは如何なるものであるかと云ふ講究をしなければならぬ、學説としては女子は天然の教育者であると云ふことは一般人士の承認する所である、併しながら此には一の條件が必要である其條件と云ふのは外ではない「兒女を教育する智識方法を知つて居る母は、最も優れたる教育者であると云ふ事である」いくら女子でも教育の心得がなくては完全に子供を育て上ぐることは出來ぬ、殊に人の母たるものは男をも女をも育つるものであるから、賢母となる爲には小供とは如何なるものかと云ふとを知らねばならぬ、之は家政學の上に於て又古今の人物に就き大いに注意して居ることである、如何なる人、如何なる事業が成功し、如何なる行爲が失敗するかと云ふ、人事上の法則と云ふものを知らなければならぬ、殊に之は女子の事のみならず男子の事も知らなければならぬ、故に私は時々男子の事に就ても、其人と爲り其成敗等に關し說話して居ります、畢竟するに女子が夫を助くると云ふのも其職務を助くると云ふことではなく、以上の二大天職を全うして、夫をして後顧の憂ひなからしむると云ふことである、又夫の成功に同情を表し、失敗に勇氣を加ふるは、即ち内助である、之が爲にも女子は偉人の行爲杯を知つて居らねばならぬ、實に女子と云ふものゝ眞正の仕事になると、決して氣樂なものではない、國の元氣を増すも、一家の繁盛を促がすも、其基は全く家庭である、家庭の無事の進行を圖るは人の妻たるものゝ役目である、羅馬大帝國は女權の擴張と共に起り、女子の墮落と共に傾いたと云ふが、洵に道理ある事の樣に思はれる。

△教授上に於ける順序

當校にては以上述べました女子の二大天職を完全に盡し得る人を作ることを目的として居るが、人間の發達は夫婦に關する道徳が、最も始めに起るものなるにも拘はらず、教授上にては父子に關する道徳を最も先にするのであります、即ち女學校教育にては一年級より直ちに夫婦の關係は說かないのが普通で、當校も其通りであります、併し終りの學級になれば其事に及ぶのは勿論である、依て私は主として一二年級の生徒には、多く良妻賢母と云ふことは說かずして、寧ろ家庭に於ける心得、十三四歳より十五歳に至る迄の女子の心得、女子の長所及び短所、女子の心の有樣、感情の整理、女子の日々の仕事に對する心得等を話して居るのである、又三年級の生徒には、女子は人の妻となり、母となる孰れの點より見るも、身體を丈夫にすべき事、及び心意の修養上、智識を廣め慾情を制し、迷信を去り德操を高め、意思を強くする事より進んで、始めて家族の關係、一家の風習、父母舅姑の關係、女德、婢僕等の事を話す樣にして居る而して四年級に至り、自分と他人との關係、國家に對する任務、一家の成立、夫婦の關係、主婦の任務、子供の躾方等の事を授け、玆に至りて漸く良妻賢母教育の本旨に入り、而も此學年に於て完成を告ぐるのである、即ち從來學びたる事柄を綜合して、始めて人の妻たり母たる事を得るの一人格を作り上ぐるのである、故に四年級は仕上げになるのであります。

△非常の場合に處するの道

次に女子教育に於て又一の考ふべき事がある、それは人の妻たり人の母たる人を作るは女子教育の主眼であるが、之に加ふるに女子をして非常の場合に當つても、自力を以て一家の生活を維持し、且兒女に教育を施こす事を得るの力量を備へしめ置きたいと云ふことである、是は實に一の問題であるが、此の教養は

決して良妻賢母を作ると云ふ論とは矛盾しないのみならず、寧ろ兩立する事情があるのである、苟も良妻賢母たる資格あるものは、其位の事は出來るのである、昔の婦人にも其樣な例は澤山ある、併し高等女學校本科の教育では決して非常の場合をば豫算に入れてはない、本科にては、重に非常の場合に於ける妻女の人格を作りつゝあるのである、然れども本科卒業後の教育、例へば補習科の如きものは、特に學科を少くし、必然的に女子に須要なるものゝみを授くるのであるから、而も生徒が自由に己れの好む所の學科を修むるのであるから、自然と非常の場合にも役立つ樣になるのである。

△**女子教育に對する本據**

私が教育の大方針とする所の本據は、英國の大教育家ロック氏と同樣である、即ち『健康なる身體には活潑なる精神が宿る』ものであると云ふことを以て原則とするのである、又苟くも紳士の名を附することの出來るものは、必らず非常の場合には劍を把つて起つことの出來るものでなければならぬと云ふことにも同意見である、而して女子に就て苟くも淑女と稱せらるゝものは、自から兒女を教養し得るの力量を有するものでなければならぬと云ふ、羅馬大帝國の女子教育の方針と同樣である、予は以上の主義として、大いに、寧ろ非常に、女子の體育を盛んにすることに注意して居る、即ち一家の主婦の身體が繊弱なる程一家の不幸なることはないと思ふ、殊に其子供が憫然であると思ふ、家の不幸は國の不幸であるから、戰爭があるにつけても、女子を丈夫な身體に作り上げたいと云ふのは眞に私の赤心である、依つて此頃は生徒の身體の爲になることなら、金を惜まずにやつて居ります、テニスのコートも各年級に一つ宛、寄宿舍生徒に一個都合四個を作りました、フートボールも二ツ買つてあります、飛繩も各年級に一本宛あります

綱引は共同して出來る運動ですから時々やらせます、先日綱を買ふて十日許りたつと、其綱を二度眞中から引き切りました。

△女子道德的品性の修養

夫から先日は陸軍の病衣を縫つた金で、羽子板を六十枚作りましたが、之は誠に好い運動になります、雨天の時には室内にて運動することにして、テーブルテニスをも作つてあります、又私は生徒を動かすのみならず、學校の品も室も動かせよと云ふ主義でありますから、講堂でも時々遊戲をさせることにしてあります、昨今本校の生徒は、雨天の時又は非常に暑き時の外、一人も殘らず大氣中に出でゝ運動することにしてあります、兎に角私は生徒を運動場に追ひやる主義です、そこで昨今は女子體操遊戲專門の教師を特別に聘して居る次第であります、又無暗矢鱈に質素の衣服を着よとか、靴を穿けとか言つても出來るものではありません、又運動を盛んにさへすれば、自然と質素になります、少年生徒抔は筒袖を着る樣になります、故に私は此運動の方面から、身體の健全を圖るのみならず、大いに道德的品性の修養を計らんことを努めて居ります、又昨今は精神の鍛錬に必要なる女子的武術たる薙刀科も加へてあるのです。

△仕事の敏捷と數の觀念

又日本人は今回日露戰爭を見ても分りますが、非常に敏捷であると云ふことは大特徴であります、機先を制するは敏捷より來ることは明かであります、故に私は何處までも此日本國民を益々敏捷なる活動を爲す人間となさねばならぬと思ふ、特に女子の家事上の行動は、敏捷と云ふことが大切なのであるから、大い

に仕事を敏捷にすると云ふことを奬勵して居ります、女子が敏捷活潑に運動することは、決して俗に云ふお轉婆でありません、世人が何と云ふても、誰が笑つても、私は今より少くも二十年の後には身體の健全ならざる女子は役に立たぬと云ふことが輿論になるだらうと堅く信じて疑はぬのであります、次に私は生徒に對し數の觀念を養成する事にも注意して居ります、元來衣食住に關する經濟の事及び衛生の事は、妻たるもの丶掌るべき仕事であるが、此等は如何なる事でも、例へば皿でも箸でも砂糖でも米でも何でも、入るを計つて出づるを制するには必らず數の勘定から來らざれば家は持てぬものである、其他裁縫でも刺繍でも皆計算を要するものである、然るに從來女子は數字が下手なものであるとして、其方面の教育に重きを置なかつたが、之は大なる間違である、一體眞の綿密と云ふ事は數から來なければならぬ、節儉、貯蓄と云ふことも數の上から考へなければ出來ぬことであります。

△女子に對する判斷力

私は女子に對し物事を容易に判斷し得るの力量を與へしむる事には注意して居る、元來女子は内に在つて家政を掌るものであるから、其仕事は大きなものは少い、仕事の大きなものは男が掌つて居る、併しながら其仕事の數は男子よりも多いから、大小に限らず常に之を斷すべく、又此場合には然かすべしと判斷して行かねばならぬ、故に女子は絶えず仕事に判斷を下して行かねばならぬ役目である、今迄の女子は兎角逡巡躊躇、事を決し得ずして彼れ是れ迷ひ居ることが多い、之は女子の大なる缺點である、私は此の缺點を矯正するにあらざれば、女子の品格を嵩めることは決して出來ないと思ふ、依つて在校中に此判斷の習慣を養はんがため、事の大小となく、生徒に於て出來る仕事は、何事でも自から斷じてやらする樣に

してゐる、そこで各組に組長、副組長と云ふものを置きて、何事でも自から企て自から爲さしむる樣にしてゐるが、之も判斷、勞働、統御等の習慣を得せしめんが爲である、物品の整理から、錠の開閉までも生徒に任かする事にした、時によりては來賓の取扱抔もさせる、又茶や火鉢の給仕抔を爲しむる事もあります、私は働くと云ふ事は決して人の品格を下げるものではないと云ふ理法を堅く信じて居るから生徒には色々の仕事を命じます、以上お話申上げた事柄はホンの大體でありますから其積りで御諒知ありたし。（完）

戰後婦人の覺悟

帝國大學教授
文學士　藤岡勝二

婦人は先づ大別して、學生としての婦人と、母としての婦人と及び其の他のものとの三種に區別することが出來る。而してその第三位に在るものは姑く措いて、けふは前の二者に就いて、御話しませう。概して社界の勢力を作るのは、此二者にあるですから。

抑戰爭といふものは、自己の國を世界に知らしむるものでありますが、私が歐羅巴に在つた頃は、日本は全然知られませんで、その知られない事が、恰も日本人に、モンテネグロやセルヴィヤが、知られないやうな有樣でした、近頃モロッコ問題が盛に出るがそれでも、日本人には未だ其地が知られない如くに、私が彼土に居た頃も、隨分氣色の惡い、問をかけられたです、かうです、第一日本を熱帶の如く思つて居るです、それは顏色から來て居るらしい、日本人の顏色は白くなく、赭味を帶びて居ますから、雪が降るといへば、驚いて居るのです、これらは全く地理上の位置を、知らぬから起るので、露西亞と戰爭を起

すといへば、一潰に押し倒さるゝであらうといふ、こんな調子だから、無論日本の大いさが分らぬ、また人口の多さを知らぬ。眞に日本に同情を持つてゐる自分の友人等が、こんな事をよくいつたのです。かく國の位置を知らず、人口及び國の大いさを知らず、況はんや日本の文明が、これ程……第一豫想しない。かの二十七八年の戰爭で、支那は、脆くも負けたけれども、

△猶支那を東洋で有爲有力なる國と

認めて居る。豫想したより比較的、支那が價値無きことは、その敗衄に因つて、歐羅巴人に知れたれど然し、支那の人口幅員は、彼等をして餘程强大國の如く想像せしむるです、特に此國は歐羅巴及び亞米利加の經濟界に信用がある、これに反して我國日本は經濟界の信用が乏しかつたものだから、一向知られ無つた、今一つ彼等が支那を、大切に思ふ所以は、支那には固有の文明あることを認めたれど、日本に於ては、美術上に日本特質の美を認むる外、毫も他の特質を認めず、美術以外には何等の特質無きものと思つて居る、この固有文明ありといふ事が、遙に輸入物多き日本に比して、尊重せらるゝ原因です、これ等總ての點に於て日本は大におはれに見られた。日露戰爭は大なる問題で、その兩國戰端を啓くや、何れの國も國も、日本を愚なものとしてゐたです。然し幸にして、終に良成蹟を揚げて立派にゆきましたが、それは出征軍人の力にも因りませうけれども

△一般教育の結果より

人民の心を一致せしめたのと、それから由來日本の國民性が外寇に對してよく一致する性質あるによるこ

とは明です、かく非常に

△精神的力の存することは

日清戰爭によりては、まだ認められんでしたが、日露戰爭に於て、漸く認めらるゝに至つた、一般西洋人が日本に就いての地理上のこと、人口とか幅員とか、物質上の日本の位置とかいふやうな事に就いては、依然として往日の如く、知らないかも知れぬが心ある人達には精神力に非常のもの、存することを認められた、何め戰爭すればとて、地理及び軍事上の事の多少は知れるが、戰爭を起たしむる精神力までが一般に容易に知れわたるものではない。近頃西洋の識者が、つく〴〵感服したのは、戰爭上の能力に於てのみならず、尙その精神力に驚いた、何故かといへば、西洋の雜誌を見ても、日本軍事の進歩を頻に稱讃すれども、其質

△有形的の日本の軍備は、珍らしく無い

敵の露西亞にもある。或る場合に至つては、軍備は劣る場合がある、軍備或は兵器といふべき方に於ては日本が劣つて居る。然るに日本が勝つ故、疑を起しこれは結局兵器以外何かの力が無くてはならぬと思ひ來つたので、恐らく日本人自らも驚いて居るであらう、故に天祐の語で持ち來つて、不可解として居る、この不可解は結局孟子の、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずといつた。その

△人の和に基いて居る

人の和がない敵は如何です、露都の騷擾とか、オデッサ、セバストポルの騷動とか、曰く何曰く何、實に

夥しい、これに反して日本には、立派なる人の和がある。實に麗はしい人の和がある。さりながら人の和も徒に成るものでない、その所以がある。それを外人が疑ふ。

△外人には到底日本の國體が解釋出來ぬ

皇室と國民と同一系に出るといふ事など、彼等の頭では解釋が出來ぬ、それ故、非常に疑ふ、疑ふ結果先づ敎育に於ける日本の精神修養が、如何になり居るかを考ふるに至つたです、それは日本人の所謂、大和魂とか武士道とかいふもので、之れまた西洋人には一向解らぬ、この解らぬものこの物が今眞に、日本を西洋に紹介する、基礎たるものであらう、日本の人口、幅員、人種、文明の度、それから金（支那の如く豐でない）等よりも、現に外人に最も攻究せられつゝあるのは、國民精神の力、この精神力は、有形的文明と竝ひ

△摸倣が出來ぬ

こゝ也こゝが我日本帝國の有難い處である。爾く有難い所であるが、唯注意したきは、そのやうなる至極結構なる精神があればこそ、戰にうち捷つのであれば、その結構なる精神を、敎育して益々强固に、完全にと力めなくてはならぬ、而して

△其責任は婦人にある

日本で武士道の、盛に重んぜられたる時ば、婦人を物の數ともしなかつたが、今日以後の精神敎育に於ては決して、婦人を輕んじない、啻に輕んじないのみならず重んずる、その故は西洋文明が、調和せられた

のに因る、されば今後は所謂古き武士道とは少し異なつたものが出來るであらう、それには女子が進んでその精神修養を助ける位置に當らなくてはならぬ。女子が排斥せられた時代、輕んぜられた時代でさへ、婦人が發奮して、夫をして節義を全うせしめたるに、況んや昔しと異り重んぜらるゝ今後にあつては、及ぶだけ進んでかゝる美事なる精神の涵養を助くるやうに、しなくてはならぬ、昔しは輕んぜられたものだから陰に立つて助けて居た、處がこれからは表面に立つことが出來る故、現れもするし、發奮して助力したならば、功力が著るしからうとおもふ、丁度今が時代が改り眞の明治の代に這入つたのですから、その覺悟で大に努めなくてはならぬです。それで學生の女子即ち

△女學生に於ては

兎角學問最中に理想的に、走り易いから、實際に鑑み、人間も常識の發達を自ら勸めないでは不可です、つら〳〵考ふるに、世間大抵の事はつまり、常識より割り出さるゝので、女子は常識が完全に行はるればそれで足る。何も非常の仕事を目的とするに及ばない、唯常識の事を勤むればそれで宜い、同じく

△文藝を愛するにも家庭の事にでも理想に

走ると屢々根本の立場を失ふことが起る、殊に女子は非常に、理窟をはなれ感情的に進むことが多いから餘程注意しないと、精神が妙に西洋流の衣を被せたものとなる。西洋人からは折角日本人の、特質を認め感服して居られながら、こちらでは西洋風の日本に合はないものを、引入れるやうでは、これこそ眞に

△大なる誤りである

日本人の特質を認めて、沈着なる態度に出ねばなりませむ、斯樣に申しますと、或は保守的退歩的のやうに聞こえるかも知れませむが、爾うでない、明治に入りて基礎を固むるのはこれからで、今迄は作る時代であつた、若し三十何年作り來つたものを、今に當つて固めなかつたならば、妙な事になる、譬へば折角道を作つて、今それを均しつゝあるのだからよく均さねば可かぬ、世間女子教育に於て、頻に良妻賢母を云々して、やゝ拘泥の傾きが有るらしく疑ふが、われよりも今猶

△常識教育で宜からう

と思ふ。社界に働く抔は、幾何か應用した側であらうと思ふ。今少し根本に至つて考へた方がよからう又

△母になつて居る人は

この新時期に對して大なる功勞をするか、或は大なる失敗をするかの時節である、古來かゝる時節は無かつた、大切なる時期である。

このやうな戰爭後の、國民思想は非常に開放的かまたは保守的かになり、兎角中庸的にならぬものですが大に保守するは悲しむべき事で、東洋に於てこれ程の位置にまで進んだ日本に取つて不利である。勢に乘ずる方が宜い、されば總ての母は、保守も保守だが先づ進歩するやう考へるがよろしい。併し急に國勢勃興の場合に際しては、進む方針で進んで往きながら、ともすれば他に出ることがある、これは他の國にも例がある、心がゝりの一つです、美事に戰ひに捷つた故、一般國民思想が日本中心主義で、無暗に進む方になるか。或は度外れに開放して

西洋人に醉せらるゝかの患がある。西洋人に醉せらるゝも、單に外形より見たならば進歩に見ゆるものであるが、事實は進歩で無いかも知れぬこの日本中心主義傲慢主義お山の大將主義と、醉せらるゝ主義と二つ出來た處で、孰れも注意をせねばならぬ、

△西洋人が猜疑を起しかけて

居る故、中心主義でやると、狡猾なる彼等の手に乘り、又醉ふと知らず識らずの內に、土俵の外に出されて居るやうになる、さればとて保守主義も不可でありますれば、要は

△日本在來の精神を固めるべし

たゞそれさへ固まらば、進歩主義も可なり、西洋文明を容るゝも可なりで、外形に何が付くとも一向差閊はない。されば母として家庭に兒女を敎育する身でありますならば、先づ日本在來の精神を堅固にするといふ主義で、日本從來の家庭に倣つて、敎育するがよくあります。さればとて暴に親權を振ひ、壓制してはいかぬが、急に西洋風の家庭敎育を入れるといふこともいかぬ。今の時は矢張、關渉しなければ日本在來の精神敎育にかなはぬ。在來の家庭敎育主義は、兒の自由を充分に、させないといふので、愛する方面にも偏る、即ち愛に溺れもするが、どの方面にも深く關渉するのである。この習慣から急に離れて、西洋の關係しない風にすると、兒女の家庭敎育は完全にゆかぬ。

△長者に服從する

といふことの慣習を敎ふるのは、頗る大切なる考で武士道に君の爲、命を擲つも此考であるが、悲しいか

なこの感念が今薄らぎつゝある。私は思ふです以上幾回も述べたやうに、在來の精神教育は何處迄も保つて、而も今日の社界に調和する裝ひを附けることが最も緊要で、調和の感念を缺いでは、頑固者流に陷つてまた救濟する事が難からうと。尙總てを約言すれば

△外國人に羨まれて居る日本精神を

完全に保護し立派に有功に、涵養してゆくのが必要で、女學生修養上の考も、かくありたきものです。今度の戰爭に日本の勝ちたる所以は全く、長き歲月の間に養はれたる精神に因るのであれば、毀さないやうにこの精神を保護發展せしむる要がある。折角明治の時代が成り立つた時全然變つたものになるやうでは心配である。このやうな點を學者は注意して居るが、一般人に於ては、只に物質的方面の花々しい事のみが氣に付かないやうでは困るから、此方を注意したい。

序に女子の自立といふ事について少し話しませう、昔しは男子の事業が即ち女子の事業でしたが、今は獨うでないですから、往々自立せうとする婦人がある、この側の人の事業は概して、向上主義で時には男子以上に出んとするでありませうが、それは事實到底男子以上には出來ぬと思ふ。勿論中に一人や二人は男子を拔くものもあらうけれど、一般に於て女子は男子以上に出ることは難い、何となれば

△婦人は天性負擔を持つて居る

即ち子を產とか、一生獨立してゆくやうに、出來てゐない、それ故その方の誘惑に陷り易い、今一つ女子には

△事を捲きかへして遣る

といふ例が少い、一度失敗すると何處迄も落ちてゆく、事業上何か障害が出來ると曲る、女子自身には獨立自活、男子に劣らないと考ふる人もあるであらうが、それは損です、女子としての眞の幸福は、そのやうな處に無い。

△女子は家庭をつくつて見て樂みが出る

男子は事業に於て、樂みを持つものであるが、女子は自分から家庭をつくるやうにするが徳です。西洋のやうに財産分配主義で、父死せば長男にも娘にも分けるといふのならば、まだ自立も易いが、それでも、獨身生活者は困つて居る、況んや日本の風習では長子が皆取つて了ふのだもの、戰後の女子には、隨分自立を考ふるものが起るであらうが私は取りませぬ。

獨逸などにては女子の職業問題は大變な重要問題で亞米利加でも爾うです、女子獨りでは到底いかぬです然し社界としては、女子に職業を授けねばならぬが女子より好んで自立するには及ばぬ。

前にも云つた通り、空漠なる理想を抱いて、自立を志すに至つては危險千萬です、

△經驗ある長者の命に從ふが得策で

從はないと、健全なる發達は出來ぬ。これを社界の事實に徵するに、或る程度の親の關渉ある家の方が、關渉の無い家よりも遥に好結果では無いか。

（完）

小楠公

文學士 大町桂月

第七、四條畷

寄手の京勢は淀八幡にて越年し、正行勢は河内往生院のわたりにて越年しけるが、明くれば正平三年正月三日、師直六萬餘騎を提げて、河内に向ひ進み來りぬ。彼もさるもの、楠は定めて難所を前にして待ち居るべければ、寄せては惡し、寄せられては便ありと思ひしが、兵を四軍に分ちて、據守の陣を張りぬ。第一を縣下野守を旗頭としたる白旗組とし、其勢一萬二千餘騎、飯盛山上に陣取り、第二は大旗組、河津高橋を旗頭として總勢一萬餘騎、外山の峯に屯し、第三は武田伊豆守、五千餘騎を以て四條畷の田中に、馬の懸場を前にして控へ、第四は伊駒山の南に、佐渡判官入道八千餘騎にて打上り、面に疊楯五百帖を築き並べ、足輕の射手八百人を馬より卸して、攻め上る敵あれば、馬の太腹を射させ、躊躇する所を眞倒に驅け落さんと謀り、而して大將武藏守師直は、二十餘町引後れて、將軍の旗下に輪違ひ旗を押立て、親兵二萬騎に圍まれ、射手五百人を先鋒とし、居然として四方十餘町の間に陣し居れり、凡そ此の如きの堅陣、項羽の略も施し難くぞ見えたりける。

是に抗すべき正行勢は、僅に三千餘騎に過ぎざれども、是より先き、主上には正行決死の誠心を聞召され、如何にも御心許なく思されて、四條隆資に、兵三千を以て、行て正行を援けよとの詔あり。即ち六千騎となるも、尚未だ敵の十分の一を超えず。當に大に正行の智略に待たざるべからざるものあるなり。

依て謀議の結果、正月五日の早旦、隆資の軍飯盛

山に馳せむかひて、白旗大旗の兩勢を牽制せんとせしが、敵は案の如く、擬勢と知らず眞の寄手と心得て、專ら之が防護に力む。其隙に正行は弟正時、和田新兵衛高家、舍弟新發意源秀以下三千餘騎を引具して、霞の間より乘り出し、總直に四條畷に押寄せ、短刀直入大將師直に寄合ひて、勝敗を決せんと突進す。

　飯盛山の敵將縣下野守は、菊水の旗一旒偏へに師直の本陣さして進むを見て、こは捨置かれずと馳せ下り、輕兵三千を控して、正行の先鋒に立ち、好敵ござんなれと待構ふれば、正行の前陣五百騎は英氣滿身、こは面白しと打てかゝり、眞前に進み來る秋山彌次郎、大草三郎左衛門を射落し、續て進みくる御野七郎、雨注の矢に立ちすくめる所を、我が和田新發意、つと蒐け寄て甲の鉢をしたゝかに打叩きて之を倒し、是を軍のはじめとして、我五百、彼三千、喚き叫んで戰ふことしばし、殘り少なく討ち破りて、縣下野守も深手五所まで蒙りて、討ち殘されたる兵を率ゐ、師直の本陣に退去したり。

　次は四條畷の本陣たる武田伊豆守、五千餘騎を以て我が疲弊に乘じて進み來る。味方は餘勇勃々たる前陣と、新に馳せ着きたる二陣千餘騎とを以て之に當りて、双方より取圍み、兵馬東西に驅け違ひて、追ひつ返しつ、旌旗南北に開き分れて、捲りつ捲られつ、七八度まで揉合ひしが、敵武田勢の騎兵は最早殘り少なくなり、味方の二陣また大半疵を被りて、勢やゝ衰へはじめぬ。

　敵の四陣の内、飯盛山の白旗隊と、四條畷の一隊とは、かくの如くに殆んど潰へ終りぬ。殘る二隊の内、外山の一隊は四條中納言隆資の見せ勢を慮り、大手の合戰をば徒らに高見の見物をなすばかりなりしが、楠の後陣戰に疲れて、麓に控へたるを見て取り、奇貨措くべしと長崎彥九郎資宗、松田左近將監重明以下、新手の兵を提げ、小松原より懸け下りて、山を後ろに負ひ敵を直下に瞰して寄せ來る。このたびは地勢の懸隔頗る不利にして、我軍益す辟易

の色をあらはすに至れり。

殘れる敵の一隊を以て、伊駒山に陣し居たる佐々木佐渡判官入道道譽、熟ら楠軍の足並を見、其意を推量るに、蓋し自餘の敵には目もかけず、ひたすら大將武藏守の旗を見て蒐るは必定、さすれば全軍を少しく遣り過して跡を塞ぎ、袋の鼠となして之を討ち滅さんと謀り、其勢を率ゐて飯盛山の南方まで近づき、旗押立てゝ控へ居たるが、楠の後陣、兩度數刻の戰に、馬疲れ氣屈して、頗る難色あるを見濟まし、總勢を三手に分ち、鬨を揚げて驅け下る。我軍の後陣、暫くは支へて戰ひしも、敵は多勢に、しかも人馬共に新手なれば、戰餘疲弊の味方を以て、此新手の敵に當り難く、大半は討死して、殘る僅かの勢も、既に散り〳〵に落ち失せたり。

元より小勢なる正行の兵、後陣は既に敗れて、殘り留る前陣の勢も、今はあはれ三百騎にも足らずと見ゆ。然れども、これ正に楠軍の精粹也。正行、和田新發意を始として、十二月二十七日、如意輪堂の過去帳に名を留めたる決死の兵百四十三人、今日こそ手を取り合ひて討死すべき秋と、言ひ合さねども、一所に犇々と打ち寄りて、後陣の敗亡をも顧みず、唯敵將師直の陣處をのみ目がけて進み行く。之に從ふ殘兵百餘人。

敵は、一番に細川阿波將監清氏、五百餘騎を以て、此敗餘小勢の弱兵に當りぬ。味方はもとより面も振らずに迎へ戰ひ、瞬く間に敵の五十餘騎を討取りたれば、敵は稍臆して北をさして引退く。二番には仁木左京太夫賴章、七百餘騎にて入替りせめ來る。此方は二百餘騎、轡を並べて眞中に驅け入り、四方八方へ驅け立てゝ、火をちらして戰へば、左京太夫賴章、終に支へ得ず一方へ引退く。三番には宇都宮遠江入道、同參河入道、兩勢併せて五百餘騎、東西より相近づきて、此度こそは漏さじと見えしが、正行は敢て味方より之を破らず。敵虎韜に連りて圍めば、虎韜に分れて當り、敵龍鱗に結びて蒐れば、龍鱗に進みて戰ふ、三度合せて三度分れしが、竟に亦敵は

大半の兵を亡ぼして、引きかへしぬ。
然れども顧みれば、味方も今ははや百餘騎の兵を失ひて、殘れるものも馬に、矢の三筋四筋射立てられぬものなし。所詮捨てたる命にはあれど、死に瀕するも飢渇は忍び難し。朝來止みなき激戰に、腹は全く虚しくなり、之が爲めに疲勞もいや增して、少しく身を養はずんば、續て戰ふ勇氣も挫けたり。依りて一同相共に馬を下り、とある田の畔に背をあてて、胡籙に差したる辨當取り出し、心靜かに兵粮を食ひ始めぬ。
此綽々たる餘裕には、京勢も荒膽を拔かれ、か程にまで思ひ切りたる敵を取圍んで討たむとせば、味方の兵を損ずること多からざるべからず。憖じ今日討滅すの要も無ければ、落ちたくば心のまゝに落しやらんと、故らに一方に路を開きて、爲すところを試み居たり。故に小勢といへども、一先落延びて再擧を謀らんと欲すれば、それも自由に爲し得べかりしが、はじめより正行の意は、今日を限りの運命と思ひ定め、師直の首を取りて返らずば、即ち正行が首はなきものと、吉野の宮にても奏したる通りの決心なれば、勿論一歩も退かず。閑かに兵粮を濟ませて起ち上り、聲々に、高師直出で丶勝負を決せよと罵り呼はりて、進み寄りぬ。
此有樣を見たる敵勢は、細川讃岐守賴春、今河五郎入道を始として、武藏守の前後左右に控へたる屈強の兵ども七千餘騎、我先に打ち取らんと蒐出でしが、正行勢は些も臆する色なく、暫く息繼がんと思ふときは、一度に颯と立並んで、鎧の袖をゆり合せ、思ふまゝに射させて、敵近づき來らば、同時にはつと立上り、鋒先を揃へて跳りかゝる。一番に懸合せたるは南次郎左衛門尉、馬の諸膝を薙ぎて落つる所を起しも立てず討ち拂ひ、二番に劣らじと近寄りしは松田次郎左衛門、此方は和田新發意が寄合ひ、長刀の柄を取り延べて甲の鉢を打ち、錣を傾くる所を内甲を突きて馬より落し、此外目前に切り落さるゝもの五十餘人、小腕打ち落されて朱になるもの二百

餘騎、追立て〳〵攻め寄せたり。

七千餘騎の兵も、こは叶はじとや思ひけん。追々に開き靡きて引退き、淀八幡をも馳せ過ぎて、京へ逃るもの引きも切れず。此時若し武藏守師直、一歩にても自ら退きしならば、頽波の勢、盛返し難く、師直の首は兎も角、一先正行の大捷に歸して止むは必然なりしも、不幸にして師直は去る小膽なる男ならず。大音聲を擧げて敵は小勢ぞ、師直は此處にあり。見捨てゝ京へ退く奴原、何の面目あつて將軍の御目にかゝらるべき。運命は天にあり、名を惜しと思はざるやと、目を瞋り齒を嚙みて、四方を下知すれば、少しは兵勢を回復して、師直左右の堅めのみは保たれ居たりき。

其中に正行間近く進み寄りて、師直との距離僅に半町ばかりとなり、多年の本望、今ぞ遂げ得べき刹那に迫りぬ。

此時敵の參將上山六左衞門高元、師直の陣屋に來つて、閑かに物語をなし居たりしが、俄に東西南北騒ぎ色めきて、敵押寄せたりと見えけれども、咄嗟の事にて、我陣に歸り物具を着くる暇なし。見まはせば、師直が着替の料に、同じ毛の鎧を二兩まで置き並べたるものありしかば、上山走り寄りて、其鎧を取り肩に打懸けしが、師直の若黨鎧の袖を控へて、是は如何なる御事ぞ、我君の御きせながにて候ふものを。案内をも申されずてはとて、奪ひ止めんと引合ひ居るを、師直見やりて若黨をはたと睨み、いふかひなきものゝ振舞かな。只今師直が命に代らん人に、縱令千兩萬兩の鎧なりとも、何か惜しかるべきぞ。其處のけと制して、顧みて、いみじくも召され候ふものかなと、上山を賞せしかば、上山嬉しき氣色にて、此詞の情を思ひ入りたる心地、いはねども色に顯はれけり。暫くありて師直、今は危く見ゆるに至りければ、上山六郎左衞門、師直の前に立ち塞がり、八幡殿より以來、源家累代の執權として、武功天下に隱れなき高氏の嫡流武藏守師直是にありと、大音聲を擧げて、潔く正行に首を授けしを、正

行の軍には一人も知るものあらざりけり。

正行一刀の下に師直を討取りて、其首を見れば、淸げなる貌の男にして、鎧を見れば輪違を金物に堀り透せり。さては仔細なく武藏守を討取りて、多年の本懷を今日達したり。是見よや人々とて、此首を宙に投げては請取り、請取りては手玉に使ひて悅びしが、弟正時馳せ寄りて太刀の尖端に指貫き、差上げて是を見るに、師直といふは僞り、紛ふ方なき上山高元の首なるを、斯くと聞きたる正行は、暫し齒嚙をなして無念の情堪へ難き態なりしが、母に亨けたる武士の情けは、かゝる時に表はれ出で、我君の爲にこそ不倶戴天の逆賊なれ、主の爲に身代りに立ちて一命を拋つ事、其義勇稱すべく學ぶべし、ゆめ他の首と混ずまじきぞとて、自ら着たる小袖の片袖を引切りて、高元の首を押裹み、岸の上に指し置きて、口の内に一片の回向を唱へて去りぬ。

此日既に卯の刻より申の刻に及び、前後凡そ三十餘戰、獲たる首級は幾千なるを知らず。味方も今や殘兵僅に五十餘人、師直未だ討たれざるを知りて、彼の旗幟を望み最後の進擊を果さんとせしが、正行暫くと呼び留め、餘りに勇みかゝりて大事の敵を打ち漏すな、敵は騎馬我は徒立、追はゞ敵定めて引くべし、引かば何として師直を討取るべき。事の様を案ずるに、我等怺へて引退く眞似をせば、敵は氣に乘りて追懸來ると覺ゆるぞ。敵を近々と引寄せて、其中に是ぞ師直と思はん將の、馬の諸膝薙ぎ切りて、落つる所を細頸切り落さんは如何にといへば、衆皆此義然るべしと楯を後に引かづき、引退く態を見せて逆進するに、高播磨守とて、西の田中に三百騎にて控へたるもの、之を見て一人も殘さじと追かけ來る。此方は默して、其近づき寄るを待ち、一同咄と聲立てゝ、礒打つ波の岩に當りて返るが如く取りて返し、火花を散らして戰へば、播磨守の兵は引返す隙もなく、矢庭に討たるゝもの五十餘人、散々に切立てられて、本陣をも馳せ過ぎ、二十餘町も逃げ延びぬ。

さる程に正行と師直との間、再び一町ばかりになりて、左右に控ふるもの亦今や七八十騎に過ぎざるに至りしを見て、此度こそはと我先我先にと突進するに、師直殆ど既に引色に見えたる折しもあれ、九州の住人須々木四郎とて強弓の矢つぎばや、三人張に十三束二伏、百歩に柳の葉を立て、百矢を外さぬ程の射手來りて、人の解き捨てたる箙、尻籠、胡簶を掻き抱くばかりに收集め、雨の如くに矢坪を指して射懸けられしかば、如何で堪へ得べき。次郎正時は深く眉間を射られて、拔く程の氣力もなく、正行は左右の膝に三所、右の頬先、左の目尻、箆深に射られて、其矢冬野の霜に伏したるが如く折れかゝり、其外今は三十餘人の兵とも、三筋四筋の矢を射立てられぬものなく、最早これかぎり進むことも退くことも難きに至れり。

正行兄弟、矢すくみに立はだかりて、彼方を睨みつめし時の感想、果して如何ありしか。心ばかりははやれども、天神地祇も照覧われ、武運拙くて斯く成り果てたる身の末を如何にせむ。せめては敵の手に懸らずして最期を遂げむとて、正行正時刺し違へ、十四年前正成兄弟、湊川の最後を其儘に北枕に倒れて死に伏せば、續く三十二人も思ひ〳〵に腹掻き切りて、上が下に重り伏しぬ。

獨り和田新發意は、如何にして紛れ込みけむ、師直が兵の中に交りて、師直と刺し違ひ死なんと近づくを、此程河内より降參して敵軍中に居たる湯淺本宮太郎左衛門といふ奴、之を見知りて和田が後へ立回り、諸膝切りて倒るゝ所を、走り寄りて頸を掻かんとするに、和田新發意骨髓に徹する深き怨恨を籠めて、朱を灑ぎたる如き大の兩眼を活と見開き、睥睨したる儘、眼終に塞がずして、首を取られ終りぬ。其臨終の樣餘りの恐ろしさに、湯淺は我身の罪業なも思ひ浮べ、心身惱亂して、仰ぐも俯すも和田の睨める眼見え、怨靈五體を責めて、軍散じて七日目の朝、わかき死に死にたりとかや。

和田新兵衛正朝は、吉野宮に參りて事の由を奏上

せんと思ひ、只一人鎧を堅め歩立になり、太刀を右脇に引き側め、敵の首一つ取りて左の手に提げ、東條の方へと落ち行きしが、敵の安保肥前守忠實、唯一騎馳合ひて、和田楠の人々皆自害せられて候ふに、見捨て落られ候ふこそ情なく覺え候へ。返され給へ、見參に入らんと詞をかくれば、和田新兵衞笑ひ〱引返し、四尺六寸の太刀の貝しのぎに血の着きたるを打ち振り走りかゝる。忠實一騎合の勝負叶はじと思ひて、馬を驅け開きて引返さんとすれば、正朝は又落行く、落行けば忠實又追懸け、追懸くれば止り、一里あまりを過るまで、互に討たず討たれずして、日既に夕陽に近づきぬ。かゝるところに後より二騎、何者とも知れず、射殘せる矢をもて馳せ來り、追懸け〱射懸くる矢に、正朝七筋までも射立てられ遂には敵に首を授けたり。

凡て此日の戰に、楠和田の一族近從一人も、殘らず討死し終りしかば、四條隆資は即ち敗兵を收めて、戰況を具さに奏上せしが、畏くも主上には痛く正行の功勞を嘉賞せられ、其早世を哀悼し給へり。斯くする中に、師直は和泉の堺浦に陣し居たる師泰と相呼應し、勝に乘して吉野を襲はんと、月の十四日、既に吉野郡に近づき來りぬ。此山は要害の便稀にして、とても防ぎ切るべき策なければ、隆資、急ぎ天河の奧、賀名生の邊りを指して、御忍び候ふべきやう勸め上ぐるに、せん方もなく主上夜に乘じて神器を奉じ、寮の御馬を引出させて跨り給ひ、夢路を辿る御心地にて御所を立出で給ふ。女院、皇后、宮々を初め進らせて、月卿、雲客、郎吏、從官、諸狩の頭、八省の輔まで、取る物も取りあへず周章て騒ぎて随ひけり。もとより心を留むべき處にはあらざれども、既に年久しく住みなれし上に、行末は尚奧深き山奧なれば、何れの人々も涙せきあへず、哀れにも悼ましき道行なりけり。

去る程に、師直は三萬餘騎を率ゐて、吉野宮に押寄せしが、人のけはいもなし。さては落ちたり燒き拂へとて、わらゆる宮居建物に火をかけぬ。山中假

の宮居とはいへ兎も角も皇居を初めとして、卿相雲客の政所、宿舎、棟を並べてひろ〴〵と連なり居けるを、魔風盛に火を助けて、此等の宮居を始とし、二丈五尺の金鳥居、金剛力士の二階門、北野天神示現の宮、七十二間の回廊、三十八所の神樂屋よりして、三尊光を和らげて萬人頭を傾くる金剛藏王の社壇に至るまで、一時に灰燼とぞなり果てける。

最近の女流文家

鈴木義山

嗚呼人と爲り眞摯至誠、其心の高潔なると、恰かも野の百合の花の如きハリエツト女史よ、女史の生涯の如何に高貴なる觀念と、敦厚なる感情を以て一貫せられしかは、苟くも其著書『アンクル、トムス、ケビン』を一讀するもの、必ず首肯する所ならん。

奴隷問題は、十九世紀の初期に於ける、最も混雜せる問題なりき、その勞働問題より一變して、道德問題となるや、議論最も沸騰を極め、殊に亞米利加合衆國の如きは、凡ての政治上に於ける各種の問題、悉く之に關聯して、人心騷然、遂に南北戰爭の大亂を現ずるに至りたるなり。

此時に方り、『アンクル、トムス、ケビン』と題する小說は、華盛敦府發行の『ゼ、ナショナル、エラ』雜誌にあらはれぬ、奴隷制度のあらゆる背德、非道、殘忍、暴虐なるを說破して、自由を尊崇し、敬虔の念篤く、慈愛溢るゝ許りなる氣象は、一言一句の間にも認められて、盛んに奴隷解放の福音を宣傳したり、此書の著者ハリエツト、ビーチヤー、ストー女史は、一千八百十一年則ち我が文化八年の六月十四日に、「コンチクチカツト」なる「リツチフヰルド」の最と質素なる家庭に呱々の初聲を擧げぬ。

女史の父母

父は、ライマン、ビーチヤー氏と稱し、宣教師を業として、リツチフヰルド及び其の近傍の町村に傳道

せる、識見高くすぐれ、同情の思ふかき人物なりき、母はロキザナ夫人とて、高等の教育を受けて、志操堅く、感情麗しく、常に家庭の内にかくれて、夫を輔け、子女の教育に意を注ぎたる賢婦人にてありき。

兄姉

かゝる父母を兩親としたる女史の生育は、精神教育の上に取りては、最と仕合せなりしは、いふまでもなけれど、其の肉體上の狀態は、甚だ幸福にてはあらざりしなり、女史は十一歳を頭として六人の兄と姉とを有し、さらぬだに饒かならざる家計の、況して斯く頑是なき子女の多かりしは、主婦の身に取りて、如何に苦痛の多かりつるよ、されば夫人は夫に勸めて、一の私塾を開き、佛語、圖畫、刺繡などを教へ、聊かなる收入を得て、やう〳〵に一家の窮乏を補ひしとぞ。

慈母の永眠

家貧くして良妻を思ふといふなるに、禍の神は、七人の子供と、一人の夫とより、此の良婦人を奪はんとするぞ憾みなれ、和氣堂に滿ちて春の如きピーチャー家の上には、一團の愁雲固く鎖して、ロキザナ夫人は今や將に此世を去りて、魂魄遠く天國に旅立たんとす。

天使の如き愛らしき八人の子女は、母の臨終の枕を取りまきて、みな歔欷するなりき、母は眼を見開きて、さま〴〵になだめ賺かしつゝ、男子は神の福音を地上に傳へん爲め、將來宣教師となるべしと遺言し、漸やく迫る呼吸苦しげに其眼をとざせり、夫ライマン氏は、さしも身も魂も消え行く許りにて、熱き涙に咽びながら、我と我氣を取直し、徐かに立ちて聖經の文句を誦し始めぬ。

されど爾曹の近づける所はシオンの山、又活ける神の城なる天のエルザレム、又千萬の衆、即ち天の使の聚集、天に錄されたる長子等の教會、また衆人を鞫く神及び成全せられたる義人の靈魂、新約の中保なるイエス及び灑ぐ所の血なり。

と讀みけるとき、夫人は嫣然微笑を洩して、夫の面を見上げしが、其眼は笑を含みしまゝ永久に瞑ぢられて、魂や去りて喚べども歸らず、遂に草茂れる邱土の主となり了りぬ、一家八人の悲慟はいふまでもなく、取別け幼兒ヘンリーの如きは、神の園生に遊べる母に巡り逢はんとて、一日姉の部屋の窓を堀り穿ちしこともありしといふ、夫ライマン氏も又た哀悼の情堪え難きまでに泣き悲しみしが、一夜忽然亡妻の姿あらはれて、傍近く座を占めつゝ天女の如き笑ひを洩せしと見て、それより渠の胸は豁然として開け、さしもの憂も悩みも、一旦にして消えて痕なく、其の翌日より再び快活の人となりて、尊き職務に從事しけり。

學校生活

女史は幼にして慧敏夙達、非凡の才を有せしかば、七歳の時には二十七の讃美歌と聖書中の長篇一章までも暗誦せる程にて、讀書を以て、無上の樂みとしけるが、強記明達一たび讀めば、つひに忘れざるを常とし、彼のスコットの『アイバンホー』の如きは七回つゞけて讀了りたりといふ。

かくて十二歳の時、著名なるジョン、ピー、ブレース氏の學校に入りしが、修辭學は最も好むところなりければ、天禀の才藻は、茲に其端をあらはして、學期の終りに生徒作品展覽會の催ふされし時、父ライマン氏は成績品中の『靈魂の不滅は、自然の存在により證明せらるべき乎』と題する一文を讀むで、驚嘆の餘り、何人の作なるやを訊ひて、始めて我女の手に成りしを知り、涙に滿足を表はして、うれし泣きに泣きしとぞ。

姉カザリン孃

女史に唯ひとりの姉ありて、名をカザリンと云へり、容色麗はしくして玉の如く、其心もまた潔くして雪の如くなりければ、エール大學の教授フキッシヤーに思はれて、遂に許嫁の約を結びぬ、さればカザリン孃は一日千秋の思ひして、結婚の日を指折り數へて待ち居りしに、花に嵐しの譬へに洩れず、フ

キッシャー教授は、歐羅巴より歸航の途中、其の乘込る滊船アルビヨン號の暗礁に觸れて難波せし爲め、乘客一同と共に、哀れわだつみの底の藻屑と消え了りぬ、カザリン孃の驚きと哀しみとは、筆紙に盡すべくもわらず、一時は傷心の爲め、病の床に就くべく思はれしが、さすがに神を信ずる身の、自から其氣を引立て丶、平生好める數學の研究に身を委ね、傍ら兄エドワードに就きて羅甸語を修めなどして、力めて心を慰めけり、この時カザリン孃は芳紀方に二十三歲とぞ聞えし。

其後孃は、コンチクチカットのハートフォード大學に入校し、特絶せる天才と精力とに加ふるに、日夜孜々として螢雪の苦みを積み、百折不撓、終始一貫の精神を以て、其志しを貫かんと勉强しければ、やがて最優等の成績を以て學校を卒業し、程なく數千金の資財を募集して、ハートフォード女子學校を設立しけり。

この時ハリエット女史は齡僅かに十二歲なりしが、リッチフキルドを去り、姉カザリン孃の學校へ入學しぬ。

百弗の小切手

當時ライマン氏の財政は、夫人永眠後再び紊れて、幾んど家を支ゆる能はざるまでとなりしかば、後添にと迎へられし新夫人は痛く之が爲に心を苦しめ、安き眠をすら催ふすを得ざる程なりしも、淸貧を樂みとせるライマン氏は少しも心に留めず、常に夫人を慰めて、神の攝理に任かせ居しが、或る日曜日の朝の事なりき、何處よりともなく、一封の書翰は來りて、中には百弗の小切手封じありければ、妻は豫てより、夫の外套の見苦しきまでに破れ古びたるを憂ひ、そを新調せんとて、貧しき中にも節儉して、二十五弗を貯金せし折柄なれば、此の百弗の金より何程かを足し加へて、外套を求めんとて、夫に悉皆の金を渡しけり、ライマン氏はさらばとて、其金を懐中しつ、外套買はんとて出行きしが、その途中にて、或傳道會社へ出席しけるに、日頃より博愛の

情深き氏のことゝて、寄附金の箱を眼前につきつけられて、今は外套のことをば打忘れつ、布哇島民の爲めにとて、懷中なる件んの金をば、一文殘らず、寄附箱へと投入れけり、其の同情の程こそ、最と感ずべきなれ。

とかくする中に、ライマン氏の名聲は漸く著はれて、神學者の淵藪なるボストン府に招かれ、六年の間其の地方の宣教に從事しけるが、其後オハイヨ州シンシンナチの神學校長に任ぜられけり、カザリン孃は、ハリエット女史を携へて、父と共に此都に棲、やがて兩女史共同して、此處にも女學校を起しぬ。

結婚

其後四年即ち一千八百三十六年女史は父の校長たる神學校の教授にして、聖經批評と東洋文學とを擔任せるカルビン、イー、ストーといへる學者と結婚の約なりて、程なく華燭の典を擧げたり、女史齡方に二十五歳にてありき。

奴隸廢止運動

其頃奴隸解放の聲は、米國到る處に反響し、殊にケンタッキー州と界せるオハイヨ州のシンシンナチの如きは、奴隸廢止の議論熾んに沸騰しければ、平生雇主の壓迫に苦める夥多の奴隸は、保護を受けんとてオハイヨに逃げ込む者日に多く、遂にライマン氏の神學校の如きも、同じ渦中に捲込まれて、學校を擧げて、激烈なる非奴隸運動を助くるに至りぬ。

さるほどに奴隸維持論者と、廢止論者との間に、劇しき衝突を起して、熱度日々に高まり來り、解放されし黑人中には、或は家を燒かるゝもあり、或は慘殺せらるゝもありて、事態愈々危險となり、奴隸保護を以て目指れたるライマン氏の神學校は、今にも暴民の攻寄せて、亂暴を加へんも知るべからざる形勢に迫りしかば、女史の夫なるストー家の如きは、正當防衞の爲にとて、毎夜武器を枕頭に置きて、護身の備へを爲す程にてありき、されば學校にては一時危險を避けんが爲め、已むを得ず、學生の奴隸問題を論議するを禁せしかば、その結果、學生の大半

は相率ゐて學校を退きぬ。校長ライマン氏は此時學校基本金募集の爲め、東部諸國に赴きて不在なりしが、歸り來りて斯くと聞き、大いに驚きしかども、更に勇氣を奮ひて、孜々として學校の回復を圖るに力めにき、此間女史は健氣にも、黑人の子女を愛育せんため、我家を開放して、懇ろに愛撫しけるが、奴隷維持論者との間兎角に面白からずして、動もすれば衝突を生ずるの恐れあるより、寧ろ此地を去らんと決心せし折柄、恰も好し、ストー氏はメーン州のボードイン大學より招聘されて、教授に任ぜられたれば、一家を擧つて同地へと赴きけり。

小說著作の大成功

女史のメーン州に移住するや、生計を助けんが爲に、時々スケッチ様のものを認めて、新聞社に投じ、僅少の報酬を得しが、其著『新英國物語』には、五十弗を受けぬ、六人の兄は亡母の遺言に從ひて、今はいづれも神學者となりぬ。

かくて齡四十歳に達せし頃には、二人の愛兒をさへもうけしかば、女史の任はたゞ我子を愛育するのみならで、日に學校へ行き、夥多の子弟を薫陶するにてありき。

『アンクル、トムス、ケビン』の名作の趣向を起せしは則ち其頃の事なりき、女史は或日曜日の朝、偶と胸にこの小說の趣向浮びしかば、急ぎ歸宅して、其の一篇を書上げて、十二歳と十歳なる兩人の子供に、讀み聞かせけるに、兩人は子供心にも深く感動して、奴隷制度の惡むべきを悟り、涙を流して同情を表しければ、女史は愈々決心して、苦心慘憺力を盡して『アンクル、トムス、ケビン』を書き始め、やがて『ゼ、ナショナル、エラ』雜誌に揭げしが、一冊として上梓せしは、一千八百五十二年三月二十日なりき、女史は直ちに奴隷廢止に同情を寄せたまへるアルバート殿下及びヴイクトリア女皇を始め、文豪マコーレー、ヂッケンス、キングスレー等に各一本を贈呈して、世界の如何なる批評を此の著作に與ゆる

やを靜かに窺ひ居けり。
然るに此の小說は、驚ろくべき勢ひを以て、世界の歡迎を受け、發兌後未だ十日を經ざるに、忽ち一萬部を賣盡せり、加之ず、英京倫敦に於ては、半年の間に三十版を重ね、且つ同地の六大劇場に於て劇に上して、觀客の喝采を博し、一年の後には三十萬部を發刊して、直に賣盡すに及べり、かゝる勢なるを以て、歐米の各地より女史の許へ、此の小說を激賞せる書翰を寄せたるもの日に幾十通なるを知らず、中にもアルバート殿下、キングスレー詩伯、チッケンス文豪等よりも實に

空前の好小說

なりとの批評を加へて證明し來れり、女史の喜びは、果して如何なりしぞ、一枝の筆よく功を奏して、世界の賞讚を受くると斯の如きは、稀に見る所の盛事にして、之が著者の心の愉快は殆んど譬へんに物なかりしなるべし、さては父ライマン氏の悅び、草葉の蔭なる母ロキザナ夫人の滿足も、推量られぬ。

夫妻英國に遊ぶ

其の明る年に、女史はその夫と共に、英國に旅行せしが、巾幗の身を以て、奴隸解放の爲に、絕妙の小說を著はして、萬丈の氣焰を吐きたる女史の芳名は、今や大英國に響き渡りて、誰一人知らざるものなき程なりしかば、女史の巧緻なる思匠と、流麗なる筆致とに對して、英國の讀詩社會は、未だ曾て其例を見ざる盛大なる歡迎會を催ふして女史を迎へ、其他リバープールを始め、グラスゴーにても、エヂンバルクにても、アベルチンにても、ダンチーにても、到る處其の都市の歡迎を受けて、思ひがけなき面目を施せりき、殊にスザーラント公爵夫人の如きは、女史を其邸に招待して盛筵を開きしが、來賓の中には、パーマーストン卿、アルジーム公、マコーレー氏、グラッドストン氏等の名士少なからざりき、公爵夫人は、紀念の爲にとて、奴隸の桎梏の形せる黃金の腕環を贈りしが、其の腕環には
『こは是れ直ちに切斷さるべき桎梏の紀念なるを信

ず。』との文字を鏤めありけり、女史の名譽も極まれりといふべし。

歐羅巴より歸りし後も、數多の小說を公けにせしが、何れも相應に賣れ行きて、女史の一家は、其の收入の爲に、生活の困難を見ざるに至れり、南北戰爭平定後、家をフロリダに買ひて、冬の間は、避寒にとて、家族と共に此に移りて住ひ、又夏日には、コンネクチカットのハートフォートに暑を避くるを常とせり、但し其本邸はマンダリンの市中にありき。

七十一回の誕辰

光陰矢の如しとかや、星霜漸やく重なりて、ビーチャー家の家族も多方は身まかりぬ、父ライマン氏は八十三歲、姊カザリン女史は、七十八歲の高齡を以て天上の客となり、女史また玆に七十一歲となりければ、その誕辰を祝せんとて、平日女史の書を出版せる書肆等申合せて、マサチユセットなる知事の邸宅に於て、盛大なる園遊會を催ふせり、知名の文士、美術家、政治家、宗敎家等この著名の女流文豪を見んとて、來り會する者雲霞の如く、さすがに廣き邸園も人もて塡むる許りなりき。

逝去

女史は千八百九十六年（我が明治廿九年）則ち今を距る九年前の七月一日といふに、コンネクチカットのハートフォートに於て、八十五歲を一期として永眠しぬ、女史の夫ストー氏は、女史に先だつ十年にして逝去せしが、それより女史の身體は次第に異狀を呈し、精神また漸く沈衰して、復た昔日の女史にあらざるに至り、遂に此世を去るに及びしとぞ。

かくて遺骸は、マサチユセットなるアンドーバーの墓域、夫ストー及び愛兒ヘンリーの墓側に葬むられて、千秋長へに此地に眠れるなりき。

人若し「アンクル、トムス、ケビン」を一讀せば、女史の高潔にして正大なる心事を窺ひ知るを得て、覺えず感嘆の聲を洩らさゞるはなかるべし、女史の如きは、世間稀有の女流文豪ならずや。



雨月物語『白峰』(三)

文學士　境野天華

西行いよ〱恐る〱色もなく、座をすゝみて、君が告らせたまふ所は、人道のことわりをかりて、慾塵をのがれ給はず。遠く震旦はいふまでもあらず、皇朝の昔、譽田の天皇、兄の大鷦鷯の王をおきて、季の皇子兎道の王を日嗣の太子となしたまふ。

〔通解〕新院の御容子が恐ろしくなつて來たのにも拘らず、それに怖るゝ景色も見せず、西行は益々落つき拂つて、新院に向つて申上げるやうには今我君新院の仰せられたことは、それこそ名を人道と云ふことにかりて、自身一人の慾塵の心（塵と云ふのは汚らはしい心と云ふ意）を滿足させやうとしておいでなさるに過ぎぬ。其の間違つてゐることをお悟し致しませう、と云つても別に遠い唐土（震旦）などの例を引いて來る迄もないこと、我邦の歷史上に立派な手本にすべき例がある。昔應神天皇（譽田の天皇）の御治世の時、天皇にどう云ふ御心がおわせられたか、兄上の大鷦鷯を差しおいて季の皇子兎道の王（稚郎子）を皇太子に据え皇儲（日嗣）の君と定められた。

天皇崩御たまひては兄弟相讓て位に昇りたまはず。三とせをわたりても猶果つべくもあらぬを、兎道の王深く憂ひ給ひて、豈久しく生て天が下を煩はしめんやとて、みづから寶算を斷たせたまふもの

から、やむ事なくて兄の皇子御位に即かせ給ふ。

（通解）父の應神天皇が御崩御に成つてから、其の二人の皇子達は讓り合ひそしてどちらも天子の御位に上らせられなかつた。其の位を讓りあつておゐでなさる事が三年間にも亘りて何どちらとも片付かぬので、兎道の皇子が非常に其事をお歎きになつて、自分故天下の人民は一方ならぬ迷惑を感じてゐる。疾く安心をさせてやらねばならぬ、それにしては自分が生きて爲てはとても兄の皇子は天子の位に上られぬからと云つて勿體なくも自殺をして御自分の齡（御年）を短くせらたので兄の皇子は詮方もなく、不本意ながら遂に天子の位に上られた事である

是れ天業を重じ孝悌をまもり忠をつくして人慾なし、堯舜の道といふなるべし本朝に儒教を尊みて專ら王道のたすけとするは兎道の王百濟の王仁を召て學ばせたまふをはじめなれば此の兄弟の王の御心ぞ即て漢土の聖の御心ともいふべし。

（通解）此の二皇子の行爲は神聖なる天子の御位を重んぜられ、親に孝道、兄弟には友愛の道、人としては誠を盡くされたのであつて、其の間に些少の人慾を混じてゐない尊とい行爲でありて、斯樣なる行爲は支那の聖人の旨にも適つた所の眞の道德とも云ふべきものでありませう。此の日本國で儒教（孔子の教）を修んで其の教を以て天下人民を治むる所の王者の道のたよりとしたのは此の兎道の皇子が其の頃の學者三韓百濟の博士王仁を召し寄せて、それに随いて學問せられたのが抑の始であつて、其の學問の教へに從はれたのは即ち此の二人の皇子である、それで此の皇子の御心はとりも直さず支那の歷代の聖人方の御心に適ひ、儒

教の教旨にも適つたものと云ふべきである。

又周の創武王一たび怒りて天下の民を安んず。臣として君を弑すといふべからず。仁を賊ひ義を賊む、一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと人の傳へに聞侍る。されば漢土の書は經典史策詩文にいたるまで渡さゝるはなきに、かの孟子の書ばかりいまだ日本に來らず。此書を積て來る船はかならず暴風にあひて沈むよしをいへり。

〔通解〕周（殷に代つて天下を取つた）の創業の時武王即ち周の最初の天子樣は殷の紂王が暴虐であるのを怒つて、軍勢を引きつれて殷を伐ち、之れを滅ぼして、天下の人民を安堵せしめた。元來殷の紂王は武王の爲めには君主である。武王は臣下である。臣として君を伐つ法はないと云ふものがあるが、決してさうでない、暴虐無道仁もなく、義も知らぬ紂王のやうなものは決して天子樣でなく只一人の男と云ふに過ぎぬから、武王が紂を伐つたのに就いて決して故障はない、のみならず、其の暴虐な紂を殺ろして天下の人民を救ふたのは立派な行爲であると云ふことを孟子と云ふ書物（四書の中の一つ、四書は大學、中庸、論語、孟子）に記してあると人の話に聞いて居るのでありますが、其の孟子の記事は支那のやうな國體の處では宜いかも知れぬが、此の日本國の國體に取りては甚だ不都合千萬な云ひ草であると云はねばならぬさう云ふ國體に合はぬ事を記してある書であるから、漢土支那の書物は經書であれ歴史であれ、詩文章の書であれ殆んど舶來しないものはないが獨り、孟子は渡來せぬ、孟子を積み込んだ船は途中で必ず大風に逢つて難破して海中に沈んで仕舞ふと云ひ傳へて居ります。

それをいかなる故ぞととふに、我國は天

照すおほん神の開闢しろしめしゝより、日嗣の大王絶ゆることなきを、かく口賢しき教をつたへなば末の世の神孫を奪ふて罪なしといふ敵も出べしと、八百よろづの神の悪ませ給ふて神風を起して船を覆へしたまふときく。

（通解）なぜさうであるか、其の譯は如是である此の日本國は天照大神が創めて國土を開かれたので、其の以後大神の御子孫が代々此の日本の主となりて其の傳統は今日までも絶えずに居る有難い國柄であるのに、若し此の孟子のやうな小利口なさうでないこともさうだと云ひまぎるやうな敎を傳へしめたなら、後世もしや、神孫なる正統の帝者を推し退けて位を奪つても惡るい事でないと云ふやうな亂暴な者も出やうかとの懸念から、日本の國土を守護して居らるゝ多くの神樣方が（八百萬は數の多き形容）孟子の書を惡くしんで、神風を吹かして其の船をお沈めになるのであると云ふことも承はつて居ります。

且つ詩にもいはざるや、兄弟牆を鬩ぐとも外の侮を禦げよと、さるを骨肉の愛を忘れ給ひ、あまつさへ一院崩御たまひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て御祚をあらそひ給ふは不孝の罪これより劇しきはあらじ。

詩　詩と云ふは詩經のこと。詩經の小雅常棣の章に「兄弟鬩二于牆一外禦二其侮一」と見えて居る。

殯の宮。あらきの宮の事で、正式の埋葬前假りに御屍を收め置く所。

（通解）其上また詩經の中の文句にも兄弟の友愛相親の情は人の生れながら有つてゐる性情である假令不斷は多少家の中で互に睨みつこをしてゐるやうでも其は内輪事である。外に向つては協同一

致で、家の耻辱兄弟の耻辱となるやうなことをするなと云つてある。然るに新院樣には兄弟骨肉の親愛すべきもお忘れになつて（後白河とは兄弟の間柄なれば云ふ）其上一院の鳥羽院が御崩御になつてまだ正式の御埋葬も濟まず、其の御肌の温味も寒えきれぬと云ふ時、（新院の御謀反は鳥羽院崩御保元元年七月二日の翌日）あさましくも喪中の身ながら軍旗を飜へし、弓の尖端を振り立て〻戰爭を起こし天子の位を兵力にかけて爭はれたと云ふのは實に言語同斷の御行爲で、父帝に對し奉りては此上もない大不孝の罪を犯しておいでなさる。

天下は神器なり、人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるをたとへ重仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布き和を施し給はで道ならぬわざをもて代を亂したまふ時はきのふまで君を慕ひしもけふは忽ち怨敵となりて、本意をも遂げたまはでいにしへより例なき刑を得給ひてか〻る鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞ〳〵舊讐をわすれ給うて、淨土にかへらせたまはんこそ願はまほしき叡慮なれとはゞかることなく奏しける。

（通解）此の天下國家と云ふのは例へば神樣が下し置かれた所の大切なる器物のやうなもので、一個人の私心を以て勝手に奪ひ取ることは出來ぬ道理のものであるのに、彼の御子の重仁親王は固より仰の通りの賢い御方で其の方が御即位遊ばすのは元より天下萬民の希望してゐるのには違いないが、德を天下に布き人民を安樂にすることをせず道ならぬ方法を以て、武力に訴へて天下を取り、天子の位に即かんとし、其の結果天下の大亂を引き起こすと云ふやうな事をなされては昨日迄は君

を慕ひ申した人民共も今日は君の亂暴にあきれて忽ち怨敵となりて反抗すると云ふ、世の常の事で新院樣の場合と云つても丁度其通りで、目的は達せられず、其上に昔から未だ例のない刑罰に觸れて此の邊鄙の處へ流され、遂に此の地の土となりて身を終られたのである。此上は只一切世上の、昔の怨恨は情念を忘れて仕舞はれて早く佛の世界淨土樂地に行かんことを此の西行が呉々も御心に訴へてお願ひ申す所で御座いますと、憚らず憶せず言上に及んだ。

漢文講義

阿井笛村

○賢婦某氏傳　蒲生重章

賢婦逸其姓名、幕府冶金局後藤某妻也、爲人仁慈、其夫有愛妾、遇之如姉妹、衣服食飲、皆與己同、如此數年矣、賢婦病、數日不癒、其夫偶見有妾自筆簡牘飜机邊、拾看之、囑今戸某巫祝、咒咀其妻死之手簡也、其略曰、積日呪咀之効驗、頃日病日漸、猶丹精是請、某讀了、大怒曰、吾妻積年遇之甚篤、而彼忘恩敢然、我亦深愧乎妻、然殺之則事佈世上、吾家之耻辱也、乃告諸妻、而將放逐之、妻臥病蓐、潸然流涙、謂良人曰、婦女之愚、世或有如此者、豈獨彼而已、彼奉仕有年於斯、今放逐之、則貧寠誰顧、飢寒可憫、不若敎諭之令自悛、分産於其所生子某、以爲之母、而置淺草所買市店、而終焉、此吾願也、某乃從其言云、善諷子曰、賢矣哉某氏、以德報怨、仁恕之言、惻惻動人、婦而悍妬、閨門不修、醜聲外聞、而恬不省者、往往有之、聞後藤氏夫

之事、豈能無恧怩哉、
(讀方)賢婦は、其の姓名を逸せり、幕府治金局後藤某の妻なりき、其の夫に愛妾有り、之を遇すること姉妹の如く、衣服食飲皆己れと同じくせり、此の如くする者數年成しが、賢婦病み、數日すれども癒えず、其の夫偶々妾の自筆の簡牘有りて机邊に飜へるを見、拾ふて之を看れば、即今戸の某巫祝に囑して、其の妻の死を呪咀するの手簡也、其の略に曰く、積日呪咀の効驗わり、頃日病日に漸なり、猶丹精を是れ請ふと某讀み了り、大に怒りて曰く、吾妻積年之を遇すること甚だ篤し、而して彼れ恩を忘れて敢て然りと、我亦深く妻に愧づ、然れども之を殺さば則ち事世上に布かん、吾が家の恥辱なりと、乃ち是れを妻に告げて、而して將に之を放逐せんとす、妻病蓐に臥し、潸然として涙を流し、良人に謂て曰く、婦女の愚なる、世或は此の如き者有らん、豈獨り彼れ而已ならんや、彼れ奉仕すること斯に年有り今之を放逐せば、則ち貧寡誰れか顧みん、飢寒憫む可きなり、若かず之を敎諭して自ら悛めしめ產を其所生の子某に分ち、以て之が母たらしめ、而して淺草に買へる所の市店に置き而して焉を終へしめんには、此れ吾願也と、某乃ち其の言に從へりと云ふ

善諷子曰く、賢なる哉某氏や、德を以て怨に報ゆ仁恕の言、惻惻として人を動かす、婦にして悍妬なるは、閨門修まらずして、醜聲外に聞ゆ、而かも恬として省みざる者、往往にして之れ有り、後藤氏夫妻の事を聞かば、豈能く恧怩たること無からんや

(譯解)賢婦逸其姓名幕府冶金局後藤某妻也＝初筆に賢婦と云ひ出したるは、本文の題を賢婦某氏の傳と命けたる故、其の題を直ぐに受けたのであります、扨て此の賢き婦人は其の姓と名前とを聽き漏したが(逸とは取り逃がしたと云ふ意)、此の人は幕府の冶金局とて貨幣を造しらへる役場に勤め

て居た、後藤某（通稱は庄三郎）の妻でありますが性仁慈＝其の性質が仁慈くありました、其夫有愛妾過之如姉妹衣服食飲皆與己同＝然る處其の夫庄三郎に一人の愛りの妾がありましたが、並大抵の妻君ならば、中〳〵内輪が睦まじからぬ理でありますけれども、此の婦人は少しも嫉妬の心なく其の妾を遇かふことがまるで姉妹の樣で。衣服でも食飲みでも皆己と同樣にして少しも疎略なことをしませぬ故、家庭に風波も何もなく善く治りて穩かでありました、此の如くして居ることが五六年の間を過しましたが、其の中に此の妻君が病ひ付まして數日たちても癒りませぬ、其夫偶見有妾自筆簡牘黐机邊拾看之＝然るに或る時其の夫が、偶と妾の自筆の簡牘が机の邊に黐て居るのを見出して、何氣なく拾ひ揚げて讀で看ますと驚ひたのは、即囑今戸某巫祝呪咀其妻之死之手簡也＝これが即今戸といふ處（東京淺草にあり）の何某とか云ふ巫祝に囑んで、其の妻君の死ぬ樣に呪咀をして貰ふ手簡なのであります、其略曰積日呪咀之効驗頃日病日漸猶丹精是請＝其の文言の略して、『幾日數を積みて呪咀てくれたるお陰で、其の効が驗れて、頃日では病人の容體が日々に漸り行く樣である、猶此上とも丹精を凝していよ〳〵息の根を止めて下され』との意が、細〳〵と書き認めてありました、夫庄三郎は讀み了り、大に怒りて、吾が妻には積年の間之を遇ふこと甚だ手篤くあるのに、而かも彼れは却て恩を忘れ這樣なる言語同斷なることをするとは何たる事ぞ、我亦深愧乎妻然殺之則事布世上吾家之恥辱也＝我自身に於ても亦深く妻に對して愧ち入る次第である、故に彼の女を手打にして妻に申譯をせんかとも思へども、之を殺せば則ち内輪の事が世上に聞へ布がりて、吾家の恥辱を表はさねばならぬ如何したるものや』と考へたる上、乃告諸妻而將放逐之＝乃で諸れを妻に告して『此上は彼の女を放逐て仕まふことにせん』と申したる處が、妻は病の床に

臥しながら、潸然と涙を流して良人に向ひ、婦女之愚世或有如此者豈獨彼而已＝『婦女と云ふものは愚かなるもので、世の中には或〳〵這様者が無ひでもありませぬから、豈して彼れ斗りでもありますまい、彼奉仕有年於斯今放逐之則貧寡誰顧飢寒可憫＝彼れも此の家に奉仕して以來、最早餘程の年を重ねた者でありますから、今頓かに之を放逐したならば、貧しきが上に便る所もなき寡ものとなりますから、その時誰ありて顧て遣る人がありましようか、飢へ且つ寒へる外とてはありますまい、心柄とは謂ひながら憫そうではありませぬか、不若敎諭之令自悛分産於其所生子某以爲之母而置淺草所買市店而終焉此吾願也＝不若も善く之を敎へ諭してお遣りなされて、自ら前非を悛めさせさうして彼の女の生み出したる子の某に産を分ておやりに成て以て其の分家の母として、豫て淺草に買ひ求め置かれたる市店に母子一同住はせて一生を終らせる様にして遣て下さいとこれが吾のお願でございます』と、曰し述べましたので夫の庄三郎も、我が妻の恨に酬ゆるに德を以てするのあり難き心掛を感心して、乃で其言に從ひました

善諷子曰賢矣哉某氏以德報怨仁恕之言惻惻動人＝善諷子とは作者が自ら稱する名前で、論を立て丶曰すに、賢なる哉賢に感ずるに堪へたる、賢明なる某氏婦人ではある、德を以て怨に報ゆると云ふことは中々出來難ぬる事であるのに、其の夫に對して述べたる仁恕ふかき言を見るに、惻惻にもいたましく人の心を動さしむる、婦而悍妬閨門不修醜聲外聞而恬而不省往往有之＝世の中には人の婦たる者が悍妬くて、とかく閨門が修らず、醜き聲が外に聞へても、恬で以て省みることもせぬ者が往往もあるが、聞後藤氏夫妻之事豈能無恧怩哉＝これ等の恥も外聞も知らぬ人人が、此の後藤氏夫妻の善き風を聞いたならば豈もや心恧怩しく感ぜずには居られまい

○蟬丸彈琵琶　服部元喬

値中秋月陰風凄、蟬丸忽彈一曲、博雅心中悶癢、冀及秘曲、少頃、蕭然嘯咏、且嘆曰、嗚呼無其人哉、當此寂寂誰當共靜夜思、以語其志者、博雅應聲出、乃通名、且具陳向來事、蟬丸感歎、終夕晤言、取秘曲悉授、世乃稱蟬丸隱趣博雅好事至今

(讀方)中秋月陰り風凄きに値ふ、蟬丸忽ち一曲を彈ず、博雅心中悶癢、秘曲に及ばんことを冀ふ、少頃ありて、蕭然嘯咏し、且歎じて曰く、嗚呼其の人無き哉、此の寂寂に當りて、誰れか當さに靜夜の思を共にし以て其の志を語るべき者ぞ、博雅聲に應じて出で、乃ち名を通し、且つ具さに向來の事を陳す、蟬丸感歎し、終夕晤言す、秘曲を取りて悉く授けぬ、世乃ち蟬丸の隱趣博雅の好事を稱して今に至れり

(譯解)此の文章は蟬丸に就きての記事文の一節であります、蟬丸と云ふ人は百人一首に、「これやこの往くも返へるも別れては知るも知らぬも逢阪の關」と云ふ歌が出て居ます如く、和歌の名人で且つ琵琶の妙技を極めて居た人であることは、人の能く知る所であります、値中秋月陰風凄蟬丸忽彈一曲＝或る年中秋即ち八月の十五夜のこと、月陰りて風凄しき折節、蟬丸が忽ち琵琶を取りて一曲を彈じました、玆に源の博雅と云ふ公卿がありましたが、此の人は極めて琵琶に熱心なる人でありまして、蟬丸の琵琶の妙手なる事を知り、どうとかして其の秘曲を聽かんものと、竊かに其の棲家なる草の家の戶の前に來りて伺つて居ました、此夜も例の通り待て居ますと軈て彈き始めましたが、秘曲ではありませぬ故、博雅心中悶癢冀及秘曲＝博雅は心中悶癢しく、どうぞ秘曲に入て呉れゝばよいがと冀つて居ました、少頃蕭然嘯詠且歎曰嗚呼無其人哉當此寂寂誰當共靜夜思以語其志者＝少頃すると蟬丸はいと蕭然に嘯き咏ひ且つ

歎息して『嗚呼其人無き哉此樣なる寂寂しさに當りて、誰と共にか靜けき夜半の思を共にし以て其志を語るべきや』と獨り言ちました、博雅は其の聲に應し立出でて乃ち名前を通じ、且具陳向來事、且又具さに向來の事を申陳べましたれば、蟬丸は大に感じ且つ歎めて、終夕晤言取穩曲悉授之終夕互に晤言て、琵琶の秘曲を取りて悉く博雅に授け傳へました、世乃稱蟬丸隱趣博雅好事至今＝乃で世の人が、蟬丸の世の塵を隱れ避けて一種の高き趣を備へたることを、博雅の三位の好事を稱へて今の世まで傳はりました右は女子に關した事ではありませぬけれども優美なる文であります故、講述することとしました

女子と英語

婦人にして英語を專攻せる者の現在及び將來に就き女子英學塾津田梅子の語る所に依れば

▲同塾卒業生　は卅六年の第一回卒業生は八名昨年二回は五名本年度の三回目は八名都合二十一名にして一二兩回の十三名は左の如き現況なり

敎員七、通譯一、新聞社員一、結婚して無爲自宅に在る者四、但し世人の想ふ如く外交官の夫人となりたる者一人もなし

▲卒業生の少數　最初一年級に入學せし本科生廿五名を數ふるに三年後の卒業期に至り五名乃至八名の少數となるは奈何なる仔細かと云ふに是は一身上の都合即ち家政、結婚、病痾等にて退學する者多きにも因るならんが是れまでの敎授法其當を得ざりしにも基くべく決して女子に英語の不適當なるが故とは認むる能はず而も斯る文學は最も日本女子に適當なり云々

▲俸給・年齡　敎師となれる者の俸給は十圓以上三十圓にて遠隔の地に赴任する者の中には四十圓位の者もあり又文部省檢定試驗に及第して女子高師の敎師となれるもあり何れも高等女學校卒業後の入學ゆゑ卒業當時は廿七歲が若くて二十二歲位なり然れど二回三回と進むに從ひ年少の卒業生を出し居れり

SELECTIONS FROM MY ENGLISH DIARY.

英文日記拔華

A. MIYAMORI.

宮森桃潭

Saturday, August 5.

A cloudy and cool day with a temperature of 80° F. at noon.

Mr. Tōjūro Seki called in the afternoon.

The *kawabiraki* was held on the Sumida River. Several hundreds of splendid fireworks were set off from the twilight till about ten o'clock. The last one which represented the expected fall of Kharbin struck the spectators with the greatest degree of admiration. Such an immense concourse gathered about Ryōkoku Bridge and its neighborhood to see the brilliant displays, that the electric car company was obliged to stop its traffic after half past 6 o'clock.

八月五日（土曜日）

此日曇天にして冷しく正午の温度華氏八十度なり。

午後關藤十郎氏來訪せらる。

隅田川に於て川開を催す。壯麗なる烟花幾百發薄暮より十時頃まで打揚げたるが、最後の一發は吾人の期待せるハルビン陷落の模樣に擬したるものにして觀客の最も喝采する所たり。烟花の壯觀を看んとて兩國橋附近に集るもの雲霞の如く爲に電車は六時半限り休業するに至れり。

Sunday, August 6.

Cloudy and cool.

Forgot to look at the thermometer.

Got up at about 8 o'clock but a complaint in the brain obliged me to take a nap till 11 o'clock.

Read a few chapters of *Uncle Tom's Cabin* which I had begun to read a fortnight ago.

A Reuter telegram dated August 5th.—The Japanese and

八月六日（日曜日）

曇天にして冷氣。

温度を測ることを忘れたり。

八時頃に起床したれども腦痛の爲め十一時まで假睡せざるを得ざりき。

アンクル トムス ケビンの數章を讀む此書を讀み始めたるは二週日前なりき。

八月五日發ロイテル電報に曰く『日露媾和全權委員は今日

Russian peace plenipotentiaries arrived to-day in Oyster Bay. They had an interview with President Roosevelt in the *Mayflower*, a yacht of the U. S. government. The Japanese envoys were treated with greater hospitality than Russian.

オイスター灣に着す。彼等は米國政府の遊艇メイフラワー號に於て大統領ルーズベルト氏に引見せらる。

日本使節は露國使節よりも鄭重に待遇せられたり』

Wednesday, August. 9.

Fair weather with a refreshing breeze.

Temperature at noon was 85°F.

Finished *Uncle Tom's Cabin* in the morning.

Vice-Admiral Shibayama telegraphed from Port Arthur that they had begun to pump the sunken cruiser *Variag* (6500 tons displacement) at 3 P. M. on the eighth and she was floated without mishap at 5.42 P. M. on the ninth.

八月九日　（水曜日）

天氣快晴にして爽快なる微風あり。

正午の温度八十五度なり。

朝アンクル、トムス、ケビンを讀み終れり。

旅順より柴山海軍中將の電報あり曰く『八日午後三時沈沒巡洋艦ワリアーグ（排水量六千五百噸）の排水に着手し九日午後五時四十二分故障なく浮揚れり』

Thursday, August 10.

Fine weather and sultry. The highest temperature was 86° F.

Mr. Gikō Katayama, an old friend, whom I had not seen about eight years, called in the forenoon; and we had a joyous talk until about 6 o'clock in the afternoon.

A telegram from Portsmouth, U. S. A,, to the *Jiji*.—Early in the morning, the Peace Envoys arrived here. A salute of nineteen guns was fired in honor of

八月十日　（木曜日）

晴天にして蒸暑し。

最高温度八十六度。

舊友片山義行君午前來訪せらる氏と相見ざること凡そ八年、午後六時頃まで驩語す。

米國ポーツマスより時事新報社への來電に曰く『今早朝媾和使節當地に着す。十九發の祝砲は彼等の爲に發炮せられたり。ウイッテ氏は俯し目になりて憂

them. Mr. Witte was in low spirits with downcast eyes, while Baron Komura looked quite light-hearted.

爵の様子あり之に引かへ小村男は意氣揚々たり』

Friday, August 11.

It was fine weather and rather cool.

The highest temperature was 82° F.

Being quite recovered from illness, Mr. Sasaki left for Osaka at 12: 30; and I went to the station to see him off.

A telegram from Portsmouth,—On the tenth there was the first interview of the Peace Plenipotentiaries. Every preliminary arrangement necessary to the opening of the conference being made, the Japanese Plenipotentiaries showed the Russian Plenipotentiaries Japan's peace terms in written form; and the latter promised to begin an examination of the terms without delay and to give a written reply as soon as they could. Then the meeting was closed.

八月十一日 (金曜日)

快晴にして稍冷氣なり。
最高温度八十二度。

佐々木氏病氣全治したるを以て十二時三十分大坂に向け出發す、余は停車場にて見送りたり。

ポーツマスよりの來電に曰く『昨十日兩國媾和全權の第一回會見ありたり。媾和會議の開催に必要なる豫備的準備終るや日本全權は紙面に認めたる日本の媾和條件を露國全權に渡したり而して露國全權は速に條件の調査に着手す可く且つ出來得るたけ速に紙面にて回答する旨を約す。此にて會見は終れり』

Saturday, August 12.

Cloudy and rather cool. The highest temperature was 82° F.

Some hours I busied myself with writing letters electing a lady and twenty-three gentlemen

八月十二日 (土曜日)

曇天にして稍冷氣なり。最高温度八十二度。

一婦人と二十三人の紳士とを三田輪友倶樂部員に推薦する書面を認むるため數時間之に從事

to the membership of the Mita Bicycle Club.

せり。

Thursday, August 17.

It rained all day and it was very cool, the highest temperature being 73° F.

Mr. Makoto Niwa, my wife's uncle who is governor of Higashi Yamanashi in the province of Kai, wrote inviting me to come to his town to avoid the heat. I wrote in reply, thanking him for his kind offer but adding that it was so cool in Tokio that there was no need of going into the country to avoid the heat.

八月十七日　（木曜日）

終日降雨あり且つ頗る冷氣にして最高溫度七十三度なりき。

荊妻の叔父にして甲斐國東山梨郡長たる丹羽孚氏より書面にて避暑の爲め其任地に來るべきことを勸む。余は返書して其好意を謝すると同時に東都の冷氣にして避暑に行くの必要なき旨を答へたり。

Sunday, August 20.

A cloudy and cool day.

In the morning I called on Mr. Isobe and borrowed from him The *Journal of a Life in the Highlands* by Queen Victoria and Lockwood's *Rhetoric*.

I had a bad headache.

In the evening, I took a stroll with Toshihiko to Tameike and neighborhood; and we were inclined to visit the Engiza theatre where numerous kinematographs were exhibited. Among others we saw pictures of the Battle of the Japan Sea, of Genroku dances of Tokyo geisha in and of the recent conflagration of the New York Standard Oil Company buildings.

八月二十日　（日曜日）

曇天にして冷氣なり

朝、磯邊氏を訪ひビクトリア女皇の著ジャーナル、オブ、エ、ライフ、イン、ハイランヅ及びロックウードの著修辭學を借來る

甚しき頭痛に苦めり。

夕景、俊彥と溜池附近を散步し、演伎座に行きて活動寫眞を觀る數多き寫眞の內、日本海々戰、東京藝妓の元祿踊及びニューヨーク スタンダード石油會社建物の火災杯の寫眞も看たり。

Friday, August 25.

A wretchedly wet day. It was so cool that I put on a winter *haori* and a woolen shirt.

Received a card from Mr. Kōchi in China, asking me to send soon his winter clothing in my keeping.

In the evening, through the rain, Mrs. Miyamori and I visited the Hongōza theatre and saw a performance of *Myōtonami*—a drama which is founded on a celebrated novel by Kikutei Taguchi. Every part was played well; but, above all, Toshiko, the heroine, was done exceedingly well. Her gentleness, kindness, chastity and courage, especially her fortitude under difficulties, moved the spectators, almost all of whom were so muchover come that sobs were heard on every side. I was also moved to tears. I was so much excited that I could not sleep well this night.

八月二十五日（金曜日）

甚しき雨天なり。冷氣强く余は冬羽織と毛織のシャツを着るほどなりき。

在清國河内氏より端書にて余の預り居る冬服を速に送り呉れよと申來れり。

夕景、降雨を冒して妻と共に本郷座に赴き田口掬汀の著名なる小說に基ける戯曲女夫波を觀る。いづれの役も能く演じたれども就中主人公俊子は極めて巧に演じたり。俊子の温順、深切、貞操、勇氣特に艱難に處する堅忍不抜なる精神は大に觀客を感動せしめ嗚咽の聲は四方に聞えたり。余も亦感涙を催したり。余は甚だしく精神を刺激せられたるが爲め此夜熟睡することを得ざりき。



本多嘉種氏を訪ふ

村田琴伴

▲お住居

兼ねて教育界に其人ありと云ふ事は承つて居りましたが、未だお尋ね申した事は御座いませんから今度此地へ參つたのを幸ひ有益な談話でも伺ひ度いと存じまして、八月の十八日、飛雨蕭々として欝陶しい今日此頃先づ降りませんのを好機として足を運びました。

上市の梅香と申します所の坂を登りきりますと、土地には餘り類の少ない煉瓦の塀に洋風門、だんだら道の門内を徐かに踏んで案内を乞ひました。

生垣の隙間からちらりほらりと窺まれる雄大な眺め、青々と露の玉を貫いて居るかと怪しまれる葦の大きな稗蒔の盆栽其儘に涼しさうな千波湖、昔の榮華を尚ほ夢に殘して三十五萬石の當時を無絃の響に奏でゝ居るらしい下市の町の有様等うたゝ荒城の夜半の月が忍ばれるので御座います。

賢し氣なお女中の『此方へ』との案内に胸の雜感は跡なく消えて終ひまして、三疊の玄關から六疊のお座敷へと通りました。

▲お座敷

別に是れと申して取り立て飾りは御座いませんが、何となく淡泊と垢拔がして居りまして、一間の床には梅花と菅公との掛軸を中央に兩側の米芾の筆になつた石摺は儼然と御主人の氣象を露出して居り

ます。床に對した長押には由緒床し氣な「思齊」と書風も優美に大書した額、それに向つて右手の額も矢張り「思齊」の二字でした、思ふに何となく懷しい由緒でもあるやうに感じられました。

▲風采

『いや、ようこそお出下さいました。』と、團扇片手に端然と坐られた風采は儼然として古武士の名殘を止めて、且つ何處となく禪味を帶びて脫俗されたやうな御樣子は、丁度武田信玄とでも評しませうか！然し人に對しての面は儼めしい八の字鬚を貯へて居られるにも關はらず、何處迄も溫和に優しくて、三歲の小兒でもにこ〳〵となづみさうに見えました。

▲女學生問題

私も此の夏の休暇には是非とも東京へ參つて、敎育家や女學校の人々などもお尋ねし、又經驗の爲に種々のお話等も承はらうと思つて居つたのですが如何にせん、身體が急しく、其處だの此處だのに演說を依賴されまして、いやはや、此間も稻敷郡の方などへ參つたやうな始末で、實に殘念だとは思ひながら思ひ止まつたのです。東京には何か變つた事でも有りませんか、はつ、、、、女學生問題も仲々世の重大な事件となりましたから、然し斯う女子敎育に付いて良かれ惡しかれ世の中で注意するやうになつたのは實に喜ばしい譯ですね。

▲女子敎育

婦人の敎育の進歩するのは間接に社界の進歩について大いなる力があるのですから、私も女子敎育の爲に一意專心身を捧げやうと、心秘に誓つて居るのです。最早や男子の方は、熊本の師範學校を卒業して以來、嘉納治五郎君が熊本の高等學校の校長を爲られて居る時分に。私も舍監を爲つて居つた事がつたのです。其時の生徒等では隨分有望な位置に居る者も少なくはないのです。此間も用事があつて文部省へ行きますと、堀と云ふ秘書官が居て、『いや先生。』と云ふ譯で『今日は御馳走をしますから。』と、其時分に生徒であつた人々が或は參事官やら或は書

記官などになつて居るのを二三人電話を懸けて呼び集めて、晩餐を共にしたのです。實に此樣な樂しい事はありませんでした。男子ですと斯う云ふ風に後後迄も交際し又は、思ふやうに語れもし思ふ樣に遇ふ事も出來ますが、婦人では學校を卒業した後も尙元のやうに交際するなど丶云ふやうな譯には行きませんが、私は唯其人が良妻となられる事を祈つて居るのです、婦人は到底男子のやうに車を飛して出步いたりなにかする事は出來ませんから、又事情が許すとしてからがそんな事をするのは餘り宜しく有りませんですから……。

▲幽閉主義、開放主義

此地には三個の新聞がありますが、其內一番人の讀物となつて勢力のあるのは「いばらき」と平假名で書いた新聞ですが此の間も此「いばらき」で私の事を幽閉主義だなど丶云つて、誰が書いたかは知りませんが「寄宿舍生活」と題して盛に論じましたが私は幽閉主義でもなければ、開放主義でもないのです。開放主義と云へば一方からは大に良いやうに人間の價値を認めて自由と云ふ事を愛すると云ふやうに聞えますが、妙齡の婦人をどうしてさう放任して置けるものですか、又開放するのも關はんですが、未だ今の社界はどし〳〵と出步く婦人を批難しますからね、さうして婦人はさう〳〵外で働くのには適當して居らないだらうと思ひます。で私は寄宿舍の制度として一週に二度づ丶外出を許してあるのです先づ普通の家の主婦でも一週に二度づ丶外出すれば隨分用は足りるだらうと思ひます。私の家內等も此頃は愛國婦人會だの出征留守宅の救助だのつて引き出されますから止むを得ず出しますが、實際子供を泣かせて置いて會などに臨むのは宜しくありませんよ、婦人の天職は子供を敎育するといふのにあるのですからね、大工は大工の仕事を爲、左官は左官の業を勵んでこそ價値もありますが、大工が左官の眞似をしたり、左官が大工の眞似をするのではいやはや仕方がありますまい、それよりも八百屋が大工の

眞似をするに至つては、わつはつ丶丶丶丶。

▲髪の結び樣

隨分制裁する學校も有るさうですが、私は髪などに付いても大抵は關渉しないのです。鬢を出さうと出すまいと、日本髷だらうが束髪だらうが、餘り嚴格には云はんのです、もし餘り目に付く、それこそあの元祿髷にでも結ふ人が有りましたならば注意しますから、何れ皆なそれぐ\に好き嫌ひがあつて、束髪を好む人桃分れを好む人唐人髷を好む人種々あるのですから、別に此の髷でなくては不可んとは云はないのです。然し別に珍らしい髷を云ふ人も無いのです。

▲衣服、袴

一體水戸は東京等とは違ひまして、昔が尙武的な極く質素な國ですから、衣服などに付いては未だ一度も何とも申しませんが、華美な服裝などを爲る生徒は少いのです、式などの時も大底は黑木綿の紋付を用ひて居るのです。又袴も必ず付けなければならんとは云はないのです。家によつて好まん家も有りませうし、又はいろいろの事情によつて袴を用ひられん塲合もありますから、東京等では海老茶袴に束髪と云ふと大分攻擊されますやうですが、はつ丶丶丶丶攻擊されても差支へはありますまい、自分の心にさへ耻ぢなければ、世の中では海老茶袴でも穿いて女學生の服裝をすれば直ちに此人を女學生と見なして一般の女學生に押し當てるのですからね、はつ丶丶丶、服裝が女學生なら藝者も出來ませう茶屋女も出來ませう其處家の下女でも女學生の服裝をすれば女學生ですからね、衣服や髮の結ひ方で女學生になれるのならば世間一般の人が何んな無敎育な人でも女學生になれるのです。なに幾程眞似をしても良いですよ、何しろ此間迄は貴夫人方が藝者とか何とか云ふ賤業婦の容子を眞似て耻ぢなかつたのですからねそれを只今の世では、詰らぬ者迄女學生の眞似を爲たがる、つまり女學生を羨しいと思ふから眞似するのですからね、それだけ女學生の直價を世の中

で見とめて來たのでせう、女學生と見せれば人が信用するから其裝をするなど丶云ふのは實に喜ばしい事です。

▲白粉、言葉

東京では大分化粧を施て通學する人があるさうですが此地では家では兎に角學校へ來るのには皆用ひません、師範の方でも女學校の方でも白粉の制裁などを與へる必要はないのです。言葉等も東京の女學校の有る側では注意するさうですが「よくつてよ」「さうだわ」等と云ふのは勿論用ひませんし又「さうだんべい」といふのもありませんから、かれこれ云ふ程の事はありません。

▲入學試驗美人選拔云々について

云ふ迄もありませんが、婦人は言葉や態度等については餘程注意を要するだらうと思ひます。と申すと此春の師範學校入學試驗云々の事を御存じでせうが、上は東京の大新聞から下は北海道の新聞に至る迄鉾先を揃へて批難しましたが、私は決して美人を選拔して形の惡い人々を排斥したと云ふ譯ではないのです、然し同じ學力ならば對度も風采も共に立派な人の方を選びますからね、それに教員などは人望を得るのが必要ですから、なか／＼風采なども馬鹿には出來ないのです、と云つて美人ならば學力の有無を問はずに入學を許す等と云ふやうな事ではないのです。また學校へ行つて參觀されると一見してさうでない事が知られますが、はつ丶丶丶私は額に禿のある一人の生徒について、あれを前髮を切つて下げて隱した方が良いであらうか、又は禿は出しても普通に髮を揃へて居つた方が良いであらうかと云ふ問題を職員などにも謀つて其意見を尋ねたのですが、當人は私が他で心配して居る程には感じてないやうです。

▲良妻賢母主義について

いや何れの女學校でも皆良妻賢母主義のやうですが、どうしてさう注文通りにはゆきませんよ、百人居れば百人の性質が各々に違ふのですからね、さう

かと云つて愚母鈍妻主義と云ふのでもないのです、私は殘らずの生徒を皆良妻賢母にしやうとは思はないのです、無論出來れば此上もない快事ですが、さうはなか〳〵ゆきますまい、ですから其内の一人なり二人なりが良妻賢母になればそれこそ充分です實に滿足な次第です、良妻は多く得られるとしても賢母などは昔から何百年に一人何千年に一人位しか無いのですからね、それを以て大勢の人に當て嵌め敎育を受けたから、彼人も此人も賢母になるといふのはちと間違つた考へだらうと思ひます、世の中では高等女學校を卒業さへすれば皆良妻賢母にでもなるやうに思つてかれこれと批難するのは酷ですよ、先づ普通の人間が出來上りさへすれば充分なのです。

▲獨立主義について

隨分多い生徒の中ですから獨立主義の人も少しはあるやうですが、私は決して惡いとも良いとも云はんのです。成る可くならば婦人の天職を全うさせて家庭の人となり子女の敎育に從事させたいのですが、事情やむを得ない者は獨立主義を取るより仕方がありますまい、ですから獨立主義を取つて淋しい暮しを爲るのも場合によつては其人の心に任せた方がよいでせう。

▲宗敎について

絶對的に宗敎を信じては不可んとは申さないのです、キリスト敎なり佛敎なり又は孔子の道なり、相應に信仰するのは良いでせう、むしろ少しは奬勵した方がよいかも知れません、つまり信仰すればそれ丈け心が落付いて惡徳などは施さないやうになりますから、然し宗敎に漬けられて終つて、一にもキリスト二にも佛敎と云ふやうになつて、結婚するにも自分の宗敎外の人では厭やだなどゝ云ふやうに至つては仕方がありますまい、つまり宗敎は人間の心を錬る一種の學問ですからね。

▲意志敎育

婦人の問題として此頃世上で專らやかましく當局者が論じて居りますが、婦人が他へ嫁して人に依賴

するにしても、何なり一つ獨立の學藝を有つて居らんければ一旦不幸にして禍に遇つた時に困難し、其爲に心にもない再婚などをし又は一家離散の悲境に陥るやうな事があるから、音樂とか文學とかそれぞれの職業を覺えて嫁かんければ不可ないなど、云ひますが、それは無益の心配だらうと思ひます、そりやあ出來るならば一藝に秀て居るのに越した事は御座いますまいが、婦人は十七八乃至十九廿歳位の妙齢を以て他へ嫁す時期と昔から定つて居るのですから、其迄に到底裁縫も爲る家政學も修める何も學ぶ彼も學ぶといふ樣な事情で、普通の學問を修めるのさへ容易ならん次第です、それを其上に何うして獨立の學藝などが修められませうか、若し又此處に誰れも彼れも夫に早く別れると云ふ事はありませんから、若し此處に假に不幸な人があつて獨立の學藝のある爲めに夫の亡き後子女を立派に教育がして行かれるとしても、其人の意志が薄弱ならば途中で挫けて終つて其學藝も何の益には立たず、結婚前の心掛も水の泡となるではありませんか、これに反して獨立の學藝は出來ずとも、其婦人が意の強固な人ならば、高等女學校でも卒業して居れば教育に從事してなり、又それから他の學藝に進むなりどうにでもなられるではありませんか、ですから私は獨立の學藝などを授けるよりも、意志教育が肝腎だらうと思ふのです。

▲脚根下に注意せよ

で何時も私は此事について心を用ひて居りますから、先ず第一に其心を養成する始めに、脚根下に注意せよと云ふ事を聞かせるのです、それは自分の家人の家の別なく下駄を脱いで玄關から上る時に、ちやんと並べて再び穿くのに都合がよいやうにして置くのです、茶屋の便所の草履なども其通り學校の便所の草履などは無論の事です、さう云ふ所にまでつまり何時も變らず心を用ひて如何なる場合にも變らないやうにするのです、學校でも此頃は嚴格しく云ふものですから草履でも下駄でもちやんと心地よく並

べられてありまして、決して人の迷惑になるやうな事等はないのです、婦人はよく私等の言葉を一度云ふと用ひてくれますから』と云はれながら立ち上つて床と並んだ違ひ棚の中から五六冊の手本樣なものを持つて來られまして『此れ等も意志教育としては此上もない良い手本になるものです、此れは監獄の北に住んで居られた藤田北郭先生の石摺やら又は眞の字やらを敷寫にして其儘虫の喰つた所はちやんと其通りに、千變萬化の爲し難い樣々の書風を四十冊も書かれたのです、見て居る內に實にあつと感じるやうなのがあります。』一々示されました。成程拜見致すさへ容易ではありません、楷書は楷書に草書は草書に虫の生いた所は其通り字の切れて居る所は矢張り其如くに寫したので御座います其忍耐に富んだ筆の跡は唯感き入るばかりです。『はつ〳〵〳〵なかなか大した事をされましたらう、私は心の結ばれて清々しない時は何時も此れを鄭寧に見るのです、すると氣がしんと靜つて云ふに云はれぬ良い氣地になるのです。私も父母の命日には必ず二千字位書くのです、それは氣が他に散らないで他の事を思はないやうにする爲です、はつ〳〵〳〵座禪を組むのもなかなかよう御座いますね。

△講堂終身△

私は幼い時に兩親を亡しまして、淋しくつて仕方がありませんでしたから、何時も書齋へ籠つては父母を思つて居つたのです、で書齋には思齋の名を付けて、此の上にある二幅の額も人に頼んで書いて貰つたのです。』成程思齋の額の理由は始めて御主人の口から說明されました。

で私は此間六月の廿一日に女學校の講堂終身の時間に「我が母」と云ふのを話したのです、誠意を以て語り始めた私の言葉が漸々進み行くに從つて席上は水を打つたやうに靜り返り、講堂の內は丸で寂寞として夜の墓地かと思はれる位でした。愈々感慨に充ちた私の聲が染み渡るやうに響きますと、居並ぶ生徒は皆悄然として首を垂れて居りましたが、遂には

潸然として泣くやうになつて終つたのです、此時の私の心中の嬉しさ、私も暫しは聲を發する事が出來ず、、、すゝり上る聲ばかりが漏れるのでした、此瞬間私は、生徒の心と私の心とが一致して黄金にも勝る千金の貴い涙が溢れたのだと云ふ事を悟りました。其後いばらき新聞の記者に遇つて斯う云ふ話をしたのです、私の學校には不品行な生徒等は一人もない斷じて無いのである、何故とならば「我が母」と云ふ私の物語を聞いて聲を發して泣く程の優しい、親を思ふの情の深い生徒が何うして兩親の名を耻める事が出來ませうか、人は何んと云はふとも私は此の水戸の女學校には一人も惡評を受けるやうな行をする生徒はないと固く申して誇つたのです。

▲大華族の家庭

それに水戸の女學校には、婦人では有名な女丈夫の聞えある豊田教授、それに男子では教頭の池田教授の此の二教授が有りまして、よく私の意を了してくれられますから、職員一同が實によく和合して居るので、此間も高等師範の雀部教授が來られまして君の學校は大華族の家庭のやうだと評されたのです實に此の言葉は私が滿足して心に喜ぶ所なのです。

▲程度について

ハア程度ですか、一體東京等とは違ひまして四年で終結するのですから、少しは東京の女學校等よりも簡單かも知れんのです、然し成る丈け家政學とか割烹とか云ふやうなものは實用的を重にするのです何う云ふものですか、定めし此土地には相應して居るだらうと思ひます、何にしろ都とは富の程度も違ひますから。

▲小說について

左樣、此頃は神聖戀愛など丶理屈を付けて面白がつて居りますが、私は萬朝報で論じた主義の方ですなにしろ血の燃え立つ若い人々には見せない方が良いだらうと思つて學校では讀まないやうに注意して居りますが、家庭では何んなものですか、學校で嚴格しく云ふ位で丁度良いでせう。不可ないと制裁し

ても好きなものは駄目ですよ。

▲儼格家

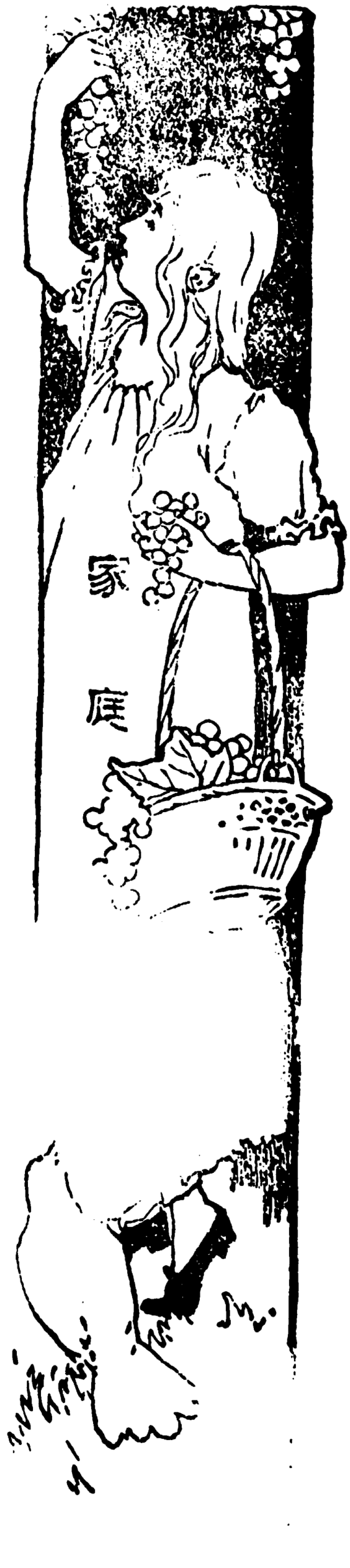
然し東京へお歸りなすつたら斯う被仰つて下さい水戸には本多と云ふ儼格家がひかへて居つて書記官でも農學校の校長でも皆んな引つ張り出して毎朝擊劍のお相手をして居ると云ふことを、あつはつゝゝ。」と愉快さうに笑はれました。

教育家と云へば箱詰な人と一言の下に融通の利かないやうに思はれて居る世に斯くの如き良校長が居られて、立派な論說と經驗との上から教育される水戸女學校並に師範學校の幸福は何の位でせう。

御維新前の水戸は、孔孟の學を盛んに傳播して一藩の教學大に揚り、風俗敦厚撲茂にして、人情仁義を重んじ忠孝を尊ひて、日本列藩の欽仰するところでありましたが、時勢の變遷と共に、この良風も次第に消え行くは、心ある人々の慨嘆するところであります、私は此點につきても、本多校長の特に留念して矯弊の實を擧げられんことを希望致します。

●繪はがき

繪葉書界も意匠及素地凡ての方面の贅澤的進歩は驚くべきものにて此頃は高價なるもの丶方が最も多く賣れ行くの傾向となり單に着色のみならず金銀泥を貼附することより更に進歩して今は寶石入りのもの出來るに至れり尤も西洋より來るものには今日までも澤山寶石入れのものあれど直段が馬鹿に高くて需要者も少々思案の體と云ふ譯なりしが百目五十圓内外の寶石を使用するも日本にて製作する時は一枚二錢以外にて原料が整ふことゝて中には水早やにもニス糊にてつくるものあれど何れも剝げ落ちて購買者より苦情の來るが常なり但し中には比較的に糊着術成功したるは意匠登錄を出願せしものなりとか例の女子のみにて着色業に從事しつゝある渡邊翠溪女史の處にて研究中にて比較的に成功せりと云ふ



家庭雜記

文學士　山本無極

◎無くてすます　誰にも必要の事なれど、殊に家持の女に大切なるは、なくて濟すといふ術なり、これは經濟と克己により行はるゝものにて、足るを欲すれば、限りもなし、少しばかりの面倒はありても、克己して、なくて濟すの道を知ると、家持の大事なり、例へば小簞笥がありて便利と思ふ所にも、色々工夫して、菓子箱或は袋に代へ、俎板が二つあればと思ふ所にも裏を用ひ一つにて濟すといふごとく、總べての事些細の樣なれども、決して忽にすべからず、此術を知る婦人は實益を主として、みかけを先にすることなければ、よく家を持ち立つるなり

◎所謂上手の經濟　言換ふれば損にならぬ經濟なり、下手な經濟は不經濟の極なり、變味しかゝりたる肉を吝みて良人の腸加答留を引起し、牛乳を飲まで身體の健かならぬを歎くなど、愚かなる話なり、買へばさまで高くもなきものを、一日も二日もつぶして手細工にするなど、いそがしき家持女にはトギ賃に刀身こかしの極と謂ふべし、されば經濟は分別の異名にて、或人の『われ妻を娶らば願くは芋汁は

薄くたて、菜汁は濃くたてる女を得たし」といひしも、此見わけあることを云ひしものぞかし、經濟といふ中には、金の經濟のみならで、健康の經濟、時間の經濟氣力の經濟なんど、色々あるものなれば、よく思ひはかりて、不經濟なる經濟をせぬが肝要なり、

◎裁縫術の精神　一家の主婦なるもの、家政を整理する上に於て缺くべからざるの業務は、直接裁縫にあり、其貴賤貧富の如何に拘らず、婦人處世の一要務として、よし自ら手を下して爲さゞるも、必ず普通裁縫の心得はなかるべからず、これ既に婦人一般の認識する所にして、今更十言萬語するの必要を見ず、故に予はこれより裁縫術の精神が、家政上に及ぼす三四の利益に就きて一言せんと欲す、抑も婦人が、一家の主婦として家政の衝に當り、萬事を處理する上に於て、必要なる精神上の要素は、忍耐にあり、綿密にあり、節約にあり、清潔にあり、而して此等の諸徳を修養するの時期は是非とも、子女敎育期に於て之を望まざるを得ず、敎育上直接に是

等の諸徳を涵養するの道は修身學あり、家政學あり衛生學ありと雖、予は寧ろ女子敎育上殊に是等の諸徳を涵養するに恰當なる間接の學科は裁縫術にありと云はんと欲す、裁縫は固より一科の技術に相違なし然れども、其技術中に存する精神をば適當に發揮し、應用し來らば、將來彼等が家政を整理する上に於ての利益蓋し鮮少ならざるべし、何となれば、裁縫術なるものは、頗る忍耐を要し、綿密を要し、節約を要し、清潔を要するの業務にして、衣服を裁縫するの際、もし此等の諸徳の一たりとも缺くことあらば到底完全なる仕立物をなすこと能はざればなり故に裁縫術には必ず家政上に必要なる是等の諸徳を優行實踐せしめざるべからず、斯く裁縫課敎授上に於て、裁縫科に必要なる是等の諸徳を涵養することは女子敎育上殊に將來家政の衝に當るべき、一家の主婦たるものを養成する上に於て切要なるは勿論なり、然るに較もすれば、女子敎育上裁縫科を以て、單純なる一科の藝術なりと心得、精神上の諸徳を修

養するの道は、他に之を求むるといふものあるに至りては、思はざるの甚しきものならずや、

◎衛生の注意　一醫師は家庭に病人なき限りは入來の必要なし、醫師の入來る家庭は不健全なり、家庭に誰か病人あるが故なり、吾人は家庭に病人なく、醫師の入來なきを禱るものなり、併しながら家庭に病人あらんか、又は急變あらんか、是非とも醫師を迎え其診察を乞はざる可らず、而して其病人の速癒全癒を計らざるべからず、家に病人ある時は、其家政は何となく隱鬱にして、面白きものにあらず、一言せば不健全なり、家に一人の病人あらんか、家庭の總ての人は、此病人の看病に打かゝらねばならぬ故、家政の上に於て頗る面倒を重ぬるものなり、病氣の起る種々ある原因あらんが、詰る所は不衛生にあるなり、不衛生より病氣を起し、發熱苦痛を感ずるに至り周章して醫師を迎ふ、これ家庭と醫師との關係なり、されど吾人は急變の場合に醫師を迎ふるのみに限らず、無事安全の時に於ても醫師の來らんことを望む、これ何の爲なるか、第一は家に病人起るを未然に防ぐこと、第二は衛生的の智識を得ることなり、故に肉體の健全にして、家政の擧らんことを欲するには、醫師の力を假りて、病患を未萠に防がざるべからず。

◎美術心の養成　古來婦人の教育としいへば、一通り讀書裁縫を主とし、傍ら歌詠むこと、琴三味線活花茶の湯などを習ひ、以て家庭の諧和を助くることなりしも、遊樂に荒み易きは人性の常にして、兎角遊藝に重きを置き、却つて實用に事を缺ぐより、物堅き父母は寧ろ婦人の教育を嫌惡するに至り、只管裁縫をのみ勵まし、其他は之を顧みざらんと欲したりき、所謂遊藝なるものは、是非とも良からざるものは之を避けざるべからざることは言ふまでもなく、縱令其全く無害なるものなりとも、遊藝は即ち遊藝なれば、實用を先にして、纔に餘閑を以て之を修め、其家庭諸和の具となさゞるべからざるは勿論ながら、亦全く之を無用視するに至つては、過ぎて

猶及ばざるなり、成程遊藝としいへば、何となく善からぬやう聞ゆれども、美しき言葉を以て之を言顯せば、即ち美術的修養也、繪畫の如き、詩歌の如き高尙なる音樂の如き、獨り以て家庭諧和の具たるべきのみならず、自ら其心身を慰むべきものなるのみならず、之を善用すれば大に其品性を養ひ、氣格を高尙にすべく、又子女の敎育にも必須なるものたり若し婦人にして繪心あらん乎、自ら之を畫き或は人の畫きたるものを巧に撰擇して之を家庭敎育の有力なる敎授器械となし、依りて以て子女の心性を陶冶すべく、或は之を室内の裝飾に應用して、一家の淸雅諧調なる氣風を養ふべし、若し婦人にして詩歌の才能あらん乎、以て自ら鬱を遣り、情を暢ぶるの樂を享くべく、以て人の悶を解き憂を慰むべし、若し婦人にして高尙なる音樂に堪能ならん乎、夫婿終日の勤勞も燈下一曲の絲竹に之を慰籍し得て餘りあると勿論也、且つ美術心なるものは、其心性に含蓄ありて優にやさしく、自ら起居振舞の都雅なるを保つを得べし、人は男子にまれ婦人にまれ、何事か一の好み樂む所なきを得ざるもの也、已に一の好み樂む所なきを得ずとすれば、成るべく高尙にして、我人共に益する所あるものを擇ぶべきは當然なるのみならず、人若し高尙なる樂みを樂むにあらずんば、意に却て下卑なる樂みを樂むに至らん、而して美術上の樂みは樂の最高尙なるもの也、要するに、婦人に美術心あるは其婦人をして奥床しからしむるもの也戒は唯荒むべからざるに在るのみ、實用を先にして之を餘業にすべきに在るのみ、

◎小兒の躾方　干渉時代過ぐれば、放任の時代來るも自然の理にて、殊に忙がしき家庭などにては、父親は外の仕事に汲々として、母親は家内の雜事に眼のまはる程忙がしければ、小兒の躾方とておろそかにするとはなしに、何時か放目勝になり易く、時時叱りもし、言聞かせもすれど、何分親の精神十分に小兒に適せざるの患あるものなり、此は實に注意すべきものにて、言ふまでもなけれど親たるものよ

くよく考へ、何が尤も大切なるかを慮り、十分に面倒を見て、煮豆の焦つくからとて、小供の僻事を見のがし、調べ物の忩がしき故とて、繪本など携へてこれを何ぞと問來る小兒を、五月蠅と、叱飛ばすやうの事あるべからず、必ず小さき事とて等閑にすべからず、春の野山の青み渡るも、一莖の草の集まれるにあらずや、發句にも「子にあくと申す人には花もなし」とあり

○交際の注意　さても交際といふものはむづかしきものなり、嚴然として正しく構ふれば愛想なしと



誹られ、にこやかにお世辭をいへば、口まへのよき油斷のならぬ人といはる、如何にせば交際の道を全うすべきやとは、世馴れぬ婦人より屢耳にする所なり、げに交際はむづかしきものにて、緩嚴共宜きを得て、出過ぎず又退過ぎず、能く心にわきまへて、したり顔ならずといふやうにせねばならぬ故、世馴れぬ人にありては殊の外むづかしと感ぜらるゝも道理なれども、僞らんよりは『拙く誠なれ』にて、己が赤心を推して人の腹中に置くこそよけれ、但し心誠にして、而し

て才智の後るゝ時は、人に計らるゝことを免れず、これ能く心すべきなれども、苟も己が心至誠にして寡欲なる時は、危險の淵に陥るゝ迄には、計られぬものなりかし、されば己れ智ありとして徳を無し、人を計りて陥れんよりは寧ろ邪も正なりと信じ違へて、計らるゝことと増さりたらめ、さりながらこれ将た愚に痴々しき誹を負ひぬべければ『女子は注意深かれ』てふ語を服膺して、能く正しき道を踏違へぬやうにすべし、凡そ女子の、人愛想よきは誠に然るべきことなれども、心誠ならずして、口まへのみよく、一時の花を飾りて、永遠の實を結ぶとなきは、甚忌はしき事なり、

我は如何にして我が健康を回復せし乎

石川野花

私しの母は、體軀の至つて弱い人でございました、母の家族は、誰れ彼れも大概肺病の為に倒れて此世を去り、殘る三人は癌腫に罹つて死にました、こんな有樣でございますから、私しも虚弱の方で唯もう其日其日の病の苦痛を逃るれば、それが何より結構だと思ひまして、全く病氣が治癒つて、健康の人となるほどの希望は、勿論無いのでございました。

母は始終病室に起臥して居るのでございますから、其の病室の中には、厚い布團や、毛布や、其他病人の用ゐる種々の物が、其所此所に散亂したまゝに、室内は六ケ月に一度も掃除といふ掃除を致しませんので、危險なる塵埃は室の隅々に堆たかきまで積つて居るのでございます、尤も朝夕全く掃除を為ないのではございませんから、目に見へる程、堆積して居るのではございませんが、何しろ其實堆積同樣の有樣であつたに違はございません、又た多くの人の申しますやうに、病人を風に當てると惡いといふところから、夜になると、決して窓を明けたことはありません、それは夜氣に觸れると善くないと思ふか

らでございます。

其頃私しは料理のことにも、家政のことにも、格段の趣味を感じませんので、家庭の樂みと申すものは何にも無かつたのでございます、たゞ空腹くなれば自分の好む食物を勝手に喫べる位ゐが樂みといへば樂みで、其の好きな食物は何かと申しますと、鹽漬か酢漬といふやうな異つたもので、折々は檸檬も用ゐましたが、そんな食物を餘り澤山喫べるので、後には胃袋が受付けなくなりまして、遂には胃病を引起しました。

それから後は自然に食慾がなくなりまして、胃の消化力が非常に衰へてまゐりましたので、自然にそれを治癒さなければならぬのでございますから、喫べたいと思ふ食物を、ホンの僅か許り喫べまして、胃の働らきを起さすやうにして居りました。

或日某しの女醫學校で、某醫學博士の演說を聞きましたが、其の演說が一々私しの胸に思ひ當ることのみで、如何にも感心致しまして、何うか其の演說の趣意の通り我身に實行したいと固く決心したのでございます、ソコで私しは此の決心を以て、直ぐに地方に參りまして毎日々々日中は、戶外生活をして、夜になると家に歸つて眠るといふ風で暫らく暮して居りました、又食事は一日三度と極めまして、始終品を變へたのでございます。

始めて料理法を學ぶ

私しの參つて居た地方では、料理法など申すことはまだ開けて居ませんので、家事に重きを措かない婦人達には、料理の趣味は一向分らないのでございましたが、併しそれにも拘らず、此地には料理法を教ふる專門の學校がございますので、私しは其の學校へ入學して、料理學校の第一年生となりました、まだ二期の學科に進まない內に、成程家政學といふは甚だ必要な學問であるとのことを大に感じました、實に家政學の知識は、人々の健康の上にも、又た一家繁昌の上にも、非常な影響を與ふるもので、其の研究と適用とは、家婦の必ず勤むべき職務の範圍內

であるのみならず、事實に於て、料理の如きは、醫業に劣らざる一の職業として、重んずべきものであると感じたのでございます。

こんな感想を抱いて、趣味を感じながら、日々我身を忘れて、學科の研究に從事いたした、それが何よりも身體の藥であつたので、私しの病氣は何時となく自然に治癒りまして、日々に健康になるのを覺えました、食事の時間は勿論整然と極つて居りますし又た例の戶外生活を怠らなくて、暇さへあれば新鮮な空氣に觸るゝのでございますから、是等各種の狀態が自づから健康を回復すべく、我身を益したのでございませう。

次の年には二年生になりましたが、暫らく致しますと、故あつて敎師が辭職しましたので、代つて敎師となるべき人が他にございませんところから、是非私しにと勸められますので、少々怪しい敎師だと自からお可笑く思ひながら、已むを得ず、就職致しました、實の處を申しますと、家政學といふ廣い學問に就いては、私しはまだ何にも知らないのでございましたが、この地方では、家政學といへば、殆んど料理のことのみに限つて居るのでございますから、マア何うにか斯うにか、敎ゆることが出來たので、今考へて見ますると、自分ながらお可笑くて耐まりません。

食事の改良

其後此の學校で、食品化學の研究を始めまして、生物學者、醫者、化學者などの先生達が、何れも食物に就いての講演を開かれ、食物改良の議論を盛んに唱へられました。

私しの眼も其時次第に覺めまして、よくまあ自分は生きて居ることが能ると怪しみました、事實上私しは永く生きて居られない食物ばかりを喫べて居たのです、私しの病氣に取つて、最も害になる食物を選んで居たのです、則ち鹽漬け酢漬け、油煎りの食物菓子、一日三回の食事など、是れまで私しの食物上の習慣は、胃腸の惡い私しに取つては、何れ丈け有

害であつたか知れません。
ソコで私しは肉類(殊に豚肉)油煎りの食物、菓子、砂糖の類を食することを廢め、又衣類では、赤の「フランチル」、厚き下着など量の重いものを身に纏ふのを止めまして「クリーム」「バタ」橄欖油など脂肪の多い食物を之に代へました、又重い下着などを被て、苦しむのは如何にも馬鹿々々しいと感じましたので輕い衣物を着て、進退を自由にし、運動の活潑に能るやうにとの目的を取つたのでございます、重い衣物を着ますれば之を支ゆる爲に身體の力を費やさねばなりませんから、輕い衣物を着て、之に費やす丈の力を運動の方に向けましたならば精力は身體に留まつて、健康上甚だ利益ある譯ではございませんか。
それから朝飯を次第に減ずるといふ方針を取つて、始めは燒パンと僅かの菓子ですましましたが、後にはそれも止めて、お茶を一杯飮むのみに致しました正午になると、普通の滋養物などで製らへた食事を取つたのでございますが、食事を終ると三十分又はそれ以上の休息を必ず致しましてから、教場に出ますので、何時も精神が輕快で、一向屈托がございません、晩餐は至つて淡泊な物を選び、パン、牛乳、鷄卵、穀物類を常に用ゐ、夏は新らしい菓物や、少許りの胡桃を加へましたが、何れもよく注意して咀嚼するのでございます。
ところが其後八年經てから、偶然腸窒扶斯にかゝつて、床に就いたきり、長い間全快致しません、遂に九十一日の間寢たまゝで通し、其後も全快といふ運びに參りませんので、滿一ヶ年は學校にも出席しないのでございました。
言ふまでもなく全快後も、健康がこの六七年間のやうにございませんので、自然と少食になりましたが其實食事を減ずるのは、身體上尤も必要であつたのです、ソコで是れまで二回の食事を四回に致しまして、回數は增しても、食量は餘程減じたのでございます、則ち朝の一度は珈琲ばかりで濟し、其餘の三

度は、小麥のパン、バタ、牛乳、菓物、胡桃を重な食事にしたのでございます。然るに間もなく健康は回復して、二年と經ぬ内に、これまでにない程優れた身體になりましたので益々注意して、食料を精選し、其の量を減少し、よく咀嚼して喫べましたが、年を逐うて、健康は益々宜しくなりまして今日では一日に十四時間乃至十六時間働らいても何ともございませず、又一年に三百六十五日則ち一日も欠がさず勉めましても少しも困難のない程、丈夫の體軀になりました。

婦人は皆料理を稽古すべし

家政學が一家の幸福を高むるに就いて、最も必要欠くべからざる學科であることは、常に私しの感ずるところでございます、隨つて私しは凡ての婦人達が料理の稽古を爲られんことを希望するのでございます、私しの敎ゆる婦人達の中には、料理法に就いて私し程は趣味を感じないので、敎授中時としては、如何な熱心な私しも、困らされることがありますがそれでも私しは何故こんな面白い事をするに、彼人には興味がないのだらうと思返しまして、益々熱心に敎ゆるのでございます、世間では身體の弱いお人は、どうかして、強くなりたいとの望から、恰かも水に溺れた人が、一本の藁にでも、悦んで取附くが如く、何んでも強壯になることゝさへ言へば、直ぐにそれを試用する方が多いやうに見受けますが、其の人達が強壯になられると、家政のことなどは彼方のけで一向頓着されませぬが、それが健康上善くないことで、實際身體を強壯にするのは、強壯劑のなんのと騷ぐよりも、簡單な法によりて、尤も著しい効能のあるのは、私しの例で分るではございませんか。

各種の協會などで、私しは度々講演を致しましたが中には二三の婦人達が、私しの實驗談に隨ひ、其身に實行して、果して立派な身體になつた方がありますが、實際食事を減ずるとか喫べたいものを喫べないとかの節慾に關する問題は、さあ實行となると、

さう容易なことではございません、婦人方殊に子供も、安全に此世を送られんことを望みます。を有つて居らるゝ母たる婦人方は自分のことのみでなく子供の健康の上に注意して何うしたならば、子供を健康に成育せしむることが能るかと、常に案じらるゝのでございますから料理法を學んで、私しと同様に、其身も子供達を



大概な人は、何事に就きても、自分で吟味せずに、人の吟味した事柄を聞いて、それで満足するのですが、料理法の如きは人の吟味した談位に満足せずに、自から進んで吟味する覺悟がなくて

はなりません。

凡そ社會の各階級の人が其の平生食して居る食物に關して、自から吟味するのは、造作もないことで、何々の食物は、身に取りて善くない位のことは、直に分るのでございます、何處の家でも、かゝりつけの醫者はございますが、醫者といふものは、病氣を治療するまでゝ、平日の健康といふことには、頓着のないものでございますから、病氣の時には無論診て貰はねばなりませぬが、平生身體を委して置く譯には參りますまい。

空腹にならざれば食ふなかれ

私しは朝飯を食しませぬ、實際食する必要がないのです、筋肉は睡眠中修復すべき食物を要しませぬから、前日喫べた食物は、活動によりて消化することなく、其儘腹中に停滯して居ますから、若し其上に食しますれば、腹が脹れて、重みが益すのみで、決して力のつくものではございません、胃は朝人が眼を覺ますと共に活動を始むるものではありませんから、食物の下つて來るのを待て居る道理はありません、それに猶ほ食物を喫べて、無理に活動させやうとすれば、必ず不消化といふ結果を來すのです、さらばと言つて、蜜柑や、橙子や、冷水や、其他の刺戟物を飲むで、胃の活動を強て起すのは、不自然なことで、身體の爲に善くありませぬ。

朝八時に喫べた朝飯は、まだ消化の責任を有たない胃腑の中に其儘滯つて、晝頃まで殘つて居るのに、十二時になつたから、必ず晝飯を喫べねばならぬと心得て復び食卓に對ふのが、一般の常でございますが、之が爲に哀れな胃腑は、重荷に堪へなくなつて活動が愈々鈍くなるのです、それが毎日のことでありますと、雨滴の遂には堅石を穿つが如く、後には如何なる壯健な人でも、胃病に罹つて、大苦を受けるやうになるのでございます。

それ故お腹が空かなければ、決して喫べてはなりません、お腹の空くのは、則ち食物を要する爲の自然の告げ知らせでございます、不自然の食慾は、病の

本で、神經的挑發から起るのですが、空腹は食物に對する自然の健康的要求で、活動を益すに從つて生ずるのでございますから、誠に大丈夫な現象ではございませんか。

又一方から考へますと、私しの健康の基は確に咀嚼にあると思ひます、私しは何を食しましても、凡そ二十回若くは三十回もよく嚙碎かなければ、决して嚥下しません、善く嚙碎いて喫べた食物は、嚙碎かずに丸呑みにする食物よりは凡そ四倍以上の滋養になるのでございます。

私しは又料理したものよりは、生物を喫べるのを好みますが、さりとて小麥や馬鈴薯のやうな澱粉質のものを生で喫べるのではございません、人間の胃は是等の調理せざる澱粉質の食物を消化する力が甚だ乏しいものでございますから、こんな食物を生で喫べるのは、危險千萬でございますが、萵苣だの、芹だの、三ッ葉だのといふ野菜を生のまゝ喫べるのは敗血病の豫防にもなつて、血液の運行を助け、恰かも箒の如く、身體の各組織を、清潔に掃除するのでございます。

頭痛は必ずしも恐るゝに足らず

朝起き立てに頭痛がして、氣分の重いのは、胃から起ることです、誰れでも、其の身體に要するより以上の糖分を用ゐますれば、その糖分は肝臟に集つて自然に膽汁病を起すのです、若し膽汁病が起らなければ、それよりも一層惡い病氣を引起します、そんな不愉快なことに時間を消し、金錢を費やし、體力を消耗し、剩さへ快樂をも犧牲にするといふは誠に詰らぬことです、野菜は膽汁病になりかゝつた人に取りては、生でも煮たのでも、餘程効用がありますが各種の菓子など糖分を含んだものは、必ず喫べてはなりませぬ。

頭痛は必ずしも恐るゝには足りませぬが、其の原因は胃から生ずるのでございますけれども、又た不潔な空氣と、適宜の運動の缺乏から來る場合も多いのですから、家の内ばかりに働いて居る家婦などは、

多く頭痛に罹るものです、家婦は終日家内の勤めに忙がしく、朝夕手足を動かしますから散步の必要はないやうでございますが、空氣の新鮮な野外などを散步するのと、風通しの悪い家の内を歩行するのとは、健康上大に差別がありますから、家婦たる人々は、朝夕二度位は、家内の勤を忘れて、散步をするが宜しいです、散步から返つて來て、復び家事に取りかゝると、家事もまた面白く知らず識らずの間によく捗どります。

毎日屋內に空氣を流通せしめよ

寢室を始め、部屋々々の隅々までも、毎日空氣を流通せしむるのは、最も必要なことです、陰鬱な室內には、何人でも生活して行けるものではございません、健康と氣力は、注意と智識から生ずる產物で、注意と智識がなかつたら、世界は全で茫々たる草原です、この草原を開拓して、秩序整然たらしむればこそ、世界中の何物に就いても、美といふものが認められるのではございませんか、人も之と同じく智識と注意とでもつて完備して參りますと、どんな仕事に當つても、趣味が出て面白いものです、一寸臺所を拭掃除した丈けでも、今まで知らない樂みが生ずるものです、又た窓硝子を磨くにも、だうするのが一番よく磨けるかを工風して、善い材料でも選ぶことになると、一段の樂みが出來るではありませんか、家事といふは、元來細かいものでありますが、それでも秩序正しくチャンと奇麗に致しますと、心が快然して、なぜ他人は自分のやうに家の內のことを綺麗に片附ぬであらうと、怪しむ位ゐになるものでございます。

私しは一生涯生活法に就て、人を導くことを以て自分の職務とする積りでございますから、本文に記した事柄は、みな私しの實際の經驗から來たことのみで、一つも想像や空想を加へないのでございます、他人の病氣を、我が病氣の如くに憂ひて　それを治癒すといふは、先ず普通困難しいことで、自分の健全になつた例を引て、是非他人も自分の例に倣つて

健全になつて呉れと心から祈るなどは、容易の業ではございませんが、私しは愛の心を以て、この容易ならざる困難なる事業を己れの務として、弱體な婦人達を救ふ積りで居るのでございます。

　我が完全なる健康の歸因

之を要するに、私しが仕事に當つて、勞れるといふを知らない、又頭痛一つしたことのない程完全なる健康を得たのは、畢竟我が職業と四圍の境遇とに相當する丈の極めて少量の食事と、純潔なる水と、新鮮なる空氣と、戸外運動の適宜とに歸する他はありませぬ。

朝は空氣を充分に室内に入れます、夜眠る時でも、餘り嚴く戸障子を密閉致しませず、又室内では輕くて薄い衣物を着て居ます、さうして絨氈など敷詰めたり、種々の修飾品を備え付けたりすることは、一切致しませんで、成る丈け塵埃の集まる物は、一つも室内に置ぬことにしてあります。

早朝臥床から起きますと、先づ冷水浴を致します、次に一杯の冷水を飲みます、それから力を籠めてする仕事は必ず朝の中に爲て了います。

氷水や、氷で冷やした食物などは、一切飲食致しません。

食物は凡て喰べたいと思ふもので衞生上差支へのないものを用ゐます、どんな滋養分を含むだものでも、喰べたいと思ふ程、好嗜的誘引のないものは、決して身體に利益のあるものではございません、旨く料理が出來て、如何にもお適味かりさうな食物は、身體に利益がありますが、さりとて勿論喰べ過ぎてはなりません、こゝが尤も注意を要するところでございます。

一日の働らきを終りまして、スープや、肉や、野菜や、其他の澱粉質のものを食べますのは、旨くて、愉快で、さうして健康上莫大の利益がございますから、私しはそれを樂みにして、一日も怠りませぬ。

（をはり）

家庭科學 菊

倭翁

◎栽培の由來◎稱呼◎種類◎嗜好◎菊湯◎本場

曾て夏の家庭植物として牽牛花を擧げましたが、秋の家庭植物としては菊花を推さねばなりませぬ、さて牽牛花の夏の曉花に珍しい其精力の衰へないで毎年永が〳〵と人目を喜ばせますが、殊に菊花は秋から初冬へかけて花を開き香を放ち、たゞにその花季の永いばかりでなく、光經の

　打ちはらひをる袖寒く匂ひけり
　　霜のまがきにのこる白菊

と詠じた如く、百花既に凋みはてた後にもなほ霜にも負げで晩節を傲れるさまは、流石古來君子國の名花と稱へられる丈けありまして如何にも尙むべき潔いところがあります。

そも菊は單瓣花類の菊科に屬する一種の植物でありますが、此の菊科と申せば廣く世界の各所に分布して居りますけれども、優美で高潔な我が國の菊花の如きはもと東洋の特色でありまして歐米諸國には絶へてなかつたものであります、然るに近年東洋より輸入するやうになりましてから科學を應用せる園藝術によつて盛に栽培せられ、今日では我が國に劣らない見事な菊花を作り出す勢であります。

菊花栽培の由來

現今我が國の學者間に知れて居る我が國產出の菊花に屬する種類は約三十種あまりありますがその內で現今栽培されて居るものに最もよく似たもので山野に自生せる菊、取も直さずこれから改良したらしいと推定せられる種類は四國の野地菊、美濃の養老菊山城の嵯峨菊、與州の小濱菊を始め龍腦菊、岩菊、宇品菊、油菊などで、此等は何れも菊の元種として認められて居るのであります、百菊譜に『城州東山有㆓寺㆒、曰㆓高臺㆒、寺後有㆓菊溪㆒、其流曰㆓菊水㆒、近傍多㆓甘菊㆒云々』とある所を見ると、古へ京都附近には甘菊があつてその後同地方の愛菊家の手に

て改良せられたものも必ずあらふと思はれます。

隨て菊は何れの時代から栽培し賞翫し始めたかと申すに、素より明確に知ることは出來ませぬが、萬葉集には菊に係ることは少しも見當り申しませぬに係らず、古今集になつて澤山此花に關する歌が出て居ります所から考へますと、先づ奈良朝から平安朝に移つた時代かと思はれます、即ち今より一千年以前に始まつたものでありませう、延暦、寛平、延喜の時代には、天皇より群臣に菊を賞する爲に宴を賜はつた事が歴史にも出て居ります、その頃は多く上流社會で菊合が盛に行はれましたが、その菊花を持寄つて優劣を闘せた計りでなく種々の催しもあつて、殊に和歌などは盛に詠だものである。

ぬれてほす山路の菊の露のまに
いつか千とせを我はへにけん　（素性法師）

秋風の吹上げに立てる白菊は
花かあらぬか浪のよするか　（菅原道眞）

うゑし時花まちどうにありし菊
うつろふ秋にあはんとや見し　（大江千里）

うゑし上は秋なき時や咲ざらん
花こそちらめねさへ枯れめや　（在原業平）

秋の菊匂ふかぎりはかざしてん
花よりさきとしらぬわが身を　（紀貫之）

その後觀菊の式は時世の變遷に伴ひて自から隆替を免れませんでしたが、兎も角連綿として絶ゆる時なく、今日では毎年赤阪離宮で觀菊の御宴あらせらるる盛事を拜するのであります。

又陰暦九月九日の重陽節に菊を賞することは支那が始りで、我が國でこの重陽節を行ふやうになりましたは遣唐使などが歸朝してからの樣に思はれます、又九月の節句に菊の花の酒を飲む、

をる人は命をのぶと聞なへは
散ること知らぬ菊の花かな　（道　濟）

この草花を服すれば老衰することがないと云ひ傳へられて居ります、斯る風習はみな支那より輸入され

たものであります。

次に殘菊の宴と云ふは十月五日に催されたものであります、殘菊とは古來陰暦の九月節句以後の菊を指して云つたもので、菅家文集にも『黄華之過二重陽一世俗謂二之殘菊一』と説明されてあります。

今日は上は皇室にあつて年々觀菊御宴の御催しあり下庶人も益々盛んに栽培するやうになつて何時しか菊の鬪花會などを開いてその優劣を競ふ風を生じました、民間では大隈伯、曾根男は有名な栽培家であつて、殊に曾根男の如きは先年秋賞會と云ふものを拵へて奬勵して居られますこれが爲には年々千金をなげうたるゝそうであります。

稱呼

菊の和名に附ては倭名鈔に『菊はカラヨモギ一にカハラオハギ俗には本音の如くに呼ぶ』とあり、又東雅に『歌の言葉などには皆菊と讀みたれば古言の俗なる後の世の雅言となれる云々』とあります、今異名の二三を擧れば、

百夜草　よはひ草　まさり草
金草　おきな草　おとめ草
こり草　くゝり花　秋しくの花
秋の花　いなて草

菊の花頭は數多の小花が集合して出來たものでありまして、其形が多數の花冠を括つたものに似て居ますからく゛ゝりはな゛と申すのだそうで、天皇は我が日本全國を總括し給ひてくゝりしめらるゝと云ふに因みて、菊花を我が皇室の御紋章と定められましたのだと承りました。

漢名も澤山ありますが、その二三は

金英　黄花　治牆　日精　節華
女節　更生　金蕋　陰成　女華
傅公延年

英語では『クリサンシマム』と呼びます。

種類

菊に夏菊、秋菊、寒菊の種類がありますが、單に菊と云へば秋菊のことであります、この秋菊に大菊、

中菊、細菊の別があります、又栽培の方法に依て一輪咲、或は大輪咲と唱へて一株に一莖を限つて育て上げ大な花を咲かせるものがあります、又一株に十數輪以上數十輪まで咲かせるものもあれば、千輪咲とて一莖數百輪乃至千輪を咲かせるものもあります

さて最初野生の時代にはその種類も僅かであつたに相違ありませんが、多年培養せられた結果と、人工によりいろ／＼の變化を起させた爲めに、今日詳しく區分いたしますと數百千種に上る程であります、例へば筒咲と稱へるのは又貝咲とも申して蕊が變成して瓣となり球の形をなしたものであります、又丁字咲と名けるものは雌雄蕊を包圍せる小さい瓣がよく發育したものを指したのであります、其他葉には縮細葉あり、斑入葉ありて、逐一此等の種別を枚擧することは出來ませぬ。

併し菊の花と云ふものはドンな菊でも、菊は菊に相違ありませぬが、菊作りの方で云ふと平瓣、管瓣、匙瓣とこの三つが備つて居なければ本當の菊と云はないので御座ります、平瓣と云ふは普通平たくなつたので、丸くなつて居るのは管瓣これは嵯峨菊に多い、匙瓣と云ふは瓣の本は丸くつて先が少し開いて匙のやうになつて居るのであります、なぜ此三瓣を尊く云ふたものかと申せば菊が段々狂つて來ると、平瓣はくるまつて來る之を抱へると云ひますが匙瓣はその抱へる瓣を持上げて居ります、其中から管瓣は簪の樣に突立つて居るこれが三瓣の所作であります、所で今日は此三瓣を一瓣で働いて居るものも出來たそうであります。

菊は上述の如く我國に數多の種類あるのみならず、歐米にも近年盛に培養し實生で研究するところから從て變りもの丶の珍品も少くありませぬそうで內外共にか丶る勢でありますから年毎に變化して行きますので、自然大昔からの菊は極少なくなりまして大御所樣時代から殘て居るものは鹿子菊位な所であります。

さて菊に對する嗜好のさまは如何と云ふに、この花の本家本元なる東洋殊に我が國では古から主として純白色の花を賞賛したのであります、歌に

めもかれず見つゝ暮さん白菊の
花より先の花しなければ　（伊勢大輔）

久かたの雲の上にて見る菊は
あまつ星とぞあやまたれける　（敏行朝臣）

又支那ではその黄色を貴重する國柄だけに菊とさへ云へば黄色の花であるやうになつて居ります、史正忠が菊譜の序は「菊草屬也以レ黄爲レ正」と云ひ、又范至能が後序にも『金譜先レ黄而後レ白』と述べてあります。

又歐米人は一般に唯濃色大輪のコッテリした花を賞翫して白色や黄色をば一向喜びませぬ。

我が國も近年に至つては色澤も形狀も共に優美と云ふより、寧ろ珍奇と稱すべきものを愛翫する傾向が生じまして關東では狂咲のやうな一種の奇品を喜び縮緬葉や斑入葉を賞美して色彩には餘り重きを置かなくなりました、然るに關西は之に反して重に純白な花で天然の形狀に遠ざからない筒咲や、丸咲などを貴ぶ風があります。

我が國の菊花栽培術の精巧なるは千餘年來の經驗と熟練とを積だ結果でありますが、驚くべきは科學の進歩せる歐米人であります、先きに我が國より輸入した菊種に改良を加へ、却て米國あたりより我が國へ珍らしい種類を舶來するやうになりました、その舶來種と云ふべき一二を次に、

ミスセスレー　（淡紅色大輪、摑毬咲、千重、平瓣）

パーリー、ヰドナー（濃厚色大輪、平瓣、摑咲、千重）

ライオン（淡紫色大輪、千重、熨斗瓣、盛上熨斗咲）

又我が國より輸出の歐米向の種類は、

共白髪　白色大輪、平瓣中太、直徑八寸以上

六歌選　紅赤色大輪、摑咲、直徑八寸以上

雪の峯　純白色大輪、毬咲

螢火　紅色大輪、廣瓣抱咲

武藏野　深紅色大輪、扁瓣抱咲、直徑七寸以上

千代の光　東紅色大輪、毬形筒咲、直徑八寸以上
璉璃の波　純白色大輪、外葩曲垂
雲井　白色大輪、直葩綠色、外葩曲垂、半筒咲
雷電　黃色大輪、内抱咲、外垂咲、長扁葩直徑八寸以上
薄櫻　東紅色大輪、簿筒半筒葩、直徑八寸以上
薄化粧　薄紅色大輪、大扁葩、直徑八九寸
若紫　淡紅色大輪、抱咲、直徑八寸内外
春の霜　純白色中輪、扁平葩、毬形、亂咲
富士の白雪　純白色大輪、葩先旋曲、葩抱咲、毬形
八幡山　黃色大輪、抱咲、直徑九寸以上
源氏丸　紅色大輪、抱咲、直徑八寸以上
變の名所　内深紅色外薄紅色大輪、半筒葩、直徑一尺内外

菊湯

菊の花葉を稱觀する外に菊花の酒を飮むとは前にも述べましたが、又此花を鹽漬として貯へ茶の代りに用ゐて中々風味のあるものであります、之を拵らへるには先づ黃色の菊花で成るべく小さいものを十分に開かないうちに摘み取り、清水でよく洗つて菊一升、食鹽二合五勺、梅酢一合の割合で瓶に漬け込み、厭石をして三四日も立つてから別の瓶へ移し花を並べて一重毎に茗荷或は笹の葉を布き、上部には幾重にも布きたるのち、小さい石を五六位も其上に載せて輕く厭して置くのであります、斯うして貯へ置かば翌年菊花の季節まで色も香も變ることがありませぬ、依て來客のある都度それを取出して櫻湯と同じやうに熱湯の中に投じてすゝめるのであります。

又葉や花は揚物や浸物にして食用に供せらるゝは皆よく知る所でありますが、さてその形や色が同じでも菊と薏とを混同してはなりませぬ、菊は其花が喰るゝ位のものでありますから虫も好きますが、薏は大層苦いものですから虫も附きませぬ、それで

意は多く黄色で紫とか赤とか云ふ色は少ふござります、菊湯を拵へなさる素人方には一寸心得おかるゝがよろしい。

菊の本場

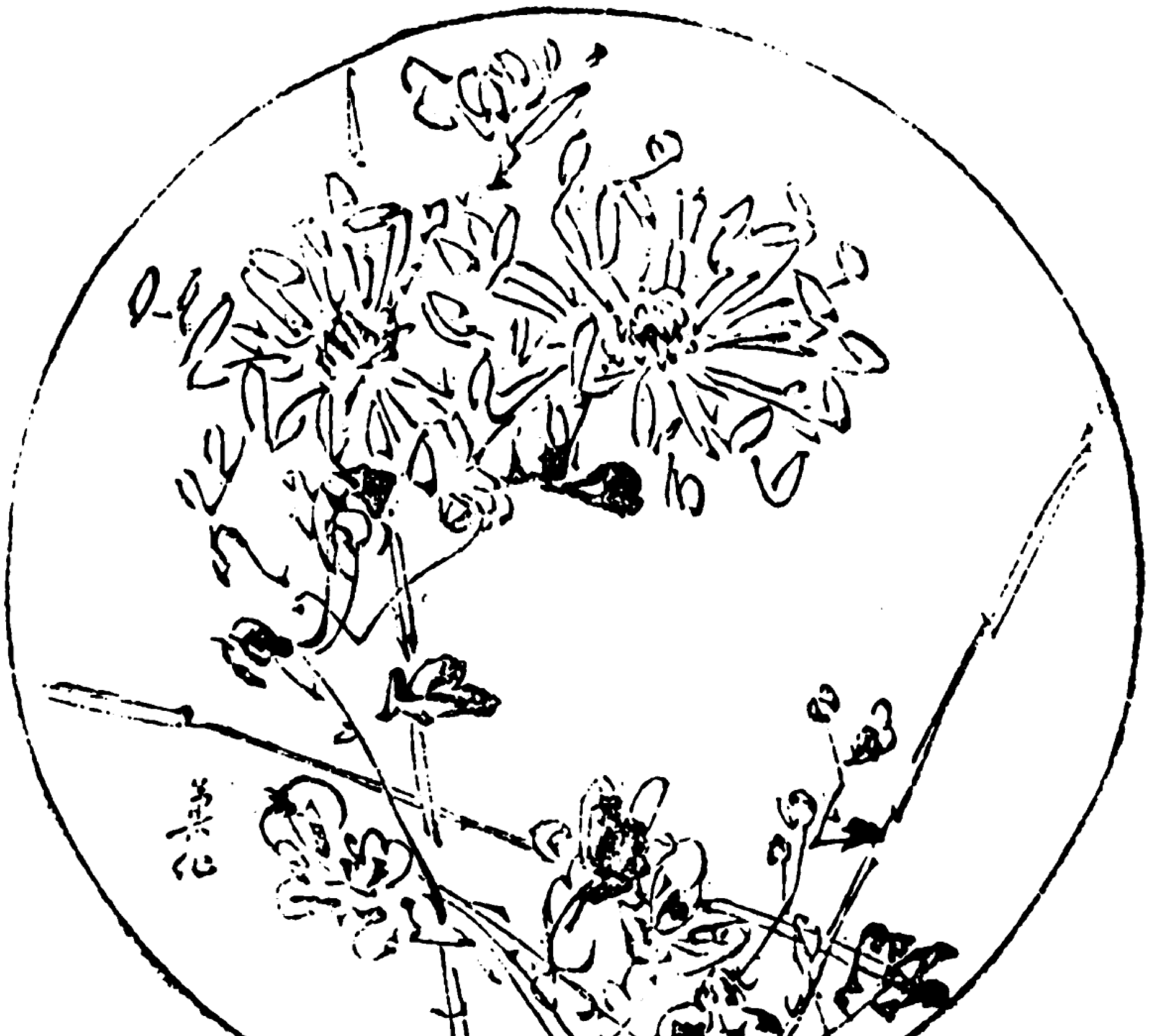
世界の本場は我が國で、東京の本場は團子坂であります、東京で菊を盛に栽培し又細工物を作り始めましたのは、今を去る殆んど百年以前、文化九年の事で、その頃から巣鴨方面の農家が菊の栽培や手入に熱心して頗る見事なものを咲かせるやうになりました、故に秋季には毎年都下の貴賤男女の別なく見物に出掛けましたから、其土地が大に繁昌して殊に益々菊の仕立方に注意いたしましたと同時に、染井や駒込の槖駝師が競ふて細工物に工夫を凝らしましたから、愈々好評を博し、何時となく農家の軒端に酒肴の行燈をかけ、屋外に床几の二つ三つも並べる風が起つて、遂に土地の名物となつたのであります、斯ふいふ有様で巣鴨の既菊は年々盛になつて參りましたが、細工物は何時となく衰退して、文化の初年には已に全く其跡を絶つたのである。

降て弘化二年今より六十年前の秋に細工物の名を造菊と改め、多少新機軸を出だして稍興行物の風に拵へ番附を江戸市中の各所へ配付いたしました、これが現今造菊の起原であります、その番附は團子坂、駒込籔下、小石川原町の組合で、

太神樂　白狐　汐干　月時鳥
具足櫃　富士　七夕　月兎
生花　惠比壽　二股大根　桝三寶

以上十二ケ月見立の外に、番外として兜や羽子に凧などがありましたそうです、此等の催しが大に人氣に投じて案外に繁昌したので、翌年には谷中、根津染井、駒込、白山などにも陸續類似のものが出來て其數が百ケ所内外に及び遂には寺院や神社の境内にまで之を造つて、僧侶や神官が何程かの茶代を目的に觀客を招くやうになりました、併し當時の造菊は決して現今のやうな大仕掛のものでなく、十二ケ月見立の外に、伊呂波歌留多の譬喩などで、其拵へ方

至極造無作に出來て居たもので、其目的も單に評判を取て客足を引くに過ぎないのであつたから、別に木戸錢を受けるなどのこともなければ、客を呼込むやうなこともなかつたのであります、その目的と云はゞ鉢植の菊花を賣るのと、花園の中に床几を置いて新茶を出し芋田樂又は燒團子を商ふ位であつて、之が爲に人を雇ふこともなく一家のものが總がゝりで從事し、毎日幾許かの收入を得るを喜んで居た位でありました嘉永年間に小石川白山權現の大祭に氏子二十五ヶ町から造菊の山車を出して非常の喝采を博しましたが、此後享和の頃に至つて此催も中止となりて、此等の



造菊に從事したりし巣鴨、駒込、染井邊の植木師はいづれも造菊を廢して花壇の一方になりました、依つて其後造菊は團子坂の專有物となつて、遂に今日の盛况を見るやうになつたのであります。

さて團子坂では嘉永の頃から毎年江戸三芝居で大當りを取た狂言の造菊出すことゝし、人形もやゝ贅澤に傾いて來ましたけれど、未だ木戸錢を取る程でもなくて土產物として提灯に豆菊を植て賣つたり、或は茶代などの收入に多少の利得を見て居た位でありました。

然るに明治維新のゝちは諸事贅澤に走り、多額の金圓をかけて造物の華美を競ふやうになり、遂に純然

たる興行物に變じて木戸錢を取つて客を引くことになつて來たのであります。

さてその造術の費用は幾何程かゝるかと聞けば、作り付けの舞臺を建設した乃ち固定資本を除いて每年二三百圓を要するそうであつて、これに對して木戸錢の收入は大抵四五百圓をあげ得ると云ふことであります。

最もこの細工に用ゐる菊花は殆んど野菊の一種でありまして、彼の愛菊家の丹誠を凝して育てるやうな眞正の菊ではありませぬ、ゆゑに今日本場と申しても造術が主でありますから、菊として見るべきものを持つて居るは、團子坂を通じて僅々二三軒に過ぎない位であります。

俗事瑣談

△△△△△

顏に皺の寄らない樣にするのは、短氣の行を避け、癇癪を愼むが肝心です、短氣と云ひ癇積と云ふものは彫刻師の印刀の樣なもので、一遍でも使へば、生涯消す事の出來ない刀痕を殘すものである。

◦ ◦ ◦

視力を傷はないやうにするには、極く緻密な針仕事をせぬのがよいのです、目のつんだ蛛網細工なぞは第一愼むがよい、之んな眼に毒なものはありません

◦ ◦ ◦

身體を丈夫にするには、先づ朝寢坊を愼しみ、飮食の度を程よくして、斷然麥酒を飮ないやうにするのが必要である。

◦ ◦ ◦

顏の血色をよくするには、新鮮の野菜を食するに限る、菠薐、水芹、蕪菁、石刀柏、それに生菜の類なぞは、容色保存に極く適してをります。

◦ ◦ ◦

胃の消化力をよくするのには、食物を生噛にして丸飮にしないのが肝要です、過度な運動をした後で、大食するのも宜しくない食時に臨んで八釜しい談を

するのもよくない。

氣を輕く有うとするには、瑣餅に心を窮しめぬがよい心配を色に出すようになつては、天女の顔も艶を失ひ、加之に心の薄弱を顔に現はすやうになる、だから意志の鞏固なる人程どんな、苦艱に出會つても顔を顰めずに、思ひ通り成効するものである。

◎　◎　◎

腦を用ふ仕事にしろ又骨の折れる働作にしろ、兎も角、氣力をつゞけやうとするには、充分に睡眠するが宜しい、睡眠は結構なる補益劑として、青年の人程服用して、著るしい効驗をあらはすものである。

◎　◎　◎

貧血性の人は、鐵氣を含んだ食物を充分食べるのがよろしい、鷄卵、牛乳、獸肉、魚肉、鳥肉の如きは脂肪質もあり、鐵氣も含んで居るから、血の色をよくする効がある。

我が使ふ奴僕に言付て、同じ奴僕の過失を叱らしてはならず、又召使の過失を同じ召使共に談さぬのが家内安全の基である。

夫と子供　△△△△△

結婚して新に夫を持ち、初めて子持となつた婦人は面のあたり夫を先にするか、子供を先にするか、何れが吾が身の尤も親愛のものなるやの問題が、先づ差當り起るのである。

◎　◎　◎

子供を手堅き乳母に預けることの出來る婦人は、格別苦勞も少ないのであるがそれでも日毎〳〵に、起つてくる事を監督しなければならず、又乳母の事に付ても、萬事心得て居らなくてはならないが、子供が自分の手を離れて居るから、さう始終氣を張るにも及ばないのだ、子供の目が醒める時分、五時や六

時に起きなくてもよいし、寢て居やうと思へば、何時迄も寢て居られる、母と云ふ義務を忘れない以上は、偶には數時間子供を打捨て置て外出も出來る、だから夫に向つても、嫁に來た年の樣に、能く氣が付くし、愛情も格別變らない譯である。

◎　◎　●

新婦が、時によると子供の愛に牽かされて、夫を忘るゝを得ざる場合があるが、是は結局、其の身の處置の宜しくないからである、言はゞ一生涯の伴侶を撰擇しているのだから、よし夫に對する愛情が子供を育てる必要の爲に、凋落したと思ふ時があつても決して心配するには當らないのだ。

◎　◎　◎

だが、親身の乳母と言ふものは、殆んど少ないもので、少し位の金づくでは、中々雇い切れるものではない、手離せない子供の三四人も抱へて、乳母を雇ふ事が出來ないで、夫の腕一つで稼いだものを、繰廻はして行く女親の身になつたら、マーどーであらう？氣の毒にも夫は、妻の捧げる愛情などは受けやうとて受けられもせず、恍惚して居るか、さなくば戸外で氣の保養でもしなくばつゞくまい。

◎　●　◎

そんな有樣になつて來ると仕方なくなる、そこで新婦たるものは、この問題を解決するに、何か良い方法も探さずばならない、勿論子供の事を忘れてはならず、手馴ない下女共に任して了ふてもならぬが、さりとて、女中一人しかなければ詮方ないから、場合によつては半時間位、女中に委せて手離す事も出來なくなるのである。

◎　●　●

晝食後の休息

晝食後の休息と言ふ事に就て、一寸した事を言へば晝食後はなんでも休息するに限る、能く〳〵の事でなければ、何事にも手を出さぬがよい、子供と一緒になつて居ると、子供は無中に遊んで居るから、休息しないで騷ぎ散らかす、なんでもこんな時には、

子供の神經を興奮させる樣なものは一切持せないで搖籠なり、吊床へなり、子供を寢かす算段をして、自分も幾分か眠る樣にするがよいのだ、よし眠られぬまでも、兎に角、目を瞑つて居ればよい、と言ふと或る婦人なぞは、そりや實際出來ない相談だなぞと言はれるだろうが、ある醫師の妻君は、物心ついて居る。五人の子供を抱へて、夜食が濟むと、夫々子供の始末をつけて、規則正しく睡眠すると言ふことで、それに、一度や二度、病家から呼びに來られて、電話の應對もするだらふに、用を濟して室へ戾つて來て、じつと眼をつぶつて、屈托なしに眠ると言ふ談がある。

先づ此の通りに、行つて見るがよい、身體の疲勞を補ふには睡眠に勝る良藥はない、そうなると夫が歸つて來ても、子供は眠て居る、室は片付いて居る、自分の氣持も何となく淸々して來るから、書物を讀んでも、又夫と差向つて談をしても面白くなつて來る。

情き甘い、子供を痴愛する母

子供に無中になつて、夫には全然構はない、謂ゆる馬鹿可愛の母は、次なる言葉を能く服膺して、身たしなみとするがよい、母と言ふものは、赤兒の時許りでなく、其子が生長して將來學生となつた時でも又一歩進んで矢張母である、一人前の男女となつても、母は母に相違ないので、世間には往々子供を可愛がり過ぎて、其結果母に必用なる本分を忘れて仕舞うものがある、簡短に言へば務め以外に力を盡しきつた、氣の毒な婦人がある、只管子供を看護するがために、讀書を廢し、訪問を止め、音樂の道を遠けて、一念に子供の上に許り心を配り、虎の子の樣に大切がつて居るが、いざ其の子供が生長すると、母が其れ程してくれた事を全然思はないものがある。

母が子供を愛くしむ事にのみ注意して居れば、人の交際も自然薄くなるから、尋ねて來る人もなければ家庭は平常活氣がないし、子供の時分に來る人もなければ、成人してからも、誰一人心配して呉れる者もないので、結句不幸に世を喞つ樣な、憂目を見ることがある。

若き子福者

（小兒に與ふる懲罰）

△△△△△

博士トーラー氏曰く
葡萄を栽る人の腕がよくなければ、良き枝も冗枝と思ひ違へて鋏を入れ、却つて葡萄の木を傷めるものである。

子供を叱るにも上手下手がある、こうすれば叱られるものだと言ふ事を、噛で含めて、厳しくなく甘やかさない樣に叱らなければならない、甘へさせない限りは、平常寛裕と言ふ事を心に懸け、其叱る譯をよく言ひ聞せて叱らなければならない、心にもない罰を與へて强迫がましくせぬがよいのだ、惡い行をすれば叱られるのが當然だと言ふ事を思はせさへすればよいので、强迫も度々やると馴て來て自然効験が薄くなるものである。

。　。　。

靴を泥だらけにしたり、衣物を鈎裂したりするなぞは、本當の叱るべき罪ではない、小供は小供らしい事をするものだと思へば、別に氣に止めるにも及ぶまい、十人の子供を平均したつて、身の行が完全無缺で天人の樣なものはありやしない、よしそうしようと思つたつて到底無駄な事である、何事につけても自分が子供の時代を考へて見て、其の時分はどれ程叱られたもんだかと思つたら、我慢も出來る筈である。

。　。　。

左樣思つたら、實際叱つたり懲らしたりせぬがよいこんな大切な事を無我無中で居て、懸念しないのは

甚だ宜しくない事で、氣をつかうよりか、道理の上から履行した方がましだ、子供が辯解をする具合に耳を留めるのが第一であつて、其の辯解の仕方が善ければ褒めてやるし虚僞であつたら言聞せてやる斯樣〳〵であるから、汝が惡いと言ふ事を、柔和に明白と聞かせてやる、善い事をしたり言つたりしたときは充分に褒めてやり、折々は若い者對遇にしてやれば、必つと耳を澄してよく其の言詞を聞くものである、親は虚僞を言はない誠實であると言ふ事を思はすれば、子供も其れに習つて虚僞を吐くまいと勤めるのは



定つて居る。

◦　◦　◦

單に子供の爲めに、妨害となるからとて、何から何迄禁制して仕舞うのはよくない、只子供を窘しめて却つて反抗の念を起させる基となるのだ、禁ずるなら禁ずる譯をよく言ひ聞かせてやらなけりやならぬことだ、通例子供がすることなどは一寸した考から起るものであつて、何故してはいけないなど〻言ふ考はないのだ

◦　◦　◦

子供を叱るには決然して、決して懲罰を中途で止めてはいけないのだ、叱りかけ

て止めたりすると、それこそ將來親の弱身となつて子供に付込れる種を作るものである、何でも懲罰をするなら中途で止さぬ方がよい、懲罰をして終つたら勘辨されるのだと、子供に思はせるのと又た親の方でも再びそれを念頭に置かぬがよい。

◇　◇　◇

食物にかゝることも懲罰してはいけない、これは誠に益もない事である、言ふ事を聞かなけりや早く寢かして仕舞ふがよいので、親が夕食の分量など彼れ是言ふのは、畢竟、食物を吝むと云ふ樣な賤しい觀念を起させるに過ぎないのである。

◇　◇　◇

みだりに子供を叱り散らすのは、子供の品性を無茶苦茶に傷つけるのである、他人の居る前で叱るなどは猶更の事で、子供の身に害がある許りでなく、傍の人にも迷惑を及すものである。

◇　◇　◇

子供の非を矯め直さうと思ふなら、子供に對してよく母たる行狀を愼まなければならぬ、惡い事をした爲に、母の愛情が余程薄くなつて來たと云ふ事を、子供に思はせさへすれば、子供は如何かして元の通りにしたひと、氣を揉むでくる、畢竟かゝる牽引的の關係から、子供の意志を矯正させるのは、自意發動と言ふ懲罰の最も上策である、だが臨機の處置をして、規則正しくやらなけりやならぬ、一時は他所〳〵しく直ぐ又馴々しくする樣ではいけない、子供が自分の惡いのを悟り、改心の情が出て來たら、極く手短に將來を戒めてやつて、直樣元の通り可愛がつてやるのがよい。

◇　◇　◇

笞刑はよく〳〵の場合でなければ、行つてはならぬのである、子供を笞つと言ふのは、實に賤しい仕方である、此の方法が充分の効を奏さないと、却て親の品性を落し子供の品格を下げる樣になるのである。

日常の心得

▲炭の心得　炭火のはねるのは、見苦しいもので衣服等を損ずるヿが往々あり、客の前に出したる折などは殊に失禮なヿがある、是は畢竟炭の乾き過ぎた所爲であるから、炭は凡て豫じめ一度水をかけおきて、後に用ゐる方がよい、俵のまゝで雨に曝らしておいてもよい、塵も立たず、火の持もよいものです、されど、まのわたり、炭火のはねるのを止めやうと思つたならば、食鹽を一摘其中に投ずるのです。

▲凍瘡又は皹の療法　ドクトル、ペルッの法によれば、苛性加里〇・五、グリスリン二〇〇、アルコホル二〇〇、水六〇〇を合せおき、まづ患部を温湯で洗ひ、後にそを毎日二回ほど塗れば四五日位で全治します。ペルッ水とはこれのことです。

▲ランプの危害を防ぐ法　ランプに用ゐる油は、火止め石油といふものも出來て、大概危害も免かれらるゝがさもない、石油を用ゐてゐる時には、其油壷へ半分ばかり鹽を入れ、石油を注ぎおけば、火の輝も増し、又誤つてランプを取落し、油壷の破るゝことあつても、火の油に移る等の虞がない且つ油の消耗をも少なくするものです。

▲味噌の變味したるを直す法　味噌の風味損じたのを直すには、生松の樹を取り來りて、その皮を剝ぎ、二つになり三つになり之を割りて、それを味噌桶の所々へ突き立てゝ、七八日ほどおくのです。さすれば必ず風味がよくなります。

▲冷飯を炊立の如くする法　先づ火を焚きて釜を暖め冷飯をいれ、そして釜のはたの方へ水をうち、蓋をして暫くおくのです。さすれば、殆んど炊立のと同じやうになります。

▲紙に血の付きたるを落す法　紙に血の付いたのを落すには、生姜を薄く切りて、血のついた所におき、度々これを取り換へるのです。かくすれば、血は何時となく消えるものであります。

▲染歯を即座に白歯にする法　笹の葉を焼き黒くして、まだ灰とならぬのを指の腹につけて、磨けば歯黒忽ち落ちて白歯となります。

▲糊にて張りたる物を鼠に喰さゞる法　糊の中に蒟蒻玉を少し加へて、張れば鼠が喰はぬものです。

▲香の物を美しく黄色に漬ける法　香の物をよき黄色に漬けるには、樽の中程と、上の方とに蕎麦の莖を並べて漬けるのです。また粟糠を入れても黄色になります。

▲鹽魚の鹽氣を去る法　鹽魚を木槿の葉と一緒に水に浸し、半日ほども浸けば、鹽氣は大概なくなります。また藁で包んで一夜土中に埋めておけば、全く鹽氣は抜けて丁度生身のやうになります。

▲鷄卵の良否を鑑識する法　鷄卵の良否を鑑識けるには普通明るき方に向ひ透かし見て、透き通るのを良とし、透らざるを否としてゐるが、又こゝに水の中に入れて見分ける法がある、それは其頭が下の方へ向ふものは新しいのです、又新しいのは、疊の上にて横に轉がし、直に位置を換へて縦に轉ぶものです、けれども惡しきものは横に轉ぶものと思つても間違ないやうです。

▲庖丁刀の腥きを去る法　庖刀の腥きのを去るには生姜か茗荷の葉で庖刀の腹を擦るのです。

▲鹿角を軟かにして細工する法　鹿の角を細工に使ふには、是非とも軟かにせねばならぬ。これは鰡の骨にても肉にても少し入れて煮るのです。又酢か曹達を入れても軟かになります。

▲雨障子に油を用ゐざる法　大根又は蕪菁の絞汁を用ゐて紙に引く時は、色も付かないで、雨水を防ぐものです。又蠟を引くときは、三四年も損じないけれども、その引きたる痕跡があるから、所によつては用ゐ難いです。

▲革類の垢を洗ひ落す法　革類の垢つきたるを洗ふには、糯糠で揉み洗ひ、糠を去らないで乾すのです。また水などかゝりて硬くなりたる時は、酒を少し吹きかけ、疊の下に敷きつけ、乾きたる時に取

り出して、よく揉みつけるのです。

▲韮葱の類を食して口中臭からぬ法　韮葱などを食して口中の臭き時は、紙をかむか、又は砂糖を舐めても臭氣が去るものです。

▲小鮒の鱗をいかほどにても一度に取る法　小鮒を如何程にても擂鉢へ入れ、中へ笹の葉を入れて、ぐる〳〵と廻せば、わけもなく鱗が取れます。

▲雪中並に寒夜手足のこゞえぬ法　胡椒を二つに割り焙烙でよく煎り焦し、紙で以て氣の抜けないやうに包み、臍に當て丶居るのです、さすれば不思議に寒さを覺えないものです、又唐辛などを靴の先へ入れておけば、餘り冷氣を感じないものであります

▲蒔繪道具の古びたるを洗ふ法　棉實殼の灰を水で溶き、それをす丶びたる道具に塗り、乾して後、絹布で丁寧に拭ひ取るのです。さすれば、繪も損せず、地にも疵つかないで、光澤もよくなります。道具屋などは皆この仕法でやつて居ります。

▲布に墨のつきたるを拭去る法　白布についた墨はなか〳〵抜き難い、若し墨のつきたる時、直に水に入れて洗ひす丶がば、次第に薄らぐけれども、日を經て一旦乾きたるものは、水で洗つたのみでは脱ちないものです、其時は墨のついた點に飯粒をすりつけ、又はかたき糊を塗り、指先で強く揉む時は、其墨は糊にうつりて布の方は薄らぎます。そして、其糊が黑くなれば、幾度となく取替へて、後水でよくよく洗ふのです。

▲膽汁のつきたるを脱す法　これはぬるま湯に浸しおきて石鹼で洗ふのです。

▲ペンキの衣服につきたるを脱す法　これは揮發油で洗へば直ぐに脱ちます。いま例へば羅紗地にペンキのつきたりとすれば、小さき刷毛に揮發油をつけて幾度となく擦する時は、ペンキは揮發油の爲めに溶けて自ら脱ちます。後に殘りたる揮發油のしみは百度の熱湯即ち滾れる湯に一二度投じて火に翳せば直に跡なく消えて了ひます。

▲酒の汚染をぬく法　酒の衣服にかゝりたる時は

直に灰を振りかけ、乾して後洗ふのです。けれども既に汚染となつてゐるものは、大豆又は豌豆の煮汁に四五時間も浸しおきてのち、清き水でよく洗ふのです。

▲醤油のかゝりたるをぬく法　醤油のかゝりたる時、少量ならば、口で以てよく吸ひ取るのです、併し多量にかゝりたる時は、左右より引張つて持つてゐて、其上から熱湯を注ぎかけるのです。

▲インキのつきたるを脱す法　酢または梅酢を水に滴らして洗ふのです。水一合に醋酸二三滴たらして洗ふ方が最もよい、但し醋酸は餘りに多量なる時は、布質を損ずる虞があるから、注意せねばならぬ。

▲血のつきたるを脱す法　血液のつきたるものは最初水に浸して、決して湯に入れてはならぬ。そして、其點に石鹼をよく塗りつけて洗ふのです。そして、やがて血の大概とれた時に、熱き石鹼湯で洗ひ落すのです。又水で洗ひ、唾液をつけて洗へばよく脱るといひます。

▲布につきたる鐵錆をとる法　白き衣服殊に夏物に鐵錆のつく時は、赤く腐りて性を失ひ破れ易くなるものです。故に白地を釘などにかけぬやうに注意せねばならぬ。今その銹を拔き取るには、小桶に熱湯を入れ、湯とすれ／＼に其布を擴げ、銹のつきたる點に硝石をおくのです。さすれば、硝石の溶けるのと一緒に、銹は直に脱ちます。さてその硝石は、たゞ普通に洗へば又脱ちるものであります。

▲烟草の脂のつきたるを拔く法　生味噌の稀薄なる汁にて洗ふのです。

▲黐のつきたるを脱る法　これは米糠をつけて、その大方をとり後ち、其所を大根卸の絞汁で洗ふのです。

▲石油のかゝりたるを脱る法　火の上へ翳して徐かに揮發せしめるのです。又絨緞の類であれば、熱灰を布片で包んだので、其上から叩くのです。

▲蠟のつきたるをとる法　熱灰を紙片に包み、蠟のつきたる所を壓すのです。灰の熱さめたらばさら

に取りかへるのです。

▲柿澁のつきたるをとる法　これは其點へ白砂糖を塗りつけて、よく〳〵揉み洗ふのです。

▲衣服の油汚染をぬく法　滑石末と牡蠣殼の粉にしたのを等分に混ぜ、汚染の裏表に厚くぬり、吸取紙又は奉書を上下におきて、火熨斗をあてるのです又羅紗につきたるものは、稀き炭酸曹達水で洗ふのです。

▲染物の鐵漿臭を除く法　これは竹の葉を煎じたる液にて洗ふのです。

▲胡瓜を苦味なく漬ける法　胡瓜の頭の方を少し切りて一時間程水に浸しおきて、後漬けるのです、又頭を切りて倒さにしておきても少しは苦味が去るものです。

▲葡萄酒が白布に附きたるを拔取る法　その附くや否や鹽を塗着けておくのです。さすれば汚斑とならぬと受合です。

▲小豆を早く煮る法　少量の砂糖を入れて煮ると

●完全なる育兒法

米國バッダースフィルド市長は目下一種の理想的育兒法を全市に行はしめつゝあるが其方法は凡ての產婦には赤兒の生後一ヶ年間は市より一ヶ月に一磅宛給與するものにして其代り此金錢は約束手形を以て仕拂はれ紙面には左の箴言を色刷にて印し證書形式を帶ぶるものゝ由なりと

一必ず母の乳を以て養ふべし其母の乳は天然自然の食物にして又最良のものたるべし之を守るものには日附後十二ヶ月間證書面の金額を拂ふことを約す

一生後三ヶ月母の乳にて養はれたる赤兒が一人死する時は他の方法にて養はれたる者は十五人死するの割合なるを知るべし

一萬々止を得ずして母自ら哺乳せしむる能はざる時は新らしき牛乳と水とを混入して飲ましむべし

一三時間毎に正確に乳を與ふべし

一常に赤兒を清潔ならしむべし

一溫湯に每日一回赤兒を浴せしむるを要す

一搖籃或は寢臺に赤兒を眠らしむべし

一寢臺は及ぶべくんば柳細工物を用ゆべし

一泣く時は注意すべし赤兒は第一飢たる時第二不快の時第三病氣の時より外は泣かぬものなり

一七歲に達する迄は牛乳の外パン或はスープ等を與ふべからず

一五月に至るまで赤兒を坐せしむべからず



職業と女子

前田越嶺

△はしがき

開明の世の中となつた爲か、狡猾な世の中となつた爲か俸給の尠いのと、使易し易いのとの、一擧兩得法よりして、種々の職業に男子を廢して女子を使用する風が、益す流行して來るやうになつた、お目出度い趨勢かなさけない趨勢か、女子教育に從事する人達は、今より早く之を研究して置かなければならぬ問題だらうと思ふ、手前は女子とは誠に緣の遠い職掌に居る者で、女子の事は一向に知らぬ木强漢であるが近頃泰西女子教育の著書を讀んで居るので、色々の思想が念頭に浮んで來る、今其の二三を記して世の女子教育家の一助としたいと思ふ。

△工女の境遇を嘆く

先づ第一に研究して見なければならぬ問題は、現在既に世の工場で澤山使役されて居る女子所謂工女問題である、佛國のミシユレー氏は

『工女と云ふ文字は不吉なる文字なり、けがらはしき文字なり鐵時代にあらざれば意味の分らぬ文字なり云々』

と曰つたが中々酷い言葉のやうに思はれる、矯激の言とでも謂ふべきであらう、乍然其實工女の境遇を嘆く一片の誠心より發した警句であると思はなければならぬ、何せ工女の境遇が斯く嘆くべきであるかと云ふに決して其の物質的境遇の惡きが爲ではない、工場は概して其の構造が堅牢である、其の室内は廣濶である、空氣の流通もよく光線の發射もよ

い、少くも工女自身の居宅に比べて云へば、實に極樂淨土である、男子の給料に比してこそ薄給なれ、從來家に居て、裁縫や仕立に從事して居る時分に比べて見ると立派なお役人樣である、然らば何くに其の嘆くべき理由があるかと云ふに、確に其の道義的狀態に在ると謂はねばならぬ。

バデール氏が言ふ如く『婦人一たび工女となるや最早婦人にあらず』で、其の家庭に居るときは閨門深く鎖して貞淑の生活を送るとまではゆかざるも、娘ならば母あり兄弟姉妹あり、妻ならば良人あり子供ありで、如何なる貧家でも兎に角和氣靄然たる春の裡に暮して居ることが出來るのであるが、偖其の家庭を出でゝ一たび工場に入るや、忽ち道德いかゞはしき朋輩と交り、妙な監督者の下に立ち、男子と始終接觸し、親を見ず、兄弟姉妹を見ず、良人を見ず子供を見ず、終日親子兄弟離散の苦を嘗めて居る譯である、故に其間家庭はなしである、母は其子に乳を與ふる能はず、子は我儘勝手に市世を彷徨して居る、黄昏になりて、母は終日の働きで疲れて歸り、子供は一日の惡戯で疲れて歸り、母子對面は嬉しきやうなものゝ、家には火なく食なく、何もなき寂寞荒涼の空家同然、而して母は食事をしたくもする氣力もなく、そこ〳〵に寢に就きて、一日の勞をやすめなければならぬ必要上より、家庭は立派に破壞して了うのである、アヽ是れ實に工女の境遇の嘆くべき譯である、貧の爲とは云へ、生れて工女となる、何の因果か。

乍併人間は食はずには生きて居られぬ、どうしても外に出でゝパンを求めなければならぬ、親たり良人たる者が充分養つてくれる資力がなきときは、纎弱なる女子と雖も、是非自活の道を立ねばならぬ、學力あらば女教員にでもなるべきも、工女となるほどの女は、そんな力はない、實を言へば、女教員とても、若し人の妻となり、母となつて居るものならば、出勤中家庭の義務を自ら竭すこと出來ぬ、家政は其の留守をかこち、子供は外來の乳母に托されて

居る、但だ工女に比して、道德腐敗の空氣中に生息して居らぬと云ふだけの話である、女教員、豈そんなに結構なものならんや。

△軍國の未亡人を嘆く

軍國多事の今日、將校兵士が出征して續々戰場の露と消ゆるに從つて、青春妙齡の未亡人が、益す多くなつてくる、中には其の良人が、金鵄勳章と、多大の金圓を遺すものがあるけれども、凡ての未亡人皆然りと云ふ譯にはいかぬ、國家は之を氣の毒に思ふけれども、萬人に萬事を供給し得る萬能者はない此の如き未亡人は如何すべきか、良人の名譽と遺金とを守つて永く貞獨の生涯を送らんと思はゞ、從來の所謂貞女、洵に殊勝な心事である、然し別に良人を撰んで再嫁したからとて、二十世紀の道德は敢て之を罪しない、貧しき未亡人の如きは止むを得ねど何か方法を立てなければならぬ、到底獨立自由の生活が立たぬときは、是非男の腕に縋らなければならぬ、而かも姿色の以て取るべき所、氣質の以て賞すべき所がなければ、女にすたりはないと云ふもの丶、賢口は確にわるい、それでも平時事なくして男澤山のときには、何處にか適當の良人を認むることを得べきも、男子缺乏の今日、之を認むること中々六箇敷い、若も今後戰爭が、永く繼續すべしとすれば、男子の缺乏益す甚しくなる譯である、昔彼の豪漢ナポレオンの時分に、佛蘭西に於て一時男子拂底して女子のみ遺つた邑があつたと云ふが、まさか我邦には此の如き村落を出すやうなとはなからうが年若き未亡人の善後策に困るやうなことは確に有り得べきと、假定して論じても、決して早計ではなからうと思ふ、今日再婚說の出る洵に故なきにあらずであるが、而も男子缺乏と姿色嫁資等の缺乏のため、其の再婚さへも出來得べからずとすれば、ア・余は此の如き未亡人の境遇を嘆かざるを得ない、皇軍連戰連勝の今日、一方に出征軍人の義勇奉公の志を稱すると同時に、他の一方には家庭生活難に迫れる未亡人

あるを忘れてはならぬ、此の未亡人も亦是れ家國の爲に橫暴なる露國と戰つた者と言ふて可なりである國家の爲に其の最愛なる良人を出すとは、何等の犧性ぞ思ふて、爰に臻れば、吾人は益す其の心事をあはれまなければならぬ。

尙他に嘆くべき境遇に立てる婦人女子一にして足らぬが、今は目下の急として兎に角今日の工女と軍國の未亡人との二種を擧げたのである。

△女子の職業問題

以上二種の女性の境遇を見れば、必ず之に適當の職業を授けて其が永久の生活を計つてやらなければなるまい、彼の遺族救助法の如きは、一時的、暫有的性質のものである、且遺族にして他に職業あらば永く救助を仰がんより、寧ろ其の職業に就かんことを望むべきや瞭である、是に於て乎、女子職業問題は是非とも之を解決しなければならぬ、然れども女子職業問題たるや、中々複雜して居る、一朝一夕に之を解決することは六箇敷い、況や之を工女と出征軍人の遺族とに當篏めて論ずるときは、其の範圍が尙一層せまくなる、余は勿論胸中別に成竹ある譯ではない、但だ泰西女子教育書を讀んだ結果を之に當篏めんとするのみである。

試に其の一斑を語れば、先づ女子の道德を保ち其の家庭的生活をも(成るべく)保つ職業をと云へば多くは家居的職業に限るものである、故に成るべきだけ、此種の職業をふやすやうに計らなければならぬ、彼の針仕事の如き其の分配極めて不公平にして其の賃錢極めて僅少なれども、婦人が家庭的義務を竭すと同時に、パンを求め生計を營むことを許す性質のものであるから、此種の仕事を成るべく盛にし器械的事業の幾分を節してまでも、半慈善的に戰死者の未亡人に授けたならば、今日の一時的救助法に優る萬々である、若し多少の經驗と學識あるものならば、舍監となり、家庭教師となり、遊藝の師匠となるも、其の操守と家庭的義務とを妨ぐるものでは

ない、女敎員になるほどの資格學力があらば、成るべく男子と接觸の危險なき女學校に勤むるはよろしき事であるが、此點に就き少しく當局者の注意を促さなければならぬ事がある、今日は免狀免狀とて免狀の世の中免狀あるものは、さほどできなくても採用され、免狀なきものは餘程できて居つても、採用にならない、是れは公平を缺いて居る處置である、官學の弊此まで及んで居るので、私立學校を繼兒視するが如きは、畢竟國民全般の利益を思はぬ所爲である然し戰死者の未亡人就中工女などには學問の土地に働くこと



が出來ぬとするときは、他の家居的職業の門戶を廣く女子に開いてやらなければならぬ、即ち郵便局、電話局、電信局、鐵道局、其外切手の賣捌き、煙草營業等の如き方面に於て、隨分女子の手に執らしむべき業務が、未だ盛んになつて居らない、尙他にも女子の執ることの出來る公共的事業と官業とは、種々あるけれども、多くは其の貞操を毀損して家庭的義務を妨ぐる性質のものである。

　產婆看護婦等は先づよしとするが、女醫は如何であらう此は隨分異論のある問題である、女の病を女が療治するは何の差支もなきことながら、男子の凡ての病を女子が療治すると云ふ事は、其の貞淑の德が之を許容するであらうか、又多感性、神經質の婦人が男子の難病、手術を要する病氣等を治療するに適當であらうか、決斷力の乏しき婦人は、生死の問題となる醫術に手を下すことが出來やうか、概して女子は醫士の命を奉じて働くには極めて適當である、故に看護婦の如き適任と謂はねばならぬ、が、已れ自ら醫者となつて人に命ずることは如何であらうか。

　良し假りに此等の事皆出來得べしとするも、既に母となれる女醫が、家庭に子供を遺して、夜となく晝となく病者の求めに應じて、往診することは如何であらうか、子供を敎育する事が、先づ母の第一の義務ではあるまいか女醫の如きは余之を泰西の「スール、ド、シャリテ」に於て望む、一般家庭の婦人に於ては望むべきでない。

　此の如く余は飽迄も女子の操守と家庭的義務を毀損せざる種類の職業に就て、之が擴張改善を主張するのであるが、物質的進步のみを重んずる世間は、女子の道德を踏破して、經濟便利の方法をのみ計つて居るのは嘆息の至りである。



家庭の一週間

村田朝子

▲日本の習慣

何事にも兎角不規則に流れ易いのは、悲いかな、我が國人の習慣で、殊に時間に關することに就いては尤も苟且にするのが、一般の弊習であつて、それが爲に冗に時を費やし、金を費やすことは、夥多しいことです。

分り切つた話でございますが、一年は五十二週間で一週間は七日で、一日は二十四時間とチャンと極つたものでありますから、一年といふ月日を有益なことに使用せんが爲には、一週間の日子の冗にならないやうに能く守らねばなりませぬ、一週間の日子の冗にならぬ爲には、一日の仕事を必ず其日に仕遂げなければならぬのは當然のことではございませんか。

然るに我が國人は、年の始めや、月の始めに、其の年中又は月中の仕事をホンの大體丈け、大摑みに極めて置くのが關の山で、仕事の順序とか、時間の利用とか云ふことには、一向深い注意を拂はないのが、先づ一般普通の有樣です。中には些とも仕事や時間などには頓着なく、唯其日〳〵を漫然送つて行く方が少なくありません。

▲西洋人の見たる日本の家庭

或西洋婦人が、日本の家庭を觀察して、批評した言を聞きますに「日本の家の内に入つて拜見しまするに、座敷や部屋の道具の置所も、大體のきまりは定まつて居るやうなものゝ、その排列方が至つて、亂雜で、科學的でないと申すと、少々四角張りますが兎に角物の用法に適つた秩序的のやり方ではないやうに窺ひます、殊に臺所の方などを拜見いたしますと、それは〳〵甚だ混雜した有樣で、たゞ種々の臺所道具が、ゴロ〳〵と並べてあるといふ位の有樣で

時間や經濟の點から見ますと、全で零なのです、無益の勞を省くとか、時間を節約するとかいふやうな理窟に適つた排列方は、我々西洋人の眼からは、どうしても日本の家庭に見出すことは出來ません、是れは一つには、家屋の構造にも據ることでございませうが、又一つには日本の婦人方は、幼少な時から、お正月が來るといつては、急にお正月の仕度をし、又た夏になる前には夏の用意をするといふ風に、たゞ其の時節々々に後れぬやうにとのみ心を用ゐるのが、習慣になつて、却つて手短かの一週間若くは一日といふことは疎そかになつた爲めではありますまいか、家事を區分して、一日に當て嵌め、一週に割當てゝ無駄に時間の費へないやうにして家を整理するのは、家政上の最も重要なことであるのに、日本の家庭で、此の重要なことの忘られておるのは、一大遺憾と思ひます』と、如何にも其通りです、室内の道具のシダラなく排列されてあるのも臺所道具のゴロ〳〵して居るのも、畢竟するに、一日、一週、若くは一年といふやうな時間の觀念が乏しいから起る弊習に相違ございますまい。

▲歐米に於ける一週間の利用

日本とは正反對で、歐米諸國では、時間を守るといふことは、最も重んぜられてあつて、假初にも怠慢に流るゝといふ風が少ないやうです、其日々々の仕事が、一般の家庭を通じて、殆んど一樣に極つて居ますので、家婦たる人々は、規則正しく其仕事をするのを其日一日の勤務と致しますから、秩序整然として、諸事混亂するの恐がありません、今試みに亞米利加合衆國の一部に行はれて居る習慣を記しますれば、

▲日曜日

は「洗濯日」といふことに極つてあつて、此日は手輕な食事をしたゝめて、家内一同の務めは、前週間の汚れ物を一切洗濯するのです、雨天であつても、乾

燥器械の備へ付けがありますから、臺所を片付けて自由に洗濯することが能るのです。

▲火曜日

は、「アイアンデイ」則ち火熨斗日とまをしまして、前日(月曜日)洗つて乾かして置いた物に火熨斗を掛けて、皺を伸し、立派に仕舞つて置けるやうにする日と極つて居ます。

▲水曜日

此日はこれぞといふ極つた仕事はありませぬが、家の内の一部を掃除したり、衣類の綻びを補うたり、又特に汚れる處とか、其他家々で極まつた所を掃除する日です。

▲木曜日

「ケークデイ」則ち菓子の日と稱へまして、次の木曜日までに、家内中の者が喰べる食パンや、又は客に

出す菓子、子供に與ゆるビスケットの類を製造する日で、樂しみもあるが、又中々忙がしいのでございます。

▲金曜日

家内中惣掛りで、各室殘らず大掃除をする日でございます、子供に至るまで、面白い歌を唱つて、其の調子に合せて、自分々々の受持の室々を、掃除するのでございますから、一週間の中で此日のやうな賑やかな日はございません。

▲土曜日

明日の日曜日の用意にとて、いろ〳〵の御馳走を製らへる日です、又冷肉だとか、菓物の漬物とか、ジヤムだとか一週の間貯へて置くべき物は、みな此日にこしらへて、氷で貯藏します。

▲日曜日

歐米各國に於ては、宗教上の規定として、日曜日を安息日と定め、之を嚴守するは、何方も能く承知のことでございますが、此日は安息日と名づけられた通り、家事は勿論、商買から一切の俗事に至るまですべて休むのでございます、さうして大概朝夕二度教會に參りまして、專ら精神上の修養を勉むるのでタトヒ基督信者でないものでも、一般の風習に隨つて、此日一日は我身の保養をする爲に、緩りと休息しないものはありませぬ。

▲其他の仕事

こんな風に六日働いては一日休むことに爲つて居ますので、其の一日を樂みに六日の間は能く勉めるので、又一方からいへば、一日の間、ゆるりと樂んで身心の保養をするので、六日の間、屈托なく仕事をして行けるのでございます、勿論此日は何々をする日と前に記したやうに、極つて居ましても、其他の事は一切せぬのではございません、書物を讀んだり裁縫をしたり人を訪問するなどのことは、充分な時間がわつて毎日差支へなく能るのでございます。

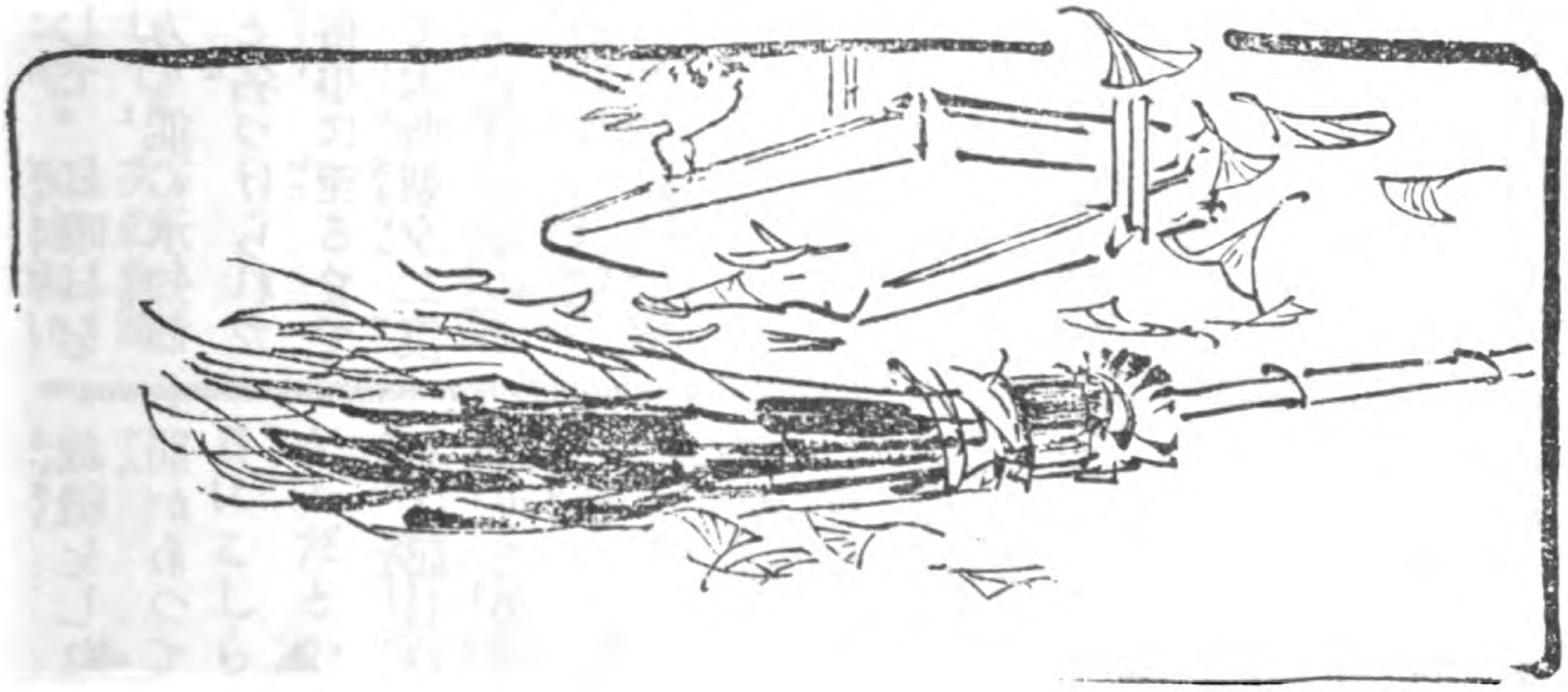
▲文明的生活

右に記したのは、米國に於ける習慣の一例で、處によりて多少の相違はございますが、一週間の割當ての極つてない處は決してありません、文明的生活と申しますと、何だか其詞がハイカラ的に聞えますが日々の務めを豫め定めて置て、成る可く無駄な時間を費やさず、無益な勞費を省いて進歩的家庭を作るのは、文明的婦人の務めで、それを實行するのは、則ち文明的生活といふべきではございませんか。

▲家庭の改良

日本にも善い習慣は幾らもあります、西洋に較べて決して劣らない點も少なくありませんが、たゞ時間とか數とかいふやうな算數的智識が、どうも乏しいのは、一大遺憾でございます、無論之れは家庭に於

てのみならず、日本人一般の欠點と思ひますが、殊に家庭に於て尤も甚しいやうです、この智識に乏しい爲に、自然境遇が、放惰に流るゝのでございます、明日は何んな仕事をしやうといふ考が、其の前夜でなくては分らぬやうでは、日々の仕事が完全に仕遂げらるゝ筈はございませぬ、或日は仕事が二三日分も溜つて、一日大勉強で働いても、仕切れないこともあるし、又それかと思へば、何事もせずに、一日を不規則に暮すといふ風は、決して良い習慣ではございません、どうか一週間の割當をきめて、家庭の改良を圖りたいものでございます。



泰西女權論の過去現在

こしのみね

◎女權論と云ふ文字は新らしいが其の事實は極めて古い、女權論と云ふと、如何にも生意氣な女を作るやうな議論に思はれるが必ずしも然と定まつた譯ではない、女權論に洗禮を授けると、立派なものが生れて來る。

◎現世紀の人々が何故女權論を唱導するに至つたか、現社會には果して婦人が不義に壓屈されて居るか、又女權の回復は果して目下の急務であるか、否、果して正當であるか等の問題になると、中々六

箇敷き議論になつて、一朝一夕では論じ盡されぬのであるから、余は今は唯女權論の性質と沿革とを說くに止まる積である。

◎女權論は女子にも男子と同等の權利を獲得せしむる主義であるが、此の定議の裡にも已に謬想が這入つて居る、何せなれば男女權利の同等と云ふことが迚も認められぬ。

◎議論の誤りは男女兩性の性質を究めざるに原因して居る、男女は相互に其の性質を異にして居ると共に、其の特點をも異にして居る、男は智識を以て女に優れ、女は心情を以て男に優れて居るは、爭ふ可からざる事實である、是れ實に男女の性と云ふて然る可きである、然るに同等を夢想するが如きは、其の性を轉覆せんとするのである、餘り恐ろしい革命ではあるまいか。

◎女は古來何れの國に於ても輕侮せられて居つたには相違なきも、凡ての女が皆輕侮せられたと云ふ譯でもなければ、如何なる時代に於ても尊敬せられた例はないと云ふ譯でもない、古來隨分と國家的事業に關與して、民衆の敬慕を受けた婦人がある、又西洋で武士時代には婦人が中々尊敬されたものである、婦人を尊重するのが、武士道の一つのやうに思はれて居つた。

◎婦人を奴隸視したのは、東洋の外に羅馬が一番酷かつた、不幸にして羅馬法が永く後世に傳はつた爲に、婦人も其間首を捧げること六箇敷かつたけれども、然し基督敎に於てマリアなる者が非常に崇敬せられたお蔭で、羅馬法は餘程の打擊を受けたのである、中世時代には羅馬法が退けられて『女は男の好伴侶』と云ふ理想が立派に通用したのである。

◎然るに革命が此の理想を又復轉覆して了ひ、女から凡ての權利を奪ひ取りて、凡ての義務を之に要求するやうになり、爾後其の意志は良人の意志に呑まれて了ひ、漸次に其の名を失ふと同時に、其身の自由をも失ひ、其の財產の自由をも失ひ、結婚しない時には、公共事業に加入する權利もなくなり、實際

に於て其の社會的生命は零となつて了つた。

◎處が之が反動として女權論が極端に奔るやうになり、女子の正當なる權利を回復するに止まれば宜かつたのに、一躍直に女子の絕對的自由を叫び、結婚も自由、生活も自由、離婚も亦自由と云ふやうになり、彼の基督教の金城鐵壁と頼める『神の繫ぎたる所、人是を釋く能はず』と云ふ神的結合主義を不倶戴天の敵と視做し、有ると有らゆる罵詈嘲笑を浴せかけたる結果、遂に或る社會に於ては『自由言論、自由行動』と云ふことが主義となつて了つたのである。

◎乍然斯る過激なる女權論は貞淑なる婦人の性質に適しないものである、餘程お轉婆式の女でなければ、之を歡迎することが出來ぬものである、故に心ある婦人は社會の婦人を輕視して居ると云ふことを知つて居りながらも、斯る極端なる女權論には迚も賛成が出來ぬものと諦め、寧ろ自分等の位地のひくゝ天職のわからぬを默忍して居るに如かずと思ふたので、中には隨分知名の婦人もあつた故、之が爲に女權論の發展は少くも五十年位は後れたのである。

◎然しながら法律の過酷偏重なると男子の利己的なるとにより、婦人輕侮の風習は中々容易に消え失せる容子もなく、二十世紀の今日に至るも、婦人は依然家庭的生活のみに限られて、未だ社交的生活に入る見込もなき故、女權論は又復た勢を高みて來るやうになつたのである。

◎是に於て乎女權論者として有名なる某婦人は憤然立つて社會に呼號して曰く、

『家庭的生活にのみ限れる婦人時代は旣に去れり社會的生活に入る可き婦人時代は將に曙光を放たんとす、從來知識界に於ては男子の反映たるに過ぎず、家庭に於ても一種の劣等物と視做され、永久隸屬的生活にのみ壓屈されたる婦人も今や己も亦一個の自由物なるを覺識するに至ると同時に初て玆に其の社會的天職、責任、勢力等の在ることを自覺するに及びぬ、此の勢力や今迄壓迫せ

られたるだけそれだけ社交的戰場に於て大發展を示すに至らんとす云々』

◎ア、是れ實に泰西女權論の過去現在である、今余は、之が是非を論ずるの意はない、が今迄の如く女子を全く閨門に閉込めて置いて、教會堂に參詣に往くより外には餘り外出をも許さぬと云ふやうにいたし、女子と云へば子を産み子を育てるの外他に藝能のなきものゝやうに視做すは、今の世に於て誰の眼にも酷と思はれるのであるから、或程度までは女權を擴張し、或事業に於て女子の天職を認むるのは決して過當の事ではなからうと思ふ。

◎今茲に數者の例を揭げて申せば、女子と雖確に生活の權利あるものである、今迄は社會萬般の事業を大抵皆男子が獨占すると云ふやうな有樣で、女子をして自活の道を立る餘地をも與へなかつたのである、成程生存競爭と出たならば、女子は到底男子と頡頏すると出來ぬものであるけれども然し頡頏が出來ぬからとて凡ての領分を男子が獨占して了ふと云ふ理由はない筈である、女子とても何かを爲して活きる權利あるに相違ない、飽迄も男子の奴隷となつて暮さなければならぬと云ふ道理はない筈である。

◎次に女子と雖、天より享け得た知識を磨く權利がある、是に於て乎學問をなす必要が出て來る、又其の學問は必ずしも良妻賢母たる目的に歸せしめなければならぬと云ふ譯もない、單に學問を以て一種の樂となさんが爲にしても、又は學問を以て世に立たんが爲にしても、或は又學問して女教員の資格を取らんが爲にしても一向差支のないことである、世人動もすれば女子にして學問すれば、生意氣になる、お轉婆になると云ふので、女子の學問を嘲笑非議するものあるけれども、然し學問が惡いのではない、其の學問の濫用が惡いのである、學問の濫用は女子に於てのみ惡い譯でなく、男子に取ても惡い、女子が學問して生意氣になる、お轉婆になると云ふのは其の罪誰に嫁すべきであらうか、畢竟教育家が惡いのではあるまいか、女子と云ふものは學問をすれば

屹度生意氣になるべきものと先天的に定まつて居るものと云はれやうか、天性温順なる女子は教育の方法如何によりて尙一層温順になるべき筈である、故に女子が惡いのではなく世の敎育法が惡いのである。

◎乍然余は如何に女子に學問を奬勵しても高尙深邃なる哲學を學べよ、法式の錯雜紛糾して居る數理學を學べよと勵むるものではない、女子の頭腦は天性斯學に適して居ない、政治學、法律學、雄辯學等も學ぶ必要はない。

◎若夫れ道德的事業に於ては、女子の手を要すべきものが澤山ある、就中慈善事業、看護事業、其他凡て病院病人等に關する事業等は、女子の性質によく適して居るものである、蓋し女子は心を以て勝つて居るもので、慈愛親切等の德は男子に優れて居るものである、故に女醫の免狀を取ること、必ずしも非とすべきではない。

◎其他にも今迄女子の從事しなかつた職掌にして其の性能く之に好適して居るものも尠くはない、此等は女權の伸張と共に徐々と之に從事して行くやうになるであらうと思ふ、時勢の進運はどうしても女子を社會公共的事業に參與せしめんことを督促するものである。

◎聊か泰西女權論の沿革を述ぶると同時に、女子の權利天職に就き卑見の幾分を披瀝したのである。

〔をはり〕

松茸の話

梅の舍

秋の空に於て、茸狩の遊びほど面白いものはありますまい。同じ茸狩でも、松茸の採集は、壯な遊びでコンナ愉快なことは、外にはあるまいと思ふのです、松茸の產地としては京都の稻荷山が最も世に聞えて居りますが、更に名も無いながらに其實の驚くべきは、信濃の國、南安曇郡、梓村の小倉官林の右に出

るところは無からふと思ひます……此小倉官林と申すところは松本町より巽の方、僅かに三里ほどを隔つた高原で、東西一里、南北三里に餘る一つの大い松林であります。此小倉官林の

▲松茸の生方

を見るに、稲荷山などとは、全く趣きが變て、失眼者で無い限りは、ドナタにも採れぬと云ふことはありません、先づ、其土地の樣を見るに、赤松の林立てる限り、タヾ、杉苔の生ひ廣りて、平かなことは左ながら、湖の面でも見るやうであります、此青い平かな間に、彼の黒赤みの笠を現はし出しては、如何に人目を逃がれやうとて、逃がれることは出來ません。デ、盛りの頃になるとお老婆さんでも、お嬢さんでも、さては小供に至るまでが、ヤンヤと云ふて繰り出すので、ソレ〳〵素晴しい園遊會が始まるのであります。否此素晴しい茸狩より、更に松茸の素晴しい蕃殖には、大に驚かざるを得ぬのでありま

ます。否々、其素晴しい産額に至ては、更に大いに驚かざるを得ぬのでありませう請ふ是れより、

▲松茸の城

に進んで、愈々其壯觀を一見することに致ませう。

サテ、此地の方言にや、凡て茸の生へ居る地域を、一と口に城と云つて、大城、小城、善い城に、惡い城など、サマ〳〵の種類に別れて居るのでありますが、狩手の面々は、吾れも〳〵と此城を見當に、西に東に爭ひ歩くのであります。若し一度之を見附けば最後「ヤア、有た〳〵」と兩手を翳して小躍するステツキや帽子を抛り出して、丸で前後の覺えも無い。コタマに響いて呼聲に「ドレ〳〵」と云ひさま宙を飛んで馳せ來る一行「ヤア、素晴しい城だ」「オイ、某軍曹、城の廣さは何メートル位じや」「ウム、南北が約十メートル、東西は廣い所で六メートルもあらふ。」「成程。見給へ〳〵、此城は、南北の二大部分に分れて、丁度南軍と北軍とが、先鋒と先鋒と

互に衝突をするばかりじや」「さうか。如何にも笠の密集してニヨキ〳〵として居る數は、約五六大隊もあらふ。」「ドウして、北軍ばかりでも一聯隊は確かだ」「サウカ、僕は素人で分らん。が、南軍の方は露助のやうに、大身の奴が多いじやないか、先づ此露助から退治しては、ドウじや」「愉快々々、サア、一齊射擊でヤッツケやう。」と城の廣さや茸の多さなど評し合ふのが、狩手の常套の語ながら、如何にも意外の壯觀ではありますまいか。然り、全くかゝる壯觀は、かゝる土地からで無ければ、見ることの出來ぬもの、タトヒ、稻荷山の好箇の城を撰んでも、トテモ其尾にさへ追ひつくものでありません。恐らくは、日本全國に於て、また、斯る壯觀は二つと數へることは出來ますまい。ソハ兎も角、

▲山と林との松茸

が、其繁殖の仕振に、コンナ相違の出來たのは、ドウしたものでありませうか。タヾ一トロに土地からに依ると申せば、ソレデ滿足の說明でありませうが恐らく、左は、百姓風の說明に過ぎぬもの、更に進んで一段の理を究めやうと思はぬものは無からふが、サテ、第一に發るべき問題は、此兩地にドンナ相違があるかと云ふ事柄でありませう。デ、其重もなるものを比較すれば、

山	林
一、土地急斜せる故に、地味肥沃ならざるは、山の通弊なり。	一、土地平面なる故に、地味肥沃なるは、平地の通態なり。
二、是れ風雨の爲めに、其植物の落葉が、吹き飛ばさるゝか。押し流さるゝを以て、其堆積一樣ならず。	二、是れ風雨の爲めに、其植物の落葉が、無事平安に其塲に堆積し得るに依ればなり。
三、從て落葉の腐敗して、其地を培養する力、平等ならざるのみならず、甚だ薄弱なるべきは、勢免れざることと云ふべし。	三、從て落葉の腐敗して、其地を培養する力、平等なるのみならず、甚だ強大なるは、素より自然の勢と云ふべし。
四、去れば、山の城は一つの場所に於て、廣大なる蕃殖を見ること少き所以なり。	四、去れば、林の城は、一つの場所に於て、廣大なる蕃殖を見ることを得る所以なり

ザッと、こんな理由で、小倉林と稲荷山との茸の出方に大した相違を生ずるのでありますが、松茸の香や味は、兩者の間に、左程の優劣を認めませんけれども、小倉産の方が、却て香も高く味も善いやうに思はれました、之は、先年やんごとなきお方に招かれて、稲荷山に遊び、本年更に小倉林に出掛けて、親しく實驗したところの自分一家の判斷であります。タヾ稲荷山は都に近いから、其評判を上げたに過ぎぬのでありませう。ソレカラ、第二に、松茸の植物的生活の狀を研究するに、其全體は、傘狀を爲し、菌傘の裏に無數の菌褶がありて、太い莖に支えられ居ることは、ドナタも善く御承知のことであります。此菌褶の側面を注意して見ると、極めて細かい粒々のものを認めます、若し、十分に開いた松茸を取り、其菌傘だけを切り取て、黑い盆などの上に置いて御覽なさい。粉のやうな粒々が澤山盆の上に落ちて居るのを見るでありませう。其粉のやうなものを、胞子と申しまして、何より大切なもの、即ち其子孫を蕃殖する要素なのであります。胞子はかやうに小さいのみならず、又甚だ輕いものゆゑ、容易に空中に飛び散り、適當の物の上に落ちると、發生して白い糸のやうな植物となります。此植物こそ吾々が所謂カビと云ふもので、學問上では、菌と申して居ります。今松茸の自然に發生して居るものを檢すれば、莖の下部に無數の菌が、糸を爲して着て居るのを見ることが出來ます。デ、此白い糸のやうなカビを菌糸と名附けるのであります。それゆゑ

▲松茸は必竟カビから化けたもの

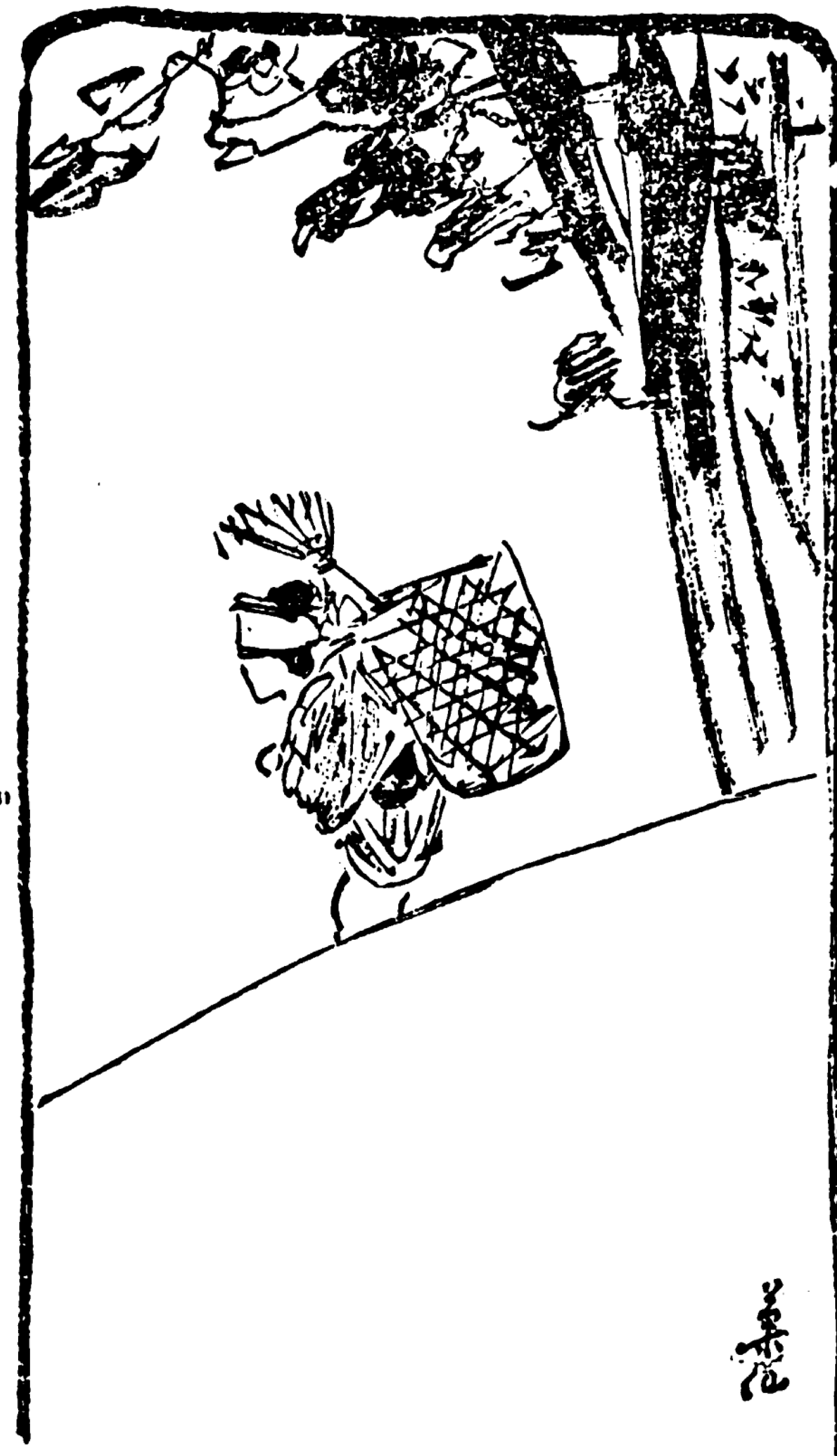
に外ならぬのでありますが、カビの中間は、此外にも頗る數多くて、糊に生ずるものもあれば、餅に生ずるのもあり、柿や蜜柑に着いて、其果實を腐らしめ、麥の穗に着いては、黑奴となり、蠶の體に宿ては、コシヤリ病を生し、繭の内面に生じては、ウチカビ菌となりて、大いに產業の上に損害を與へて居るのであります。是等のカビを總稱して菌類と申し

ます。菌類は、植物の獨立生活に必須な緑色の要素を缺いて居るので、自ら獨立の生活を營むことが出來ぬゆゑ、糊でも、餅でも、麥でも、蠶でも、何でも、構はずに寄生して、其生存を保つものであります。松茸の菌糸即ちカビは、主もに地の下に蔓り朽つた植物の部分に寄生して生育を爲すものであります。サテ、松茸はカビの化けたものなどと分てはドウモ薄氣味が惡くて、吾々のお腹の中に入て、若し綿のやうなカビにでもなられたら大變だ、餅や蠶などのやうに體が敗たら災難どころの騒ぎでない。以來松茸禁食などと神經を煩はすものも無きにしもあらねど、吾々はマタ菌類のおかげで、トンダ調法をして居ることが少くありません。御覽なさい、吾吾が日用品の糀でも飴でも酒でも醤油でもパンでもカステーラでも、皆此カビが本となつて造られるのではありませんか、更に吾々が注意の屆かぬところに於ても、櫻のサクラケムシ、桑のエダシヤクトリなどのやうな、害虫には、是等の菌類が寄生して、ドシ〳〵彼等の大群を斃し自然の害虫驅除者として偉大の功を奏して居るではありませんか。去れば、菌類とて學問の眼に依て識別さへすれば、其害と益とをドウにも利用して行くことが容易なことでありませう。諺に

▲雨後の茸

の如しと云ふことがありますが、之は降雨の後、天氣が晴れますと、茸の生長が迅速に澤山生へ出ることを申すので、茸狩の好機は、全く此時が第一であります。凡て菌類の發育には、殊に適當のシメリケとアタヽカサが必要でありますが、彼の雨後の晴天こそ、此理に相應して、百年實驗の結果、雨後の茸の如しの諺を生じたものに相違ありますまい。故に物品を乾燥して保存すればカビを生ずるとなく、又冬の寒き間にカビの生せぬと云ふのも、矢張此理に外ならぬのでありますれば、衣類、什器などにカビを生せしむるは、無識でなくば、ブシヤウモノに

違ひがありません、イヤ、之は思はずカビのお話に深入りいたしましたが、更に松茸のお話に立ち返り其各々の部分に付いて、今少し研究したいと思ふのであります。デ、彼の菌糸から松茸の生ひ立ち樣を見るに先づ其糸先が膨れ出す追々丸くなる。其頭が凸になる。ソロ〳〵楕圓形に變る。小さいジャガタラ芋のやうに見えるマダ笠と柄との區別もつかぬが、見る〳〵笠と柄とが、各々獨立の形を表はす。此區別の無い時は、全體が白い色であるが、笠は赤黒い皮を被りて、菌褶を保護するため



に、莖の上部に附着して居る、至て彈力が強くて、丁度薄いゴムのやうなものであるから、タトヒ、どんな強雨が降らうが、暴風が吹かうが、此テントの中に包まれ居る菌褶を傷けるやうなことはない從て胞子を害ふやうなことは更に無いのである。かく大切な笠であるから、之を支える莖は如何にも太く逞しい。松茸が其丈けの餘り長くないのも、ツマリ其重げな笠を保護するからで、其纖維の如きも、正しく排列して、頗る強靭なれば、其維持力も、益々強大である、シテ、松茸のシャキ

シヤキとして、生の善いのは、かゝる組織に依て成り立ち居るからで、又天下の美味と賞せられる所以であります。去れど眞に、

▲松茸の美味珍香

を知るものは、世に其人が乏しからふと思ふのであります。料理家は松茸の料理法を八ヶ間敷申されますが、其先生の料理では、ツヒ感服したことは御座りません。勿論東京に來て居るものなどは、丸で松茸のヒボシのやうなものゆゑ、料理法も必要であれど、既に香も味も、ぬけのからで、天下の美味珍香などゝは思ひも寄らぬことであります。實に其美味珍香を知るには、茸狩をして然る後に始めて其に語るに足るのであります。此度小倉林に遊びし折城蒸と云ふ馳走を受けましたが、松茸の眞味こそ、此城蒸に越えるものは無い。慥に無い。全く無いのであります。其料理の方法は至て無造作で、出しも入らねば、味淋も鹽加減も、サッパリ必要を感じない。タヾ松茸の城を見附けたら、其邊の枯れ松葉をドッサリ掻き集めて、群る茸の上に被うて、アチラからもコチラからも一時に火を附けるのであります丁度松葉の燃え切れる頃、一城の茸は、善い加減に蒸し焼きにされて居るから、洗うて後直ちに、各々引きさきながら、醤油に加へて食するばかりであります。其香の高き其味の佳なる、天下の珍膳と申す外は御座りません。殊にかゝる廣大な松林の中で、丈けなす杉苔の間に生ひ立つ茸のことゝて飛び土一つだに無ければ、其清潔さ云はん方なく、洗はずとも食し得られるものさへ澤山あつたのでありました去れど、一度城蒸を行ふた地は數年の間、全く蕃殖の力を滅ぼし盡くすので、濫りに行ふことを嫌ふさうであります。最後に其産額を上げんに、緣める茸取の家に就て其日の採集高を見しが、廣い表庭に高さ四五尺ばかり、長さ三間餘り堤のやうに積み上げし樣を見て、餘りの事に「コハ一村の全收か」と尋ねしに、主人は「否吾家の取入のみ。此村でも、猶

外に十數軒もあるのみならず、官林を取りまする村村は、數村に亘れば、何れの村でも、皆此れぐらゐを取り入る」との話に、打ち魂消て反問す言葉もないばかりでありました。

古螺城

女子英學塾講師　辻村椒花女

鶯花少なき邊土に來りて、かゝなへ見れば三星霜、道周の桑楡依々として、こゝも春色闌なるを、故園はまして今如何、酥にも似たる小雨の朝、入相の鐘に落花の夕、其夕榮の花見小袖も、花の吹雪の春雨傘も、嗚呼只夜々の夢に入り來るのみ。

されど丘山を愛するの性僻は、三月肉味を斷つより今すこし已みがたくて、特書す、明治三十八年四月十日、古螺城一名崑崙城の遺跡を吊ふべく日曜の黎明僑居をいで、程遠からぬ雲南線より出發、淡靄一抹全市街を鎖して、夢より淡き殘月の紺青色の中空に刻一刻と白みつゝある滊車は黒烟を吐き、迅雷に總して、今やさしかゝるは東洋一のトーメヤーの大鐵橋、(紅河に架設せる)此時天明け氣朗か、汪洋たる紅河の水面を遠望すると共に、心は可不可一如と斗り、豁然として思念無し、橋をわたりて、シヤラムと云ふ停車場より、海防線へ乘換ふ、此邊一體山高からず丘陵起伏し、土地膏腴來往種作の農夫らは、來耜を執つて多忙はしげに、萬頃の緑疇に力役しつつあり、春橋停車場に下車、小村落田圃路を行くと數町、數里に連亘れる堤防は、即ち螺城の第三外廓、今其名殘を止めしもの見渡す斗りの芝原は、青氈を敷きつめたらむ如く温柔に、桑畑茶畑暢茂り、農家の軒も三つ五つ見えて、少女が歌ふ茶摘み歌は、國家の興亡も知らぬかの樣に、宛轉たる嬌喉を弄せり。

一寸斗りの羊齒科植物を見つけて、ア、蕨だと嬉しがれば、何それは蕨であると同行の人は笑ふ(同行は牧野氏日高氏)ヲ、忘れな草と少さい優しい花を摘む、自分も見付けて摘てえりにさす、見馴れぬ鳥が羽たゝきして、中空高く飛び去つたを、牧童を呼びて地に畫いて問へば、鵲と數えた、乞巧奠の鵲の

橋？何等の詩趣ぞ。

束ぬる如き千竿の竹林と、幾曲節の墻壁とを以て圍繞されたる第一城門、往古は石火矢鐵砲の守衛か、一々誰何せしなるべし、今は綺羅も天涯の孤客も、自由に出入するのである、雉堞は圮壊れ蓁莽生茂り陰たり鬱たる老木の梢は、鴟梟の聲も聞きく可く、浮藻青き塹濠には、鵝鴨の一群、人を見て驚かぬ門側の堂守小屋を敲いたが、閴として人聲がせぬ、誰か來よかしと無意識に漫歩いて、南の方へ迂折すると、枯槹の聲槐陰にきこえて、石墻にて築き上げたる大井戸の下に、五六人の村翁野孃が喃々と笑語してをる、自分は此人等に迎へられ、立寄つて、一杯の水を乞ふ、清冽歯牙も氷る斗り、傳えて麥壽の水となす、釣瓶は尻の尖りし竹籠、内部には松脂を塗り、引上げて手繰るべく網を附けたり、幼稚の所に云ひ知らぬ古雅の味あり、其内頒白の老翁が手を後ろざまに腰のほとりに交叉して、漫々として來るのに逢ふた、物いふたれど言語が通せぬ、筆談で意味を了解したりと見え、微笑ながら立去りたが、程無く清痩鶴の如き白髪の老翁を伴なうて來た、忝く出す名刺をみれば、北柯品某、此あたりの村長とあり、多少文字を解するなる可し、好意を以て案内する積らしければ、やがて此行四五人となり、打連れ立ちて昇る、第一佛殿、十圍の圓柱堵の如き石砌、幾府の樓門、數丈の金堂、鳳龍及唐草模樣彫刻緻密色彩絢縵殆ど人目を燿眩せむ斗り、今は佛國政廳所轄として、國寶の一と數えられて居るが、惜いかな國寶の眞價値一もあるなく、奥の院にある王冠と靴でも又後世の摸擬品のみ。

時は已に正午を過ぎたり、茗茶をいれかへ、床几を列べ、此佛殿の中に午餐をしたゝむ、以下敍述ることは史に傳ふると、此村老の傳說とを綜合したるものなり。

安南、即越裳氏の名が史に見え初めしは、支那には舜典、史紀に載せしは周の世、交趾の南に越裳氏あり、三譯を重ねて來る、使者途に迷ふ、周公錫ふに駢車五乘を以てす、みな指南の制を爲す、杖南林邑の海濱より期年にして國に歸る云々とみえ、我日本には續日本後紀、日本紀略に見えて、孝謙天皇の勝寶五年に遣唐大使藤原清河及留學生阿陪仲麿關にあ

ふて安南に漂着すと云ひ事や始なるべき。
此處に說かむとするは、今より遙かに數千年の昔、我孝元天皇の御宇、支那には秦の始皇の朝、西曆紀元二百年江南諸蠻主安陽王と云ふものあり、性は蜀諱は泮、在位五十年始て今の封溪に都す、即今の古螺城なり、color 王の甲辰元年は、周の赧王五十八年王時に文郎國を合併せ、國號を改め、甌貉國と云ひ威勢頗る强かりき、始め王は兵を擧げて、文郎國主雄王を攻め、其封疆を侵略せしが、雄王の將士皆勇悍善く防き戰ひ、一度も敗を取りし事無し、雄王忽心驕慢りて、我軍如此き威神力を有す、蜀何爲の者ぞ、虞ふるに足らずと酒を被り女色に荒淫みて、殆ど國政を放擲せり、蜀軍武を練り鏃を利き、國力兵力充實せしかは、再兵士數千を率ひて其王宮に攻め入りつ、王は宿醉未だ醒めず、鼙鼓の聲に驚き立てば、敵はや已に臥榻にあり、雄王即身を脫して自ら井水に投して死す、已に主領を失ひし其部下みたゞ擧措を失ひ、戈を倒にし旌旗を伏せ、忽蜀軍に降服す、王大に其版圖を廣め、此所に築城の大計畫をなす、高さ千丈廣袤十里萬代不易の金城湯池、形靑螺に似たりとて名けて之を螺城といひ、又思龍城崑崙城とも名つけしは、隆崇第一なるを云ふ也、其城已に成るや否、一夜天柱地維折缺けて、さも凄ましき音響と共に、日月晦冥く黃埃沖り、屋瓦は宛然飛霰の如く、墻壁忽ち溶岩と流れて、幾多の國帑と、幾多の生靈、泥犂の底に埋沒もれ了りぬ、王は恐怖の思ひに堪えす、天神地祇に祈禱を棒けて、再ひ土功に着手し初めぬ。
時に神人集通あり、城を指し嘲笑つて、工事は抑も何時を以て其成功を告けんとはするぞ、若し其禍根の伏在る所を知り、根底より其禍ひを除くにあらずは、百年河清は望むとも、此城終に成る可らずと、王此神人に稽首して謹みて敎えを乞ふに、我只此事あるを知る、妖孽を逐ふ術に至りては、又只江使の來り救ふを待つより外はある可らずとて、飄然として辭し去りぬ、王は明旦城門を出で、江河の濱りに使命を待つに、風濤奔騰瑠璃沫を碎きて、金龜忽ち顯はれたり、此金龜人語を發し、我は是江使也、豫言者也、此築城を防害くる者は、則本土山川の靈氣之に附隨して妖をなすは死して祀らぬ厲鬼なり、其

前生を如何にと云ふに、前王時の伶人樂器を抱いて他國に奔らむとせしものゝ七耀山下に餓死せし者、此厲嗔つて長嘯すれば、大木折け、巨石飛び、土山も崩壞れ、江河も決す、城隨て造り隨つて亡ぶは、蓋此祟りによる、此妖氣の依寄する所は山麓に一の旅館あり、主翁名は翁悟宛・一女と白鷄一隻とを有す、若し旅行する人、過ちて迷ふて野徑を失ふ時、一夜の宿を乞ふ者あれば、必らず生きて還る無し、君若し行きて白鷄を殺し、其妖の一部を除き、更に如斯云々せば、更に後患無かる可しと、私かに囁き告げつ、王は翌日微服して金龜と共に城門をいで、七耀山にたどりつき、一宇の茅舍に宿泊りたり、主翁は王の面貌を熟視て、君は必定庸人におはさじ、此屋に止まりたまひなば、御身の爲惡しかる可し、速に歸りたまふべし、過ちて禍をとりたまふなと、老實やかに告しか、王は只打笑つて、死生自ら天命なり譬え鬼魅來る共、我を何とかすべきぞとて、强て氈帳の内に入りつ、夜半果して恐ろしげなる聲にて門を開けよと罵り狂ふを、金龜は徐に叱咤したり鷄鳴て紅暾はいてゝ鬼は一道の白氣と化し、「七耀山」へ棚引き去りぬ、主翁は定めて死せりと思ひし王の斝聲雷の如くなるに歎驚し、君は眞に聖人なる可し奈何なればかく幸運なるぞと幾度か羅拜尊敬しき、さて王は悟空に向ひ、あの白鷄を我に與へよ、價は乞ふによるべしとて、翁が答ふる語も待たず、庭に餌拾ふ鷄の雪なす羽毛を引握めは、鷄はふたふたと羽博きし帛裂く如き悲鳴をあぐるに、閨より突如と走りいでし少女は、王の腕にすがり、其鷄を殺したまふな、救けたまへと狂氣の如きを、王は耳にも入れずして頸捻ぢ切りて打捨るに、不思議や少女は身を戰慄はし、苦き聲たてゝ息絕えつ、王は迎への從者に指揮し、山の古冢を堀り發きて、古樂及び骸骨を得、皆收集して荼毘に附し、一撮の灰として江河に投じ、妖氣はこゝに漸滅せり、さて改て城を築き日となく夜と無く督勵し、幾歲ならず、竣功しき、則今の螺城也、王は金龜に感謝して云ふ、君の恩を荷ふこと莫大なり、然りと雖百歲の後遐齡若至る事もあらば、如何の術もて禦ぐべき、金龜其爪を脫きて王に與へていふやうは、若しそれ危急の機ある時此鑑爪を弩機にかけ、城頭に立ちて敵を射よ、敵兵

只其靈光に眩し、弦は斷え刄は折れむ、努、戒めて失はすば、國家虞ふるに足る可らずと、王は喜悅斜ならず、侍臣皐魯をして神弩を制り、名けて靈光金爪神弩といふ。

當時周已に亡び、秦の始皇六國を併呑せて、支那全土の主權者となり、益鷙鳥の翼を張りて、侵略攻服主義をとり、桂林(廣西)南海(廣東)象郡(安南)を置き、任囂を以て南海都尉とし、趙陀を以て龍川令(南海郡縣)とし、徒兵五十萬人を附して成らしめたり古木に緣りし鵲の巢を蛇の窺ふ如くにて、此二將海より陸より屢螺城を攻惱せしが、百戰百敗每に勝利を贏ち得ざりき。

祖龍砂丘に崩してより、蠻夷の弑逆、阿房の焦土、祖國は漢楚分爭の地となり、囂と佗との沮喪の心は飄て思念を歸國に絕ち、土着の王を驅逐して、此所に建國せむの決心となり、陀軍は北路遊山をこえ、囂軍は舟師舳艫啣むで、水路より冷美津に上り、屢々城壘に肉薄せしが、又徒に死傷算を亂し、或は陣中疫癘に犯され、病臥す兵さへ數を知らず、趙陀は勇略絕倫の人なり、退いて思ふやう、王に靈弩の存する內は勝算絕えてある可らず、可しもし我に詐術ありと、忽ちに重圍を解き、軍を武寧山下に退け、使をやりて和を乞はしめき、王は固より戰を好まず此數月の籠城に味方もいたく困憊しかば、快く其媾和を許し、象郡を分ちて二分とし、平江より北の部は佗之を治め、以南は王の領土とし、盟を立てゝ和議を結びぬ。

王は其齡五十を超えて、只一人なる愛女、其名は媚珠と呼ばるゝあり、芳紀今は二八をすぎて、綻び初る桃李の粧、雲まに匂ふ月の眉、明眸皎齒蠻土を照して世にいつくしき美人なり、此度王宮の宿衛としてはた聟かねと許嫁されし仲始(陀の二子)は、抑如何なる人ぞと阿監どもに打かこまれ、葦の簾こしのかいまみに、我から掩ふ羅縠の袖、仲始は顏美玉の如く、心魂剛なる事は父にも勝りし弱冠と世の風評もわたならず、近まさりする容貌態度、我身は女にも俊秀れたる夫持ちけりと、戀衣心に深く思ひ染みぬかゝりしかば吉辰を選み、華燭の典を擧げしより、二人の中はとこしへに松にかゝれる藤かつら、離れ難なき相思の情、珊瑚の帳夢濃に、翡翠の衾溫柔

にて千歳をかけてぞ契りける、仲始も元より惡からぬ其新妻の眞情を世に淺からず思ひながら、燃ゆるが如き一道の靈火は、情の露にも消ち盡きざりしが或時仲始稍やかに媚珠に向ひ云ふやうは、父王が神とし崇めたまふ靈弩は如何なる物やらむ、只一目視まほしきを、御身宜しく手引して視せたまはすやと私めき告ぐるに、媚珠は少頃打傾ふきしを、二度三度切に云はれて、戀ほど切なきものはあらじ、只いさゝめも其人の心に戻るが悲しさに、天ともたのむ父王の眼を隙もありやと偸みつゝ、心凝りては嫋竹のかよわき心も雄々しう成り、宜しき折をや得たりけむ、彼の靈弓を安置せし後宮深く導びきつ、仲始はさすが亂るゝ心緒を自ら強て勵まして、匕首を取りでゝ件の神弩の絃を斷ち、機を破毀ち、再元の床の上に置き、さらぬ體にて出でたりしを、媚珠はさかしき少女なれど、麻より直き心に比べて、露ばかりも疑はざりけり、程經て仲始は父王に乞ひ、北部に歸りて其親を省せむとす、時に媚珠に向ひて、しめやかに比翼連理の談合は生を經るとも變る可らず御身と馴れて年頃の情けを何に忘る可き、然はあれ

とも緣薄くて兩國再び和親破れ、南北永く隔たらば尾上にこふる山鷄の、共しだり尾の長き恨綿々、盡る期無かる可し、譬へば戰の場に立つ共、君と見えもし見られもせむには、如何の手段かあるべきと云ふに、媚珠は不祥の夫の言に虫が知らすか、胸うち騷ぎて、或は悲しく又嬉しく、空恐ろしくも訝かしくも、心は千々に亂れながら、涙ぐみつゝ仲始を凝視て、實にのたまふ如くなり、妾何所へ逃れむとも身に添へもたる錦褥あり、雪なす鵝毛を詰めたれば其糸を解き綻はし、散り亂しつゝ行くべきなり、それを栞に妾が在所やかては其所と知りたまへど、現なくてぞ契りけれ、其後任囂病て死す、趙陀は仲始の計らひにて、心算こゝに熟せしかば、普く羽檄を飛ばせつゝ、盜兵起れり急に沿道を警戒し、兵を聚て守備せよと揚言するに、州縣すなはち響應し、召集せられし數十萬、兵は鋭く氣昂れるを、海陸二手に分ちつゝ、佗自らは陣頭に立ち、天を動かし地を捲きて、怒濤の如く、雲霞の如く、螺城の下にをしよせたり、王は憤怒の心火燃えて熱血内に逆りしが、恃める神弩のあるなれば、紫髯の端たに微搖かさ

す、物の具鎧ひて神弩を執るに、こはそも如何に機は毀たれ、寶爪失せて行方知らず、敵軍已に亂れ入り、接戰數刻に及びしが、主客の勢懸絶すれば、味方の死傷は數を知らず矢叫び太刀打凄まじくて、阿鼻叫喚も他所ならず、我事畢ぬ矣と見るよりも、王は打物投げ棄てゝ、後宮深くふみ入れば、獵場に迷ふ雛鳥の媚珠は涙におほゝれたるを、王は片方にかき抱きて、騮毛の名馬に一鞭あて、支ふる敵を蹄に蹴ちらし、搦手より落行きたる恩愛の道ぞ哀なる、冷美津まで落のびて、駒を汀に乘り捨てゝ、乘らむとするに舟はなし、城はや煙焰に包まれて、猛火の光萬弩の響、王は鐵腸九廻するに、敵はた近く追ひ來なり、王は最後の聲振しぼり、金龜靈あるものならば、顯して我を救へやと、血を吐く斗り絶叫しつ時に金龜は忽然と顯はれいでゝ叱咤して、王よ知らずや、汝が國を滅亡させむす、仇讐は汝に從行せしものぞ、斬りて棄てずや疾く斬れと、云ふ聲耳朶に觸るゝと齊しく、王は物にや魅せられけむ、三尺の利劒抜く手も見せず、顧みさまに媚珠を斬りつ、媚珠は最期の息の下に、天を仰ぎて祝して云ふ「忠信一節爲人所詐、願化爲珠玉、雪此讐耻、」とあはれ香魂長しへに劍光を追ふて飛び去りにき、碧血滾々苔鮮を傳ふて、紅絹曳く如く江心に入りしを、蛤蚌いつか其汁を吸ひ、殼に印して明珠となりぬ(傳ていふ王は七寸の文犀を持ちて海に入ると)仲始は廐花なす騮毛を追て、汗馬に鞭して馳せつきしが、已に遲し、玉質摧けぬ、蕙蘭破れぬ、見馴れし玉環金鳳釵野徑に委して、人收めず、玉藻にまかふ黑髮は、かつて我手にかきやりしをと、面を掩ふて慟哭しつ、屍はやがて收められて、故城に歸り葬られしが仲始が朝々暮々の情は、更に慰む方も無し、父陀は已に十二分の捷利を此所に得たりしかば、自立ちて王となり、邊疆みな其鼻息を仰ぎ、雌伏し果ぬ者もなく、漢、高、すらも陸賈を遣り、封して南粤王とせしを思へは、當時の威權いかなりけむ、然るに仲始は此度の合戰功名一位にありながら、懊惱として樂しまず、ましてや媚珠の居室に入れは、俤浮ふ思ひ妻の塵埃積りたる明鏡を拂ふも、綣綣の片つはさ翡翠の衾霜華さえて、誰と與にか重ぬべきと、只垂籠めてありけるが、終に古井に投して死にき、

後人東海の明球をとり、其井水を以て洗ふ時は、其色澤愈光榮を加ふと云へり。

史に云ふ武帝の康元四年陀甍し孫胡嗣く、後西漢の伏波將軍馬援帝命を奉して南越を滅す、王たること五世、九十三年にして亡びたりと、

武略も、智術も、富貴も、榮華も、醒め來れば一場の夢にて、只這般の神怪と多情多恨の傳說とのみは千古の下、風流才子を惱殺せしむるなり。

此長物語を聽きつゝ、いつのまにか將に入らむとする第二の城門側に小祠あり、大さ一抱なるべき豫章樹は其根二つに分岐れ、樹ち人をも通行せしむべし枝葉は合して一となり、余蔭は婆娑と中空を藏す、所謂これ連理木、其小樹となく幹といはず、幾個となく土器やうの物が吊下けてある、只長に問ふても及はぬこと、何方にもありかちの赤繩結ひの類ひと覺ゆ、門を入ると文字美はしく記した螺鈿の扁聯が、左右の柱に揭けてある「千歲上是耶非、誰能辨之、龜爪督機、傳外史、五倫中父與夫、果孰親也、蚌胎非水獨深情」とあり、此奥の院の一室黯淡として光線射入らす、陰濕の冷氣肌膚に迫り、耿々たる燭火は冥土を照らす、一つ火の如く、厠子を疑らして見れば、大さ半間斗りの一塊石、塵埃と土とに覆はれて、分明には分らぬと、質は寒水石らしく自つからなる濕潤を有す、之所謂娟珠の靈化して石と爲りしと云ふもの、里俗傳へて有事の日は、其形態を變すると云ふのである、此所をいでゝ斜紛るた小丘に傍ふて數丁行くと、蒼天四際に接したる大森林、湧出る如き漭勢は波うつ甍、睥睨むる後覘、庇の反りし屋端は、我藤原氏の優雅にて、然も一種の崇高古雅を含めるは、所謂安南式とも云ふべきか、「金湯終古奠皇居、蒼宇此間存王氣」と記せるは門柱の扁聯也此堂内に安置せるは、安陽王等身大の銅像、及三尊天部の諸神、十六羅漢、圍繞せるもの皆これ近時の修繕にかゝる、兎に角千年前の大建築の内に立ちて堂守燭を乘り、村長紙筆をとりて、三千年前の恨事を說く、聲は瑩然反響を傳えて、云ひ知らぬ森嚴を感し、殆ど太古其時の人の如くに恍として神逝く心地がした、入口を洗ふ里河一帶臙脂を解いて流せし如く暖たる孤村、干たる麥秀、徒に憑吊の客をして徘徊顧望去る能はざらしむるのであつた。

巴里たより

八月三日發　澁谷うまのかみ

一、ペルシャ國王

◎ペルシャ國のシャーSHAH（國王の稱號です）御名をムザフエール、エド、ヂヌ Mouzaffer ed-Sine と申される方は先月中旬に巴里に御出になりパレースホテルに御滯在になつて、毎日新聞の種となつて居られました。御到着の節には馬頭も停車場まで奉迎にまゐりました。曾て馬頭は自著「萬國女子風俗」の中に、シャーの宮中の内幕を書き付けました事がありましたが、只今、フイガロ、ルタム等の大新聞は例外として、他の多くの小新聞が遠慮なく嘲笑の筆を弄びますところを見ましては、甚だ氣の毒に存ぜられます。今日（八月三日）午前十時發の滊車でシャーは御立ちになりました。

二、英國皇太子

◎近頃の新聞に英國の皇太子ウエルス親王殿下は我が有栖川宮殿下が英國を御訪問になられました御返答として日本へ御出になるかも知れぬと見えます。どうぞ事實であるやうに私共は祈ります。英國の皇太子は皇太子に決定されました後は常にウエルス親王 Prince Wales と申されますのです。佛語ではガール親王 PrinceGales と申します。

◎我が皇室では今年春に第三皇孫が御降誕になりましたが英國皇室でも益々御繁榮でございます。七月十二日の英政府の告示を見ますると「ウエルス親王妃殿下は今朝三時五分に御男兒に御出生を與へなされました、御母子ともに御健全にわられます」とあります。これは第五の皇孫であります。今日のロンドン電報によるに皇孫は今日洗禮を受けなされ、御名を、ジョン、チャーレスフランシスと付けられましたと。

三、伊太利皇太后

◎今年五月二十一日の東京朝日新聞に見えました如

く伊太利の皇太后マルゲリッタ陛下 S. M. Margueri-taは非常の日本びいきで是非一度日本へ行つて御覽になりたいものと御心がけなされまして、日本海々戰大捷報を御聞きになりましてからは尙更此御希望が強くならせられて、平和克復までも待ち兼ねさせられるやうに、僧正ボノメリが拜謁のをりに抑せ出されましたのは、去る二月中旬の事であります。併し其期日等についてまだ其決定をきゝおよびませぬ

◎マルゲリッタ皇太后陛下は先帝ウンベルト一世の御后で、今帝エムマヌエル三世陛下の母君であらせられます。先帝崩御の後はひたすら閑居して風月を樂んで居られます。

四、ルーズベルト孃に就て

◎七月二十七日の東京電報に曰く「ミス、ローズベルト及び陸軍卿タフト氏の一行は昨日皇帝に拜謁を仰付られ、終つて皇族の方々と共に午餐を賜はり非常に懇切なる待遇を受けました云々」

◎七月二十七日東京電報（英國デリー、テレグラフ所載、巴里エコード、パリ轉載）に曰く「東鄕大將夫人、大山元帥夫人、伊東大將夫人、寺内陸相夫人其他の貴婦人は米國公使館に於てローズベルト孃を訪問しました。諸夫人がたは殆ど五十人もある米人に取りかこまれて鄭重なる言語を交換しました。米人等は、日本の東鄕大將ではない、世界の東鄕大將であると思ふ云々とを口々に申しました。又米人等は、靜肅にして丁寧なる日本の諸夫人がたが、今日の成功を產み出しましたのでありますと云ふ事を感じました。」馬頭曰く米國婦人がたは初めに、日本の今日の成功は勇敢なる日本女子によつて生み出されたものと思つたのでありませう。

◎「マタン」新聞論じて曰く「ローズベルト孃は日本に於て其機敏なる精神と謙讓なる態度とによつて、勝利を得つゝあります。彼の女は旅行としての最大の利益を得つゝあります。日米兩國の交誼はたしかに之によつて一層温かならしめられたと申してよいでせう」

◎「エクレール」新聞は燒氣味の筆を走らせて論じます「ローズベルト孃は東京に大もてである。日本國民は米國に對して同盟したいと熱心に望んで居る。只今の所、日米兩國とも大分中がよいやうに見えるが、將來此兩國が果して同盟國となり得るであらうか。怪いものだ。ローズベルト氏が大統領に始めてなつた時の挨拶に何と云つた、米國は大平洋の主人とならねばならぬとかやうに云つたではないか。日米兩國の帝國主義はいつしか衝突の期があるであらう」

五、佛國の日本學者マヅリエル侯爵

◎侯爵は日本語は話しませぬが併し日本歷史にあかるい事は中々えらいものであります。侯爵は現政府に心よからず、世間にはあまり顔出しをせず、文筆を以て心をやる考か、又はさうでないかも知りませぬが、とにかく、專ら著作に從事せられ、日本に關しての著も既に二三種を發行してあります。

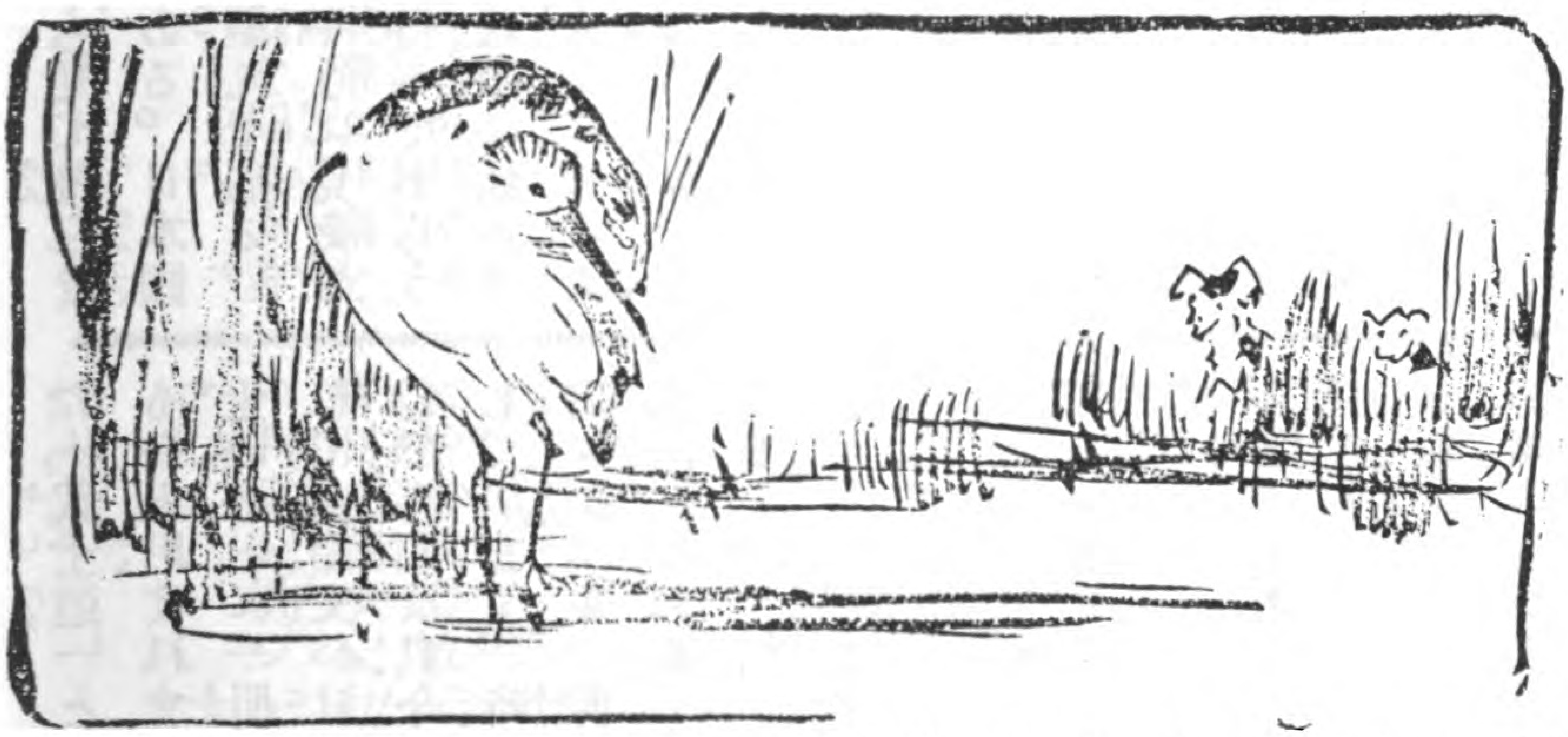
◎今年四月巴里に於ける日佛人協會で侯爵が發表した「武士道」と云ふ論文一冊は時節柄一讀の價あるものと思はれます。私は之を東京なるリギヨール博士のもとに一冊郵送しました。博士の論評を加へられて此論文が日本に紹介される事と存じます。

◎で馬頭は只今侯爵が日本歷史を著述される手傳をして居ます。時々古文の講義を致します。外國の學者に萬葉集や源氏物語等の講義をして聞かせるとは横濱解纜以來いまだ曾て夢想にも及びませぬ事でありました。惜い哉此のうまのかみは彼のうまのかみが雨夜に品定めをしました如き、筋のよく通つた、そして痛快な辯舌をふるふだけの力がありませぬ。

◎如何に侯爵が細かな事まで取調べて居られるか、次に一例を申ませう。中古の文學の所です、和泉式部日記の一節を譯してその歷史の中に挿入れますに其初めに此樣な歌があります「はかもなき夢をだに見で明しては、何をか夏の夜語りにせん」とあるを侯爵の原稿には第二句の見でを見てに誤解して譯してあります。これは獨逸語に譯した和泉式部日記

（オーグスト、フリーメエル氏一八八五年獨逸出版）を種にして侯爵が更に佛譯しましたのです。そして自身に、どうも意味が不明了だと申されました。馬頭は此の見でと見てとの相違を説明し、之を「はかない夢も見ずに此夜を明かしましたなら後日今夜の紀念として思ひ出すべきものは何もないでありませうSi durant la nuit nous n'avons pas biens rêves, an réveil nous n'en aurons aucun souvenir と云ふ風に改めさせました。尚ほ譯文は侯爵の筆でうまく飾られるでありませうが意味は此の通りに改める事に決しましたのです。

◎一日侯爵云るゝには佛教の語にうんと云ふ語がある。今日の語で元素と云ふ意味であるそれに五種あると



申しました。馬頭はうんなら運即ちめぐり來る吉凶を云ふ語であらうと思つて左樣云ひましたけれども侯爵中々承知しませぬ。どうしても元素の事で火や水や土や金などの事のやうだと云はれました馬頭熟々考へたに、成程わかりました。それはやはり元素でありますが地水火風空の物質上の五元素を云ふのではありませぬ。般若心經にもあります色等の五蘊の事で迷妄を引き起す五種の原因となるものをさすのでありました。漢字を見ないでの日本の事蹟の研究は實に困難であります。侯爵の辛勞思ひやられます。

六、五色の禍

◎巴里の一繪畫師時事に感ずる所あり五色の禍をつくる。其の一に曰

く黄禍、其の二に曰く綠禍、其の三に曰く黑禍、其の四に曰く白禍、其の五に曰く赤禍、之れを繪ハガキにつくりて賣り出す。黄禍は云ふまでもなく白人の諸帝王が黄色の海中に於て龍に呑まれる所のもの。綠禍はアブサントと云ふ酒をあふつて泥醉する所の圖。アブサントは其色綠で極きつい酒であります。黑禍は黑衣の僧（巴里で耶蘇僧徒を烏と云ひます、黑い衣をまとうて居ますから）がはびこつて國民が難儀する圖、白禍は贋造牛乳が流行し赤兒が中毒し續々斃れる圖。赤禍は社會主義者におだてられて赤い上衣をまとうた裏店のおかみさんが先に立つて騷動を起す圖。時弊の幾分を説明したもの。

飲食物の話

磯部　武者五郎

香料類

香料類には佳快なる香味と辛味とを有するものを含む、其の主成分は蛋白、脂肪、澱粉糖質と特種なる揮發油を有す、揮發油は黄色を帶び、刺激性を有し唾液、胃液の流出を促し食氣を玦にし、消化機を興奮せしむる効あり、多量に用ふれば神經を刺激して害あり、少量に用ふるに効あり、其の重なるものは

胡椒、黑胡椒、白胡椒及ジャマイカ胡椒の三種あり原產地は印度及スマトラ島、新嘉坡地方なり、其の成分は水分、蛋白、脂肪、澱粉、灰分、糖質、揮發油等なり、ジャマイカ胡椒は西印度ジャマイカ、キユバ島に產するものなり

山椒、胡椒の一種にして本邦を原產地とす、故西洋人は日本胡椒と稱せり、成分は胡椒と同じく特に揮發油脂肪を多しとす、

蕃椒、水分、蛋白、脂肪、無窒素、エキス質、灰分等を有し、辛味甚烈し、西班牙佛國の南部、伊太利匈牙利等に多く產す、本邦に渡來せしは豐太閤朝鮮の役に始めて取り來ると云ひ、或は慶長十三年又文祿年間に渡來すと云ふ、現今支那人朝鮮人は蕃椒を

嗜むこと非常にして日常の食膳此の品を欠ぐことなし、

芥子、白芥子、黑芥子、魯西亞芥子、の三種あり、到る處に產す、主成分は水分、蛋白、脂肪、揮發油無窒素エキス、灰分等なり、芥子は調理に加味品として使用し、又藥用として使用す、藥用には多く芥子泥として皮膚に貼附するなり、

洎芙蘭、成分は水分、蛋白、揮發油、脂肪、糖、無窒素エキス、灰分等を有す、原產地は波斯、小亞細亞希臘にして現今墺地利、佛蘭西、西班牙等に多く產す、洎芙蘭は西洋料理に使用し、又藥用に供することあり、

生姜、成分は水分、蛋白、揮發油、脂肪、澱粉、無窒素エキス、灰分等を有す、原產地は熱帶地方なるが如し、本邦にては上代より產出せり古事記神武天皇の大御歌に「ハシカミ、クチヒビク」と詠じ給ひたるを見れば其の古くよりありしことを知るべし、「ハシカミ」は生姜の我が固有名なり、生姜は日常の食品に供するのみならず藥品として使用すること多し、

山葵、成分は生姜と異なることなし、只其辛味は生姜よりも烈し、山谷の間に自生するものと栽培せしものとあり辛味は自生の品に及ばず本邦には古くよりありて和名稱に山葵の名見えたり、日本料理には必要なる加味品なり、又外國產のものは藥用に供するあり、

植物性製造品

植物性食品にて製造したる品類は其の數甚だ多し多くは穀類、菽類より製するものなり、其他蔬菜類を乾燥したるあり、其の重なるものは、

豆腐、成分は水分、蛋白、脂肪、灰分等なり、植物性製造食品の中最良のものにして滋養有効分殊に多しとす、豆腐の効用を始めて研究したる當時の衛生雜誌に左の説あり、

豆腐は窒素含有の植物性食品にして蛋白含有動物性食品に代用するものなり、善良の豆腐に鹽を以て

調理したるものは其の風味牛乳を以て製したる新鮮の酥に類似し、洋人も大に之を賞玩す、蓋乾酪素と植物乳酥とは共に同じく蛋白質抱合物にして人身榮養物中の最も貴重なるものなればなり、故に豆腐を稱して植物酥或は豆酥と呼ぶ、總て豆類は最も植物乳酥素を有するものにして就中大豆は此植物性蛋白質を含むこと最も多し、故に豆腐は善良の食餌にして滋養に富み實に庖厨の要品と云ふべし云々

豆腐は中古支那より製法を傳習したるものなり其の盛に行はれしは徳川氏の時代なり享保の頃は既に僻在の地迄も傳播したるが如し、

豆腐の製法は大豆を水に浸し凡そ數時間を經て磑磨にて磨り釜にて煮、荏子油少許を加へ泡沫を消し、絞りて豆滓を去り鹽膽汁を交へ杓子を以て攪拌せ後四周に小孔を穿ちたる槽に綿布を敷き其中に移し壓蓋を置き壓搾すること少時にして凝結するなり、

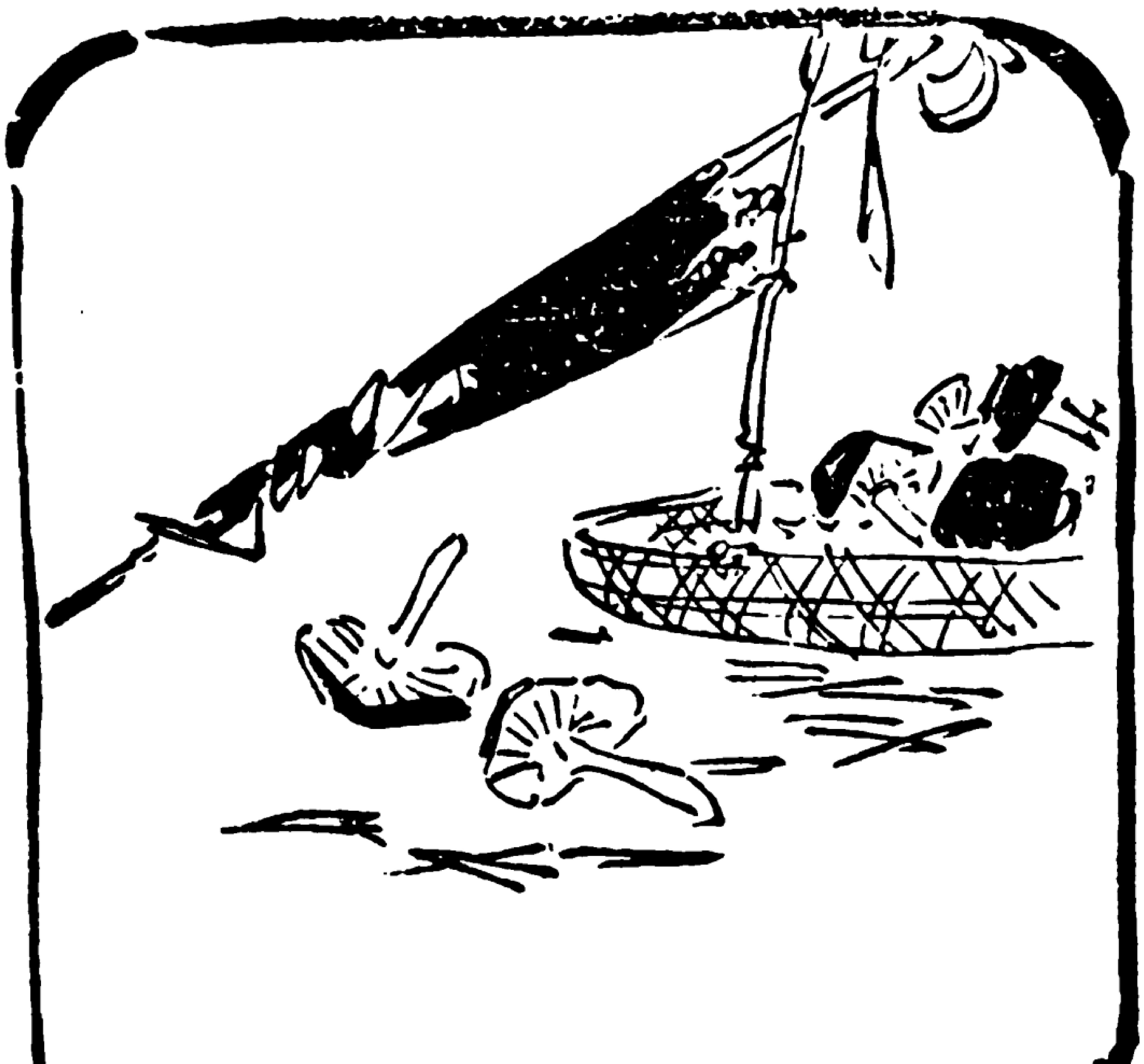
豆腐は日常の食膳に上るものにて其の價廉く、又調理簡便なり、煮て食し、或は生にて奴とし、湯豆腐にし、其の他汁の實とし、調理の方法極めて多し、

豆腐の種類に燒豆腐、凍豆腐、油揚、絹漉等あり、燒豆腐は燒灼度を過さざるものは滋養食料となすべし、度を過ぎたるものは消化不良なり、凍豆腐は寒夜に凍結せしめたるものにて味佳なり、紀州高野山の産著名にして高野豆腐の名あり、油揚は豆腐を胡麻の油又は菜種油にて揚げたるものにて滋養食料とすべく殊に冬時の食料と爲すべし、絹漉は精製度を過ぎたるものにて佳味を賞すべきも日常の食料としては淡泊度に過ぐべし、

豆腐滓は豆腐を絞りたる糟粕にして主成は豆腐と異ることなく只纖維分、灰分の多きが如し、調理の方法に由りて佳味の食品と爲すことを得べし、

味噌、成分は水分、蛋白、糖分、炭酸、抱合物、灰分(即ち食鹽)を有す、大豆、麹、食鹽の抱合物にして蛋白質に富み食用として滋養の効尤も多し、味噌は我邦にて往古より製造したる食品にて現今は日常缺くべからざるものとなれり、唐僧鑑眞和尚來朝せ

しとき此の食を賞め賞味して未曾有と云ひしより遂に味噌の名あるに至れりといふ、其の製法は先づ大豆を水に浸し、凡そ二時間を經て湯蒸にし、食鹽及大麥製の麹を加へ攪拌せ、桶に移し、置くこと數日にして赤味噌となる、味噌の種類には赤味噌の外白味噌、中味噌名古屋味噌、岡崎八丁味噌、仙臺味噌、金山寺味噌、麥味噌、小金味噌等あり白味噌は赤味噌に多量の麹と甘酒を加へたるもの、中味噌は食鹽の量赤味噌と白味噌の中間にあり、名古屋味噌、岡崎八丁味噌は品稍劣れり、以上は味噌汁として食用す、金山寺味噌は麥製味噌に飴を加へ、茄子生姜等を漬けたるもの、麥味噌は大豆と大麥にて製し、小金味噌は赤味噌に蒸したる糠を混じたるものにて以上は原品のまゝにて食用す、



豆腐と味噌とは本邦にて製出したる滋養食品の最有効なるものにして我邦人は日常缺くべからざるものなり我邦の人の牛乳を飲用するもの少きも常に豆腐と味噌を食用する故に其の植物性蛋白質が保健上に有益なる効力あることは疑ふべからざるなり、若し一朝此の兩者を缺ぐときは本邦人は筋肉骨格の柔軟なるものとなるべし、豆腐皮、又湯葉に作る、成分は水分、蛋白、脂肪、無窒素物、灰分を有し、其の蛋白、脂肪は良好なる食品と爲すを得べし、製法は大豆を水に浸すこと數時間にて之を出し磑磨にて碾き之を大釜にて煮、上面及鍋の四邊に白色の薄

き膜を生ずるに隨ひ之を乾燥するなり、日光の產を最も好しとす、其の他西京の湯葉又著名なり、

麩、成分は水分、蛋白、脂肪、澱粉、無窒素物、灰分等を有す、製法は小麥を粉碎し、水を加へ、揑て其の黏質を製したるものなり、麩の滋養分の近來世人の認むる所となり、或は牛乳に勝るともいふ、其の種類甚多く生麩、金魚麩、切麩、寒製麩、庄內麩等數種なり、

（未完）

實用洋食調理法

加見太一述
すみれ記

キャベツミート

最初に牛肉にても豚肉にても、よく叩き、玉葱を細に切り、少量の鹽と、胡椒を混じてよく交せ、此內へ鷄卵一箇を加へ、更に充分混合し、キャベツを丸のまゝ煠でゝ、其葉をとり、之に肉を入れ程よく包み、鍋の中に入れて煮上げ、皿に盛りてウスタソースを懸けて食膳に供します。

牡蠣フライ

新鮮なる牡蠣を取り、乾きたる布巾上に之を載せ凡そ四十分計り押し置き、能く水分を切り、之をメリケン粉にてくるみ、更に鷄卵の溶したる內に入れたる後ち、又之をパン粉にてまぶし、ヘットを煮沸せしめたる鍋の中に揚るので御座います、揚げましたならば西洋紙に載せて油をきる事を忘れてはなりません。

白瓜シチウ

白瓜の皮を剝ぎ置き、別に肉を叩き、其內へ玉葱、鷄卵、セリ酒、鹽、胡椒等を混じ、之をスープにて煮、最後に鍋にバタを入れ、メリケン粉と牛乳を先に煮たる白瓜の煮汁と半々に加へ、之を白瓜の中へ詰め、五分乃至十分間煮烹し、之を輪切にして皿に盛り、附合には馬鈴薯の煠でたるものを用ひ、懸けソースにバタと、牛乳を煮たるものへ白瓜の煮汁を加へて食します。

コロッケー

馬鈴薯を煠で、裏漉にし、バタと牛乳を少々加へ、鹽にて一寸味を附け、牛肉を細に叩き、鍋にバタを入れ、以前の細くしたる肉を煎り、ウスタソースをいれ、之にセリ酒を加へ、鹽にて味を附け冷却し、以前の馬鈴薯の中へ入れ、俵の形に造り、鷄卵の溶したるものをつけ、更にパン粉を付けて、之をヘット或はラードにて燒き上げるので御座います、コロッケは形の少なる方が宜しい樣に思はれます。

チキンカツレツ

何にても鳥肉を取りて、之を細く叩き、鷄卵、玉葱パン粉、パセリ、セリ酒、胡椒、鹽を少量づゝ混せ鳥の肉に先の混合物を塗りて、鍋の中にバタを入れ以前の肉塊を燒き其の燒きたる鍋の中にて牛乳、スープ、ウスタソース等を加へて、暫時之を煮るので御座います。

オムレツ

オムレツは西洋料理を好まれぬ方御でもよく好んで食せらるゝもので御座います、オムレツの中へ入れます材料は樣々御座いますが牡蠣などは大變に宜しう御座います、牡蠣の新鮮なるものを撰び、鍋の中へ入れまして煮ます、之には水分は一切加へません之を取り出しまして細かに切り鷄卵を溶きまして前の蠣を中に入れてよく混せます、之に鹽、胡椒を少しく加へてよき程に味をつけ、火上に載せ徐々に攪拌致しますと、漸々固まつて參ります、其時に之を折りまして皿に盛りて出します、鷄卵は一人前に二個位で宜しう御座います。

ベテパスープ

スープ肉一斤に、水八合ほどを加へ、火加減はあまり强からぬ樣にして、四時間程煮出し玉葱、人參を細く切りて之に入れ、極少量の鹽を入れて味をつけ鍋の表面に浮き出ましたる脂肪も漉し、鹽と胡椒を入れ置き、青豆を柔かく煮たるものを裏漉にし、以前煮置きたるスープの中へ之を入れてとろ〳〵になし、牛乳を少しばかり加へます、其中にパンを狐色



各女學校御用

美術造花材料各種

東京日本橋區横山町一ノ十六

天野卯兵衛商店

（電話浪花一六四三番）

營業案内は往復葉書にて御申込み次第送呈仕り候


諸學校御用
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
NO.5. Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
S.A
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 一、〇三〇
二號同 一、二二〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺
拾参圓 並等一臺九圓半
號大人用
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
484
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓八拾錢
四號 八圓弐拾錢
五號 七圓弐拾錢
六號 六圓弐拾錢
テニス組一張一、七五〇ヨリ二、九五〇迄各種あり升
東京神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

にこがし、之はバタにて煎り、切り方は塞の目なり。

蠣スープ

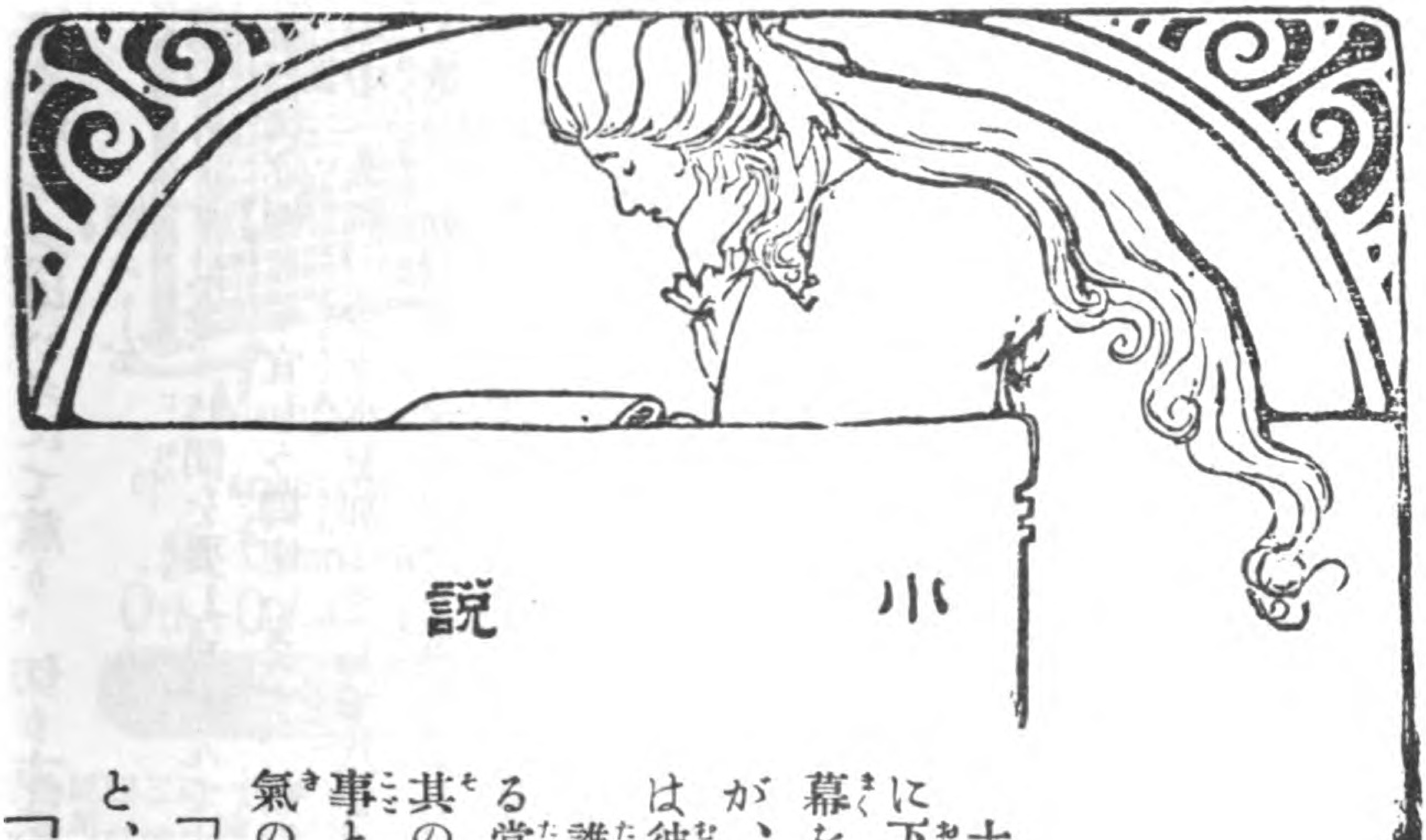
蠣のスープは余り時間を要しませんですから急ぐ時などには極めて宜しう御座います、新鮮なる蠣を鍋の中へ入れ、少々水を加へまして煮ますと蠣からも多量の水分を出します、之を漉しまして、蠣は外に移し置き、其中へ以前の煮汁と牛乳を半々交せ、ビスケットの善いのを少しばかり入れます。粘液狀になります、之を鹽と胡椒で味をつけ、例の麪包を塞の目に切りてバタにて狐色に煎りて、以前の蠣と共に入れて賞といたします。

キネールシチウ

豚肉及び牛肉を半々に混せ、之を細に切りまして更に叩き(隨分細きをよしといたします)之を楕圓形なり圓形なりに拵へまして、少しく鹽氣を帶たる湯にて凡そ十分か十五分位煮ました後取出しまして皿に盛り、之に掛ソースをかけて出します、之は極手輕で御座いますから至つて調法で御座います。

●日本婦人の身長と体量

醫師三輪寛德氏が婦人三百五十三人に就て調査せし所によれば婦人身長の最長は十八歳と十九歳の間を限度とし此平均四尺八寸三分にして體量は四十歳を最大とし十二貫七百十三匁なり今又より十年前に明治生命保險會社の調査せる處によれば婦人の身長發達は二十歳を以て限度とし此の平均四尺八寸七分あり又體量は四十二才に於て極度を示し此平均十二貫八百七十五匁なりしと云ふ然るに近ごろ日本生命保險會社の調査せし結果を見れば婦人身長は二十六才より三十才迄に於て最も發達せるを示し其平均は明治生命の調査と等しく四尺八寸七分にして體量は四十一才より四十五才迄の平均十二貫九百匁なりしと云ふ此等の説を綜合して大澤醫學博士の談によれば日本の婦人は二十才にして身長極度に達し約そ四尺九寸と見做すべく體量は四十二才に於て極度に達し平均十二貫八九百目と斷定して可なるべしと



緣？

卜部観象

上

十月の末つ方、月清く、蟲の言哀れな夕であつた。自分は夕餐後庭に下り立つて、その幽寂しく、且心澄む景趣を稱へつゝ、否寧神秘の幕を透して自然の私語でも聞かんとするが如く、茫然と佇立んで居たが、何時しか歩を運んで門を出でやうとすると、ガラ〳〵チリンと戸は彼方から開いて、跼りつゝ入つて來る者があつた。

誰かと思ふ間もなく月光は早くも其の知人である、然り彩霞と號する當時賣出しの閨秀畫家で、先頃材料を探るべく房州へ行つて居つた其の人であると云ふことを知らせたが、彼方は婦人ではあるし不意の事とて、自分の此處に居たのに少からず驚いた樣子であつたから、稍氣の毒に感じたが、

「やア」

と、例の簡單な挨拶で彼女の默禮に答へた後、

「何日お歸京りでした？。」

「漸う昨日歸京りました！。」
「如何です彼地は？。お話より永かつたやうですから、定めし好材料を得られましたらう！。」
いえ、さつぱり……」
「私はまた、何か大に興を惹くやうな事があつて、傑作の筆でも揮つて居られるだらうと思ひましたが！」
「いえもう……私の材料は餘り得ませんでしたが、其の代り思ひがけない人に就て、思ひがけない、眞實に小説見たやうな談を聞いて參りましたの！」
「へえー、そりや宜しければ承りたいものですな。」
「え、貴郞も御存じの方ですー、歸京りました御挨拶旁、別にお土産はありませんから、まア其の談を……おほゝゝゝま、左樣でもありませんが、實際御話し致さうと思つて參りましたが、然し何處かへお出かけの處では御ざいませんか？。」
「いや、只氣紛れの散歩です、さア何卒！。」
談話しつゝ、明放してあつた柴折戸から客間へ通し、半ば月光を浴びた椽側近く席を定めるや否や、自分は、自分の知つて居る人に就ての小説的の談と云ふ彼女の言葉に、むら〳〵起る好奇の心は抑へ難く薫らして居た捲煙草の灰を忙しく拂きながら、
「私の知つて居る人の談つて誰の事ですか？。」
と、誘ひかけると、彼女は自分の性急なのを知つて居る故、稍頬笑んだが、一碗の茶に喉を濕して、
「竹内綾子さんの事ですがね。」
「へえ、彼の方が如何したんです？。」

自分は斯う云つたが、其語氣は前の意氣込みに比べると餘程冷かであつた。それは他でもない、成程自分は綾子を知つて居るには相違ないが、親しいと云ふ程ではなく、逢つたのは僅五六回に過ぎぬ。素より幾何も逢つたことのない割合には彼女の内情性癖等は多く知つて居るが、それはこの彩霞女史如き彼女の直接の友達から時々噂を聞かせられたので、彼女との交際はそれ等を知ることに依つて餘り多くを増さなかつた。然し談の悲しむべき事か喜ぶべき事かは未だ知らぬが、斯かる間柄故其の人と聞いて直に冷かになつたといふ譯ではないので、初め貴郎の御存じの方ですと云はれた時、已に我が心裏には自分の知つて居る者の總てに對する安危の情を燃やしたのであるが、それが割合に親しくない其の人と知れたから、以前の反動として我れ知らず自分にも心づく程冷かなる語氣にも變じたので、而してそれと共に自分が逢つた時の彼女の姿、それは紋羽重の被布にカシミヤの海老茶袴、紫の風呂敷包を小脇に、佛蘭西流の女靴をしとやかに運びつゝ、お茶の水橋を駿河臺から渡つて行つたある朝の事や、縮緬の二枚重ねに束髪へ挿したローズの品よくして匂ひも高く、何家の令嬢かと思つたある年の正月の事や、桃割れに浴衣姿の得ならず艶であつた夏の夕や、色白の瓜實顔に情を含んで常に涼しい切長の眼、稀に見る處の美人であつた事や、或は優しくして而も才氣のあつた事や、化粧品の選擇なか〳〵嚴密であつたといふ事や、摺鐘が鳴つて駈け出しても懐中鏡は忘れまいと想像つた事や、彼や是やと其の人に就て見た事、人から聞いた事、又は自分で思つた事など、突差の間にも心に描く丈けの餘裕を得たのであつた。

彩霞女史も急には答をせず、我が心でも量らんとするやうな顔色で、やがて徐に

「まア貴郎は如何な事だとお思ひなさいますの？」

と、却て彼方から妙な問を發して來た。

自分は一度はや、冷かになつたが、種々彼に就ての追想を重ね行くに從つて、漸く我が知人中の綾子ではなく、我が知人の彼女であると云ふ念が高まつて來て、今は殆ど其の感に滿されて居たからして、善かれ惡かれ可成早くその事を聞き度く思つた。で、

「如何もそりや分りませんな。まアさう焦心さずと早く聞かせて下さい！。」

「ほゝゝ、でも想像でも描いて居らつしやる樣な風に見えましたから……」

「いや、左樣ぢやアないです。兎に角承はりませう！。」

「あれ、左樣改まられましては出惡う御ざいますわ！、然し下手ながらお話し致しますが、考へますと何となく厭な氣になりますの！。」

彼れは斯く云ひつゝ不快なやうな顏色をしたが、再び茶碗を取上げて澁茶を啜つた。

自分はこの言葉を聞きこの顏色を見て、今は全く綾子の上に在る心の、尠からず不安と好奇心とに驅られて片唾を呑んだ。

「まア冗長いやうで御座いますが始めからお話致しますが………」

「何卒、詳しく………」

「あれ……丁度私が房州へ參つて三日目の事でした。北條館山邊の公園と云つて居ります北下の景色を見やうと思ひまして、多分二時頃で御座いましたらう、旅館を出て北條の裏通りから館山の町へ入り、少しく賑かな處も通り越して、段々町外れの方へ參りますと、彼方から子供を脊負つた一人の女が俯き勝に此方へ向つて歩いて參りました。初めは隔れては居ますし、只道行く人と見る外別に何と思ふ譯もありませんので、行きか歸りか此邊の內儀さんが用足しに出たものとしか思ひませんでしたが、段

段近寄つて、もう二三歩で互に行過ぎやうと云ふ處で、不圖其の婦人を見ますると、急に思ひ出せませんでしたが、慥に見たことのある人ですから、歩を緩めて尚よく見ますと、驚くまいではありませんか心の裏には忽綾子さんではないかと云ふ疑が起りました。其の時は眞實に疑ひました。而して迷ひました。前からも左樣は思ひましたが、近づいて見ましても、此邊だとて中等以上の者とは思はれませずそれは何も綾子さんが必ず中等以上の生活をして居られると定めて居た譯でもなく、御承知の通り殆丸三年ばかりは何處に居られるか如何して居られるか少しも消息を知りませんから、如何いふお生活をして居られるか分りませんでしたが、然し彼の美しい、才智の勝れた、平常割合に立派にして居られた方の事ではありますし、それに年も今年二十五としましては、慥に三つ四つは上のやうですし、容色好し丈けに若く見られた方ですから、今逢つても二十三か二十四位にしか見えないでせう、又幾何老けたとてまさかに斯うはなるまいと思ひましたから、其の人らしくはありましても、流石に綾子さんでは御座いませんかと尋ねられもせず、たゞはてなと思つて、歩も進めず、問ひも致さず、躊躇して居りますと、彼の婦人も、初め互に面を見合はせました時は、些と眼を見張つたやうに見えましたが、然し何とも云はずやがて、如何してか蔽して居た洋傘を急に傾け、互の視線を遮るやうにして、其の儘行き過ぎて仕舞ひました。

で、私ももう言葉をかけることも出來ず、如何も似て居るがとは思ひながら、歩を移しましたが、何となく名殘惜しさに振返つて見ますると、彼の人も丁度顧りましたので、圖らず又面を見合せましたが、彼の人はそれと見るや、遽しく顔を返して、思ひなしか以前よりは少し足疾に歩み行くので御ざいました。

私は佇立んで尙其の後姿を見て居りましたが、子供を脊負つては居るもの丶、歩きつき迄如何も綾子さんに似て居るやうに思はれますし、それに服裝は餘りよくありませぬが、何處か華奢な品の好い處があつて、時には荒仕事の手傳ひもする普通此邊の中流以下の内儀さんとしては似合はぬ所のあるのも認めましたが然し綾子さんとしては餘りであるし、第一年も違ふやうだし、又彼の婦人の擧動も如斯だし、自分の間違ひに相違ないと諦めて、目的地へ向つて參りましたが、まだ何となく其の人らしい感が致しまして、綾子さんに就て知つて居る限りの色々なことを追想して、北下の景色も多く眼に留らず歸りました。

其の翌日私は野島を見物に行きまして、一夜白濱の旅館に泊ることゝ致しました。

是は素より景色を見やう爲ではありますが、一つには此處は綾子さんの故郷と聞いて居りましたからして、餘所ながらでも其の後の樣子を聞き度く、都合によつてはお家を尋ねても見やうかと、東京を發ちます時から思つて居た事ではあり、それに、前にお話申したやうな事がありましたからして、もう耐らず、早速其の翌日出かけて行つたのでありましたが、其の日の晩餐后、徒然のまゝ、此頃は割合に閑な旅舍の女中を呼び止めまして、波穩かな果しなき海上に光清き十日頃の月を欄干近く眺めながら、何や彼や其の邊の樣子を尋ねました末、此處邊に竹内綾子さんと云つて、今年は丁度廿五になりますが、久しく東京へ修業に行つて居られた美しい方がある筈ですがと、問ひの緒を開きますと、女中は凝乎と私の顔を見つめ、又今更のやうに姿など見廻しましたが、やがて、

「え、それはこの隣村の方で御座いますが、貴女はよくまア御存じで、お友達でゞも御ざいまして?」

と、優しくはありましたが、力ある聲で問ひ返して參りました。

言葉の模様やその擧動で、この女中の綾子さんを知つて居ると云ふことが畧分りましたから、私も好い人に逢つたと熱心に、

「え丶、彼地に居らつしやる時分は極く親しく爲て居ましたが、もう三年ばかりと云ふもの、少しのお消息もなく何處に如何して居られるか分りませんですが今矢張り此地に居らつしやるのですかね？」

と、尋ねますと、女中は私と綾子さんとの間柄が分つて安心し、又



氣乗りもしたと云ふ風で、

「あゝ、左樣で御ざいますか。いえ、今は此地では御坐いません、三年ばかり前に舘山の方へお嫁に行かれましたが、あの方もあれ丈けの御修業はなさる、御容色も好う御ざいますのに、今は荒物屋のお内儀さんださうで御ざいますもの、如何いふ御考があつてかは存じませんが、お氣の毒でなりませんです!。」

と、さも同情を寄せて居るらしい語氣での答でありました。



私はこの言葉に前日の事を思出しまして、では昨日見たのは矢張り綾子さんであつたかしらと、昨日はそれではないかと思つたもの丶、今はそれでなければよいがと云ふやうな氣も致しまして、呆れたやうに、少時茫然として居りましたが、

「へえ、左樣ですか、如何してまアさういふ處へ……全體學校を御卒業なさつてから二年ばかりの間は、お互に手紙の往復をして居ましたが、其の後は此方から差上げても御返事もなし、私の方でもだんだん御無沙汰をするやうになつて、それなり御樣子も分らず過しましたが、知つておいでなら話して下さいな？！。」

と、氣になる處から、此方の事も話し、賴むやうに申しますと、女中も隔てなく話してくれました。

で、其の語る處によりますと、この女中は綾子さんと同村の者で、近處ではありませんが、小學校ではお仲間だつたと云ふことで御ざいますが、私等には話しませんでしたが綾子さんには一人の許嫁がありましたさうで、其の人は早稻田とかを卒業して後、英國へ洋行して居られまして、綾子さんが御卒業の年には其の方も彼地の學校を卒業して歸朝られる筈であつたさうで御ざいますが、綾子さんは彼のやうに好成蹟で目出度御卒業なされ、少しの間國へ歸つて居りますと私等にも申してお歸郷りでしたが、それは内々御婚禮の用意など仕ながら許嫁の方の御歸朝を待つ爲だつたさうで御座います。

所が思ふやうにはなり難い世の常で、其の許嫁の方は卒業間際急病の爲彼地で死亡られ、日夜待ちに待つて居られた綾子さんは、思ひがけなく遺骨を迎へることゝなりましたので、其の失望と落膽とは如何程で御ざいましたらう。其の後は多く外出はせず、血色は惡るく、鬱いでばかり居たさうですが、終には病氣になりまして、半年位もすぐれないで居たさうでございます。

それでも種々治療を致した甲斐がありまして、漸く以前のやうになりましたが、治ると彼の方の事ですし、又許嫁の方も死亡られましたから、諸方から縁談の申込みがあつたさうですが、如何いふ譯か皆斷つて、矢張り引籠り勝に日を送つて居られたさうで御座います。

で、村の人などは、無益の事ながら種々想像もし、風説も致したさうで御座いますが、幾月經ちましても變ることもなかつたので、想像も臆説もだん／＼消えて行きましたが、お歸鄕になつてから丁度一年半ばかりの後、東京のある大きな實業家の處とかゝら又縁談があつたさうで、初めは大略纏まりさうでお父樣やお母樣は大層喜ばれる、村でも亦大した事と大評判であつたと云ふことで御ざいますが、如何いふ譯かそれも終に綾子さんの方からお斷りなすつたさうで、村人は又不思議に思つたと云ふことで御ざいます。

然し其の後この事に就きましては、何でもその實業家と申しますのが、餘り品行のよくない人だといふことが分り、噂をした人は口を噤んださうですが、中には當世でないなどゝ云ふ者もあつたさうで、世は樣々で御座いますね！。

で、それからは一寸左樣いふ話もありませず、綾子さんも舘山のお母樣の在所へ行つて居りましたが三月ばかりで歸村つて參りますと、突然今の處へ行らつしやるといふ話、大抵の人は信ぜなかつたと云ふことでありますがそれが終々事實となつて現はれましたので、中間でないと思つて居た貧乏人へ大金の富鬮が落ちでもした時のやう、多くの人は呆氣に取られたといふことで、誰しも思ひがけなかつたさうですが、それは其筈、私なども今だに不思議でならないので御ざいます。

然し底には底のある世の中で御ざいますから、それには何か譯があらうと、種々尋ねて見ましたが、

理由らしいことは少しも分りませず、たゞ其の嫁かれた家は相應に有福で、お聟様は青年には似合はない程著實な人だと云ふことを知り得た丈けで御ざいました。

女中に聞きましたのは是丈けで、私は翌日この白濱を後に、北條の旅舍へと歸りましたが、二三日過ぎて再北下へ參りました歸途、海邊へ出やうと思ひまして、ある呉服屋の近傍から左へ折れて行きますと、土藏作りの一寸した荒物屋の店頭に、中形の裕衣に三四日前に結つたかと思はれる丸髷姿、何處から見てももう世話女房の綾子さんが、顧客を迎へて話して居るのを見ましたが、訪ねて却つて迷惑にでも思ひなさるかと、たゞ番地を覺えておきました丈け、引かれるやうな殘惜しさを忍んで北條海邊へ出で、其の翌日東京へ歸りましたが、變れば變るもの、今もまだあの人の姿が目について放れません。それは私とても、高等教育を受けた者が荒物屋のお内儀さんとなつたから不思議とか、又は彼の人が常人と異つた貧しい服裝をして居たとか云ふのでも思ふのでもありませんが、私等中間で、又彼の方な知つて居られます多くの人も、皆末は立派な人になられることゝ思つて居りましたその人が、如何してまア擇りに擇つてあのやうな處へと思ひますと、何となく人世がつまらなくなつて嫌な感じが致しますわ、矢張り緣と云ふので御座いませうかね

と、語り終つて、香氣高き絹のハンカチーフで汗泌む額を拭つた。

自分はこの話を聞いて疑問の中にも辿るべき連鎖を朧ろに認め、想像ながら事情の幾分に就て解し得る處があつた。で、この話を以て直に人世の悲しむべき好例とはしなかつたのである。彼れ綾子は今笑ふことが多いか泣くことが多いかは知らぬが、恐らくは笑ひに近づきつゝあるのではなからうか、若し果して自分の想像の如くならば、虚榮の塊なるある者よりは却て幸福であるだらうと思つた。

「何か宗教を信じては居ないですかね？」

「如何で御ざいますか、私は二三日中に手紙を出して見やうと思ひますが……」

「それは好いでせう。」

彩霞女史は自分のこの言葉に決する處ある如き顔色であつたが、時計の丁度十時を報つたので匆々暇を告げて歸り行かれた。

自分は送りながら庭迄出たが、月は相變らず清く、虫の音一ト入哀れであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此話はやはり月清き夜友を訪ふて酒間に聞いた話であるが、其の夜の何れの物よりも予にとりては第一の好下物であつた。

友は其後まだ彩霞女史に逢はぬさうであるが、彼の人は如何なる手紙を出したか、又如何なる返事が來るであらうか。

（をはり）

銀杏稲荷

高橋香流

去年の秋、御神木なる大銀杏に落雷ありて、さしもの大樹半より削去りたる如く、焦げて洞と成りぬ。朱の鳥居の色褪せて、耳口鼻などの缺げたる石の狐、左右に居並びて敷石をさし狹めり。境内は廣からねど、彼の大銀杏の外に、松杉の類茂りに茂りたれば、御宮の裏手は物凄きまでに森閑として、鈴打鳴らして參來る人の、その鈴の音の奥深く響渡り、何となう神々しくも聞えつべし。實の名は何とか言ふらん、我が幼き頃の友達は、皆銀杏の稲荷樣と呼びなして、物凄き場所の一ツなりけり。

今、我が幼き記臆を喚起せば、夢の如く影の如く唯だ此銀杏稲荷の森の姿、明白地ならぬ朧の色に現る丶よ。されど、その森の姿に引かへて、尙眼のあたり、生けるが如く物言ふ如く、婆裟として我が前に浮ぶ美しき亡靈の、お蝶の姿こそ、怪しく奇しく、今だに我が胸を搔捲らる丶心地ぞすなる。

いざ語らんか。六歳七歳の幼き折のことながら、我が胸に深く〱印されたる出來事は、秋の初めの晴れたる日、我れ銀杏稲荷の朽ちか丶りたる欄干に、寄りて立ちたるたそがれ時。勿論一人にはあらず、母の我れを連れて參りたるなれど、その默禱の束の間だに、惡戯せずしては氣の濟まぬ當年の我れは、欄を足

代として伸上がり、狐格子に懸けたる神鬮箱を取下して、打ふり／＼、時折母がなす如く、その一本の鬮を靜かに振出して、母が目の前に差出したるに、母は優しく我が惡戯を咎めて後、こは凶なり、稲荷樣の御怒りに觸れたるぞ、あまりに惡戯の過ぎたればなりとて、自ら箱の内に挿入れ給ひて、以前の位置に供へてけり。

凶と聞きて、小供心にも何となく悲しく頼りなき思ひしたるが、その思ひの一ト月を出でずして現れたり。

母は間もなく死去り給へるなり。

あはれ、愛で慈しみ呉れたる母君の、此世を去り給ひたる、洵に悲歎の極みにして、其後のわれは雲を見るにつけ水を見るにつけ、ありとしもなきはゝき木の、その御姿を思ひ出でゝは、唯だ泣きに泣く、或夜の夢に母と二人、嘗てありけるやうに打連れて、銀杏稲荷にまゐりたると見て寤めたる朝の如き、身も浮くばかりの涙なりき。

父も祖母も我れを慰むる能はず。小鳥、犬の兒、總てその甲斐なし。

かくばかり歎きかなしみてありける中に、唯だ一人、我れを慰め得たるはお蝶なり。お蝶年は十七八、較や面長の色白く眼元に愛嬌ありて、痩軀の後ろ姿の何處となく淋しき女なりしが、夭く死ぬる者の姿形には何となく淋しき所のあるがやうなり。

此お蝶は荒物屋の娘にて、常盤津の喉のよきと、その美しきとにて誰れ知らぬ者なく、我が家とは程遠からず、且つは祖母が殊の外三味を好めるものから、絶えず來りて彈語の、熊谷梅忠など、幼きわれも聞き知りたり。

お蝶は荒物屋の娘と云へど、實の娘にてはあらず、繼母の慾深きがありて、口穢く罵り喚くをも聞きたり

と噂せるが、我が母のみまかりける時など、我れにも倍して、悲しみ歎き、二日三日の程は、二人してありし事など繰返しては泣き合ひゐたり。

その後も日毎〳〵に訪れ來て、優しくわれを慰むるを小兒ながらに嬉しと思ひつ。戀と云へば戀とも云ふべし。一と日だにお蝶の姿見えざれば、何となく氣にかゝり心にかゝりて、待ち焦れては我れからお蝶の店へ出懸けて呼迎へ、雨の日、風の日、二人が顔を合せぬ日とてはなく、其年も暮れて菅の根の長き春日の或る朝のこと、お蝶眼を泣き腫らして入來り、遠き國へ行くことゝなりぬ、最早此世にては會へざるべし、秘かに〳〵とて小聲になりて耳打しぬ。な、なにしに行くぞと、驚くわれの眼を睜りて詰問へば、旋てお嫁にゆくなりとて、堪えずや泣入りて身を戰はせたり。行かずとも濟むべきものならずや、行かずとも濟むべきものならずや。

否々と頭を振りて、母の吩付なれば是非もなし、死に往く身ぞとて泣きに泣く。少時して言ふやう、最早今日を限りに別るゝなれば、夕方打連れて銀杏稲荷の御神鬮受けに行かん。さらば後にとて此日は長くも語らず、心せく有様にて、歸りゆくその姿の、思へば淋しき後ろ影なりき。

母を失ひ、今又お蝶との離別。母を再び世に呼戻す事は恊はじとも、お蝶との別れは、何とかして別れずに濟まさるべき法もがなと、小さき頭をさま〳〵に痛めたる末、思ひつきたる事こそあれ。われは急遽として家を出でぬ。

走りに走りて、動悸の胸を押えて立ちたる處は銀杏稲荷の鳥居の許、いと物凄き銀杏の洞も、裏手の森も、夕構への落暉を浴びて、田圃づゝき畠つゞき、春のたそがれの色は、野の川の堤よりや立ち昇る。堤向ふの桃林、野川の岸の地藏堂。お蝶と別れては淋しき春の野遊の、興なき月日を送るのみなり。何故

にお嫁にゆかねば濟まぬものにや、遠き國とは何地なるらんなど思ひて、早や涙さしぐむ。
平素なりせば、到底一人して此銀杏稲荷の境内に一歩も足を入るゝ能はざるなれど、此時の我が眼には最早恐ろしきものも凄まじき景色も映らず、鳥居を潜りて傍目もふらず、階段を上りて例の欄干に片足かけて、神鬮箱へと手を差伸べたり。
そも、我れは何事をかなさんとする！
神鬮箱を取下して、神鬮を悉く振出し盡し、母と倶に來りたる時の凶と云ふ文字の形を覺えゐたれば、それのみを殘して他は悉く折りて捨てんと思立ちたるなり。斯くなせばお蝶が打振る神鬮は必ず凶出でゝ遠き國へ行く事を思ひとまりて、永く〳〵我れと親むを得べしと思ひ付きつ。小さき我れの哀れさよ。
有繫に心憶して、手足は細かく震へ、大なる罪を犯すと覺えて、差伸べたる手を退きたれど、お蝶と別るる辛さ悲しさ、今は眼も眩みてその箱さへも見え分かず、夢中に摑んで小腋に掻込まんとする刹那、ミシリ欄干の朽目折れて、我が身は大地に瞠とばかり……後の事は知らず、少時して夢の如かりき。
鼻缺けたる、耳缺けたる、口無きもの尾なきもの、其數何萬なるを知らず。孰れも何十年をや經たると見えし狐の、十重二十重に我れを取圍みて、恐ろしの眼に睨めつけられて、我れは聲さへ出でず、かゝる處へ眼のあたり、月より大きく發と光りて、焰に包みし寶珠の玉が、きり〳〵と舞ひ廻る。見る眼も堪へず、わなやとばかりに叫ぶ途端、強く脊中をたゝかれて、我れに返れば、うれしや我が身はお蝶に抱かれゐたり。
別るゝ辛さに凶のみを殘さんと謀りたる一分四什を、總身の痛を堪へ〳〵てお蝶に告げたる時、お蝶は唯だ默して頭を下げぬ。

此時は早や夜の色銀杏の下枝に立罩めて、蒼白きお蝶の顔、睫毛には光るもの宿れり。最早お嫁には往かざるべし、されど二人は今までの如くには會ふ事も叶はざれば、唯だ〳〵夢をのみこそ待ち給はれとお蝶は言ひぬ。

小さき我れは、此意味を悟らず、遠き國へ行かずなりたる、それをのみ嬉しく〳〵思ひて、痛をも忘れて微笑めば、お蝶は犇と掻抱きて、熱き唇を我が頬に當てたれど、不思議や曇らぬ空なるに、我が額に冷かなる一ト滴落ちたり。

・　・　・　・　・

お蝶、翌日も翌々日も來らず、三日目の事、お蝶死したりと聞きぬ。唐突なる死!!、あゝお蝶は死したるか。

人々は種々の噂をなし合ひて、嫁にゆくを厭ひたる自殺なりと言ふもあれば、慾深き繼母の金に代へんとしたるを、女心の取つめて、發狂したるなりと言ふもありき。

遠き〳〵國へ行きたるお蝶の、『夢をのみこそ待ち給はれ』と我れに告げたる、その夢さへあまりの悲しさに薄くなりける。されど今もなほ、思ひ出の折々、お蝶の姿は生けるが如く、物言ふ如く現るゝこそ、なかなかに昔なつかしけれ……。

（完）

詞苑

従二位子爵黒田清綱先生撰
（菊池武則先生代撰）

月前遠情

天

てる月の影にむかひておもふかな
わかたらちねのすめるみやこを

陸前栗原郡若柳町　前田河千年子

地

昔しみし二見かうらによるなみの
おもかけにほふ月のかけかな

上野國群馬郡清里村　木暮千代子

人

松しまやをしまかさきの景色まて

三河國寶飯郡下た町　永井さい子

こゝろにうかふ月の影哉

甲之部

ともし火のあかしの浦のけしきまておも影見ゆる夜半の月哉　東京　松本くす子

むかし見しあかたの浦のけしきまておもひうつへる月の影かな　無名

今宵このすむ月かけにおもふかな石山てらのいにしへの夜を　東京　駒澤さだ子

旅人もわかふるさとの空や見んおなしかけなる月にむかひて　熊本　日高かず子

十六夜の月はむかしにかはられとおいにし己か身をいかにせむ　東京　林環子

乙之部

月みれは千々におもひの増さりけりこまの荒野の我背いかにと　石狩　加藤壽惠子

さらしなや姨すて山の秋のつきむかしなからにすみわたるらん　肥後　佐々小琴子

虎のふすあたる大のにわかせこはこよひの月をいかにみるらむ　東京　小林芳子

千萬のあたをもひしくものゝふもこよひの月をいかにみるらむ　岐阜 青木まさを子

もゝち里浪路へだてとおほそらの月のひかりはかはらざるらん　岡山 小山松枝子

丙之部（以下到着順）

せこは今いつこのうらに詠むらんはしゐすゝしくひとりみる月　大和 栗山倹子

おとつれを待ちます母はまされどもそらなつかしき秋の夜の月　栃木 福田しげ子

あはれ月かへらぬたびに行きましゝ母かゆくてを照してよかし　群馬 竹野ふし子

たそかれて松の下みちすきゆけはいろ日に匂ふみれのもみち葉　東京 駒澤さだ子

照る月はこゝはかりかも仇し野は一しほさむく照りまさるらん　神戸 今西操子

物みなのあはれもよふす月かけにみさきもろ人いかにとそ思ふ　東京 杉田繁子

外國のたひに出つるはらからは今宵のつきをいかに見るらん　栃木 福田富久子

さやかなる今宵の月をもろこしの野にます君の見てやますらん　下野 金子とし子

すみわたる月のひかりを觀るたひに想ひはかよふ滿洲のそら　東京 瀬藤ちよ子

武士のおもひも千々にみたるらむさやかにてらすあきの夜の月　東京 大原よし子

海山をへたてゝすめとはらからをおもへをこせと月さえわたる　陸前 前田河みさを子

秋田 細矢はる子

古郷をおもはするかなあたしのゝ草につゆおくよはのつきかけ

薩摩 松原みれ子

てる月に千里の外のものゝふのくさのまくらをしのふよは哉

東京 高橋珍子

露しげき草をまくらのものゝふはこよひの月をいかに見るらん

清國 富成梓子

からころもうつらふ影はむさし野の千草の露ににほふつきかも

大阪 田中れん子

思ひ出てゝまたもみよとかさなからのありし夜に似し月の影哉

埼玉 横田やな子

須磨あかし舞子の濱の月よけんこゝろはゆけとみんよしそなき

埼玉 桜田秋子

あたこやまたか雄さかやまおしこめてつきになりゆく廣澤の池

愛媛 廣田政榮子

いさを高き君かいしふみ幾めくりしのふる袖につきやとすなり

同 秋田錫子

今宵またつきにかさしてはなこよみさきし仇野の原なしそ思ふ

東京 中島茂子

しへりやのいくさの庭をおもひやるこゝろをてらす秋のよの月

石狩 加藤桂子

すみのほる月をあふきていや増に思ひ出さるゝとほきともひと

東京 大木光子

ふるさとを千里の外にいくさひとつゝをまくらに月やみるらん

東京 岩谷瀧子

我せこのかたみならねと見るからに戀しさまさるあきの夜の月

下野 福田さと子

戰さはのつはものたちもあふくらん限なく照らす秋の夜の月

東京 牛山素子

わが夫の露營のゆめをもる月とおもへはいとゝなつかしきかな
東京 奈良たく子

てる月にかゝるおたくもみえれともこゝろにかゝる唐くにの空
伊豆 岡田はな子

十五夜の月のなさけにくみかわすそまぬこゝろも緣のはしなる
大阪 田中靜子

夜はしつかこよひこの月千里なる友がすまゐもかくや照るらん
越後 松永しけ子

白熊のなくれやいかにひゝくらむ波につきよるゑぞのうらわは
東京 堀江田鶴子

唐くにゝ露營をむすふものゝふはこよいの月をいかにみるらん
奈良 天野照子

わしのはのあらのにさけふいくさ人いかにみるらんこよの月影
津 神田しよう子

こよひすむ月のかけにも名にたかき田毎の空をおもひこそやれ
新潟 岩木芳子

異くにのゝへに銃とるものゝふも月にみくにのそらやこふらむ
愛媛 船田するゑ子

去年の今日月かけ追ひてたわむれし妹のすかたの忍はるゝかな
近江 萩原治子

さやかなる月のみまへに友うとち昔しかたりに夜そふけにけり
東京 青木たま子

おのつからさやけき月につく〴〵と見ぬ世の昔おもかけに立つ
東京 大枝庸子

月見れはちゝにものこそ思はるれ我たらちれはいかにいまさん
肥後 徳永廣子

あはれてふ秋のもなかの月みてもまつこそ思へますらをの身を
肥後 徳永而有子

海山をへたてなからもますらをかをなしおもひを月にかこたん
肥後 徳永尚壽子

あたなみもしつけき空のつきかけを御軍ふれやいかに見るらん
能登 松岡紫子

けなげなることはかわして門出せし君慕はしきこやのつきかけ
青森 相馬冬子

澄み渡る今宵の月をますらをがいかに見まさんしへりやの野に
肥後 佐々有隣子

さらしなやおはすて山の月みれは遠きむかしのひかりなるらん
前橋 林廣子

すみわたるこよひの月を仰きつゝ思ひははるかますらをかみを
大和 栗山たか子

なく虫の聲に更けゆくつきみれはまつみやこゝそ戀しかりける
東京 後藤喜代子

かへらしとちかひて出しますらをも月にやしのふ古さとのそら
東京 林艶子

和歌の浦つき見し頃はむかしにて今はたつゆのそてにやとれる
愛知 後藤のふ子

月すめはまつふるさとそおもはるゝいたけき妹の遊ふをもかけ
愛知 松本たか子

月かけの清きまに〳〵いつしかもこゝろはとほき天のはしたて
土佐 秋月廣江子

はゝそばの母のそひれのかや越になかめし月にかわらされとも
大阪 船越小仙子

から國の銃をまくらのいくさひとこよひの月をいかに見るらむ
相模 森田白菊子

おもひやるかなたも空を仰きてはおなしこゝろの月にかよはむ
愛知 木下鶴子

おもしろく月を見るにもしへりやのみいくさ人を先おもふかな
和歌山 高内さくら子

秋の夜はおもひそいつる和歌の浦の名草のやまに出てし月かけ
河内　田中　たつの子

うちひさすみやこの友のおもかけもめにこそうつれ秋のよの月
東京　星野千代子

ゆくえなき思ひもすなり秋のよのつきすみ渡るはんのおはしま
愛知　不破きみ子

たらちねもこよひは月に端居してわかみの上やしのひますらん
東京　入江菊子

さやかなるこよひの月におもひやるみいくさ人も國しのふらん
東京　伊藤ふみ子

月をみてみいくさ人をおもふ夜はおなしこゝろに打なかむらん
東京　伊藤とし子

うちみやる古郷のかた月いてゝさやかにてらすそらもなつかし
東京　伊藤竹子

國しのふみいくさ人やいかならむちさとをかけて月のてるよは
上野　桐生かつ子

なつかしき君かおもかけすみわたる此月かけに見るよしもかな
東京　吉岡龜子

みさきもる國のますらを思ひやりて月見るよはの袖そつゆけき
河内　田中しづの子

すみわたる今宵の月をもろこしのいつこにせこは眺めますらむ
津　茨木みす子

なにしおふ月はあかしにすまの浦思ひやらるゝ秋のよはかな
安藝　堂面幸子

さよふけて月のみさゆるあきの夜をおもひはとほし遼陽の野に
東京　小島榮子

遠津人松浦のおきのつき見れはもろこしまてもゆくこゝろかな
八王子　山口まつ子

限もなき月のひかりにからくにののへはいかにと思はるゝかな
東京　田中千賀子

春かけて嬉しきものとなかめしをなとて秋のみ悲しかるらん
東京　平野千茂子

冴えわたる月さへ今はなかなかに胸のいたみとなるそうらめし
東京　田中千代子

月みれはとよみしうた人いまさらに悲しきときの思ひてとなる
津　神田みよし子

わかせこかとほき旅ねの空もなほなかなしひかりに月やすむらん
東京　五十嵐清子

澄わたるこよひの月をみいくさのとりてもる君いかに見るらむ
磐城　三森須磨子

澄わたる月にうそふく虫の音もあら野をしのふたれとなりけり
岐阜　中島もと子

さやかなる月見る夜半になにとなく先なつかしきふるさとの友

松間紅葉

天

松はかりたてると見えし木の間より
匂ふ夕日はもみちなりけり
名古屋市裏門前町三丁目　木下鶴子

地

わらし山わかきもみちの色にたに
そまぬや松のみさをなるらん
東京市赤阪區青山北町　岩谷淺子

人

東京麻布區東町四十七番地　林　環子

ゆふ日影さし殘るとも見ゆるかな
まつの木の間ににほふ紅葉

甲之部

下野　木邑勢津子
つたかつら紅葉せしよりときはなる松のみとりも色まさりけり
埼玉　横田須磨子
松立る峰はたやまのもみちはゝたかおりかけしにしきなるらむ
肥後　德永廣子
いつのまにしくれそめけん常盤なる松の木のまに匂ふもみち葉
熊本　日高かす子
もみち葉の錦そ見ゆるやまひめのすみかや松の木の間なるらん
東京　林　艷子
ときはなる松のみとりのありてこそ赤き紅葉のいろまさるらめ
東京　奈良たく子
ときはなるまつのみどりをたてぬきに錦織かくつたもみちかな
大阪　田中郁子
ときはなる松のみとりの葉かくれにさやかにみゆる初紅葉かな
東京　松本　くす乃子
いつのまに時雨のあめや染つらん松の木の間にみゆる紅葉ば
東京　佐野ふき子
夕ひかけ入にしやまの松はらにちしほの紅葉てりまさりけり
（以下到着順）

丙之部

愛媛　高橋[illegible]子
秋ふかみ見わたすやまも松をのみのこして木々は紅葉しにけり
東京　五十嵐清子
神そのにしきと見えてみつ垣の松の木の間ににほふもみちは
靜岡　竹内みつ子
霧はろゝ岡への松にいろはえてぬるてのもみちてりまさりけり
東京　田中千代子
みとりこき松と紅葉とこきませてみやまの秋のながめうれしき
東京　田中千賀子
みとりこき五葉のまつかはかくれに山のもみちは色まさりたる
熊本　田代綾子
唐にしきさらすとはかりみゆるかな松にかゝれる蔦のもみち葉
兵庫　高橋町子
遠山のまつの木の間にほの見ゆるかえての紅葉いとゝうつくし
鹿兒島　妙子
芦の湖わたる時雨のはれまよりまつか枝そめてもみちほの見ゆ
河内　田中　しづの子
なかくに松のこのまにまさりてそつたの紅葉は色まさりける
津　神田　みよし子
千代ふへきまつのこのまに露のまの色をあらそふ秋のもみち葉
石川　北里隆子
雨はれてゆふ日照りそふをちの山もみちの色は松のまにく
東京　吉岡龜子
枝かはす松のみとりに色はえてやしほの紅葉てりまさりけり
茨城　佐藤八重子
なかくに松のましろもおもしろし山の紅葉のところくに
八王子　山口まつ子

むら時雨かずふりそへて色ふかく松の木の間にそめしもみちは
大阪　増田つた子
初瀬やまもみちのにしき織いたすぬきこそ松のときはなりけれ
東京　伊藤竹子
朝霧にぬるてのもみちてりそひてみとりめにたつ松のむらたち
東京　伊藤とし子
夕つくひ入ても松のこのまよりちしほのもみちくれんともせす
東京　伊藤稲子
おしかなく外山の松のこのまより色もこかるゝつたもみちかな
東京　小島榮子
枝茂き松のこのまをもれいてゝにしきと見ゆるつたのもみちは
東京　佐野とみ子
松はやしみとり色こき木の間よりやしほのもみちにほひ出たる
東京　入江菊子
立ならふ松の木の間の色はえてくれなゐにほふつたのもみちは
磐城　三木須磨子
松のまにみゆる紅葉のにしきにはかしこき神もやとをしむらん
神奈川　中山菊子
みとりこき松のこの間に色そへてちるもうつくし峰のもみちは
前橋　林盛子
たちならふ松の木の間のしけみよりにしきぞ匂ふたちはなの山
愛知　後藤信子
松が枝のひまよりもるゝむら紅葉思ありけにも見へわたるかな
愛知　船田鶴枝子
松間より見ゆる紅葉はちらほらといつか秋しもふりそめにけん
岡山　黒瀬政野子
緑なす松の葉かけにいとゆかしうすくれないにそめしもみち葉
和歌山　高内さくら子
神無月しくるゝまゝにたつたやまもみちにのこる松も見えけり
大阪　船越小仙子

濃みとりの松の木の間をいろとりてはゝその梢うすもみぢせり
三河　永井さい子
松の葉のみとりをあやにもみち葉のにしきおり出す高はたの山
大和　栗山俊子
あらし山みねのもみちの染いてゝ松は木のまとなりにけるかな
相模　森田白菊子
いつれをかほこれる色と眺むらん松のはこしにうつるもみちは
大和　栗山たか子
時雨してもみつるころはたつた山みねの松かえあらはれにけり
東京　後藤紫代子
松のまより色とる紅葉うすければいまひとたびの雨そまたるゝ
上野　木幕千代子
みとりなる松の木の間のもみちはゝにしきの上の綾と見えける
埼玉　横田やな子
茸狩にわけいるやまの松はやしまつめにつくはもみちなりけり
埼玉　横田秋子
山松の木の間のもみち來てみれは千代をへたてゝ色つきにけり
埼玉　澤田榮子
色ふかき松のはやしにましはりてかほくれないに染るもみち葉
愛媛　廣田政榮子
あかねさす夕日か岡の松が枝にいろはへかゝるつたもみちかな
愛媛　廣田薫子
松風のふきのまに〳〵ほのみゆるおもはゆけなるうす紅葉かな
越後　松永しげ子
花よりもゆうひに赤ゝもみちはのもゆるもゆかし松にましりて
岐阜　鈴木まさの子
つたかつら松より松にまつはりておもはぬかたに紅葉してけり
神戸　今西操子

千代齢ふときはの松にいろ添ふはいま手折り来し紅葉なるらん　河内 田中 たつの子
千年をはなとかちきらぬ山まつにはい松はれるつたもみちかな　東京 星野千代子
なゝ色に暮るゝ空にもにたるかなもみちはそゆる松のむらたち　東京 堀江田鶴子
秋ことにきゝのこすゑは紅葉すれと松の緑りはかはらさりけり　奈良 天野照子
唐錦いろこそはゆれゆふひさす松のこのまにそむるもみちは　津 神田 しよう子
夕はえの色にえならぬ入日さすまつの木のまの秋のもみち葉　新潟 岩本翠涙子
そめいたすもみちの色にかすか山まつのみとりも秋をしろらん　東京 小林芳子
たつたひめ松と紅葉をたてぬきににしきなりなすかつらきの山　近江 秋原治子
我にはの松の木の間にはなさくとみゆるはつたの紅葉せしなり　東京 青木たま子
なかなかに松のひまよりあらはるゝ紅葉そいとゝ床しかりける　東京 大枝扇子
立田山まつのしつくやそめぬらむ下のはゝそはもみちしにけり　名古屋 不破きみ子
蔦かつらこゝろありけに紅葉せりいろもときはの松にかゝりて　肥後 徳永萬壽子
朝日影てるかとみれはたかれなる松の木のまのもみちなりけり　肥後 徳永而有子
立ならふ松のしつくやそめぬらんけさは木の間にもみち色こき　肥後 秋吉輝尾子
生しげる松のみとりの木のまよりにしきおりかく紅葉をそみる

みとりこくそめし松間のにしきこそ立田の紅葉しのはるゝかな　青森 相馬冬子
ときはなる老木の松のかけたかく紅葉のにしきおりいたしけり　肥後 佐々有隣子
朝日かけ夕日もてりてみとりふかき松の木末ににほふもみちは　肥後 佐々小琴子
山かけにふりおもしろき紅葉はの松のしつくににしきそめける　東京 田中都志子
見渡せは松のみとりの木の間よりにしきと見しは紅葉なりけり　東京 瀬藤ちか子
ときわなる松の木陰にまはゆくもにしき織なす庭のもみち葉　東京 瀬藤ちよ子
茂りあふまつの木の間を紅葉はのおりなすにしき色うつくしき　東京 大原よし子
むかつをの松のこすゑのくれないに匂ふは蔦のもみちなるらむ　東京 杉田繁子
築山のまつのみとりにたちましろ紅葉も千代のおきにみてまし　陸前 前田河千年子
みとりなす松の木の間の蔦もみちいつれの庭のあるしなるらむ　陸前 前田河みさを子
まつはかりならひか岡と思ひしにあめにぬるての色そみえける　東京 望東子
常盤なる松の緑りの木の間[illegible]りもみちのにしき見え渡るかな　石狩 加藤桂子
松か枝のこなたかなたに山ひめのかくるにしきや紅葉なるらん　東京 大木光子
相生の松のみとりにくれなゐのもみちいろとるなかめよきかも　石狩 加藤濤惠子
東京 中島茂子

年ふりしたのへの松にときならぬはなかとみしは紅葉なりけり　群馬　竹のふし子

常盤はなる松のひまより紅葉してあきもゝなかとなりにける哉　下野　金子とし子

みとりなす松にましりてとり〳〵の色うつくしき峯のもみちは　東京　牛山素子

吹きおろすまつの嵐にほのみえてゆふはへにほふうす紅葉かな　伊豆　岡田はな子

緑なす松のしげみにかすか見ゆあれなつかしき紅葉なりけり　岡山　小山松枝子

ときはなる松の木のまに淡くこく色をきほひて見ゆる紅葉は　東京　高橋珍子

ときはなる松にも秋のいろそへてこすゑにかゝる蔦のもみちは　清國　宮成梓子

つたもみち色つくからに松かせのおとし時雨のふるかとそきく　秋田　細矢はる子

いろにいろかされし蔦のもみちはにときはの松も秋をしりけん　薩摩　松原みれ子

なか〳〵に山にみつより床しけれ松の木のまにみゆるもみち葉　埼玉　澤田房子

常盤なる松のこの間をたのみにて色こくなりぬみれのもみち葉　愛知　近藤綾子

神垣のかたへにしげる松か枝にてりそふもみちにしきかと見ゆ　八名郡　山本いち子

染めのこす松のしげみをはへにして一しほめつる紅葉なりけり

●正　誤

前號和歌兼題(古寺)德永而有子作「雲かゝる高ねに鐘の音せすは年ふる寺のありとしらまし」とあるは「しられし」の誤まり茲に是正す

女鑑兼題

歌

十一月　初冬時雨　静女

十二月　氷始結　社頭雪

文

秋日汽車旅行記

雪の日に満州の寒氣を想ふ

随意　●和歌、短文、今様、新体詩

●投稿定規

一女子は何人にても投稿する事を得

一用紙は文章及新體詩は半紙、和歌今様は半紙半截又は端書を用ふべし

一題異なるものは必す用紙を別にし、二葉に渉るものは必す紙捻にて綴り置くべし

一題目の下には必す住所姓名を明記すべし

一文字は必す楷書にて句讀點を施し鮮明に認むべし

一文章は一行十五字詰にて兼題のものは四十行以内

短文は二十行以内に限る新體詩も亦廿句以内の事

一兼題文章及短文今様新體詩は總べて一人一篇づゝに限る

兼題和歌は一題に付一人一首、傾歌は一人二首に限る、但上下句中二音の漢字三字を入れ他は悉く平假名にて認むべし

一投稿宛名は國光社女鑑編輯局とすべし

一原稿〆切期日は雜誌發行の廿日前即ち每回前月十日迄とす

一〆切期日に後れたる兼題は總て共撰に入れす但短文短歌今様新體詩は次號に掲載すべし

一右の規定に違ひたるものは總て採用せす

兼題當撰者には文は天一圓、地五十錢、人三十錢、歌は其半數に當る計算を以て代價相當の書籍を呈す

月に對して懷を述ぶる文

天

大坂市南區惠美須町二丁目六六三番屋敷 船越小仙子

我が身一つの秋ならねども、物おもふ身の夢おどろきやすく、手枕さむき曉の風に目ざめて窓を押せば、有明の月ほの白う庭の梧桐を照しぬ。あはれ月、おもへばむかし弘徽殿の細殿口を照しゝも春と秋とはかはれども光は同じこの月なりしならむ、さゝ波や石山寺に小夜ふけて紫女の黛照しゝも清きは同じこの月なりしならむ、小鹿なく嵯峨野の秋の露ふかく松風かよふ琴の音に駒をとゞめし直衣の袖を照しゝも影はかはらぬこの月なりしならむ、鎌倉山に夜は更けて賤や賤しづの小田卷くり返してと舞ひにし人の淋しき胸を照しゝも露はかはらぬこの月なりしならむ、さては天の原ふりさけ見ればの血潮の袖を照しゝも、月やは物をおもはすると歎きし西行法師のかこち顔を照しゝも、今こんといひしばかりと待ちあかしたる素性法師の草臥顔を照しゝも、月は等しきこの月なりしならむ、あはれ月、人の言葉の通ひなば、月と人とはいかに興ある物語をやせまし。見上ぐれば、有明の月梧桐を殘して、影はやう〳〵にうすれゆきぬ、あはれ有明の月、夏ならば時鳥なきつる方とながむる人も多からむに。

評 流水今日、明月前身

地

東京下谷區御徒町三の三三 岡田柳子

拭ひたるが如き、久方のみ空に、高くとぶ雁の、數さへ明に、數へつべく、遠方の賤が藁家さへ、打見やらる。二千里の外と、眺めけむも、かゝる夜にてや、ありけむ。顧れば、早六年の昔とは、なりぬ、はら

からも、およばず、親しみむつびし、我友季子の君と、虫の聲々面白さ、庭の芝生に、下りたちて、隔てなく、互の希望を語らひつ、更けゆく事も、打忘れて、興じたりしは、あゝかゝる夜なりしよ。さるに今は早西と東に、立ち別れて、我のみは、ちかひし事の、空しうなりしを、君よ愈學びの道の、奥深う、辿らせられ、幹き教への師とさへ、なり給ひぬ。あゝ今宵懐しの友には、名所ときく東山に、御心樂しく、我よとぞ思ふどや、眺め給ふらむ。月の君よ願はくは、清くさやけきみ光りに、學びの道を、てらしもて、まどへる我の、知るべと、なりてよ、など思ひつゝ、そゞろ歩を、進むれば、いつしか柴折戸の、あたりに來ぬ。おゝいにし年、待ちにまちたる、季子の君を、迎へしは、こゝよと、なつかしさ堪へがたう、來もせぬ君と、知りながら、思はず押し開きし折柄、月をかすめて、雁一つら、なき渡りぬ。友戀しと思ふ我身には、連れだつ雁の、羨しう、打見やられてなん。

評　情恨かれ深し

人

薩摩國伊佐郡山野村字布計　松原みね子

雪花に、鳥の音に、見聞く人の心に依りて、床しうも、はた果なうも覺えらるれど、秋の夜の月ばかりいみじきはあらじかし。今宵ちりばかりのくまもなく、さし登る月にうち對ひて、たらちねの親はらからと、同じ此もなかの月を、樂しく賞でし昔のいとなつかしうなりぬ。今は身にしむ虫の音も、我奏づる小琴に歌ひ合すなどうち興じ、千々にものこそなどよまれけん心は、露ほども知らですぐせしを、あはれ故郷なる母上にも、好ませられし月にはゆかりある阿古屋の曲をしぬび出でさせ給ふらむか、はた清けき月にもそむかせられて、いたつきの床におはす父上をいたはらせ給ふらむか、照り渡れる月の鏡にも見むよしなきぞうき。常には今は我身に幾十倍ましたるやさしき嫂君のおはするなれば、己れは夫を扶け、家事につとむることこそなかく～に父母君のみ心も安むるなれと思ひ定めしを、今宵はあやしくも堪へ難きまでなつか

しうなりまさり、しばしが程にても御枕邊近く侍りて手づからみ藥などさゝげ參らせばやと、いと更くるまで思ひつゞけて、我身一つの秋かと覺へぬ。

評　情眞景眞、事眞意眞、すべて眞中より流出す

土佐　秋月廣江子

月見れば千々にものこそ悲しけれ、まことや、我身ひとつの秋にはあらぬものを、とかくにひとり歎かるゝをいかにせん。

虫の音面白み、野に立ちて限なき月に笑まひつゝ、月の歌誦せしは幼き昔の夢よ、淋しき原に亡き父上の御柩送り參らせし時新らしき墓標てらし〻月の宿世を語るに似たるを見しより、月に悲哀の影みとめ、我胸に深き印象は刻まれぬ。

かくて世の浪と戰ふべき運命となりしより、またく月に嬉しき影は見えずなりぬ、希望の光消えし時、寄すべき岸に迷ふ時、世の無情を嘆つ時、我煩悶にやせしかげをうつして、奇しきまで我涙を呼びぬ。

今宵も月さしたり、しかも冴えにさえて……あゝまたも胸のみだるゝ事よ、歎くとて月やは物を思はする、さはれ我はひそかに訴へん、月よとこしへに、弱き子が涙の袖にやどるをやめよ。

下野　松井操子

花やかなりし、夕日は、いつしか、西山に傾き、諸行無常と、告げ渡る、遠山寺の、鐘の音、かすかに、聞え、枝たれて、花こぼるる、萩の下に、すだく、虫の音、露ほしげに、聞ゆるなど、いと、哀れにこそ、おぼゆれ。今宵は、仲秋の十五夜とて、いつになく、空も、澄み渡り、雲の行來も、絶えたれば、月の光の、いたらぬ、くまなく、心地よさ、いはん方なし。斯くの如き、月夜を、よそにして、寢に入らんも、本意なし、と思ひ、いざ月見せばや、と椽に出で、しばし、眺めて、ありしが、思ひぞ出づる、遠征の將士。彼の血汐流れ、風なまぐさき、滿洲の野にありて、傷手になやめる、つはものを、照らすも、此月なるべし。

彼處に、此處に、横はれる、屍を照らすも、あゝ此月か、栖を衛の武士は、明日をも知らで草枕、抑如何なる、夢をや結ぶらん。月もし、心あらば、遠征の士をして、露營の夢、あたたかならしめよ、彼の「矛とりて、月見るたびに、思ふかな、あすは屍の、上にてるやと」と讀みけむ人の、心中そぞろに、偲ばれて、心も千々に亂れぬ。斯く國を思ふ、誠心深き、君だちには、いかで、家をも、忘るべき。空行く雁に、夢破られ、雲井はるかに、かかれる、月を見て、そぞろに、故郷を思ふ心や、如何ならん。など、思ひつづけける程に、夜もいたく、ふけ行きわたりは、寂寞として、只聞ゆるは、千草にすだく、虫の聲々のみ、仰げば、月のみ、仲天に、時を得顔に、さえ渡りぬ。

群馬 竹のふし子

久方の雲井に高く澄み渡れる三五の月の如何に氣高くも清らなるよ、さはれ此光り目出度き月とても始めよりかく輝きしにはあらぬぞかし、世はぬばたまの闇の夜に生れ出でたる新月の綾目も分かぬ険はしき道を只一人辿り／＼て漸々に三日の頃いと細やかに希望の光り愛らしくあらはれてよりは雨の夕べも風の夜もはた浮村雲にさへぎられても只一筋に志す道を急ぎて怠らねば身にそふ光いよよしるく遂にはかくこそ榮ある望にも達し得しなれ、さればにや古より此月を望月と稱へて歌人に詩人に賞せられ畏けれ共上は九重の雲深きわたりより賤が軒もる月に至るまで皆とりどりに愛でらるゝも實に宜なりかし、かゝる榮え美はしき月にしてなほ浮世のならひ是非もなく滿つれば缺くるうたてさよ、さは去り乍ら共缺くるに當り泰然自若露さはげる色なきこそ日頃用意の程も計られてなん、そも心ありての業なるかいぶかしきは月のふるまひよ、あはれ榮枯に移り行く世の姿を寫さんとてか將叉定めなき人の世を戒めんとてかかく滿ちては缺くるに絶間なきは、あゝ冴えに冴えたる今宵の月を、諸々の人、はた如何に見給ふらんか。

相模 森田白菊子

月としいへば秋、秋としいへば月なぞおもほゆ。四つの折々めで

たからぬはなけれど、稱へなすべきおもむきのなきにはあられど、人の情の深くこもれるはこの秋の月、千々のあはれのわきいづるはげにこの月なりけり、古の人の言の葉も今もおなじとつく〲思ひ入るぞかし、端居して庭になく虫のあはれを耳に、ひとり空をながむるに、ときすませる月かげに深き思ひのはてもなし、そぞろにしのぶ二なき友、わが内氣なるをひきたてくれし友と心をかたりかはせし月もこの月、月はあれどあゝ友は、今はおくつきのつゆにやどれるかげをいかに見ますらむ、わが身はあれど、のこりて月にぞなやみぬる、月は光をかへれども、かはれる世をば照しつゝ、やがて榮枯を語りしが、今は日露の事おこれるを、はた國民の義勇公に報ぜるを、天つ日かげのいろまされるを、あゝ月はとこしへにかはらざらめど、我身はやがて友のあと月よ此世の外も照らせよかし

◎　　　　東京　杉田繁子

幼き頃よりいと親しき友の、年頃さる縣に物せしが、都に上りしとてふとふりはへきたる。久しぶりなる對面に、物語のかぎりなければ、今宵はこゝにひとよ、宿らばやといひて、打とけものしぬ。折しも、舊き暦の望の夜にて、ひるより空にむらなす雲もなきに嬉しく、欄にわらふだしきて、くろゝなまつに、暗うなりゆくまゝ、向つをの森より現れし月の、中空にかゝりて、滿渡る光えならず、庭の木高き松の影短く、地に靄きて、家の奥までさやかに照し、前栽に咲亂るゝ七種の花は、そゝぎし水の露をかざして、さながら、すゐさうの玉をまろばしたるやうなるに、叢より虫のとりどりなきあらそへる、また月にうかれてや、ひとつ、ふたつ、烏のねぐら離て、なきさまよへるなどは、秋のあはれをとりあつめしやうにて、いとをかし、思へば過にし年の今日なりき、今宵にをとらぬ月に、三人四人の友どち集ひて、歌よみ、はた、物の音など、しらべあはせしに、空にもひびきて、またなくあはれなりしかし、

まれ人と語る今宵は月かげも
　五百夜の長さつぎてあれかし

と、いへば友も

過し年月に遊びし樂しさを
　くりかへしても語る夜半かな

まきの板戸も明ながらに、あかさばやとさへおもはる。

◎　　　　前橋市　林　廣子

如月の花よりもと、愛でつる秋の月も、漸く痩れて、すみ上る月は、軒端に近き松が梢にきら〱とかゝり千草にすだく虫の聲共に、昔を忍ばしむるが如く、ありし事ども思ひ浮ばれ、いと哀れな催しぬ。

あゝ去年の今宵もこゝにきて、樂しく月をめでつるに、今宵はひとりかげを地上にうつしぬ。思は去にし年にかへりぬ。遼陽は占領せられ、津々浦々の民草まで或は旗行列或は提灯行列と、互に祝意を表したるをおゝ月の君よ今におぼえ居玉ふらん。思は先へと進み進みて、果しなく、かはかりに思ひ出多き拜秋は、早や再びめぐり來りしなり。今や戰局は和局に近きて、北米に至りぬ、あゝ講和の是非云々、至る處語らぬはなく、人心一致して國家を憂ふるぞ斯ころ山翁、おみ引漁人に至るまで、……あはれ今宵の月の如、たゞよふ雲の治まれる御代萬世に榮えませ、御代末長く榮えなん。袖ひるがへす秋風に、かたへにありし糸すゝき露をはらひてちる樣のいと淸らなり。仰げば月は天上高らかに光は夜半にみち〱て、四邊寂として聲なし、あはれ月よ君は遠く忙々なる滿洲の荒野を照しつるかあゝ

幾多忠勇なる丈夫を永久に守り玉へよかし月の君よいざさらば……

◎

愛媛　船山鶴枝子

あゝ思ひ出深き今夜の月、げに、この日こそ妾が爲めには忘れんとして、忘れ難き月なれ、思へば去年の今日、楓の葉重々しう、風にゆられて心地よき夕、それよ此の木の下影に語りし花子の君、情に燃ゆる手をとりかはし、僞り多き世に、あの月の如、高く、潔く、美しく、ありたきものよ、二人は何所の、はてに、ありとしも、目ざす道は異るとも、心は常に行きかひ共に心を合せ、荒熊吠ゆる、浮世に勝たなんと、契りし言の葉は、今猶心の奥に殘れども、月は同じ光にかゞやけども、あゝ如何にせん、彼の君は今は世にいまさずや、はた姿は、ちかひし事の如く清き心にて、ありつるか、うたてや一點の雲もなき月に比べんには、余りに、我が身の、をとれるを、かく思ひては、とゞめあへぬ涙は、瀧つせの如く流るゝを、あゝ如何にせん、今はのきはに、力なき手に我が手を取りて「君よ美しき生涯を、送り給へ」と、のたまひし彼の君は、あの星となりて、頼み甲斐なき友よと、嘲けり給ふには非らざるか、ゆきにし者は、いたづらに、悲しまれども、汚れに染みし舟を如何にせん、嗚呼されど、過にし事は悔むとも、かひなし、たゞ悲しまむよりは、理想の彼の清き月に、習きて、牛の歩みは遲くとも、いかで達せざる事やあるべき、されば、花子の君も望み給ふなるべし、あゝ懷かしの友よ、汚れの道にふみ入らざる樣、導き給へ、嗚呼月よ、涙に曇りし眼を、打ち拂ひ、雲井の空を、仰ぎ見れば、月も星も、希望の、かゞやきのごと、いよいよ光りを增して。

◎

東京　星野千代

あはれ、さやけく、清らなる月かな、虫も啼き出でぬ、庭の千草の、露にむせびて、故鄕なる我父、病床なる母上の、此夜の月を、如何にながめ給ふらん、二千里外遠き界に魂もあくがれて、我子の上にも及ぶべし、月よ、鏡と照りまさす心づくしの秋風の今しばし吹き增りて、其面をば、みがゝずや、すみたる面の、いよいよ光さし添ひて、照り極まれる其かほに、此世の影も、こゝまなくうつり出で來なば、あはれ、み軍に從へる我子の姿勇ましき其働も、軍營の夢も、共に、見ゆらんに、はかなき此身こそ、添はれざれ、嚴なる父の戒は、よも忘るまじを、猛く眞なる汝が父の赤心は、常に汝が身邊にまつはりて、獨り暗路をたどる時は、道知べとなり、矢玉の雨の守りの神ともなりてあれば、忠と、勇とに、身を持ちて、能く泣も、汝が責をば、盡うし、一天の君の恩德に、報ひ奉れ、汝が弟も、こん年は、召されて、隊の中にも、敢まへ入れられぬべし、されば、幼き女子共のみなるが、東に在る姉も恙なきことなれば、ゆめ家鄕の空を思ひ起すなかれと、例の勝氣の、御心に、妹のふりわけ髮膝にかい撫で給ひぬべし、父君は早や寢給ふらん、池のほとりに、まれく尾花藤袴など、如何にあはれ深からんよ、あゝなつかしの故鄕や、去年叔母樣のゆるしを得てうつし植ゑたる一本小萩、數多の草花にも立ちこえて、生ひ茂れるを、ちかひし日頃のしるしと、獨りほゝ笑まれけるが、昨日今日秋の村雨にいたゝ色づきて、今夜の月を招きがほなるに、下露の風にみだるゝなど、分ち給ひし今は、世に亡き師の君の上、いとゞしのばれて、狹き袖に置き餘るつゆを如何にせん、やうやう荷物取り出でなどして、教を受けし所々、見るともなくて讀みもて行けば、いとゞ心もなぐさみて、須磨の浦わの鹽たく烟、明石の浦の朝げしき、あはと遙けき淡路島山、流るゝ雲の行かひにたみのゝ島の田鶴が名所など、取りあつめたる所の樣に、昔のあはれも、偲ばれて、月のおもてを打ちあふげば、折しも浮雲の、みだれそめ來て、さやけき影をたちかくしぬ、あはれ。

◎

大和橋かほろ子

宵の程より騒がしかりし、此處彼處の觀月の宴も、今は果てゝ、蟲籟聲なく枕頭近うさし入る月影ばかりほの白う靜けき夜、厨のあたり絶々に鳴くこほろぎの聲のみさえて、眠られぬまゝ窓の戸押せば、いや高く澄める天つ御空に懸れる月の影さやかに、思はじとすればいよゝ思のます鏡、せめて清けき此夜半を心靜かに夢卷の悲しき糸や繰り返さなん、

實に妾が身ほど幸なきは世にあらじ、幼き折父上母上に別れまゐらせ、云はゞ根だえし姫小松の、明日をもまたで枯るべかりしを、みなさけ厚き伯母上が膝に養はれてよりは、世に吹き荒む嵐も胸の跡もまぬがれて、憂きは過ぎにし夢とのみ。世を樂しくも暮せしが、今にして思へばそは春の野に立つ陽炎の消なむ間の現なりしよ。

あはれ飛鳥川の淵瀨定めぬ、うつし世のたとへにもれでや、又もや賴みに賴み參らせし伯母上は、去ぬるきさらぎの中旬、假初めの病の重りて、花咲くや春をも待たで、日影に消ゆる朝露と共に、あはれ儚なくなりましぬ。あゝ如何なれば斯くも辛らき妾が運命ぞ、さらでだに、か弱きは女の身なるを、まして世に、寄る邊なき孤子は、大海原に楫を絶たる一葉舟の、何處を的にか漂はん、思へば悲しき身の程や。

夜や更けぬらん、村の乙女が砧打つ音も今はたえて、更けて寒けき荻の上風、そゞろ惱める身にぞ染む、あな堪がたの月の夜と、涙に曇れる眼あげて、振り仰げば人の世の運命に泣ける孤子ありと、知るや知らずや、月は冴え返りつゝ、西へ〳〵と急ぎゆく。

◎　　能登　加野こひ子

心づくしの秋の宵、何となく思亂るゝにぞ、吾妻琴とりて、露けき庭の眞中にいでぬ。仰げば月天心に澄めり、物哀れなる夜の風、萩の下葉に音づれて秋もやゝ更けにけらし。草間にすだく虫の聲雨よりもしげくて、心ある人の膓を九回せしめぬ。

今は皆もろこしに……

われは撥取りて、おもむろにかなではじめぬ、一揚一抑或は急、或は緩、曲一曲奏づるにつれ、われもなく人もなく、哀れに冴え冴えしたる音色の其れのみ、悠々と澄み渡って、

散りて色香もなきたまの、ありかを尋ね水馴棹、

のあたり節細やかに調高く、あはれ波濤幾里をへだつる彼方の空、筒を枕の夫の君の、み胸の裡に通ふらんとばかり思はれしが、曲は進んで

相見ん事も蓬ヶ島つ鳥、浮よなれども、背戀しや〳〵……

とかなでし折しも、鳥の悲鳴の其ならで怪しき音して、ふッつりと琴の絃は斷れたり。

昨日かへたる絃なるに、歌の意とこの身の上、昔こひしや、戀しや昔と、切なる思は調の上にも現はれて、爪に力のこもりしならん。

われは悵然として月を仰ぎぬ。

瞑目して思を千里の外にはすれば冴けき月下、限りなき思を吹く笛の音にあらはして、荒野を逍遙ふ夫の君のみ姿彷彿として眼前にをどりぬ、あゝ月よ、やさしの月よ、意あらばつたへ給へ!、この胸の裡を……。やよやさしの月よ!……。

◎　　神戸　今西操子

咲き匂ふ花の下蔭、踊に照らす春の月、あるは、短夜の更けやすく、あたりのいさゝ小川に水雞鳴くなる夏の月、さては、寒さはげしく、庭の手洗鉢に、こほらむ斗り冴え渡る冬の月など、これ等の月は人の心ごゝろにて、樂しくも、はた、悲しくも見ゆる物なめれど、誰が目にも、秋の月斗り、悲しきはあらじ、桐の一葉は散り初めて、身に泌むばかりの萩の上風、尾花は穗に出でゝ秋風そよぎ、籬のあたりに鳴く虫の聲々手に取る如く、破窓の松

の木の間より、さやかに塵斗りの雲も見ず秋の最中の月いみじう照り渡りて、空飛雁の數さへかぞへつべう思はるゝ今宵、月見ればと歌ひけん古人のごと、げに哀れに悲しう覺ゆる物なりけり、ましてや、そのかみ、嵯峨野の奥にちりの世を避けて、詫しう過し、つほれの君、蘂萊の果にさすらひて、遙に天皇を偲び奉りし君はや、いかに悲しう見そなはしけむ、いかに思ひや深かりけむ、あはれ中々に悲しき思ひを、詩に誦し歌に詠じて、心のくもりを晴らし給ひしとなむ、これらくさ〲のすさび、今なは世に傳へられて、幼き童の口に歌はれ、我等また秋來る每に、そのかみ人の面影偲び出でゝは、さらぬだに秋夜の感こと更、ふかき思ひをかこつなり、あはれ今宵澄み昇る月を仰ぎては、見ぬ世のあて人慕はしく、深山住ひの古さとやいかならんと、そゞろなつかしく、かつては人に知られぬ愚なる身にしあれど、限なく照らす月のかゞみに對しても露いさゝか耻かしからぬやう、心の玉をみがゝでやは。

火　阪　田　中　れ　ん　子

◎

嗚呼今宵の月、思ひ出づれば去年の秋、風もいたく身にしむ頃、いとゞ亡き母樣の戀しうて、今は得たえぬまゝ、御墓詣でと父上共々古鄕に歸りぬ。

兵庫より乘船、船室には我等二人と、陸軍中尉の軍服着けたる士官一人、筋骨逞しく天晴れの武者振、やがて戰場にて高き功勳の程、思ひやられて、そゞろ床しき心のせられつ、

船の進むに、つれて淋しきまゝ三人の中に談話を交へぬ、士官は父に答へて『ハア僕も近日出發するです、やつと思ひが叶つて今度は死ぬる番らしいのでなアハ……』と快活に、妾は女の、殊に母樣亡き身何氺も涙もろく現在死に行くてふ君を拜するに忍びず『まア』と一言、後は得云はで反面けし頰にホロリ一雫、父樣はと見れば、之れも曇りしお目を瞬き給ふ、

『ヤア好い月ですよ』御聲に涙おし拭ひ、仰げば十日あまりの月は、大空高く澄み上りて船體を隅なく照らせり、其中に心ざす港の近づきければ士官には其旨を告げ『何うぞ御無事で、』と云へば『ヤア有難う、何れ御禮にと申度いが明日が知れん身體ですからなアハ……』『では』後に心は殘れども父上の急がし給ふに其まゝ別れ參らせぬ、あゝ、そは去年の今宵、其後妾は月見る每に、いかに在すらんと思ひ〱て、早や一年過ぎぬ、御名前はたゞ村松と聞きしのみ、あゝ村松中尉御無事にか、今宵此月をいかに眺め給ふらん思ひ出づるは去年の今宵、祈らるゝは中尉が御武運長久、

おなじくは咲きて匂ひて櫻花散らすもがなと祈らるゝ哉

豐　後　佐　藤　家　子

◎

くれぬうちより山の端高くさし出る月の光のさやけさに、うすくれなゐの峰の紅葉一しほうるはしう、千草の露も、黄金の玉をかざせる如く、月は御空にすみのぼりて、うかれ出でしはたおり虫の、こゑさへいつになくも物かなしくきこゆるもことわりなりや。思ひかへせば去年の今宵なりき、ほどちかき朝日小學校に幻燈の催しありしゆゑ、はらから打そろひ、去年の菊月のなかば、なき數に入りたまひし母君にしたがひ參りて、稻穗いでそろひし山田の右手に、清くながるゝ鮫川をわたりてゆきぬ。いでかはる月影のおもしろさ、あるはいさましなど語ひつゝ、幼弟が母君のむれをたたきてよろこびしも、今ころにかありけんなど、ひとり立いでて、ふけゆく月にむかひ、昔のしのばれて、せきくる涙止めあへず、草葉の露もおきそひたる心ちしぬ。あはれ今宵の月は、いかにして姿が思をますならん、さるにてなつかしきは亡母樣かな。

岡　山　み　ど　り　子

◎

萬籟聲をしづめて明月ひとり仲天に高くすみ渡り、にごれる人の世も今のみはとおもはるゝばかりなり。さてもさやけきこの影はいづこもかはりはなきものを、清くまどかなる月にむかひても、ちぢに物こそかなしけれとかこつもあらむ、はたむつまじきまとゐに妙なる音をもてあそび、詩情あふれて夜をふかすもあるらむ、

たゞ鏡のごとき月ぞ知るならん、世のさまぐ\なる人の心をば、かへりみれば身に一もさむることなくして、去年もことしもおなじ月にむかふ耻かしさよ、つねに兄君の勉强せよ時ををしみて、と仰せられしを、あだにせしとにはあらねど書見る暇の少なきをいかにせんなど思ひしも、やはりわが心のいたらぬためなりしが、才なきゆゑならん。研き／＼てこよひの月のごとくもりなき胸鏡にゑがきなば、うき世もおもしろく命のぶらん、さては過去のなみだもかはくべし。はかなきためしになく露さへ光をうけて、玉となぞらふべきならずや、あゝ月よ、わが未來の暗黑をもとこしへに照らしつゝまもり給へ、と仰げば、何時のほどにかたむきけむ、月影のわれをあざけるらん樣にて、愚なるものよかゝるいたづらごとおもひつゞけんひまに、讀めよ／＼息のつゞかんかぎり、書けよ／＼筆の禿になるまで時の間もつとめよ怠るなと、はげましがほなり。折しも友におくれし孤雁の月をかすめて、かすかにきこゆる聲、あはれうきよは花に狂ひ、紅葉のにほひにたはむるゝを汝はいづくに去つて冷たき天に鳴かんとはする。

◎　　　　和歌山　高内　さくら子

山月皎々として、斜窓に入り、燈影朦朧として、机を照らし、夜は沈々として更け行くまゝに、四隣寂として、又人聲なし、只庭前の梧桐、わづかに風に飄り、千草にすだく虫の音の悲しげに聞ゆるのみ、萬感千愁交々起り、轉た黯然たり、此に於てか、即ち書をとぢ、立ちて雨戸を排し仰げは一朶の浮雲去りなんとして去らず月は大なる銀輪を被りて、高く松の梢にかかり、夜氣悽然として身をおそひ、そぞろに暗涙を催さしむ、嗚呼果敢な浮世、人生僅か五十年、花顏月貌の佳人も、他日幾何ならずして必ず白髪皺面の老嫗となる、見よ月形を、纎月忽ちにして半月、忽ちにして滿月、而して漸く缺けて復、纎月に還る、反復循環、暫くも一定せざるなり、つもれば、人の老となる、などゝ、いひしも、實にさる事ぞかし、かへり見れば我が過去十七年の生活淡き事ゆめの如し、然れども前途猶遠し、人遠き慮なければ必ず近きに憂ありと、恐るべし知何で奮起せざるべけんや、

◎　　　　肥後　德永　廣子

あはれ思へば今宵こそ名にしおふ中秋の月になんありけるいざや端居してながめばやと待ほどもなく鏡の如き月のすがたはいはくまのみねの老まつにかゝると見る間にうかれ／＼て我宿ちかふうめるころはいとあはれも深くて千々の思ひぞせられぬるあはれつきよ月の君よすぎにし十とせの昔わらはいまださなかりし頃つま琴の師の君を迎へて妙なるしらべに耳かたむけ夜をふかしゝも今宵なりしを今は早此世の人にましまさずかたみに覺しかづかづの教のつゆのしらべさへとしふるまゝにわすれはてゝかなづる事のおぼつかなきは口惜しきかぎりなり御心つくし給ひし師の君もおろかなる我身のふがひなさを草葉の陰にていかに思しめさんと思へばつきの君さへ師の君にあふ心地せられて殊はづかしく覺ゆるもかひなきことゝかこちける折しもかすかにひゞくことの音にしらべ合するふゑの音もことさらに思ひふかくて平家の若武者あつもりの青葉のふゑをもておそびし夜の月も君なりけんと偲べば遠征の兄君の上まで思ひつゞけて日には時雨さへもよふしぬるはかくも限なくすめる夜の君に面を照されつゝも我身はつひにうき雲のためにか思にしづむぞぐちなりと我と我心をせむるになんあな君のすがたさへ見なばいつとなく述懷のねん浮ば自然の理ともいへど消ゆる心地せらるゝぞおろかのきはみなれ今よりは君に心をまかせうき立てんとつとむるにぞあはれを汲ていときよらけく心のそこをすましてよとねがふは月の君

◎　　　　神奈川　野田　さだ子

靜かに笑める月姫よ!。
いかに平和の姿ならずや。

いかに美しき影ならずや。

それよ、去年の九月親しの君静代と語りしはかゝる月の夕なりき。あゝ其のときよ！、妾は都に旅せんとせし三日前のことなりしよ、静代の君は のたまひぬ、君よ！、貞子さまよ！、わらはもこゝひととせ過ぎざる内におなじ都の 客とならん、そなまちてよ！、貞子さまよと。

あゝ其の時其 の夕月は今宵の 如く玲瓏たる姿なりしよ、 静代の君もさなりしよ、 別れての 後もさなりしか？、いな……いな……いなとよ君と袂を分ちて都に上り雨に風に君のたよりを待ちこがれつゝありしに一と日の夕つ 方君のたよりのありしうれしさ今に忘れずさるにあゝ美しく咲きみてる 君の心の花はもろくもあらしにちりはて給ひ圓山一片の碑と變らせ 給ひしとの悲しきしらせあゝ

玲瓏たる月姫よ！、 汝れはなにとて 汝れの餘生を静代の君にさづけざりしかよ！、 汝れ餘生を静代の君にさづけしならば今宵益に君と汝を見得べかりしに、 さりとて静代の君は月の 餘生を願がはざりしよ静代の君よ！、あゝうらめしの月よ！、戀はしの君！。あゝあゝ。さるにても月は玲瓏なるよ！。

◎　　東　京　伊　藤　竹　子

身ひとつの外にくまなす 物もなしと、 むかし人のよみたりしもことひにや、かよひたりけむ。 くまなき月影軒の八重むぐらにもさはらず、 家のおくまでさし入たるは、 まれなるまろうど待つけたりし心地して、 何わざして もてなし奉らむと、 せばき家の 内をはしりあるく、 されどあわびさだなかたもとめおかざりしかばみさかなもとゝのはずせんすべなきまゝに、 としふりたる妻學の緒も絶たるをむすび 合せなど してかきひくされど、 しらべききはやす人さへなければ、 月のみあふぎてあたらよを、 ひとりのみやあかさむと、 かこつたりしも干持からすならむかうかれ出て鳴に。

友をえたる心地して
　すめるよの月見てあかす草のやに
　　きくもうれしきとりのこゑかな
よごとかくもがなとまきの戸も明けながらにあかすになむ

◎　　東　京　伊　藤　稲　子

月の影ばかりしたしくおもなれたる物はあらじ。さるは夕日のくれたる後に細う三日のよのほのめき初しよりみちさかえたるそらにあくがれ、 はたあり明の 心づくしなるそらに、 まゆのごとく殘れるみひかりを見て、父母の昔を思出なつかしきかげをのみ夜毎にむかひゐてたゞにやは、 あるべきと をりふしによみたる影も年とともに數さへつもりぬ。 さてこよひも出ゐてあかさんと思ふに寐ぐらのからすも明ぬとやまどふらむあまたなきつれてゆくに
　月きよみやもめがらすもうかるゝを
　　いをねぬものはわればかりかな
千夜をひとよにとおもはるあたらしのよや

◎　　東　京　伊　藤　敏　子

かこち顔なるとよみたりし人はうき世を捨たりし身にさへ月を見てはあはれに物かなしくやありけむされど心の儘なる人はおきふしに思ふことなく夜毎に出ゐて夕月の木のまもりくるよりものよなめであかし山の端にほそうにほひ出たるあかつきの空にも露とともにおきゐてことふばかりおもなれて
　もち月のかくると見ればほどもなく
　　まどかになりてみちさかえゆく
かなしく見けむ人もうれしくあはれに見はやすもこゝろ〳〵の世や

◎　　長　野　細　野　撫　子

ふと目覺ぬ。見れば障子に白う影さすに、 早や東は白みしにかと、打ち驚きて、 障子引きあくれば、 あな瑠璃色の大空高く、 一痕の明月皎々と白銀の 露もやしたゝらむかと許り、 雨かと亂れ鳴く虫

の音は、今やあらん限りの音を盛して、高く低く細く長く咽ぶが如く、訴ふるが如く、今にも消えん露の命を悲しむがごとく、雪柳のさゝやかなる葉毎に飾る數知れぬ瑣珠には、幽かに小さき星の光さへ宿る懐しさ、見捨て入らむもいと惜くて、そと降立てば、冷氣身にしむ許り、噫思ぞ出づる去年の葉月、露麗しく虫の音高き、げに今宵に似たる月の夜なり、今は世に無きおゝそれよ此秋海棠の憐の如く、やさしかりし露子の君が、里の鎮守の祭りに招かれし其の夜、二人手を取り交し、祭りには行かで月をたよりに、露草星月夜などにせばめられし道を、露も厭はでゆきつ戻りつ、仰ぎては高き理想の空にあくがれ、伏しては夏野の花より紅き心を語り合ひ、或は覺束無くも、小さき頭を腦ませて、死の問題を解さんと勉め、さては我等二人は、死なば必ずよ嫦娥の宮にこそなど、更くるも知らで、樂しう語りたりしよ、さるにあゝくしきは運命よ、君はまもなく恐ろしき病魔に侵され給ひ、此身は理想も希望も打ち捨て、まだ見も知らぬ君に嫁すべくよぎなくせられぬ、あなやと思ふ間もあらせず、君は〳〵噫遂に死の手に奪はれ露ならで取り殘されし此身は、浮世の涙をせきあえず、おきあまる秋の露を如何せん、あゝ何をなげき何をよろこぶべき、仰げばいつしか傾きし月、半枯れし楢の梢に掛りて、夢と淡き白萩風なきにはら〳〵と散りつゝ。

◎　　　　下野　金子とし子

今宵は望の夜とて、宵のうちより柿笑栗紫苑尾花さては大きやかなる團子など、くさ〳〵の供物を母のさしづに従ひ整へ終りて、明月のいづるを待つ程に、やがてすみ渡りたる東のみ空より、朱盆に似たる一輪の月、夜の女神が羅衣を拂ふて、靜々と昇り出づれば、天地寂として聲なく、只一つらの雁がねさびしう鳴き渡るのみ。あな靜けくも清き夜なるかな。さるにても思出さるるは、都に逝きし我が親しかりき千代子の君にぞある。物學びせむとて、なつかしき古里を去りて、都に上り給ふ事となりける、去年の今宵明月にあこがれて、來し方行末など語り合ひつゝ、夜更けゆくに、いざ名殘りにとて、奏で給ひし須磨の一曲、更けゆく月は、愈々さやかに、奏づる妙手愈々さえぬ。曲終りて共に抱きて、別れを泣きたりしが、實に是ぞ別れの一曲なりき。月は昔にかはりなけれど、あはれ妙なる琴の主の面影、求むるによしなきぞかし。いざ君がかたみのつま琴奏でて、君がみ靈を慰めんかな。折しも聞ゆる「お月様いつく、十三七つまだ年若いな、」あな君も妾もかかる時のありけるを、あなあはれ、

◎　　　　越後　松永しげ子

「御月様えらいな、御日様の兄弟で、三日月になつたり、滿丸になつたり」妹の涼しき聲、おゝ今宵望月、それよ去年の夏彼の懐しきげん子の君と、爪音高く調べしに軒端の松風さへ通ひつゝ、月傾く迄光明ある希望を、語り合ひて樂みつきざりしを、今年冷き土衣被ひ、魂祭らるゝ身となりはてむとは、月ほのめし君今あらず、殘れる乳兒も犬も妾も、この月を眺むれば、あゝ月よ懐しき君が俤を寫さずやしばし、

人は花の香に醉ふ、春の朧月夜、綾子の君の門出を、別れ惜しきまゝ涙のせめて溺れよと神に祈る吾が痩せし影しめはひし小さき鳥居を地に投げしもこの月ならずや、綾子の君が、めでまさば、胸の思ひを傳へませ、越路の里は、木枯吹きすさび寒月獨り淋しき拾六夜妾が生みの父はさり難き事の有て、妾と母とを捨てゝ離別の涙を、妾が安き寢顔に注ぎしとな、其の涙に暫し宿りしも此月なり、あゝ月よ語らされ妾は其の悲慘なる光景を聞くに堪へず、天高く名古浦邊に千鳥友呼ぶ月夜、寄せては返す銀波金波、玉と碎くる渚を、四の袖連れて月の桂も紅葉すればや照り増ると、慰みし照子と重子との影二つを、羨しげにのぞきし眉月、さるを其の影は、離れてけり、あゝ月よ心あらば今　度は巡り合はしめよ、寢すや有りけむ又も妹の「春夏秋冬日本中を照す」聲益清し、おゝ月やあらぬとかこちけむ昔の人の心も思ひ合せられて、天津空な

る月影は實に、人毎に忍ばるゝ思ひの種なれやおゝ月よ、蟲の音高き草葉に清く輝く玉は、こはそも月の涙かあゝ。

◎　大阪　田中靜子

讀書ものうく、月影のあかきに任せて、そこ、こゝとなく迷ひ出づれば、野暮れ、山暮れ、限なく、清風白露、吹き滿ちて、唯一面に澄み渡りたる大空に、雁がね三つ四つ二つ。あはれ雁よ、汝もし情あらば、妾が願聞きとゞけてよ。噫不幸なるわれ、噫はかなき我が身、菫花咲く春毎に、蛙妻呼ぶ秋毎に、歌よみ文を綴りつ、共に樂しく語りし、親愛なる友の、さきつ日、病の爲め、噫思はじな、噫……雁よ雁、天外遠き月の宮居には、妾が友の今し我を招けるを。何卒友に一言傳へてよ。「友よ君一日なりとも、下界に下らせ給へ。君もし妾をあはれとも思召し給はゞ、如何に我が友」と云へど雁は何處にか。月影いよ〳〵清くして、四隣寂寥たり。

◎　能登　松岡繁子

安からぬ身の、看護婦にたすけられてやう〳〵に起き上り、窓押し開くれば、皎々と澄み渡れる三五の月は、遠慮なく室内深く照り込みて、やつれし影は一しほ細長く壁に寫りぬ。今更ながら身のいたく衰へしを悲しまれ、あじきなき世を又も恨めり。……噫、さてもさても情なきは世の常なるか、思へば去年の秋のこと、しかも今宵の月にてありき、梢を渡る夜嵐の音冴えて入る月にうなづく芒の影白き夜中、よき衣裳買ひ調へて歸る途すがら、恩愛深き母上はわらはの身の振り方を案ぜられ、遲くとも來春は良き口あらば緣付かしめ、初孫の顏も早く見たきものなどゝ、打洩らされ聞く身のいと恥かしう心地して、さしのぞく月を袖にさへぎり幾度か顏かくしゝ事よ、今思へばそれも一場の夢。頼み難きは人の身の上、母は彌生の始めふとしたる病がもとゝなり、日々枕重くなりて醫藥も更に効めなく、五月雨止まぬ夕まぐれ、響く鐘の音に誘はれて空しく泉下の人となりぬ、其後は母の面影忍ばれて暫し時も忘れかね、夜の蟋蟀枕にすだく聲にも涙まさり、夕の螢汀に渡る思ひにも消え入りて愁の涙抑へ難くうつうつとして樂まず、あはれいつか此の身も病魔の手ごめになり今此の病窓に苦吟する身とはなりぬ。あゝ月、月に變りはなけれども、變りはてたるは吾が親子……へだてなく照らせませ戀しき母のみ墓も。

◎　名古屋　不破きみ子

秋高うしてさえ渡る今宵の月は、いひしらず清らかに、大方の人を誘ひ、或は小波に船を浮べて棹さゝるゝあり、或は草のむしろに、さゝ酌み交し歌ふあり、木の間もりくる月に、詩歌を詠ずる風流人あり、友うち連れて遊ぶ子等あり、軒もる月に端居して、琴をかなづる乙女あり、何れも同じ、月に物するわざならむに、月ばかりさち多き、君はあらじ、四時折々に詩歌の主となり、花を客とし、花の客となり、水にやどり、山の端に隱れ、滿ちてはかけ、かけては滿ち、幾千年の後も、色麗はしう下界を、照らし給ふ、月人男の、君ぞうらやまし、我は磯邊にたゞよひし海士小舟の、過ぎし年、浮世の苦海に投出され、岩にたゝかれ、波にもまれつゝ、今や、嵐の、吹きくも白波の、只中、あゝ、君の、み世界ぞなつかしく、昔の竹取の翁の、娘、ならねど、羽衣だに、あらばなど、出來得ぬ事まで思浮びてなん、夜はいたづらに更け行きて、遠くひびける山寺の鐘の音いと物淋しう聞きなしつ、

◎　安房　池田柳子

避暑よ海水浴よと我が里に、都人の來ませしは、夢かとばかりに過ぎ去りて、今はた草葉の蔭に、虫の音を聞く物淋しさやる方なし、この折只管待たるゝは、月の眺めぞかし。今宵こそは陰暦十五の夜、待ちに待ちたる名月に、思のまゝを語らはんと、夕餉終へて庭に下りぬ、仰げば廣々たる大空に、一片の雲もなく、さやけき月のかゞやきて我を照らしつ、げに月とし

いへば、何處までも淸らかに冴へ渡るものよと、人の心の程もおしはかられて、詩に和歌に心用ふる人だちは、こを如何に眺めつらんと、獨り想にふけりつゝ、草間に喞く虫の音に、耳傾けて、そぞろ歩きせし中に、心は何時しか洋行中の兄君の上に落ちぬ、敬愛なる兄君の最も愛で給ひしは秋の月、嗚呼この月も、必ずや土地なれぬ米の都にて眺め給ひつるにてあらん、あはれ妾にして、月にしありせば、なつかしき兄君の御姿見参らせんものをと、徐に懷をうかべぬ。

◎　東京　田中千賀子

またしてもと叔母君の笑ひ給ふ御聲後にして。おばしまに立より空を見上れば。あな嬉しやよひのほどよりまちに待ちたる月の。むかふの山に美しき。その。なかばをあらはして。夕べよりも。一入さやかに、雲すらこの淸きにはぢてか姿見せぬに。こゝろのまゝ。てりかゞやくさま。まことに。いはふようなく氣高きに常々は雲よ化よと。はやせし身も。今は中々月をこそと思ふもをかし。いの紫式部の石山にてながめし月もかく淸かりしや。菅公が太宰府にてなげき給ひし月はいかに等。思ひは遠き古まで。ゆかしくもまた悲しく思ふ我が胸に。またもうつりしは靜子の君忘れもやらぬ今月今夜夏の休みもあすかぎりてふ其の夜しばしの別れ惜しまんと月いづる頃かの濱邊をよもすがらさまよひし事もありしが海と山との變りこそあれ變らぬは此の月靜子の君はいづちにていかに見給ふらんすぐる日のお便りにも月になぞらへて。この身をいましめたまひしが。まこと月のごとく淸かりなば。いかに嬉しき事ならん。はてしなき思ひにふける折から叔母君の。いつまで何をしつるにや夜もいたく更けぬるを。はや〳〵いれ給へ月は今夜のみにては。なきをと笑ひ給ふに。殘惜しけれど板戸引よせ今朝活けし白萩たよりに床に入る

◎　板橋　田中都志子

あまたなりし庭の栗の今だ若きに、竿持ちさわぐ子等のをかしさ。

秋の夜風の涼しきに、澗のかしらかろげなるあひずやさしげなり。草の繁にすだく虫の音のそのかみくりかへすかと偲へば杉の木の間をもるゝ淸き月の光を今更らしくはし近く眺め、事業繁げからぬ身も思出いやましぬ。げにかゞつ〳〵の人うれしさ悲しさにつけ、過去を顧みらるゝは理りなれど、まして去年より打ちつゞく未曾有の戰に親の出兄弟の召され子を出しゝ人々はいひしらぬ思に仰ぐらむ。砲の音かすかに。ふまれし草のなまぐさく。たまのあとまだらなる。木の下に露營の夢やいかならむ。勞れし眠をくつせず。馬をはげましゝ。お暗き谷陰もくまなく。あださぐる斥候兵の胸や何に。眞夜中重き務を正しう四方を守る。番兵など。猛き武夫とて。淸なる月影仰ぎてはいかでかなつかしき祖國を思ひ浮べざる者あらむや。あはれ更行庭のたゞ菊に。鳴けるこほろぎも。異郷に聞なば。なか〳〵にあはれ深からむ。

短歌

野分　　薩摩　松原みね子

吹きすさふ野わきの音に小山田のいねのみのりを思ふ夜半かな

秋風　　東京　瀬藤ちよ子

ゆふまくれ桐の一と葉の散り初めてたもとすゞしく秋風ぞ吹く

戰死せる軍人のわすれかたみとなれるをさな兒を見て　　肥後　德永成子

さきいてゝよにほへかし柞葉の露のなみたにしけるなてしこ

峯紅葉

高根には霜やおくらむやまゝつの木のまの紅葉にしきしにけり

海岸に遊びし友の文に接して　　肥後　秋吉輝尾子

須賀の浦声の葉わくるすゝ風になつをよそにやすこしますらん

折生迫といふ所の海水浴場に八月はじめより二週ほど滞在せし時の日誌の一節日向の青島神社に詣でゝ

青島はあをうなはらにつきたちてかみよゆかしき神のみやしろ　日向　北里繁子

折生迫海水浴場にて

なれぬれは夢もなみの上はしるなり折生迫てふあらき浪のうへ　愛媛　廣田薫子

海水浴

水およき樂しかるらむうなひこか心のまゝにうきしつみしつ　東京　大原好子

折にふれて

いたつらに惜しき秋をわかちけりつもりしことも語りあかさて　奈良　天野照子

山家紅葉

いほちかききゝのもみちを友として秋のあはれをかたらひの山　奈良　天野照子

立秋露

秋のたつしるしは空にありあけの月くさのうへにむすふしら露　岡山　黒瀬政野子

初咲きの朝顔

起き出てゝ垣根をみれば麗しく今朝さきそめしあさかほの花　東京　西ひさ子

朝顔

こそのとし種子やありけむ朝顔の垣にそひつゝさきいてにけり　東京　田中都志

思出

かつ〳〵のおもひや月にかよふらむくぬかにうみのやまと武人　磐城　三森須磨子

長き夜

よな〳〵に長うなり行く秋の夜はひもとく文もうれしかりけり　磐城　須磨子

陸軍中尉清水友美氏の戰死につき

散りてなほ芳はしきかな丈夫のあけにしほまれ千代もくちせし　岡山　黒瀬政野子

秋

さらぬたに秋は物こそかなしきになやめる母のきつかはしくて　越後　松岡しけ子

朝顔

たらちれのめくみの露に白くあかくまかきに咲ける朝顔のはな　大阪　田中子

婚姻を祝ひて

たらちれの植えてそたてし梅と竹ちとせをちきるむろの早さき　磐城　すま子

木間月

木のまもろ初秋つきの影さえて葉かけの虫の音淋ひしかりけり　神戸　今村あき子

晩鐘

なやみませるわが姉君と打つれて湖のほとりにおほろつき見し　前橋　林廣子

月前虫

夕かほの花咲きそめぬけふもはやさひしくひゝくとほてらの鐘　大和　栗山たか子

秋戀

しらたまと亂るゝ露をよすかにて誰をまつむし音にはなくらん　大和　栗山倹子

哀傷

うき人のこゝろにかよふ秋の風みにしむはかりかなしかりけり　和歌山　高内さくら子

はかなしや常なき風にさそはれてゆきにしたまや今はいつくに

短文

偶感

和歌山　高田さくら子

つくろはぬ庭の秋の夕暮こそ、實になつかしけれ、心のまゝに、生ひしげりて、今を盛りの糸萩、さては、すがたやさしき女郎花、色もゆかりの桔梗、はた尾花が袖し、とり〳〵に其の風情、すてがたきを、わきて露さへしげくおき渡し、時を得顔に、なきしきる虫の聲々も、すみ渡るやう覺ゆ、聲かとまがふ白菊は、露をふくみて、おのがじゝ咲きみだれ、出づらん月を待ち顔なる、なかなかに、あわれふかし、世には篠竹など結びまはし、つらがひ、水そゝぎなどして、塵ふとく、眞直に生ひ立て、一本の菊に只一つ大なる花を咲かせてめづる人もあめれど、そは其の人の心柄も、おしはかられて、實に、淺間敷ものぞかし

浮世繪の山水に就て

好　讃　生

本繪寫生の山水は鮮ながらざれども浮世繪の山水甚だ鮮なし假之

あるとも名畫亦鮮なし元浮世繪は風俗畫なれば單に實物を寫すのみならず寫生畫のみにて足るなり人物を交ゆるが故に浮世畫と爲る人物を交へざれば浮世繪と爲らざるなり

登山の圖山行の圖山麓通行抔にあらざれば浮世繪を爲さず北齋は名畫師なれども深山名山の趣なし豐國は人家人物花卉抔宜けれども山水は遠山のみなり都て市街大名屋敷座敷人物抔に巧みにして遠山を加ふれば眺望耳菱川淸春は浮世畫師にして山水老けたり山に遠近あり巖山沙山松山大樹列樹山坂麓路抔宜し唯非難すべきは低山に雲霞を掛け坂路に草叢生して路沒する抔に在り路は坂路と麓路とを問はず分明ならざれば畫を爲さず低山は雲霞を掛るべからず遠山を畫き（其下に田畦人家道路抔を畫く其配置宜し恰と浮世畫師と思はれず）山坂に樵夫尻絡げ草鞋掛けの男子昇降する所馬を牽て昇降する所杯愛すべし婦人の盛裝して僕を隨へ荷物を負はしめ昇降する所抔宜し麓路に牛馬貴賤男女の往來亦宜し雨天に簑笠を着け坂路麓路を通行するも愛すべし

山中山麓に人家あるは豐國月岡皆畫く而して山平圓桔屈なるには餘り感心せず然れども成地あるには感心なり菱川には地形なくして家を立つ大なる誤謬なり（豐國栄の山上に石垣を布き地形を爲し神社佛閣の廊下續き離れ離れの建物燈籠高麗犬手水鉢石階一段二段抔宜し之は巨勢氏に倣へたるなり最も平地の建物は塀牆玉垣抔にて屋敷を拵へ人中に家屋を畫く是平地建物畫の口傳なり）彼山に地形を製して人家を畫かば今一層の上達を見ん未だ至らざる所あるには更に熟練を要す殊に人家の惡き建物足らず間通り凶し神社佛閣の用意は豐國月岡に及ばず豐國の屋敷地形を偏に巨勢氏に倣て諸候平民の家に用ゆるには感心なり月岡の神社佛閣の建物には土佐住吉に倣て謬りなきは返す／＼も感心なり而して山惡し惜かな菱川は河海凶し（大海港灣船舶波止平川架橋布瀑溪流等を區別すべし）豐國に及ばず畫を見ん者其過不及を知るべし然れども狂瀾怒濤は豐國に勝ること遠し屋敷地形に高低あるは宜しからず須らく平坦にすべし菱川の瀧の直下三叉溪流の石に激し沫を飛ばす所抔宜し

豐國菱川には神佛靈驗記の挿畫に巧みなる人多し概して云ば豐國は浮世繪の本家なりと云へり

初秋夕暮　群馬　竹乃ふし

萩の上葉をさら／＼と音づる風に秋をのせて來しが、それかあらぬか俄に叢中に起る虫の聲、已がじゝ時を得顏に歌ひ競ひぬ、そも何を樂しとてか傍の花園には蜻蛉一ツ、定めの宿の花盞みてか勞れし羽を重げに彼方此方と俳徊ふ姿又なく哀にぞある、空美しく彩色れる夕月はいつか西山に傾きぬれど樫の梢に蟬は鳴止まんともせで、あはれ名殘りの惜しまれてならん、八日の月は桝の稚子形に高く澄み渡り、あたりはいと靜にて、一入卅さる虫の聲、おお樣々の浮世や。

出湯の日誌（燕）　越後　松永しげ子

八月十七日雨を凌ぎて燕に行く、此處妙高山の谷間瀧の音雲の訪き消えゆかしく、仙境とはそも他にはあらじ、宿は明治館、一歩出づれば、早や秋の千草縫りに匂ふ、岩かげの化のやさしきを折りきて瓶にさしつ、湯のよき香に醉ひて甘き夢に入りぬ、

八月拾八日湯の宿の緣を濡して雨降れば、夏のおしたのねさめよし、さても游ものゝ衣めす人、もやよりいでゝ隱れてをかし、家に籠りて小詩國繙く、

八月拾九日晴れたるもの故、山に入りて草花を採取す、歌ならざりしが繪はなりたり、夕月初めて見ゆ、夜追けて一人藥師堂にまであこがれ出でつ月を賞しぬ、あんまの笛寂淋し、

八月廿日朝日花やかなりしが雨ふり出でぬ、詩集繙く徒然なるまゝ術窮求む、夜早ういねたり、

八月廿一日山姫のかざしの花かをみなめし瓶にさしたるしをれ初めけり、湯の宿の雨にこもりて筆とれど歌さへならず物思はるゝ

朝まだきより雨ふる、外出もなさで瓶の花の下にてよき夢をみつ湯に行きて戻りて詩集繙く、隣室へ美しきが來て和氣靄々たり、妾も其の團居に入りたらむが如よ、

八月廿二日晴れたれば心殘りはすれど山を出でぬ、眺よろしく關山に至れば、越路の高峯妙高山にはなほ綿雲のたなびきて出湯のあたり雨降るらし湯の香を身にしめて君晋家に歸れば、咲かざりし鳳仙花も紅く匂ひ、すゝきの根しめにそゝろ松蟲も音を立てぬたのしかりしよ出湯の樂しさ、

有髯無聲

能登　加野千代子

私貴孃に繪葉書送つた覺えがない――そうですか、いや大に失敬しました、女の手蹟のものですからつひあやまりまして、御免遊ばせ。三十一文字が云々とありますれどあれはそんなのに考へられては困ります、歌の中に意味があつたので、返歌を與れなどゝ云ふに用ひぬのですから。人の感情をおもちやにする――よう云ひますれえ、貴孃が御友達に話した御言葉を考へて御覽、どつちがおもちやにするか判りますよ。貴孃も顏に似せん事を言はれる方だ、あきれるわ。繪葉書が貴孃でない以上は、手紙など願つても上げませんから御安心なさいませ。終りに御願ひ申します、何うぞ〳〵妾より上げた、あの繪書を至急返送して下されませんか、幾重にも賴みますよ。

馬鹿の廣告

能登　蝦茶式部

紀行文を叙するに初め觀楓の事を述べ終りに仲秋の月を見たと云ふ如く、初の景色に晩秋の事を書くなどは、好い馬鹿の廣告である。例へば能登の某女の如く、妾は返事をする勇氣がないの、二十世紀的の女子でないのと云ひながら、其の返事を堂々と、數萬部發行する雜誌に投書するとは。此れが勇氣のない女か、非明治的の女か。此等は誠に、馬鹿の廣告の好い手本である。

評　青天白日雨濛々

今様

うら盆の日母君の御墓に詣でて

豐後　佐藤家子

去年の紅葉ともろともに
ちりにし母のおくつきに
たむくる花のしづくより
しげきは我が袖の露

蓮

近江　治子

同じ水面にたゞよひて
濁りよそに花はちす
ゆかしく清く咲くものを
手折りすつこそかなしけれ

夢

くしきかほりの籠りたる
花にふれんと手をのへば
あやしきまでに胸さわぎ
我にかへりて夢さめぬ

菊の香

大和　橘かほる子

籬に咲ける雛菊の
やさしき姿でよれば
天つ御神の袖の香も
かくやおらんと匂ふなり

秋の夕べ

岡山　黒瀬政野

桐の一葉と散る秋の
野わけにすだく虫の音も
あはれ身にしむ夕まぐれ
音づる者は雨や風

別

東京　用中千賀子

親しの妹よいざさらば
今より清き天國の
百合さく野邊に杖曳きて
けがれにそまで樂せかし

神戸　今西操子

風颯々の秋は來ぬ
燈下親しく肌寒く
繙とく文の數まして
長夜の月は更け行きぬ

月前述情出征軍人の妻に

宮成梓子

きぬたのおとも
むしの音のころ
月はかりこそ
かとゝふものを
そむけるやなそ
いくさのにはゝ
しもとおきかへ
ゆきとふるらめ
男々しきことは
つはさにかけて
いへはゑにこそ
そむけるつきの
やとせるそては
それかあらぬか

小夜ふけて
まかきをは
夜な夜なに
そのかけに
ますら夫か
しらつゆも
むらしくれ
しかすかに
かりかれの
おくれとも
いはさらめ
ひかりをは
しらたまか
あなあはれ

夕時雨

さつき

こほれ初たる秋萩の
音しめやかに風も無
下葉にかゝる初時雨
夕さびしき秋の暮

新體詩

紅百合

能登 加野いさみ子

夢紛れ行く薄霧に、
現にかみしみそてより、
朝明の野にしみくるや、
百合花こゝにほゝゑみの、
愛のほのほの紅小袖、
風も濟らのそよろぎに、
あまき光をまとひつゝ、
夏のをごりのみたまさかゆる。

ふと妖艶の姫神が、
天の香そゞろ零して、
入與にふさふ美きものと、
露をふくみてなよびかに、
こびにうつむく姿して、
いよ彩流すきらの日の、
瓔珞地にゆらめけど、

あはれ

下野 金子とし子

合歡の花咲く山門を
やさしき聲の主やたれ
清きが中に愛あり
髪や衣裝やお化しやうに
思はぬ長のいたつきに
人里はなれし深山の
みどりの黑かみ切捨てゝ
秋を拂ふ友とては
朝な夕なにじつ取りて
神や佛もいかにして
雲の彼方にみ佛の
山ほとゝぎす鳴渡る

もれて聞ゆる法け經の
末だうら若きかんばせの
あはれたゞな身なりせば
浮身なやつす頃なるを
塵の浮世を余所にして
此の仙門に入りてより
身に黑染の衣をき
梢の百鳥月の影
法け經唱ふる一念を
見はなし給ふ事やある
やさしきみ聲ほがらかに
音なればかくぞ哀なる

秋のけしき

前橋 林廣子

晴れわたりぬる昨日今日
時をえがほに木々はみな
赤き心をあらはして
これぞなさけの龍田姫

秋のけしきはよもやまに
紅そめてうつくしく
淋しきおきもにぎはしく
めぐみのほどと知られぬる

●女子文科講習會　本郷西片町十番地ろ五號大日本女子教育會にては婦人の精神修養の目的を以て左の通り講習會を開かるゝ由

文化史（十月九日より毎月曜）文學士河野元三君
心理學（十月十一日より毎水曜）文學士紀平正美君
倫理學（十月十三日より毎金曜）文學士深作安文君

以上何れも十回にて終了◎時間は午后三時半より五時半迄◎聽講料一圓二科以上五十錢宛増◎志望者は本月七日迄に本會宛申込まるべし（會場は神田區一橋蔭育小學校）

彙報

葉山の御近狀

（香川太夫の談）

▲至尊の大命　皇后陛下には今春インフルエンザを患ひさせ給ひてより、專ら御攝養を旨とせられ今回葉山へ成らせられたるも至尊陛下よりの大命にて玉體の保養を是つとめさせらるゝ次第なり、されば皇后陛下には御成以來御運動に御餘念なく、及ぶべく馬車を廢せられ御徒歩にて海邊を御逍遙遊ばされ、有栖川宮、北白川宮、岩倉侯爵、桂伯、伊東子爵（祐亨）等の別邸へ御立寄遊ばさるゝを常とし、香川邸にも過日初めて御成りあらせられたり

▲濱邊御運動　御運動を目的と遊ばさるゝことゝて晴天には必ず御出門、到る所御小休み相成去廿七年當所御成の節には藥舖資生堂の別莊へ御立寄相成りたるが、今回の如きは或時は青松白砂の海濱にテントを張り御晝餐を召さるゝこと珍しからず、御運動には人跡繁き街道は却つて行者の妨げとなればとて濱又濱べと傳はせ給ひ到る所御疲勞に任せ御小休みあらせらるゝなり。

▲長者ケ崎　或時は御用邸より十餘丁を距る長者ケ崎へ漁船にて御渡りに相成り御晝餐を召さる、同所は去廿七年初めて御成りあらせられたる海氣極めて清く、眺望極めて佳なる所とて最も玉體に適し、御清遊斜めならず、右漁船は矢張普通の漁船數艘を縫ひ合せしものにて中央に御椅子を設け玉體を御自由に委すべく用意したるなり

▲由井ケ濱　先日は又御馬車にて鎌倉由井ケ濱へ成らせられ、同所海濱にて充分の御運動遊ばし御用邸にて御晝餐を召させ更に引網御覽あり、御歸路松方伯別莊に御立寄あらせられたり

▲國母の模範　余は三十年來の久しき左右に侍し常に恐れ入り居るは、陛下の至尊に對させ給ふ思召是

なり、至尊の國家に御心を勞させ給ふを此上なう御念に掛けさせられ、開戰以來日曜出御の如き最も恐れ多く思召され給ふの御氣色は吾々侍臣の拜察して恐懼措く能はざる所にて葉山御成以來は專心御攝養をこそ是事とせらるゝも毫も御優長に渡る御なぐさみ事なきは勿論至尊の日曜出御の御精勵にそむかざらんことをつとめさせ給ふ御美德は實に國母の好模範たるなれ

▲三浦郡の企て　三浦郡の有志者は周布知事を經て烟花打揚の件を余の許迄申し來りたり、御駐輦中聊か御なぐさみの一端にもと心を寄せたる有志者の企てや嘉すべしとするも、陛下今回の御成の御主意たる前述の如くなれば、是或は却つて陛下の御思召しに違ふやも計られずと余は窃かに有志者の折角の催しを如何にすべきかと思考しつゝあるなり

▲陛下の思召し　陛下には此の如く至尊の大命により御健康の回復を是念とせらるゝより外はなきも某新聞に報じたる如き絲竹管絃の御樂みとか烟花打揚の御覽とか申す如き悠長に傾きし御なぐさみ等曾てこれなきなり、陛下には至尊の日露開戰以來、日夜御心を痛め給ふを念とせらるゝや深く、一日も速かに健康を回復して至尊の大命に報はせられんと御運動に鋭意遊ばさるゝ御心掛の程は吾々侍臣の窃かに恐懼に堪へざる所なり

御避暑中の兩皇孫殿下

日光田母澤の御用邸は海抜一千尺、三面山を以て環らし東方廣濶千里の平野にして御用邸中尤も規模宏莊なるものと承はり及べるが其御建物は赤坂御所の一部を移し御改築遊されたるものゝ由にて三層の日本館より成り其房室の廣きこと殆ど數ふべからずと云ふ目下同所に御避暑中なる迪宮淳宮兩殿下には氣候の不順なるにも拘らせられずいと御健康に渡らせ給ひ日々の御起居は青山御殿におはしますと毫も御變りなく牛乳は同所御料の母牛より採らせ給ひ侍

醫には長田原田の二氏常侍拜診し奉り加藤照麿氏一週一回拜診し御大事の上にも御大事を勉め居れるが、同地の氣温は平年六十度より七十五度までにして本年は殊に土用中の氣候さへ秋の如く温度低下し雨天勝なりしかば兩皇孫殿下には縮緬羽二重の袷を召させられ御遊戯も多くは御構内のみなりしが此程車にて二荒神社に御參拜ありて初穗を捧げられ御歸途には三代廟にお立寄遊ばされ若干の御手當を下賜せられ梅林をお徒歩にて御逍遙の後御歸館ありしと

三笠艦長の留守宅

東郷大將の座乘せる旗艦三笠が不幸の災禍に罹りて沈沒と云ふ時節柄甚だ悲しむべき報導の來りしと同時に大分世間にては不祥な風說を立てゝ居る者もあるので、記者は昨日伊地知艦長の留守宅を訪うて見た折柄艦長の安否如何にと訪ひ寄つた軍人の夫人や親戚の人々も詰かけて居たのと生憎艦長夫人も外出された跡であつたが旗艦の沈沒と昨今世間での忌はしい取沙汰とは全然相違して居ると云ふ事を留守宅の人が話された

▲八日の取沙汰　何者が傳へたものであるか三笠が何うしたとか朝日が何うしたとか云つたものと見えて夫れを聞傳へて同家を見舞ふ人も尠なくなかつたが元來留守宅は主人が敷居を踏み出して海の上に艦を浮かべた以上は假令戰爭は無いにせよ天候の不穩に據りて遭難もあらうし又た今回の如き止むを得ぬ災禍はないと限られぬけれど夫れでも留守宅は公報の出る迄ドンナ事が有らうと立騷がずシカモ何物かゞ騷擾を利用した風說は取るに足らぬと遉がに旗艦々長の氣丈な夫人はソンナ風說を耳にかけるに及ばぬ女の留守宅を護るの外に何等の要があると云ふ風であつたとの事

▲また〳〵十一日　忌はしい風說のあつた八日が過ぎて九日も無事十日も何の事なくて濟んだので戰捷の旗艦無事にて目出度いと留守宅は全く風說であつ

た事と安堵の思ひをして居たが翌十一日の正午又た市中に三笠の不幸を傳へて居る者が出た、夫れは翌十三日の公報に出た通り艦内に火を失した爲め沈沒するに至つたと云ふ事だが未だ十一日は私報にも接せず矢張八日の風説を傳へてとの事と愈々沈着拂つて立騒ぐ家族の者を制し「假令夫れが事實として災禍なれば止むを得ぬ、必ず世間の風説を信ぜぬがい〻」と云はれて居た。

▲十三日朝の事　十二日も暮らして十三日の朝になると新聞紙に公報が現はれたので夫人を始め八日以來の不思議の風説が誠となつた事を奇異として先づ當局者に動靜を聞くと別に不思議とすべき原因は毫もなく多くの死傷者を出したのは痛ましい事であるけれど先づ東郷大將のお身の上の無事と云ふ事を聞いて夫人は大將の萬歳を叫んださうであるが伊地知艦長については其後何等の消息もないけれど消息の無い丈け無事と思つて居る唯だ此先は早く旗艦を海上に泛かばして日章旗を翻がへすに至つたらば世間の悪い風説は消える事であらうと夫人は來客に物語つて居らる〻さうである。

米國婦人の同情

數年來米國に遊學し傍ら彼の地に於ける婦人社會の狀態を視察しつ〻ありし飯島カチ子は昨年六月後殆ど一年餘の久しき良人飯島立峰氏と共に南北各地を漫遊し此程歸朝したるが其談話は一般米人の我國に對する同情の深厚なるを知るに足るものあるを以て左に掲ぐ

私の在米は僅に滿三箇年に過ぎませぬ殊に遊學致したと申しても一定の學問を研究して參つたと云ふ譯でもありませぬから、別に有益な御話は出來ませぬが只昨年の六月カリフオルニヤのローサンジユルスを立ちまして今度歸朝致しますまで殆ど一年餘り良人と共に南北米の各地を漫遊し一つ土地に二度參つた處なども御座いまして幾分か彼の地の人情風俗

を知ることが出來たと思ひます且つ飯島はローサンジュルスに於て在留日本人の爲めに羅府新報と云ふ新聞紙を創設し日は未だ至つて淺うございますが幸に稍や基礎も定まり追々有望に赴いて參りましたので各地を旅行致すにも大きに便宜を得又各種の婦人會などに就ても稍や精しく取調べることの出來ましたのは大へんに好都合で御座いました時恰も日露の交戰中で我國の消息は常に心に懸つて居りましたが萬里の國外に在つて祖國優勝の報を聞く其心中の喜ばしさ肩身の廣さは到底言葉にも盡されませぬ、と同時に軍人に對する感謝同情の念は一層切實に感じたことで御座います殊に此戰爭に付き米人の上下を通じて我國に對する同情の深厚なることは誠に感謝の外はありませぬ各地到る處の婦人會は日本の傷病者に金品寄贈の企を致して居ります就中私が最も深く感じたことに就て一例を擧げて御話を申しますればフヰラデルヒヤに居りました時に懇意に致しました某夫人が或日私の旅宿に參りまして申すには私の一人の姉が此地から二十哩ばかり隔つた處に居ります本年八十六歳の高齡ですが今尚は矍鑠として精神も確で御座います平素から大へんに日本を愛し日本の善いことを聞くのを無上の樂みに致して居りますが所別けて交戰以來は宛も自分の國の事のやうに心配を致し切めては傷病兵でも慰めたいと態々婦人會を設けて盡力して居ります貴女の御來遊のことを聞いて大層御目に懸りたがつて居りますが何分老體で足が利きませぬ若し御差支がなかつたら御尋ね下さい何の位喜ぶことでせうとの事でしたから直ぐに日を期して御尋ね致しました老婦人はミス　ハリオット　スミスと申す方で私の御尋ねしたのを大層に喜ばれ特に婦人會を開いて何か私に日本の話をして貰ひたいと云ひ多くの會員を集て居られました前申す通り全く非常な日本贔負のお方ですから何にも日本の爲めにならないことを言ふ人がありますと少しも假借なく攻擊して其誤謬を正し或は書を寄せて辯明の勞を厭ひません其厚い同情と壯んな意氣とは誠に稀に

見る婦人でございます私のお尋ねした時も先づ種々の質問を發した後で此頃一米人が日本に關する著書を發行した其内容の大體に就ては別に言ふべきこともないが一つ氣に入らないことがある、それは日本人は戰爭好きな國民であると云ふことであるが何うもをかしい私は決してさうは思はないが何うであらうと言はれますから私は之に答へてお説の通り我日本の國民は一旦緩急あれば家を捨て妻を顧るの遑もなく國家の爲めに奮つて戰場の犧牲となることを厭ひませぬが決して好んで戰爭をするものではなく寧ろ平和的の從順な民であります今日不幸にして露西亞と戰を交へなければならないやうな時機の至りましたことは私共の齊しく悲む處で御座いますと言ひますとさうだらう〳〵私もさう思ふのだと云つて心地好げに微笑を湛へて居りました扨此の婦人會で何う云ふことをして居るかと申しますと多くの會員が集つて寢衣用の着物を仕立て日本の傷病兵に贈つて居りますのでジョン　ワナメーカーと云ふ大商人(有數の財産家)に交渉して材料の布地を廉く買入れ會日に集つては仕事をするのみならず各々二三枚宛自分の家に持ち歸つて出來上がるとミス　ハリオット　スミスの許に持つて參ると云ふやうな仕組になつて居ります私に向つても多くの會員が病人を心地好く寢さすには何う云ふ風に仕立てたら日本の人に適當するであらうかと云ふやうな問ひもありました位で之を見ても其同情の熱誠から出でたものであることが知れやうと思ひますそれ故私も和洋折衷の衣服を裁つて仕立方などに就ても心付いた點は御話をして參りました又近頃は軍人遺族の子供にフランネルの着物を上げたいが洋服では年齡に因つて大小が一定せぬから何とか仕立方はあるまいかといふ相談が有りましたからそれに就て多少の考へを述べて參りました殊に此會に就て深く感じましたことは其會員が決して富家の人々のみでなく日本で申せば織物の工場とか製造所とかに働いて居る人の妻君或は母や娘などが眞個に日本の爲めに誠意を捧げて喜

んで働いて下さるので私は其健氣な老婦人の同情と共に深く心に印象して今日でも事毎に懷ひ出すので御座います以上は一例として申上げたのですが之に類したことは米國に於て屢々遭遇する事實で御座います。

實に米人が日本に對する注意は日に月に深く成り行きまして平和克復の後は是非日本の人情風光を觀察しやうと云つて居る人が澤山御座います處に依りますと日本研究會など丶云ふ團體を形造つて日本の地理人情風俗は勿論東洋の一小島國が今日あるの因をば歴史的に研究して居ります現に病院制度に就ては日本に留學生を送らんとの議もあります位で是れに就てはマアギー夫人が到る處に日本病院の設備の整頓して居ることを稱揚し紹介せられました力もございませう兎に角今度の戰爭の爲めに我國に對する外人の觀察力は益々鋭くなつて來ましたから戰後に於ける我國民は男女を問はず深く自ら省み孜々として勉めなければならぬと私も深く感じて居ります米國に於ても近來は女は女らしからねばならぬと云ふ說が起り現に斯う云ふ主義の學校も設けられ大學卒業後の婦人などが聚つて言葉遣ひ擧作等を成るべく優美にすることを頻に研究して居る處もあります男女交際の如きも米國の男女交際は自由だなど丶一口に申しますが自由にして快濶な交際の間に自ら犯すべからざる秩序があつて人々自ら修め自ら重んずるの風が見えます、ですから是が眞相も究めず徒らに皮相を眞似て知らず〳〵過に陷るが如きことは青年の深く愼むべき處でございませう結婚などに付ても親は皆な最愛の子女の爲めに間接に指導の道を盡し決して我國で云ふが如き放任ではありません又東の方に參りますと身分の釣合など丶云ふことも計る風がございます尙は各種婦人會の基礎が强固で上下貴賤の別なく一致活動し社會に對して間接直接の稗益を與へて居る實際を見て之を我婦人界の狀況に比べますと些か申して見たい處もあるやうに思ひます

○獨身を禁ずる法律

近頃米國にては米國婦人會々員たるメーライト、セラルといへる夫人は先般來頻りに大統領に獨身者に結婚を强ゆる法律案の發布を迫り居れるが其云ふ所によれば男子が結婚せざるは其人種自滅の原因なり而して合衆國にて結婚期に達し居るにも拘らず空しく夫を得る能はざる女は十萬人以上もある由依て彼女は大統領が州會をして適當なる配偶者に割當てしむれば彼等は何時たりとも結婚し得るなりと信じ居れり序に云ふウイスコンシン州にては年齢三十歳以上に達して尙獨身なる男子には獨身税を課するの法律が提出されたりと而して此法律の起草者は老たる女は其負擔に堪えざるべしといへる理由にて免除するが至當なりと言ひ居れりと

○珍らしき女の研究會

理想の家庭の何のと今時の駒茶呉女が碌でもない熱を吐けど出入りの酒屋を呼んでおまんまを炊いて貰ひ扨火の引き様も知らぬとはたわけたにも程があるとて大日本婦人正風會の中島義弌氏は自家の門下二十名に臨時召集を行ひ「サー誰々さんは御飯を炊きなさい」「誰々は米を量りなさい」「今日は十名の婦人客があるものと假定して何なりと献立して御馳走なさい」「客の接待は總て禮法講習の式に據つてお仕なさい」とて神田今川小路なる自宅にて實地の厨房學と禮法とを演ぜしめたるはツイ此程の事なるが氏の門下たりし婦人にして某紳士の細君となれるもの二名は全く御飯の炊き方を知らざりしと會費二十錢にて近々開かるべき次回には何人にても入會を許すと云へば米のなる木を御存じない奧樣やお引ずりの御夫人方は一度ぐらゐは出席あれ女中への御小言の參考の一ッともなりやせん

○授産婦人會の近況

赤阪區檜町なる軍人家族授産婦人會の情況は既に屢屢報道したる所なるが今其創立當時より現在に至る迄の經過を知るを得たれば茲に掲げて世人の注意を促さんと欲す

▲同會の創立　客年三月即ち開戰と同時に千家俊子、清浦錬子、伊東美津子、岡田節子、高橋鈴子、村井孝子、黒木百子、江副熊子、齋藤専子、森村菊子十夫人の發起にて設置せられ子に離れ夫に別れて頼る邊なき鰥寡孤獨の婦人等に職業を授け軍人家族をして獨立自營せしめんと取敢ず麻布廣尾町に一戸を借り受け軍隊の洗濯を請負ひ志望者をして就業せしめたるものにして其後入會を申込むもの日に多く擴張の必要を感じたるを以て同年六月現在の檜町十番地(舊愛敬女學校跡)に移り同時に裁縫部を増設し教師を雇うて教授せしめ現今にては最早裁縫師の手を要せずしてシャツズボン下等を裁ち縫ふ迄になれり、去れど同所は女學校々舍の跡なれば洗濯工場とするには不適當なるを以て越て去る八月同區新在町に更に四百坪許りの空地を借受け洗濯工場を新設し洗濯干場は勿論雨中乾燥場の設備に至る迄殆ど完備と云ふべきものとはなれり

▲幼兒保育所　同會は更に軍人家族にして幼兒の足手纏わる爲め就業すること能はざるものゝ爲め幼兒保育所を設け保姆一人助手二人外に就業者中より毎日二人づゝ交替にて保護せしめ居れり

▲寄宿舍　遠距離より通勤するものゝ不便を慮かり無料にて同會内保育所に寄宿舍を設け隨意に寄宿することを許し現在二十餘名(及其子供若干名)を收容し居れり

▲現在就業者　裁縫部洗濯部合せて百二十名にして主事富田元信　工場内外の監督より事務整理にわたり日夜寢食を忘れて熱心に盡力し事務員古賀定光、會計梅川鶴吉兩氏亦忠實に職務に勤め居れり

▲就業婦人の收人　作業の多寡に依りて一定せずと

雖も洗濯部にては月收九圓内外にして裁縫部は八九圓より十八圓内外なりと

▲保育所收容兒數及保育費　現在收容兒は男女合計七十三名にして年齡は當歲より七歲位迄なるが稚兒には一日三回或は四回位ミルクを給し他の兒童には三食及び一日一回づゝ間食を與へ此費用概算毎月一百圓なりと

▲兒童發育の狀態　保姆坂口とみ子が懇切周到なる保育の下にある事とて兒童の發育は頗る良好にして一人の疾病兒を出したることなく從つて囑託醫榊博士の手を煩はせしこと一回もなしと

▲新築計畫　同會は尙廣く救濟の實を擧げん爲め新坂町に地をトし目下新築計畫中なり

○愛國婦人會の救護事業

愛國婦人會にては豫て軍人遺族及廢兵生計狀況につき調査せしに本年一月より六月末迄に全國各支部より提出せしは三萬三千三百六十戸にして内救護を要するもの五千八百五十二戸此救護金額三萬四千九百五十六圓なるが其後の分は目下急速取調中なり此外恤兵事業及各支部に於ける遺族の裁縫經木細工若くは幼兒保育所設置等に就ては充分手落なく配備しつゝあり

○日本贔負の米國紳士

（日本服を着して大隈伯を訪ふ）

▲シーマン氏　極端なる日本贔負の米國人シーマン氏はルーズベルト孃一行より一郵船先ちて我日本に渡來したるが先月廿九日早稻田出身の森氏を連れ横濱を出發する筈なりと氏は西洋人としては中肉中背の四十餘の紳士にして記者を見るや直に名を聞きて握手し劈頭第一先づ「御國はよき國なり」と言ひ明日は日本服を着て大隈伯を訪問する筈なりとて大に喜び居たり其より談話は氏の背て爲したる馬車旅行の

ことに及び紐育より一百一日間東海岸に向ひて馬車端艇及び馬脊によりて一萬五千四百哩を旅行したり此馬車旅行は一私人の爲したる馬車旅行の中にては最長の者にして一行は八人なりき殊にカリフホルニアを訪ひたる時に例の有名なる大木を見たるが一行の中の或人は其の年環の六千あるを數へたるが此木は一萬年以上のものなり抔語りたり

▲ソー夫人の其内に同伴者ソー夫人は室内に入り來りて坐は益々賑になりたるが同夫人及びシーマン氏等は其前夜井上伯に招待せられて日本式の御馳走に會ひたる旨を語り其時ソー氏は片頰に微笑を漏して語て曰く「日本語にて私は挨拶をなしたるが廿人程の多人數の前にて未熟の日本語を以て語ることなれば胸は鼓動し非常に神經的になりたりと同夫人も極端なる日本贔負にて日本に關する歐米の書物は大抵讀破し殊に小泉八雲氏の書は大に愛讀する所にして妾の日本に來りたるは全く同氏の著書の御蔭なりと云ひ猶ほ同氏の著書に就きて曰く「同氏の文は實に絶好なる英語なるが惜い哉歐米人は充分に同氏の著書を味ふこと能はず」と語り次に日本風景の美なること中禪寺湖畔の氣候の善きことなど口を極めて歎賞し來春再び日本に渡來せんとすと語りたり同夫人は七月四日に日本に渡來したるを以て未だ我國に在るの日猶淺きに拘はらず比較的に日本の事情に通じ居れり其中に食事も濟みたれば社員は辭し去らんとせしに丁寧に握手して何時にても面會せん又來られよなど愛嬌を振り蒔き居たり

▲同氏等の日本服装　又シーマン氏及びソー夫人が大隈伯を訪問する筈なるを以て我社の婦人記者は同行せんとて帝國ホテルに行きたるに兩氏は既に日本服を着て嬉れしげに今や訪問の準備をなせる所なりきソー夫人は葡萄鼠縮緬三ツ紋の單衣に琥珀の帶を締め襟は菊の模様付たる半襟を付けたりシーマン氏は仙臺平の袴に三ツ紋の絽の羽織を着流し紋は環の中に同氏の頭字をとりSの字を書きたるを付けたり其より兩氏及び森氏と馬車に同乘して早稲田に赴き

たるが行路の人眼を聳てゝ之れを見けるがソー夫人は「若し紐育にて日本服裝をなせば尙ほ〳〵衆人の注意を引く處とならん」と言ひて笑たりき

▲諸元老は基督教徒なりや　又ソー夫人は突然伯に問を發して日本の諸元老は皆基督教徒なりやと問ひ其然らざる由を聞きて曰く「米國にては日本の諸元老は皆基督教徒にて日本を今の地位に置しは基督教の力なりと思へり」と語り同夫人は基督教徒に非ざる由を語りたり又其より話頭轉じて大に日本婦人の從順を賞讚し居たるが大に日本の生活狀態にも心醉し此度歸へる時は材木器物など凡て持ち歸り同地にて日本の家を建築し全然日本式の生活をせんなど語りたりき其後一同撮影したる寫眞は日ならずして我紙上に出づ可し（報知新聞）

◎婦人雜誌記者倶樂部例會　先月十六日の夜上野公園三宜亭に於て九月例會の催しあり出席會員代る〳〵宿題の月に因める五分演說ありしが肝督に當込し月は宵より雲に隠れて姿を見せず、當番幹事の御馳走いたく興を添えて、面白き會合なりき、

◎東京音樂院の開設　東京音樂學校教授夫谷秀、多梅稚、堤正夫諸氏を聘し去九月四日より神田今川小路二丁目十二番地に設けられ教授科目は唱歌、オルガン、ピアノ、ヴァイオリン及音樂學校受驗科にして目下生徒募集中なりと

▲中形浴衣地圖案　今回三越呉服店より左の方法に依り汎く公衆の其圖案を募集する由

一 圖案の模樣は老若とも隨意の事
一 圖案は一人にて數葉を出案するも妨げなき事
一 圖案は上と下とに模樣の合口を附すべき事
一 圖案用紙は鯨尺にて幅九寸五分丈け六寸乃至壹尺五寸の事
一 募集締切期限は來る十月十日までの事
一 應募者は其圖案を匿名にして密封したる上、東京市日本橋區駿河町三越呉服店日比翁助宛親展にて應募圖案とし宿所姓名を明了に表記せらるべき事
一 應募圖案は當店に於て審査し當撰者に左記の賞金を贈呈すべき事

壹等　金參拾圓　壹人　貳等　金拾五圓　貳人
參等金七圓五人　四等金五圓七人　五等金貳圓拾五人

一 應募圖案は一切返却せざる事
一 應募圖案の當撰せられたるものは翌年夏期に至り實物に染上げ店内に陳列して血庶の觀覽に供すべき事

寄贈書目

時好	三の九	東京	三越呉服店
日本の家庭	七	同	同文館
日本婦人	七一	同	帝國婦人協會
婦人と子供	五の九	同	フレーベル會
音樂	八の五	同	樂友社
國學院雜誌	一一の九	同	國學院
火曜	一	同	研成會
婦女新聞	毎號	同	婦女新聞社
教育	六七	同	茗溪會
女學世界	五の十二	同	博文館
をなん	五の九	同	大日本女學會
教育實驗界	十六の五、六	同	育成會
成功	七の三	同	成功雜誌社
向上主義	一、一二	同	久友社
中央公論	二〇ノ九	同	反省社
新聲	一二ノ八	同	隆文館
二十世紀婦人	二ノ九	同	北海道婦人教育會
實錄	一五三	同	尙綱社
[illegible]家の友	四二	同	時事新報社
愛國婦人	毎號	同	愛國婦人會
六合雜誌	二九七	同	ゆにてりあん弘道會
慶應義塾學報	九四	同	慶應義塾
體育	一四二	同	體育會
東京經濟雜誌	毎號	同	同雜誌社
工談雜誌	一八二	同	工談會
戰後職業案内	(成功增刊)	同	成功雜誌社
りの桂	(女の友增刊)	同	文友社
福島縣婦人		福島	福島民友社
創立廿五年紀念號		京都	京都府教育會

定價

一册	金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵劵代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に券錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年九月廿八日印刷
明治三十八年十月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊榮一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
(電話新橋二六三九番)
(電話新橋特八八番)

文部省檢定濟教科書類及參考書類

- 內堀維文校閲 國光社編輯所編纂 ◎中等漢文讀本 全五冊 定價金一圓五十錢 小包料金十五錢
- 慶應義塾大學部講師 宮森麻太郎著 ◎イージー、レッスンズアンド、コンポジション 全 定價金五十五錢 郵稅金六錢
- 宮森麻太郎著 ◎モーア、レッスンズ、イン、グランマー アンド、コンポジション 全二冊 定價金一圓十五錢 郵稅金十二錢
- 小林萬吾著 ◎中等習畫帖 色鉛筆 水彩著色 并 全八冊 定價金一圓九十二錢 郵稅金十錢
- 小林萬吾著 ◎中等習畫帖 鉛筆畫 全八冊 定價金一圓三十五錢 郵稅金十錢
- 高橋正熊 松本敬非 著 ◎法制經濟教科書 法制之部 經濟之部 全二冊 定價金各六十錢 郵稅各六錢
- 大宮兵馬著 ◎中等日本文典 全 定價金五十五錢 郵稅金八錢
- 國光社編輯所編纂 ◎中等國語讀本 全十冊 定價金二圓二十錢 郵稅金卅錢
- 大宮兵馬著 ◎國語漢文假字遣法 全 定價金十八錢 郵稅金二錢
- 大林弘一郎著 ◎中等國文學史 全 定價金六十錢 郵稅金八錢
- 矢島喜源次著 ◎中等生理衞生新教科書 全 (檢定出願中)
- 鑒定敎科書著者 內大臣秘書官 日高秩父書 ◎中等習字帖 全三冊(檢定出願中) 上中下各十三錢 郵料各金二錢
- 川村理助著 ◎高等女學校用 動物學新教科書 全 定價金五十錢 郵稅金六錢

- 川村理助著　●高等女學校用 植物學新教科書　全　定價金五十錢　郵稅金六錢
- 川村理助著　●高等女學校用 生理衞生新教科書　全　定價金五十錢　郵稅金六錢
- 東京府第一高等女學校教諭 市川源三著　●高等女學校用 教育學教科書　全　定價金五十錢　郵稅金六錢
- 市川源三著　●高等女學校用 國史教科書　全二冊　定價金各五十錢　郵稅金各六錢
- 阿多廣介 園田竹熊 共著　●女子補習讀本　全二冊　定價一卷廿五錢 二卷卅錢　郵稅各六錢
- 阿多廣介 原田長松 共著　●小學 理科教授書　全四冊　定價金二圓二十錢　郵稅金十五錢
- 同著　●小學 理科摘要　全四冊　定價金各十錢　郵稅金各二錢
- 平野秀吉著　●國語聲音學　全　定價金六十錢　郵稅金八錢
- 文學士遠藤隆吉著　●公民心得　全　定價金卅錢　郵稅金六錢
- 鈴木龜壽著　●實驗理科教授法　全　定價金五十五錢　郵稅金八錢
- 石田鐵郎著　●水產製造論　全　定價金一圓廿錢　郵稅金十錢
- ●討露戰史　第一編 第二編　定價金卅五錢 定價金四十錢　郵稅金六錢 郵稅金八錢
- 西 主一 野木衞佐美 合著　●海軍遊戲法　全　定價金二十錢　郵稅金四錢
- 岡部時次郎 森田廣吉 共編　●教育適用 舞踏遊戲法　全　定價金廿三錢　郵稅金四錢

東京高等師範學校附屬小學校編纂 ●學校生活 全 定價金廿錢 郵稅金四錢

樋口勘次郎著 ●教育者と國家社會主義 全 定價金八十錢 郵稅金八錢

雜書類

登張竹風著 ●讀書と修養 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

幸田露伴編 ●四季物語 全 定價金五十錢 郵稅金四錢

佐藤天風著 ●クレオパトラ 全 定價金廿五錢 郵稅金四錢

醫學博士森鷗外著 ●長曾我部信親 全 定價金十錢 郵稅金二錢

安部正人編 ●泥舟遺稿 全 定價金四十五錢 郵稅金六錢

伯爵副島種臣題辭 從二位尾崎忠治題辭 鹿川宮內默藏著 ●王學指掌 全 定價金一圓 郵稅金十錢

從六位國府種德序 故正三位文學博士栗田寬著 ●天朝正學 全 定價金卅五錢 郵稅金四錢

文學士吉丸一昌編 ●名家修養談叢 全 定價金卅六錢 郵稅金八錢

榎本虎彥著 ●櫻痴居士と市川團十郎 全 定價金卅錢 郵稅金四錢

小畠幾次郎著 ●腦力增進論 全 定價金卅五錢 郵稅金四錢

國光社出版圖書目録

著者	書名	冊數	定價・郵税
清藤正輔謹編	皇后陛下御略記 坤徳 上製・並製	全	定價 上製金卅五錢 並製金廿五錢 郵税各四錢
小島鐵次郎著	體力增進論	全	定價金[illegible]拾錢 送料金六錢
清藤正輔編	西郷從道	全	定價金廿五錢 郵税金四錢
清藤正輔編	聖徳太子傳	全	定價金十錢 郵税金二錢
福本日南著	筑前誌	全	定價金一圓廿錢 郵税金十錢
第五回内國勸業博覧會事務局編輯	第五回内國勸業博覧會出品審査概況	全	定價金十五錢 郵税金四錢
宮崎滔天著	卅三年之夢	全	定價金卅三錢 郵税金八錢
宮崎滔天著	狂人譚	全	定價金二十錢 郵税金四錢
澁澤男爵題字 高瀬魁介編纂	澁澤男爵最近實業談	全	定價 上製金七十錢 並製金六十錢 郵税各金十錢
北海道廳拓殖課編纂	北海道殖民圖解	全	定價金八錢 郵税金二錢
富田鐵之助題字 須田毎六著	銀行利用法	全	定價金四十錢 郵税金六錢
故品川彌次郎・平田東助共著	信用組合法提要	全	定價金五錢 郵税金二錢
獨乙大學士ウヰルヘルム、ロッシエル氏著 平田東助、平塚湯次郎・湯川寛吉共譯	商工經濟論	全二冊	定價金一圓八十錢 郵税金十五錢
濱口吉右衛門著	財政と國力	全	定價金廿三錢 郵税金四錢

●非常廉價合本發賣●

〔家庭第一實用の書〕

村井弦齋著

增補注釋 食道樂

春の巻
夏の巻
秋の巻
冬の巻

合本（總クロース金字入美本）

正價金貳圓◉郵稅金貳十錢◉清韓臺灣郵稅金四十錢

○天下に有名なる本書は出版界未曾有の盛況と稱せられ發刊以來貳年ならざるに參拾七版を累ぬるに至りしが從來は一冊八十錢四巻にて參圓貳十錢の正價の處今回讀者諸君の便宜を圖り版を改めて合本と致し非常廉價金貳圓にて發賣致候、此の製本部數に限りあり賣切れざる內御注文被下度候

○本書の附錄は從來の米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分析表、食器食品價格表等の外新に料理心得の歌百餘首を加へ申候

○臺所に此書を備へざるは文明の家庭にあらずと申す者も有之候

○嫁入道具の中には必ず此書無かるべからず、故に婚禮の祝物として最も適當に御座候

○病人の見舞に此書を贈らば何よりの慰籍と相成可申候

○殊に出征軍人の家族は此書の料理法を習得して凱旋の主人公を待たるべく候、故に軍人及其家族に對して無類の贈物に有之候

○此書出でゝより天下の家庭料理は面目を一新するの氣運と相成申候、兎も角も一冊を家庭にお備へあらば永久の御利益と相成可申候

發行所 東京麴町區有樂町三丁目一番地 報知社出版部

大賣捌所 新橋堂・東京堂・東海堂

明治三十八年十月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第十號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可